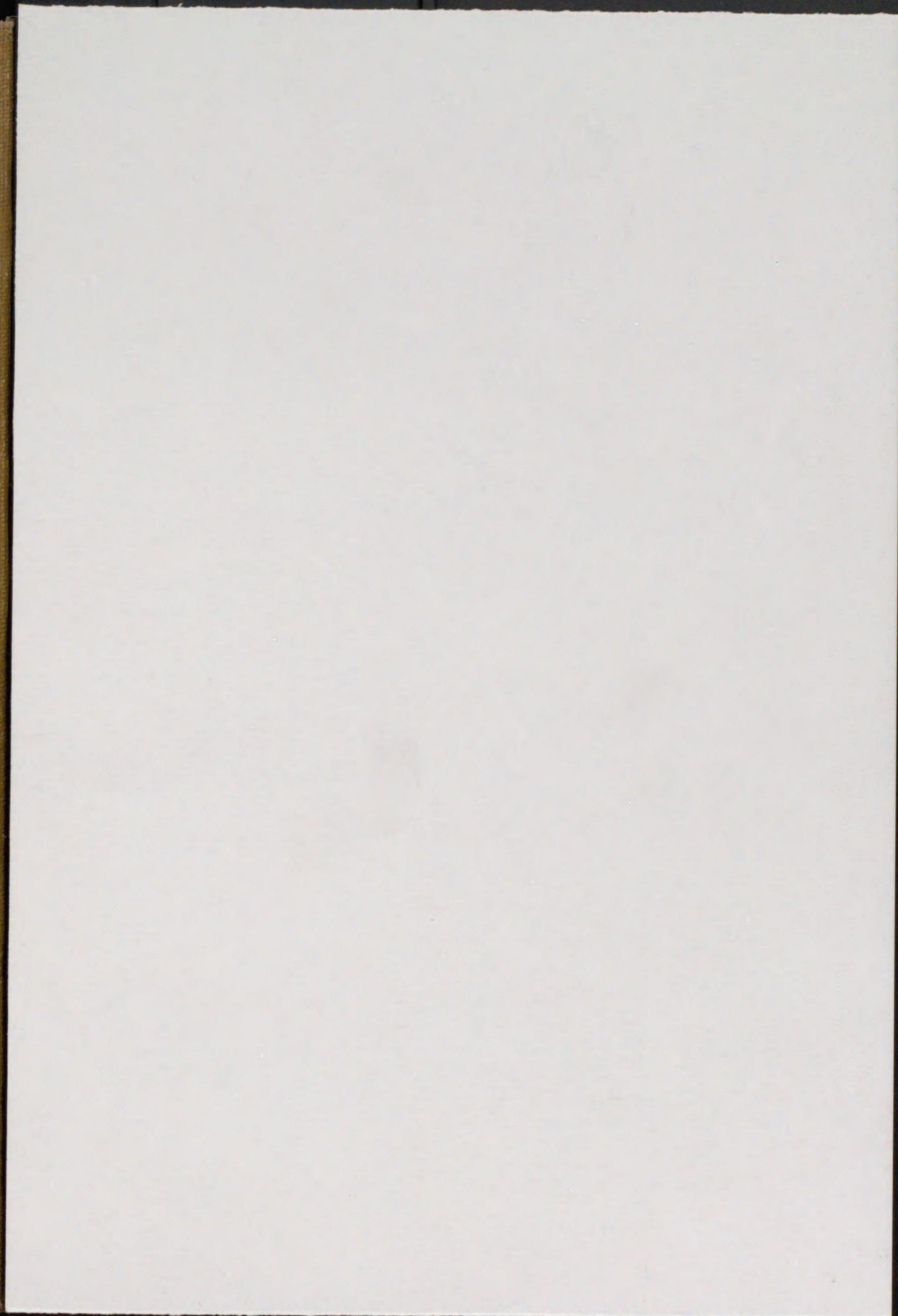


596-39



1200501527709

596
39





新選

室生犀星集

約本

151

新選

室生犀星集

室生犀星



新室生犀星集



序

「童子」は大正十一年九月の作である。「童子」から「幾代の場合」迄七年間の作品を集編したものが此の「新選室生犀星集」である。自分はこれらの作品を訂正し且つ補遺を試みようと思つたが、それは原文を全然作り變へるより外に、添削のしやうの無いものである。原文を全然作り變へ縦横に朱筆を加へることは、小説作者として何等後代に對うて「過去」を語るべきものではない。自分は加筆の餘地無き過去の作品に對しては故意に其儘に集編した。

これらの作品集の中に自ら自分の生活が壓流してゐることも、集編の後に初めて小説に偽りは無いと思つたのである。同時に稗拙の思ひ出もまた深い。

著

者

新選室生犀星集目錄

童子	一頁
後の日の童子	三五頁
嘆き	五二頁
わが世	七二頁
わがこと人のこと	九三頁
人生	一〇九頁
押し花	一五一頁
笛吹く人	一七六頁
聖觀音圖	一八六頁
九谷庄一	一八八頁
喬生と金蓮	一九六頁
芋掘藤五郎	二一一頁

春

丁小室の詩は、その思ひの深さ、情の豊かさに、同類の詩人の比ひ出さず、
 この頃の詩歌の中に「白」の字の多用が特徴としてあらはれ、
 風流の調子、流麗な筆致、清らかなる心、
 小室の詩は、丁小室の詩と異なり、
 新選の「白」の字の多用は、
 五丁の詩歌を結ぶものとして、
 詩品を高くし、その流麗な筆致、
 「白」の字の多用は、
 丁小室の詩と異なり、
 新選の「白」の字の多用は、

魚になつた興義	二二三頁
秋本の母	二三一頁
お龍夫人	二四六頁
姉妹	二五八頁
朝子	二六二頁
母	三〇〇頁
造り花	三一四頁
花輪をおくる	三二四頁
田舎暮し	三四三頁
山河老ゆる	三八二頁
身邊	三九三頁
或女の一日	四〇二頁
忘春述懐	四一九頁
露及の手記	四四七頁
妻が里	四五八頁

妹	四七二頁
彼女	四八九頁
野田山	五〇一頁
暮笛庵の賣立	五〇六頁
名園の焼跡	五二一頁
あら磯	五三〇頁
遺稿「メライ・ゴオランド」	五五一頁
七時牛	五六二頁
神も知らない	五七一頁
木枯	五九一頁
古風な寫眞	六〇六頁
山吹	六三四頁
イワンの聖人	六四〇頁
天龍寺にて	六五五頁
冬の蝶	六八二頁

童子

母親に脚氣があるので母乳はいつさい飲まさぬことにした。脂肪の多い妻は生ぬるい白い乳をしぼつては、張つてくると肩が凝つてならないと言つて、陶物にしぼり込んで棄ててゐた。少しくらゐなら飲ませてよいと云ふ樋口さんの説ではあつたが、私はそれに反対し、妻もそれに同意した。脚氣症の母乳はよく赤兒の腦を犯すことや、その取り返しのつかない將來のことを思ふと、絶対にやつてはならないことだつた。あなた方がそんなお考へなら勿論やらない方がいいんです。あとあとのことを考へると良くないから。醫者の樋口さんも毎時ものやうに強情な私を知つてゐるため賛成したのである。

「こんなに張つてゐるのを飲まされないうちで……すこしくらゐなら關はないんぢやないでせうか。」

母親は、寛い胸から乳房を掴み出し、柔らかいほとほと音を立てて陶物に滴れる乳を見ながら、口惜しさうに云つた。

私はあくまでもそれを吐りつけ、看護婦會で周旋をしてくれる筈の乳母の來るのを待つた。口入屋が千葉のもので、その千葉から口入屋のおやぢと乳母とその母親とが、今日明日のうちに上京してくるといふことだつたが、返電さへも來ないので、牴牾かしかつた。

「素性の知れないものの乳を遣るのは、どんなものでせう。それに病氣なぞあつたりすると、牛乳で育てるより却つて悪くならないでせうか。」

「よく醫者からだを診て貰つたらいい。醫者がよいと言へばいい。」

さう話してゐるうちにも、朝と晝と、そして晩には、女中の夏と、世話をしつてやつてゐる平林とが交る交る貰ひ乳をしながら、動坂まで行かなければならなかつた。そのたんびに平林に、乳を呉れる女の人のことを、私は氣に病んで尋ねた。

「子供が三人も四人もごろごろしてゐて二間きりの家です。けれども乳はたくさん出るらしいんです。」

「こちらから行くと厭な顔をしなうか。」

手袋
死と彼女ら
觀音院
山のほとり
幾代の場合

六八九頁
六九七頁
七一三頁
七三一頁
七四九頁

「厭な顔なぞしません。」

「三度に一度くらゐでも、晩方なぞ忙しいときに……。」

私の氣もちを知つてゐる平林は、「そんな事は無い」と言つた。そして、

「家ぢゆうのものが行くごとに赤ちやんは今日はおかげんがよいかとか、わるかつたら關はず乳を棄ててとりに来てくれとか言つてくれるんです。乳は時間を見計つて新鮮らしいのをお上げすると言つてゐるんです。」さう言つたので、私はまだ會はないが善い人達だと思ひ、心から感謝した。

「さうか、こんどは何か持たせてあげないと悪い——。」

夏も口をそへ、「ああいふ親切な人たちはない。」と言つた。

瓶のなかの温かい乳を、母親はいつも一度掌にあてたり、滂がないかと明るみに透したりして、嬉しがつた。その消毒をしながら、

「家人が多いんですから何を呈げたらいいでせうね。」

さう言ひ、お祝ひの品物の、さしあたり要らないものをあれも上げるこれも呈げると言つた。そしては自分の乳をしぼり、陶物にたまつた濃い白い液體を覗きこんだ。

「こんなに乳が出るのに、これが飲まされないうち——。」

さういふと、そつと夏に、「こつそりと飲ましてやりたい。」と言つた。

「そのコツソリで萬事ブチコハシになることがあるぞ。」

「三度つっおいそがしいのに頂いたりなぞして——。」

妻はさういふと、赤兒のねてゐる部屋へあんないをしなげら、

「ともかく一度見てやつて下さい。こんなに肥つて。」

「まあよくお肥りになつて……。」さう四十近い女の人は言ひ、「どんなお子さまでせうと毎日お噂をしてゐたんでございませよ。それにどうしませう、こんなに可愛くて——妹が今日こそ行つて見ませうときかないんでございませよ。」と、妹の羞しがるのを目でふりかへつた。「そんな事をわたし言ひはしなかつたわ。」と、ぞんざいに言つて妹なる人は赤ぐるい顔をそめた。

「これでわたしも何んだか安心いたしました。氣にかかるものでございましてね。」

小さい唇を締めるやうに言つて、勝氣さうな顔をした女は立つて立關へ行つた。その人が歸つてしまつてから、みんなは話し合つた。

「氣になつて氣になつて爲様がなかつたんですよ。きつと。さういふ夏に、おれにしても氣になる。」と私は言つた。

一日に三度つっ動坂へ行くのには、あまりに人手がなかつた。もうすこし近いとよいのだがと皆が言ひ合つた。それにしては乳母の方の婿が開かないので、むやみに急がすと、明日はきつと拉れて出かけるといふ返電があつた。

私は氣むづかしく吐りつめた。しまひに乳を棄てるところがなくなり、庭の萩の植つた陰地を掘つて棄てた。

或晩、立關に客があつたので、家のものが忙しく、私が何氣なく出た。が、まだ一度も来たことのない女であつた。

「あの……動坂から參つたんでございますが。」

「あ、動坂からですか。」

すぐ貰ひ乳をさせて呉れる人だと思つた。手巾に包んだ瓶をさげ、妹らしいのが格子の外で、からだをちぢめてゐた。

「いつもお世話さまで……オイ、動坂から入らしたよ。」

さう奥へ聲をかけると、妻も夏もみんな出て来た。

「お手すきがございませんでせうと、こちらへ序手がありませんから。」

手巾を開き、乳の瓶を取り出した。藍色の浴衣地の、袖がよれ、スリ切れた履物が目立つた。

「まあ、ご親切に、どうかおあがりなすつて下さいな。」

こんどは格子戸に隠れるやうにしてゐる妹の人にも、「お這入りなすつて——。」と、初めて會つた妻は、くれぐれも乳のことを頼んだ。太い腕をしてゐるので、その健康なことは疑ふまでもなかつた。私は安心をした。

「毎日お乳をさし上げてゐましても、もしも腐つたりなぞしたりしては、大變だと思ひましてね。」

「いえ、すつかりゴムの乳首にも慣れましたものですから。」

その日、乳母は、六十ばかりの母親と、口入屋の爺さんと連れ立つて来たが、私は口入屋の爺さんの顔を見ると、すぐ目を伏せてしまつた。厭な奴だと、直覺的に上向いた鼻と日焼けのしたあぶらぎつた顔を見たときに左う思つた。

「月給は三十圓くらゐにしていただきましてな、それを半年分さき拂ひに、そして私の手間賃は十五圓いただきます。」

さう切口上をいふと乳母の母親に對ひ、よく聞き解けるやうに、

「これだけ言へばわしの役目は済んだのだから、あとはお母さんがよく娘さんに話をしなさい。」

爺さんは、こんどは老母のわきに坐り、硬くなつてゐる健康さうな娘に、「かう話が決つたら氣にいらぬ事があつたりしても、我儘を言つて歸つたりなぞしてはいけぬ——切角御縁があつて来たのぢやから。」さう言ふと母親が、小さい膝を娘の方に向けた。

「一年くらゐの間だから、よく辛抱をしての、ときどきわしは逢ひに来るし、つむぎ屋さんに萬事おまかせしてあるから——。」

眼の圓い二十一二くらゐの娘なる女は、その間ぢゆう俯向いて、一言もいはずに黙つてゐた。膝がしらへ乗せた指さきで膝の肌を衝ツついてゐさうで、しぶとい人間のやうな氣がした。

「肝心のお乳を醫者に診てもらはないと困りますね。お願いするにしてもそれが氣にかかりますから。」
先方の獨り定めになりさうで、私は爺さんの顔をみながら云つた。

「乳のことは千葉の醫者でも診てもらつてきたんですが、大丈夫ださうです。最もお宅でも最一度試験していただければ結構です。」

爺の言葉に續いて、母親も言つた。「この子は近年病氣一つしたことはなし、この通り頑固なからだをして居りますから心配はございません。」

娘の方を見て、この話が乳のことでコハれないかと、いくら不安さうに言つた。

「では試験管にでもしぼつていただいて、すぐ樋口さんに見てもらひませう。——ちよいとこちらへ入らしつて。」

妻は、乳母を勝手へつれて行き、そこで管に入れた乳を平林が醫者へ持つて行つた。

「早稻田の方にも一軒廻らなければなりませんから、事の決まり次第に失禮いたします。」

爺さんは契約書と、周旋料とを私から受取り、大きな財布にしまひ込んだ。何しろこのごろは乳母になる女がないから仕事に骨が折れると云つた。

「二三日べつに不良いものも食べなかつたから、乳のわるい

い乳母のちち首を口にふくんだ。私は悪い驚甲色をした乳母の胸肌を、いい氣もちで見られなかつた。

「おいちいでせう。ほら、たんと出るでせう。」

妻はその指さきで、乳母の乳房を上からこころもち壓すやうにして、よけい流れ出るやうにした。乳母は、上から赤兒の、うす毛の生えた頭を覗きながらゐた。夏も平林も、さうして私の心にも赤兒が乳母の乳首に馴染んでくれればよいと思つた。

が、赤兒は、すぐ乳首を離した。そして泣いた。すぐ又乳首をさしつけると、ちよいと銜んでまた離して泣いた。

「をかしい、出ないかな。しぼつてごらん指さきで。」

こんどは乏しい乳がちびりと出たきりだつた。いくらやつても同じ事であつた。乳母は、顔を眞赤に染めた。しばらくしてから——

「も一度やつてください。」

さう妻が言ひかけ、赤兒の口を乳首にさしつけても、もう吸ひつきさうもなかつた。「空乳首をやつて見るとよい。私がさういふと妻はすぐ空乳首を興つた。赤兒は、吻つとしたやうにそれを舐り、くろぐろとした腫を静まらせ泣き歇んだ。

「どうして出ないんでせう。」
乳母は、心を焦つてしぼるほど、乳は、ちびりとしか出なかつた。「毎日棄ててゐるほど出た乳なんでございませうが。」

害はない。」

母親は、使ひの歸へるまで、そんなことを言ひ續けた。乳母は、膝を固まらせ、窮屈さうにしてゐるので、肩で息をついて居苦しさにしてゐた。堅氣な奉公をしたことのない女のやうに、ときどき私や妻の方を偷みろ腫が素早かつた。

平林が歸つて来た。「乳はべつに不良いところが無いさうです。」と言ひ、別に醫者からの説明書のやうなものを持つて来た。妻も私も喜んだ。

「よく使つたからだですから、よい乳が出る筈です。」

爺さんは、身仕度をする時、「ぢやお母さんは明日にでもお伺ひして、金の方のことを決めなされるとよい。わしは急ぐしするから。」と附け加へ、一緒にかへるといふ母親と、玄關へ出た。

「なるべく汁氣の多いものをいただいて、そして自分の家だと思つてゐないと、乳といふものは不意に止まることがあるものだから。」

乳が止まることのあるものと聞くと、乳母は、胸へ手を當て、眼を圓くした。「ともかく明日わたしが又來るから、そのとき模様を見てあげよう。」

爺さんと老母とが歸つたあとで、妻は、すぐ乳を赤兒にやつて呉れと云つた。貰ひ乳ばかりしてゐた赤兒は、ゴムの吸管とは、全然かんじの違つた柔らかい、いくらか手頼りのな

と、乳房をぐりぐりしぼつた。さうしてゐる乳母の額に汗さへ滲んで見えた。「しばらく休んでからにした方がいい。私は見兼ねて左う言ひ、心で嘆息した。胸肌のうちい皮つきがくらみを持つてゐるのまで、氣になり絶望的な氣もちにした。

女中部屋で一ト憩みさせてから、灯の點いた下で、また赤兒に乳房をくはへさせたが、二度ばかりで泣き出してしまつた。しらべると一滴づつしか出なかつた。——もう乳を貰ひにやる時間だつたから、出ない乳首をさしつけておくわけに行かないので、念のためにと最一度やつて見たがやはり駄目だつた。私はいら立つた。乳母は、又眞赤になり鼻がしらに汗をかいた。

妻は乳母と私とをみながら「どうして出ないんでせう。」と云ひ、さうして「すぐ平林さんに動坂へ貰ひに行つてもらひませう。」と手巾に瓶をつつんでゐる。夏は夕方で急しいからと、平林に行つてもらふことにした。平林は、すぐ出て行つた。

「困つたな。乳首になじまないからいけないんだ。」

私は妻に、わざと乳の出ないことを言はないで、左う言つた。乳母は、あぶら汗をかいてゐた。

「あなたの子どもはどうしたんですの。」

ふと妻が左う尋ねると、乳母は、汗とあぶらで光る顔を擡げた。

「死んでしまったのです。生れるとすぐに。」

「まあ。」

妻は、目を圓くしたが、私はべつに何んとも思はなかつた。子供といふものは死にやすい。もうい花のやうに思つてゐたからである。

「そして千葉にあたの。」

「いいえ。」

「どこに。」

乳母は、言ひにくさうに黙つてしまつた。わたしは尋ねるなど目で知らせた。乳母は、やはり身體中をコッ張らせ、そのため息窒りしさうに見えた。

平林がかへつて来た。

「いつもより時間が遅かつたから、こちらで持つてあがらうかと今言つてゐたところですが、と、言つて手巾にくるんでありました。」

乳は生ぬるかつた。それを消毒して飲ませると、赤兒はハアハア言つて甘美さうに飲んだ。かういふ風にのませてあるから、よほど出る乳でないと思きませんと、妻が誰にいふとなく言つた。乳母は、伏目に凝と赤兒の顔を見てゐた。頭がぼうとしてゐるらしく据はりの悪いところがあつたので、疲れてゐる、と、思つた。

晩も遅くなつてから、夏がきふに書齋へやつてきて、乳母

が着物やその他の用事で淺草の宿までやつて呉れと言つて、さつき持つて来た風呂敷を持ち、勝手口で今にも出掛けようとしてゐると言ひ、「何んでも吉原に奉公してゐたことがあるさうで、お宅は氣づまりなんでせう。」とも云つた。

「今夜行つてもらふと、明日の朝お乳を飲ませないぢやないか。こまつたことを言ふ人だね。」

妻は不平を言ひ出した。

「今晚出してやると、あの女は歸つて來ないかも知れないよ。」

先刻、居苦しさうにしてゐた乳母が、何かを口實にして窮

屈なこの家を出たいと考へてゐるらしく私には思はれた。

「さうね。でも來たばかりなのに……けれど分らないわね。」

妻も危なかつた。

「用事があつたら明日晝間にしろと言つて呉れ。今夜はだめだから。」

夏は、その通りを言ひ、すぐ乳母を寢ませることにした。

あとで、

「旦那さまの仰いましたとほりを言ひますと、しくしく泣いてゐましたの。」

妻にさう女中は告つて、堅氣な家はきゆうくつなんでせうとも云つた。

翌朝、ひと晩やすんだから、乳母の乳は出るだらうと心愉しみにしてゐたが、やはりちびりとしか出なかつた。しまひに赤兒の方で變に柔らかい乳首を厭がつた。平林は、すぐ出掛ける用意をして支關で待つた。

「家へくる前にほんとに出たんですか。」

妻は低帽かしがつて尋ねると、乳母は、やはりいつも茶碗にしぼつては棄ててゐたと言つた。わたしは全で出ない乳房のやうに濁んだ乳首を、厭なきもちで見た。

平林は、瓶をもつて出て行つた。——それを乳母は見送ると同じい仕草をその乳首の上に加へたが、やはり出なかつた。お晝にも、白い液體は出さうにもなく、さしつけたばかりでも赤兒は厭がつた。——乳母は、夏を通じて、昨夜の約束通りちよいと淺草まで遣つて呉れと、しきりにせがんで利かなかつた。

「そんなに言ふなら行つて來いと云へ。どうせ歸つてこないだらうから、乳が出ないから仕方がないぢやないか。」

「それもさうね。ぢや遣りませう。」

妻は、では、なるべく早くかへつてくるやうに言つて、乳母をやることにした。あとで私は、夏にたづねた。

「包みを持つて行つたか。」

「ええ、みんな、たゞ齒みがきだけ置いて行きました。」

晩になつても歸つてこないことは目に見えてゐても、晩く

まで勝手口の戸締りをしないで置いたが、やはり歸つて來なかつた。乳母も窮屈で困つたらうが、一ト安心をした私たちはまた途を絶れて困つた。

「やはり當分は貰ひ乳をするんだな。どうも爲方がない。」

「外にないでせうか。」

「あれだけ捜してやつと見つけて、これだ、ちよつと急にはなからう。」

ふたりが話してゐると、夏は、こんなことを言ひ出した。

「勝手口で乳母さんが出しな、齒磨はあんたに上げると言つてゐましたから、もうかへらないんでせう。」

莫迦正直な夏は、私だちの氣も知らずにぼかんとそんなことを言つたが、私はあつちへ行けと顎を杓つた。……赤兒はやすらかな花のやうな、さういふことが言へるなら、それにも増して美しいくろぐるした一線を惹いた眼をつぶり睡つてゐた。その息づかひは平和にわたしの耳をなごめた。

……わたしだちは四年前の冬、結婚した。その晩は珍らしい大雪の翌日で、夜中に、雨戸一枚を繰り手洗鉢にかがんだが、銅の手柄も凍てあがつてゐた。何となく青い層のある明け方の空氣を雪と雪とが射し合ひ、その明りはむしる痛みある寒さを感じさせた。私はそこでしばらく佇ちながら、すやすや眠つてゐるらしい女に、私がさうやつて佇つてゐるこ

とを知らずまいと、凍つた闕しきの上に音もなく雨戸を閉めた。式を済すと、田端と神明町さかひの、或る百姓家の離れに住み、私は毎日抒情風な詩ばかり書いてゐたが、蟻の餌ほどの父が残して行つた金などは、何時の間にかなくなつてゐた。貧しい地味な暮しをつづけてゐるうちにも、すこしづつ自費の詩集などが賣れて行つた。まとめて父からの金で、私は十年ほどかかつて書いた詩を書物にし、本郷の本屋へたのんで賣つてもらつてゐた。

そのころもう父親になつてゐる恩樹といふ友だちが、やつてくるごとに、三つばかりの女の子を抱いてゐた。私には恩樹がその子どもを得意さうに抱いたり、あやしたり、おしつこをさせたりしてゐるのを見るごとに、いつもばかばかしい氣がした。連れてこないときは、決して子供へのみやげの、パンとかお弄品とかの包みをかかへてゐた。それがあまり定りすぎたものを見るやうではあつたが、恩樹は、自分で赤ん坊にお湯までつかはせるほど、好きだつた。

「君のところでは、どうして子供ができないんだ。妻君はからだもわるくないし。」

恩樹は、濁らない美しい目をして、よく私にさう言つた。「どうしてかな。しかし今子供なぞできたりすると困るんだ。何の用意もないし、貧乏だし……。」

私はつとめてその話を避けるやうにした。眼を逸らせるやうにしたのである。

うにしたのである。「子供は實に可愛くていいよ。」恩樹は、まるで天にでも捧げるやうに高々と子供を抱いては、遠い中野の奥までかへつて行つた。町へ出ようとすると一しよに連れてツてくれと聞かないんだ。ツイ可哀さうになつてね……恩樹は、嘘をついたことのないやうな顔を、その子供の頬に觸れさせて言つた。家主の婆さんは、女が犬を可哀がるのを厭がつて、「犬なぞお置きになるから、子に、遠いんですよ。むかしからさういふんですよ。」さう言つては、くるごとに嫌ひな犬をしつしつと門のそばで、半ばコワがりながら叱つてゐた。國の方からも手紙がくるごとに、子供はまだか、まだできぬかと書いてあつた。そのたんびに不愉快をかんじた。あちこちの結婚したての友だちがみな子供を持つのを見ると、なほ子供のできることに厭氣がした。そればかりではなく、自分達さへ苦しい暮しをしてゐるのに、それが生れたら大變だといふ氣もしてゐた。貧しさの骨身を削つてきた下宿時代のことを考へると、それが生れてこないことばかり考へられた。

夫婦きりで閑暇のありすぎる退屈さが、をりをり譯のわかぬ不快をとまなつた。女は張り合ひのない顔を、よその

赤坊をお湯につれて行つたり、犬や猫を飼つたりして寂しがつた。

「どうして子供がないでせうね。」

「どうしてだか。」

むつつりと私はその話がでると黙り込んだ。そしてそのたんに、

「子供なぞあつたら困るだらうなア。なくてさへ困るんだから。」

さういふとブイと立つて、座を外した。その事に觸れてはならぬと思つてか、女は、その話をしなくなり、人がくるとどうしてできないんでせうね、と、さう云ふばかりだつた。

三年過ぎて、女にはそのけはひさへなかつた。友だちはよくその話で、わたしを皮肉らうとした。恩樹は、もう次ぎの子どもを抱き、さきの女の子には、夏はすすしい白のレースの洋服をきせて歩かせてゐた。

「子供ができるよ、からだがさつぱりするさうですよ。ことにあなたも頭がいたむなんてよく言ひますからね。」

恩樹は、女の前で斯う言つては、慥々してゐるのは、生むものを生まないせゐだよ、さう當らず觸れられず私に言つてゐた。そんなときでも、よい育ちをした恩樹の眼は靜かに澄んでゐたのである。「できないものをどうにも爲様がない。」

私のいふことは、それだけだつた。が、心にはすこしづつ

子供がほしかつた。時々考へ込むと、よく十年前にゐたことのある下宿屋の若夫婦が、二人きりになつて寢てゐたが、いつまでも子供ができないかつた。夫婦がごろりと二人きりで寢てゐるのは、綾もないやうに寂しいものだ、やつと思ふやうになつた。さういへば自分等もいつも定つて起きるにも寢るにも二人きりだつた。花も綾もない。そして手頼りなくしまひには子供のいないことが、夫婦きりであることに會つてない羞恥さへかんじさせた。

が、愈々子供ができるとなると、自分といふものを知つてゐるだけに、何んだか不具ものなぞできはしないかと、妙に不安になり、いつそ今まで通りに生れない方がよいとも思へた。——しかし、それよりも手頼りになる直接自分らの魂にも肉にも關係のある生きものが見たかつた。

それゆゑ私は或晩、ふと女に會つて言ひ出したこともない子供のことを言ひ出した。

「お前さへ生む氣なら、子供はいつだつて出来さうな氣がする。」

「どうして？」

女は今までも出来なかつたものが、急にできるものでないと言ひ出した。私は女に、私の秘かにしてゐたことを、まじめに話し出した。

「そんな事をいつしてゐました。いつころから。」

「國で式をあげたときから。」

自分でも意想外に冷かな顔をし、なぜか氣むづかしさが加はつたが、いつの間にか私は顔を紅くそめた。

「そんなこと、嘘でせう。」

しばらくすると、女は央ば眞顔になり、きみわるさうに微笑ひをふくんで、わたしの目を覗き込んだ。

「全く眞統のことなんだ、嘘だと思つてゐてもよい。そのうちにできるやうになるから。」

「ほんとう？」

女は腹の上へ手をあててみたが、きふに立つて次の間へ行つて泣き出した。そんな恐ろしいことをひとりで遣つてゐる人とは思はなんだと云ひ、朝まで泣き歌まなんだ。わたしは困難なときに子供なぞできなかつたこと、そして子供が心からほしいと思つたときに、生れてくるものだと思つてゐたから、女の泣き歌むのを待つだけだつた。

が、ふしぎに女は元氣になつたやうなところが、それからあとに現はれた。

「まだか知ら。」

女は木の實でも埋めたのを覗き込むやうに、自分のからだに深い注意を仕出した。そして折々こんなことを言つた。

「あなたは悪いことをしてゐたと、さう思ひませんか。」

「思はない。」

さう私はハツキリ答へたが、不自然ではあると心で附け加へた。

「わたしはそれを大變わるいことだと思ひます。」

女は、むきになり左う言つたが、黙つてそれには答へなかつた。

腹に子がきてから、女は楽しさうに小さい襦袢やおむつを縫ひはじめた。それを幾枚も疊んでは、一枚でも殖えるのを喜んだ。胎教だと言つたり、なるべく美しい子を生むのだと、西洋の名畫なぞを枕もとに置いては見入つてゐた。この女にこれまで見ることでできない微妙さが、小刻みにわたしの目に映つた。

「こんななら、もつと早くできてくれればよいのに、わるいお父さんだ。」

女はこんなことを、ときには言ひ出したが、わたしは氣むづかしい顔をし、なるべくそれには觸れぬことにした。女は毎日指を折つてかぞへた。そして或晩わたしが、或る事を明してから、その子が腹にきたことを知ると、蒼くなつてふいに考へ込んだりした。

二

翌朝になつても乳母はこないばかりか、千葉の方へ問合せ

ても返辭すらなかつた。爲方なく毎日貰ひ乳をしたが、産婆からの紹介ですぐ下田端に乳があるといふことで、人手はなし動坂は遠いから、ひと先づ下田端の方へ貰ひにゆくことにした。

「動坂は善い人だちだが人手がないから、よく禮を言つてお断りしよう。」

動坂へ禮に行かせ、田端の下臺へ毎日三度づつ行くことにしたが、平林も夏もそのたんびに、下駄や着物の裾まはりを泥だらけにした。梅雨に入つた元田圃であつた下臺は、泥濘で歩けない道路であつた。一度なぞ夏は泥の中をころげ、胸のところまで汚してかへつて來た。

「道路が悪いなんてまるで歩けないんですもの。」

あまりたびたび左ういふので、私はそれだけなら我慢をして呉れとも言つた。が、勝手口でその事を繰りかへされるとしやくに障つた。

「イヤなら止めてくれ。」

とも云つた。

平林は、泥まみになつても、黙つて井戸端で洗足して、そのことを口へ出さなかつたが、垣根につかまつたりして歩くのか、指股に泥をよく食附けてゐた。

「どんな家かね。」

「會社員みたいな家です。」

私はさきで厭なかほをせぬか、と、氣になり平林にたづねた。

「ちやんと時間になると、瓶に乳をしぼつた玄關へ出してゐるのです。いただきますと言つて持つてくるんですが、奥さんに寝そべつて添乳してめつたに出ていらつしやしません。」

「いつでもかい。」

「いつでも、出してあるんです。」

平林は、へんに不平のある顔をし、それを言ひ出してはならぬといふやうな表情をしてゐた。さきでも面倒くさがつてゐるな、とすぐかんづいた。

「動坂の家とどちらが感じがいい？」

「そりや動坂の方です。」

「いつしぼつたのかよく聞いて來るんだらうね。」

「え、おくさんはそのたびに、今しぼつたばかりですと言つてゐます。」

その日、赤兒は綠便をしたので、乳のせぬだと思つた。その剩餘をすかしてみると、どろどろなものが瓶の底に溜り、動かすと蝶の粉のやうなものが浮いてゐた。

「こんな乳だから：：お腹をコワしたんです。」

女は、「よく氣をつけて呉れればよいのに。」と、奥さんを怨んだ。「きつと朝しぼつておいたのをくれたんでせう。」とも言つた。

それからつと赤兒は、腹をコハし、じめじめした梅雨は部屋のかなかで濕り込み、夏と平林とは、下田端からかへると、井戸端で足を洗はねばならなかつた。その高聲がよく私をいらいらさせた。

「夕方はおれが取りに行く、たかが道路がぬかつてゐるまでぢやないか。」

私はかつとし、夕方、瓶をさげ、八幡さまの垂れた緑の重い枝の下をぬけ、藍染川の上手の、二年ばかり前まで黍の葉の流れてゐた下田端へでたが、泥濘つた水溜りに敷き込んだ炭俵の上を踏むと、づぶりと足の甲へまで泥水が浸つた。それを抜かうとするため、ちからが餘りひよろついて、危ぶなく倒れようとした。ハネ泥で裾まはりが濡れ氣もちが悪かつた。

土間の濕けた格子内の、三尺式臺の上に、瓶が出て居り、白いものが這入つてゐた。あけられた障子うちに、すぐ床をしき、奥さんらしい人がねそべり、よく働いたらしい膏のぬけた蹠がこちらへ向いて見えた。見當をつけ此處の家だなどと思つた。

「ごめんなさい。」

「はあ。」

「お乳をいただきに参りました。」

「そこに出してありますから……。」

奥さんは、さう寝そべりながら言つたが、蹠の位置はうごかなかつた。わたしは瓶を手中につつみ、

「いつもお忙しいところを濟みません。これはいつころのお乳でせうか。」

「今とただけですよ。」

奥さんはやはり起き上りさうもなかつたので、わたしは鶏卵の包みをそつと置き、粗末なものでございますが、どうぞおをさめなすつて下さい。」さう言ひ、格子の外へ出た。道路はさき来たより最つと悪く、雨あしも小汚なく亂れ、四五軒つづいた長屋の入口の格子の裾がみな濡れはじめた。

わたしはなるべく、飛び飛びに歩いては、水たまりへ足を這らせぬように用心した。が、爪掛けをつつ込み、ぬるい水を足さきに浴びた。——それでも乳を大切にかけかへてゐる自分の姿が、みすぼらしく寂しい氣がした、八幡坂を上りかけると、塀の内がはに、卵の花が暗い雨に浮きながら腐れてゐた。

「大變な路だ。まるで歩けない。」

井戸端で足を洗ひ洗ひ言ふと、夏は、くすくす微笑つてゐた。が、女はさつそく飲まさなければならぬので、消毒の炭火をおこしてゐたが、乳の瓶を明りに透しちよいと眉をしがめた。

「これは腐つてゐる……。」

「そんなことはない。しほつて直ぐだと言つてゐたよ。」

「いえ、これをご覽なさい、ほら、滂がたまつてどろどろしてゐるでせう。これを飲ませたらすぐ又不良くなりますよ。」

「困つたなア、あんなに苦勞をしてとつて来たのに。」

そのとき障子のうちに寝そべつてゐた奥さんと、座敷中を取り散らしてあつたのを私は思ひ出し、不愉快になつた。

「動坂はどうだらう？」

「でも此方にきめたのに、今さら行けた義理ではありません。」

「義理なぞ言つて居られない時だから關はないぢやないか。」

「向うでは最うよその子に與つてゐるんださうですよ。」

「ぢや牛乳にするか。」

「さうするより爲様がありませんわ。」

樋口さんに話じにやると、つなぎにはそれでもよいが、せひ乳母をさがしたらよいと言つて来た。

「こんどは乳母を國の方へ言つてやつて見よう。ひよつとすると質のよいのが居るかも知れない。」

「え、それがよござんすね。」

私はさつそく國へ手紙をかいた。すぐ搜して呉れるように頼んだ。——晩、或る友人が来て、山羊の乳といふものは大へんよいさうだと話した。色が白くなるし營養も多いとのことだつた。さつそく樋口さんに話じすると、牛乳よりよいか

も知れないと言つてくれたので、田端のガードのそばにある山羊舎へ平林が毎日とりに行くことになつた。幸に赤兒は、やぎ乳を好いた。みんなは物と一ト安堵をした。生れてからすつと腹をコワしてゐた赤兒は、やつとすこしばかり腹の方がなほりかかつた。

下田端の方へは、禮をもたせ斷りにやつた。そのときも膏氣のない足の裏を私はさびしく思ひ出した。——國から乳母は一人もないと返事をしてきた。搜してゐたのか居なかつたのか、腹立たしかつた。

秋、寫眞を二枚撮つた。夏がおもちやを持つて踊つて見せると、につと微笑つたところを寫した。國の母親と妻のさへ一枚づつ送つた。國の母親はそれを毎日抱いて寝てゐると書いてよこした。愛憎のはげしい母親が、さういふ優しい心になつてくれたのを喜んだ。——すこし咳をすると、すぐ樋口さんと呼んだ。

「赤兒よりかあんたがだが、神経質になるからいかん。」

肥つた先生は、さういふとわたしと妻とは、或る程度まで打つちやつておくやうにと言つた。わたしは外からかへるとすぐ赤兒の顔を、その柔らかい頬を掴んでみなければ、書齋へはひらなかつた。その掴み方が痛さうだと、女はよく抗議を言つた。

「可哀さうに、そんな手荒いことなぞをして。」

「ほら、かうしてやると微笑つてゐるぢやないか。ツマリかういふ愛撫の方法もあることを知らないか。」
 實際、赤兒は、くすぐられたやうで、いつもよく微笑つた。電燈を置くために作らせた紫檀の臺が、書齋の机のわきに晩になると置いてあつた。その上を叩くことを赤兒はすいた。とんとんといふ工合に——書きものをしてゐるときに室へはひられると私は眉をしがめ、それによつて妻は黙つて赤兒を抱いたまま、臺を叩かないで出てゆかなければならなかつた。さういふときあとで氣附いて、わざわざ叩かせに呼びに行つたりした。さうすることによつて私自身の氣を柔げることができたからである。

寒いのに赤兒は、正月を迎へた。みんな雜糞をたべ、「よい正月だ。」と言つた。そのたびに自分がかうして正月を自分の子どもとしよにすることを、珍らしいものと感じた。荒壁の凍てた寒い街裏の部屋にゐた私は、よくその震へを振りかへつてはぞつとした。——大寒も過んだ或日、夏がくらしい咳を一つした。夕方も勝手の方でつづけさまにしてゐた。

「あれは風邪をひいてゐるから、子どもを抱かせてはいけない。」
 妻にその注意をしてゐるとき、夏は、赤兒を抱いてゐたから、わたしはすぐ赤兒を捲き取るやうに抱いた。そして妻に

無理もないことだと思ひ、すぐ寫野さんへ電話をかけ、看護婦にも来てもらふことにした。その晩から赤兒は、目に見えて苦しさにせいせいやつた。「こんなことで死なせるものか。」といふ腹が引締つて私にあつた。

それに乳だけは順調に、さういふ苦しいなかでも飲んだので、その方で切りぬけられると思へた。けれども熱がしつこく降りなかつた。上る一方だつた。

寫野さんがくると、すぐ厚みにさせた着物をゆるめ、辛しの濕布を背中にした。が、十分もしたが反應がなかつた。わたしは、掌の上にある時計を見詰めた。三分経つた。からしを剃いで見ると、赤い反應が皮膚の上に出て來た。

「これが出ないと、ちよいと困るんだ。」

寫野さんはかういふと、障子に布を覆ふこと、吸入は二タどころにやることなどを注意した。樋口さんは、七本目の注射を用意して立つてゐた。

「酸素饑餓といふ状態ですな。」

寫野さんは、これだけ言ふと、無駄をいはずに、座を立たうとした。この人は技術で病氣に向ふ人だと思つた。樋口さんは情熱で病氣に對ふ人と思つた。

「大丈夫でせうか。ああも悪いとは氣がつかかなかつたのです。」

私は新しく驚いて、寫野さんの少し氣取つたやうな、しか

わたしした。その晩、赤兒は咳をした。二つ三つ續けてゐるうち、わたしは眞青になつた。

「しまつた。うつつたぞ。」

「どうも左うらしいんですね。こまつた事をした。」

熱を計つてみると八度五分あつた。それに不思議なことには、咳をするたびにせいせい苦しさに息を切らすことだつた。今夜はおそいから、明朝早く樋口さんと呼ぶことにし、水枕をしかせた。

朝になつても熱が下りず、樋口さんは、風邪だと言ひ、それほど心配することはないと言つた。私だちは氷で冷した。

——が三日経ち四日経つても、まだ熱が下りずに、咳がつづいた。せいせいといふのは喘息があり、啖が、切れないから苦しいのだと言つた。

それから二日経つた。樋口さんは頭をひねつた。

「本郷の寫野さんに診てもらつて下さい。どうも氣になりませから。」

樋口さんは「わしは他のお醫者と立ち會ふことは平氣です。わしばかりでは診られないところもあるから、却つて立ち會つてもらつた方があなた方がご安心でせうから。」と、わけもなく左ういふと、一向そんなことに關はらない顔をした。

「ではさういふことに願ひたいものです。」

し自信の強い廣い額を見あげた。

「からの反應が遅かつたからちよいと心配はしました。しかし手當に残つてゐたものがありましたから……。」

さういふと、すぐ歸つてしまつた。どこか重々しく一流の氣稟をもつてゐた。わたしは寫野さんに見てもらつたことを喜んだ。そして信じた。

吸入器の一つは伊織のおばさんが持ち、他の一つは車やの鈴木が水をさし、妻と看護婦が交る交る酸素吸入の口を向け、炭火を起したりつぐために夏は忙しかつた。夜中に、も一人看護婦が來た。吸入の霧のなかで、赤兒はせいせい苦しさに空氣が足りなさうに喘いだ。わたしは病室と書齋とを行つたり來たりしながら、立關の下駄を一ト隅によせたりするやうな、へんな眞似をした。

赤兒は、わたしも妻も茶目であるにかかはらず、黒いつやつとした瞳をしてゐた。それがなほつや／＼しくセルロイドのやうに光つて、熱で、悲しさに動いてみえた。

「しつかりしろ、死ぬには早いぞ。」

わたしはさういふと、赤兒の名をよんだ。あたりは吸入の霧で、ほとほと雫が天井から落ちてゐるやうな氣がした。糊のしめつた看護婦の白衣がしつとりしてゐた。妻の髪にも吸入の露があつた。みな勇ましさに働いた。

「今夜のうちに熱を下げなければなりません。」

妻は、半分氣狂ひのやうになり、吸入が窒つたとか、炭が足りないとか言つた。實際今夜しくじつたら取り返しがつかないと、私も頭に熱がさして來た。

「三十八度に下つた、下つた。」

妻は、夜明方になり、さう叫びながら私の寢てゐるところへ來て言つた。わたしは飛び起き、赤兒の顔をさしのぞくとやはり苦しきやうにハアハア言つてゐる。

「この容子ですと朝までに、もつと下るでせう。」

看護婦が見當をつけ、私と妻とに安心をさせようとした。が、酸素の鐵管のからばかりがたまり、もう次ぎの分がなかつた。

「困つた。宮川病院を起したらどうだ。」

すぐ近くに、去年私が入院したそれがあるので、夏が馳け出して行つた。

「起きなかつたら、石で門を叩け。」

さういふうちにも、酸素は全くきれ、きふに室内がその水を潜らせる音が絶えてしまつたので、ひっそりした、その寂そりした感じは、激しい不安を私に與へた。

「何をしてゐるんだらう。」

私は氣が氣でなかつた。「ちよいと行つて來る。」左ういふと、すぐ通りへ出、病院へ走つた。病院の白い門の前に、夜明けがたの白っぽい門がみえ、夏がぼんやり黒ずんで立つた。

「オイ、起きたか。」

近づくとも私はさう叫んだ。

「ええ、いま開けてゐらつしやるところです。」

問もなく、ぎいと門の開く音がした。私は夏をそつち退けにし、酸素を貸してくれるやうに頼んだ。

「事務のものも居ないものですから。」

下働きが睡さうにさう云つて、すぐ出してくれさうもなかつた。

「酸素のあるところを知つてゐますか。君は。」

「ええ、そりや存じて居ります。」

「ぢや僕が持つて行く、さうして明日院長に話すから渡してくれたまへ。今はぐずぐず言つて居られないから。」

「困りますわ。そんなこと。」

「責任は僕が負ふ。早くして下さい。死にかかつてゐる病人があるんだ。」

私は、下働きが藥局へ這入ると、そこへも躍々しく這入りこんで、一本だけ手に抱へた。時計が寂しくなつてゐる。

「明日來て話するから。」

さういふと私はすぐ家へかへつた。門の前に看護婦が出て私のかへるのを待つた。みんなは景氣のよい音をきくと、ぼつと一ト息ついた。

「なかなか起きて呉れないんですもの。」

夏は、ぶつぶつ言つてゐた。

夜が明けると、赤兒がすやすや睡つてゐた。樋口さんが朝飯前にやつて來た。

「すこし熱は降つたやうだ。」

水銀を振りながら、赤兒はすぐ悪くなるんだから安心がならない。」と言つた。

「いつか僕らがあまり神経質過ぎるつて言つたぢやありませんか。」

「そんなことを言ひましたか、いや、それで赤兒の場合は結構ですよ。けれども何んでもないときに騒がれると困る。」

さういふと、おひるころに又來るからと言ひ、「此處はぜひ分けて貰ひたいですな。」と夏に言つて出て行つた。

「氣さくない人ですね。一日に三度も來て下さるんですよ。」

妻は、看護婦にさう話した。樋口さんとは私が田端へきて八年にもなる知合ひであつた。

翌日、寫野さんがやつてくると、樋口さんに、藥の方のことを言ひ、

「もう取り止めたやうですね。」

さう靜かに言つた。危険期を越えてゐるとも言つた。が、まだまだ安心はできない、どういふ風にかはるかも知れないとも云つた。私は寫野さんを信じた。

「下手なことをやると、書かれるからな。」

さう樋口さんを振りかへつた。この前、やはり書きものをしてゐる人の子供を見、書かれたと言つた。

「醫者にだつてどうにもならない場合があるものですよ。」

私はそれに同感した。あんなに善くしてくれたのに、書くなどは私は思ひもよらなかつた。

醫者は、毎日、寫野さんと樋口さんとが立ち會つて呉れ、一週間目になつた。

「もう大丈夫だ。何しろ乳を飲むから都合がよい。」

寫野さんは、初めてハッキリ言つてくれ、私だちは安心した。看護婦も一人だけにした。氣がつくと、夏も妻もみんな一週間のまにすつかり憔悴れてしまつた、それでも妻は氣ばかり立つてゐた。

「一時どうなるかと思ひましたよ。やれやれ。」

妻は、やつと帯を解いてねむつた。その間ぢゆう私はひとりでゆつくり睡つてゐた。自分だけが安眠するのに氣がひけたが、おれは仕事はあるし、一ト晩でもねむらないと、すぐからだを遣られるからといふ口實をつくつた。「あなたは眠らないとあとあとに支へるから。」と、妻もさう言つて氣づかないであつたが、あまり自分勝手にエゴイストで、きまりの悪い思ひを心に感じてゐた。

樋口さんは、やはり一日に三度づつ來てくれた。生れると

「すぐ赤兒を見てゐた醫者は、よくこんなことを言つた。
「これまでに苦心してきたんだから、もしものことがあつてはあなた方に顔向けがなりませんからね。」
正直一圖で善良な樋口さんは、或る朝、晴れた座敷へこぼれる日ざしに、もうセルの服を着込んで茶をすすりながら、はればれした表情をした。
「こんどはいろいろどうも……。」

さう私はあいさつをした。
「たいがい寫野さんとも意見は同じかつたんですよ。あの方はなかなか目利きですからね。」
樋口さんは、さういふと立つて歸つて行つた。私は樋口さんのむしろ無邪氣なところを微笑んで味ふことができ、赤兒はすこしづつ笑ふやうになつた。

三

誕生月が過ぎて、まだ齒がでなかつたばかりでなく、這ふこともしなかつた。やつと抱き上げると、足に手を當ててやると立てたのが、このごろになつて足を曲げ、觸ると痛さうに泣いた。
「この子はいつたいどうしたんでせうね。足が立たなくなつたの。見て下さい。」
さう言へば、足をくの字に曲げて、さはると泣いた。「とも

私はしかし此樂山堂行きは、なんだか氣がすすまなかつた。が、もう治療にかかつてゐるのだから、それを歇めるわけに行かなかつたが、隔日に俵が門の前へ梶をおろし、赤兒を抱いた女の姿をみると、愾としい氣がした。わけても赤兒の泣きさけぶときは、可哀相な氣もした。
「けふは休んだらどうだ。風もすこし寒いし泣くから……。」

さう言つても、隔日だから一日遅れると、それだけ治療が遅れると言つて聞かなかつた。いつたいに赤兒に注射するときでも、女はそれを平氣な顔で眺め、かうすれば療るものだと信じてゐるらしかつた。が、私は注射のときは此間の大患のときも、なるべく病室にゐないで書齋に坐つて、その赤兒の泣聲がきふに苦痛のために止められ、癡て泣き出すときまで、あぶら汗が滲みながれたほど、赤兒の身になつて見て、ツラかつた。

「あんまり泣くものですから、よその病室からみんな集つてきて覗きにくるほどですよ。ほんとにこんな大きい聲を出す子はありません。」
病院からかへつた女は、いくらか足が樂になつたらしいと言つて、赤兒の足をみせた。わづかしかな肉附を揉むなんて、やはり私は信じかねた。
「いまに後悔することがあつても、おれは知らない。あそこへ連れてゆくのはどうも厭な氣がする。」

かく寫野さんへ行つて見てもらふとよいな。」
「え、さうしませう。」

寫野から俵でかへると、妻は、青い顔をしてゐた。
「樂山堂病院の整形科へ紹介をかいでもらひましたの、寫野さんでも専門ちがひで分りかねるさうです。」
「樂山堂病院つて遠いんぢやないか。電車ぢやあだめだし。」
俵にします。」

「さう、ぢや行つてくるとよい。」
妻は、すぐ下町へでかけた。まだ、なほつたばかりなのにあんなに連れてあるいてよいか知らと思へたが、あのままにして置けば足の方の病氣が固まつても困るといふ考へが私にあつた、歸へると、

「此子は神経が立つてゐて足の筋が一本引き釣つてゐるんださうです。マツサーヂするより外に治療の仕方がないつて、さうして頂いて參りました。まあ、随分泣きましてね。」
「さうだらう、がこんな赤兒の足なんか揉んで、あとで何かにさはりはしないかな。門の前まで聞えるやうに泣いたりなぞしては、心臓にさはりはしないか。」

「それは丈夫だと言つてゐました。病氣で泣くんぢやないつて——そして此處に神経の立つてゐる子は珍らしいつて言ひましたよ。」
「さうか。」

「だつて仕様がありません。」

「全く仕様がなないことだ。」
私は黙り込んでしまひ、室を立つた。赤兒はすこしづつ肉がついたやうにも見え、瘡せたやうにも見えた。食事をするとき、ああと言ひ、何かをつかまふとした。赤兒がそばへきてゐると、食事がウマかつた。自分のやうなものにもこんな子が生れたのだといふ、あたり前の考へが珍らしく、きめ細かい人間の内側のちからを感じた。

緑が深くなると、向ひの畫家のKさんの家でも、おとなりの早瀬さんでも、氣候が不順だからと、鎌倉と房州とへ子供をつれ轉地をした。どちらにも弱い子があつたが、それよりもずつと家の赤兒はよわかつた。さういふ隣近所のことを聞いただけでも、東京に居残つてゐると病氣になりさうで心寂しかつた。

或晩、地震が來た。恐ろしい音が屋内をもんどり打つた。ちやうど茶をのんでゐたのだが、私は機械的に庭へ飛び出した。そこに石燈籠があつたので、臺笠が落ちはしないかと灰白い石を見詰めてゐた。

「あ、恐かつた。」
さういふ妻は、ちやんと赤兒を抱き、赤兒は、くろくろした瞳をくらやみのなかにツヤ消しをした其光をふくみ浮してゐた。私はそのとき赤兒よりも自分がさきに飛び出したこと

に、自分自身を不愉快に感じた。
「思はず知らず抱いて出たんですよ。何も考へる間もないんですもの。」

妻は、しづまった空に樹の尖端がまた震へてゐるのを見ながらさう云つて、私が一人で飛び出したことを、べつに何も言はなかつた。私は赤兒の瞳を見た。そしてやはり私自身をイヤな感じをもつて考へた。

「いやな氣もちだ。」

「どうして？」

「お前よりさきにあいつを抱いて出なかつたことが、イヤな氣もちだといふのだ。お前はなぜおれに抱いて下さいツツて頼まなんだ。」

「そんな間なんてあるものですか。母親のそれが役目なんです。」

「それではお前だけの子か。」

私は負けたのを知りながら、どうも子供は生長するまで、母親のものらしく思へた。父親はそれを監視してゐるだけのものか。さうも考へられた。

「自分がコワイからさきにあなたは飛び出した。」

「あ、飛び出した。」

「わたしはあとからコワかつたんですの。子どもを抱いて出たあとでね。」

か知らなかつた赤兒は、眼を圓め、びくびくさせ、しまひに泣き出してつた。刺戟が劇し過ぎるやうに思はれた。熱でも出ると大變だと思ひ、自動車ですぐ歸つた。

あくる日、樋口さんは、ちよいと風邪を冒いたのだと言ひその手當をしたが、「どうも弱い子ですね。上野まで出て、コレだから大變だ。」と云つた。赤兒といふものは、一週間病氣をすれば、一週間だけ發育が遅れるといふことも、話に出た。さういへば、うちの赤兒は、ふつうの赤兒よりか半年遅れてゐた。齒も出なかつたし、這ふことも、抱いても足が立たなかつた。が、私はその黒い瞳と、私に似もつかない美しい整うた顔をしてゐるのが得意だつた。

田舎にゐる杉原といふ詩人も、もう父親になつてゐたが、やつて来ると、すぐ赤兒の綺傭をほめた。

「うちの子は色が黒くて、てんで話にならない、これは傑作だ。」

杉原が、さういふと私は、赤兒が私似であるか、それとも女に似てゐるか尋ねて見た。

「奥さんに似てゐる。」と言つた。

「しかし半分くらゐ似てゐないか。」

「さういへば少し似てゐる。」

とも言つた。

實際赤兒の顔ほど、ふしぎに兩親の顔をうつし出してゐる

「うむ。」

私は黙つてしまつた。やはり凝り固まつた自分ばかりを考へてゐる私自身に、不愉快をかされた。

樹の青みが深くなると、發育の遅れた赤兒を抱いた夏や妻が、よく庭へでてゐるとき、不思議に赤兒は、空の方をよく見詰めてゐた。そばへ寄つて透してみると、空ではない、樹でもない、何か木の葉が枝端れにひらひら舞うてゐる一枚を、珍らしさうに眺めてゐるのだつた。

「お前をよく知つてゐるらしいが、どうもおれといふものを確かに知つてゐないらしい。つまりおれが父親だといふことを、さういふ意味をはなれてもお前とくらべると、赤兒は全で他人のやうな顔をしてゐるやうに思はれる。」

「さうでせうかしら、しかし能く知つてゐるらしいんですよ、ほら、お父さんですよ、分つて？」

女は、さう言つて赤兒をさしつけても、私より夏の方へ行かうとした。女は、なるべく私に馴染ませようとしても、駄目だつた。しかし何處かに私を見る目と、よその人を見る目とに相違があつた。柔らかな馴れた視線があつた。

國から母親が來、二週間ばかりすると歸つた。その日はじめて電車に乗せ、晩方上野まで行つたが、赤兒は電車の音や騒々しい人込みに怖れた。田端の靜かな家のまはりだけし

ものはなかつた。その表情の動きのなかにも、微かながら父母の何ものかが漂うてゐるのだつた。さういふ判りきつたことを執念く私の心に對ひ、恐ろしいほど凝視するやうな氣もちだつた。

「こんど又で、できるんだ。こまつた。鬼灯の根でも飲まさうかと思ふんだ。」

「よせ、そんなことは！」

「でもおれは子供ともいふものは、さう可愛くないんだ。少しも愛情がうつらないんだ。」

「どうしてだらう？」

私には杉原のさういふ氣もちが分らなかつた。そのくせ彼は子供どものお弄品を街から包にして持つて、いつも田舎へかへつた。

「第一綺傭がわるい——。」

美しいものに溺れる杉原は、さういふ單純なことにも、自分のすききらひを言ひ張つた。それにしても可愛くないなぞとは、どうしても思はれなかつた。

「抱いたりなんかするだらう。」

「それは抱いてもやるさ、しかしどうも君くらゐに愛情がおこらない。君はマルで夢中だ。悪黨のくせによく可愛がつてゐるから感心だ。」

杉原は斯ういふと、それが私だけの前でつくろつて言つて

あるのではないやうに思はれた。かれは優しい美しいものには、それと同じい柔らかい氣もちになることができたが、左うでないものには、かれらしい病的な悒悒とした氣分になるらしかった。

が、赤兒は、一日づつ咳をしつづけた。それに喘息の氣もありさうであつたが、いつもの事で、氣にかけやうもなく、毎日、醫者は一度づつ来てくれた。玄關に靴音がし、さうしてすぐ樋口さんの白い夏服をみると、赤兒は、すぐ直覺的に泣き出した。

「どうも困るなア、さう嫌はれてしまつては！」

樋口さんはしまひに裏木戸からこつそり庭へ廻り、さうして、

「どうですか、寝てゐますか。」と、こ聲でいひ光る夏服をみせまいとした。さういふ注意深いところも、何んだか私にはたいへん好ましかつた。

「目をさましてゐますよ。そつとして。」

「咳は？」

「ときどき出ます。それにせいせいやるんです。」

「咳がきれないんでせう。咳のきれる薬を上げませう。ぢや失禮。」

樋口さんは、さういふと又裏木戸からかへつて行つた。――が、赤兒は、それから二日たつと、青いダルの顔をし、しき

りに咳をしはじめた。
その朝、女は私の部屋へきて言つた。
「おとなりの早瀬の奥さんがね。どうも坊ちやんは百日咳らしいと言つて、いまのうちに注射をしておもらひなさい、さうでないと大事になるから……それに早瀬の御主人もやはり左うらしいつて、見るに見かねて、さし出がましいけれどもッて言つてゐらつしやいましたよ。さういへば、どうも左うらしいうござんすね。」
早瀬さんとは、垣となりで、よく聞くとやはり同じい郷里の人だつた。それにもう三人も子供をそだてた経験から、その注意は私の胸にぎくりと來た。
「どうも左うらしい。いいことを數へてもらつた。」
私は感謝し、すぐ醫者に注射をしてもらつたが、いまから百日咳になりかからうとしてゐるのだ。樋口も寫野も言つてくれた。何となく大きい困難を前に拂つてしまつたやうで嬉しかつた。
が、どういふものか咳が發作的に來た。一日に一度づつくらゐに――しかしさういふことに馴れてゐるので、氣にしながらも、ただ服薬だけさせた、樋口さんも大したことではなはいと言つてゐた。しかし顔の色はだんだんに悪くなり、手足がよく冷え、すこしでも抱いてゐないと火のつくやうに泣き立つた。

或る朝、夏は赤兒を抱いたまゝ、これも顔色を變へながら言つた。

「いま大へん咳をなすつた、そしてからだをブルブル震はせなされるんですもの、びつくりしてしまひまして――。」

「ブルブル震はせた？」

妻はすぐ抱きとつたが、しかし別にかはりはなかつた。あやして見ると微笑ひ、ううと言つた。

「しかし顔色がわるいな。どうも氣になる青さだ。」

私は赤兒をさしのぞき、いくら力なささうにしてゐる腫の色を見た。何となく寂しい氣がした。赤兒のわるい顔色と勢のない眼のいろは、いつも私にイヤな寂しい氣をおこさせた。それがいつもよりすつと變な氣にならせた。

「足をみる。」

「冷えてゐます。けれどもほら微笑つてゐませう。」

「床にねかしておいたらどう。」

「下に置くと泣き出すのです。泣くと咳が出てせいせい遣るんです。」

「困つたな。どうすればいいんだか。」

やはり抱いてゐるより外に仕方がなかつた。氣のせゐるか、唇の色まで、いつもより紅いところがなかつた。醫者は喘息の發作だと言ひ、實際それ以外に何等の徴候とはなかつたのである。

あやすと微笑ひ、山羊乳もいつもほど飲んだが、むやみに頭を振り、物憂さうにしてゐた。

或朝、妻は赤兒を抱き、書齋へはひつて來た。いつものことなので、机の上から、わるい顔をしてゐると、元氣なささうなのを見た。

「豹、どうした、いかげんに癒つてくれないと、みんなが困るぜ。」

私は左う言ひ、立つて赤兒をあやさうとしたが、妻は、ふとこんなことを言つた。

「さんさん病氣をしたあげくに、この子は死ぬんぢやないでせうか。」

「さうお前は思ふか。」

「ええ、どうもそんな氣がしてなりませんの。」

私は黙つてゐたが、「いまトラれてたまるか。」と少し腹立つやうな聲で言つた。コレまで育ててきて、死なせるなんてことが有り得ようかとも思つた。死んでも引き戻してやるとも言つたが、空疎なことを言つたので心寂しかつた。

「そんな考へをもたない方がよいよ、かうして、ほら、この通りにびんびんしてゐるんだから、なア、豹。」

私は、手をとつてみたとき、あまり冷くなつてゐるのに、驚いた。足も、きのふよりも酷かつた。

「どうもをかしい、こんなに手足が冷えてゐる。」

「さうね、醫者を呼びにやりませうか。」
「すぐに呼ぶとよい、いや、おれが電話をかけるに行つてくる。」

私はすぐ宮川病院へ、電話をかけに出かけた。電話をめたにかけない私は、あはてて番號を間違はせ、うまく言ひ當てたときに、交換手が出るときふに番號が吃つて言へなかつた。さういふことを幾度も繰り返してゐるうち、ますます電話をかけ違へてしまつた。

黙つてゐるうち、向うではどんどん切つてしまつた。これでは遅れるばかりだと、すぐ家へかへり使を樋口さんへ出した。午前一杯醫者はこなかつた。その間に二度發作があり、赤兒は、ああ……といふ咳のあと息をひいては苦しんで、濟むとハアハアと言つた。

「これはいけない。これは大ぶ變つてきたぞ。」
背中に私はぞくぞくした寒さを感じ、又使を出した、が出ちがつて來なかつた。手も足も冷たくなつた。しかし黒い瞳はやはり静かにちからない顔のなかで、くろくろと光つてゐた。

「豹、豹。」
妻はうろろした聲で呼んだ。
「早く醫者がきてくれるといいんだが……。」

の八時になつた。何といふ變りやうであらう、赤兒は、もう床にはひつたまま、いつもさうする子でないのに、おとなしくぐつたりしてゐた。私はからだぢゆうの毛あなに、ぞくぞくする懸命な異體のわからない昂奮をかんじた。

「夏、表へ出て見ろ、俾が來ないか。」

夏はそとへ出たが、すぐ引きかへし、

「お見えになりません。」と、これも息を切らした。とにかくおれは落着いてゐなければいけない、さう心を引き締めた。

「大丈夫でせうか。」

「さあ。」

私はそれきり何も言はなかつた。

「潜りがあいた。醫者だ。」

さういふと、私はすぐ書齋へ行き、机のわきに落ちつき、どす黒い姿を凝り固まらせ、あわてたところを見せまいと、煙草に火をつけた。

寫野さんへは、病狀を話した。そして急にきたものらしいと附け加へ、

「どうも手足が冷え、へんだと思つてゐたんですが。」と言つた。

寫野さんは、私の説明をこの人がよくするやうに、考へ考へ、さうして大概の見當が頭でつきさうな時分に、ぢや一つ見ませうと立ち上つた。

そこへ樋口さんがきたが、大分長く考へてゐたが、

「心臓がわるくなつてゐる……こりや大變だ。」

さういふと、さつそく注射をし、「こんなになつてゐるとは知らなんだ。とにかく寫野さんに見せておく方がいいですね。」と言つた。

「わたしもさう思つてゐたんです。」

手頼りにならない氣がして、私は樋口さんをぼんやり眺めた。急にきたと云へば急だつたし、ゆつくり來たといへば、ずつとさきから此傾きがあつたのだ。が、私はいつもの發作だから大したことはあるまいと思つてゐた。

寫野さんの電話が通じないので、使を出したのが四時ころで、外出してゐて急の間にはないらしかつた。私だけは苛苛した。樋口さんも手のつけやうもないらしく、一ト先づ歸つて、電話で打合せをしてから、一しよに來ると云つた。

夕方、客があり話してゐると、妻は、私を呼んだ。その聲はいつもより違つてゐるので、飛んで行つた。そのとき赤兒は、第三回目の劇しい咳と引息で驚のやうに泣いた。ガアガアアと息をあへいだ。

「どんなに苦しいか知れない。」

私はひとり言をいひ、そして手のつけやうもなかつた。

「醫者が來ない。困つた。」

私たちは、腹のなかまであぶらを流す思ひをつづけた。晩

寫野さんは、

「今夜は卅分ごとに注射しなければいけない。」と言つたときに、樋口さんはそれを留意して一本打つた。が、又一本打つた。そして寫野さんは赤兒の頭の枕の下へ手を入れ、その頭を四寸ばかり高めた。

「辛しの濕布だ。それから湯たんぼで手と足を温めるんだ。」

踏み込んでさういふと、辛しの濕布がきたが、布だつたので、

「紙にするんだ。」と言つた。

赤兒はハアハア言ひ、くるしがつた。濕布をした。十分経つた。肱が脚の下までしか來ないで、手首は寂としてびくともうごかなかつた。手足が冷える冷えると思つてゐたが、やはりいけなかつたんだ。」と私は顫へながら思つた。

「これは危ない！」

寫野さんは、へいぜいと違つた聲でさう樋口さんに言つた。赤兒の目が釣り出した。そして息がきこえなかつた。室ぢゆうに音といふものがなかつた。

「お父さん、今ですよ。」と妻が言つた。

寫野さんが人工呼吸をやつた。汗とあぶらが赤兒の肌身と寫野さんの手のひらににちやついた。私は生れてはじめて人工呼吸を見たので、それでなくとも、ああすれば助かる助かると思つた。

「樋口君、かはつてくれたまへ。」

さう寫野さんが言つたときには、妻は泣き出した。寫野さんは赤兒の臉をめぐり、電燈をよせて見た。あんなに電燈の光をよせたらまぶしいだらうと私はふと思つた。それと同時にこの子のくろぐろした瞳は見をさめであつた。

部屋の隅で、夏が泣き出した。聲を擧げしばらく妻も泣きやまなかつた。

「お父さん、最ういちど抱いてやつて下さい。」

ほんやりしてゐる私に、目を閉ぢた子を妻はわたさうとした。

「あ、抱いてやるとも。」

さう言つた私は、抱き取ると、頭がぐんぐんになつて、重かつた。もつと靜かに抱けばよいと思つてゐるうち、全く死んだなと思つた。それまで私は何といふ呆やりした、うつけな氣持ちであつたことであらう。——こんどは、床の上にそつと置いた。

「どうかあちらへ。」

私は書齋へ二人の醫者をあんないした。樋口さんは泣いた目をしてゐた。あれほど永い問診であつたのだからと、さういふことも嬉しかつた。

「どうも惜しいことをしました。」

寫野さんは、鞆を手にとりながら言つた。

「たびたびお世話になりました。」

棺に入れるとき、私達はもう一度抱いてやつたが、やや硬張つたそのからだを持ち、閉ぢられた眼をみてゐると、まだすやすやと睡つてゐるやうに思はれた。が、ふしぎなことには、その死顔がや、暗色をおびてゐるせゐか、二つばかり急な時間のあひだに歳をとつてゐるやうに、マせて見えた。死兒といふものは、こんなに歳とつて見せるものかとも思はれた。

「靴下も入れてやりませう、それから帽子も、おもちゃも。」

まだ一度も穿いたことのない毛糸の靴下をはかせ、入れられるだけのお用品を入れた。笛も太鼓も入れた。

どれを見ても女達は泣いた。私はすこし變な氣がしてくる。と巻煙草を口に咄へた。齒の間がすくと息がぬけるので、涙ぐむやうなことがなかつた。——墓地は、田端の大龍寺にした。子規の墓があり靜かだつたし、近くてをりをり行けるやうな氣がしたからである。

「あそこならおれも埋められてもよい。」さう言ひ、妻にイヤがられた。——晴れた翌朝私だけ家にのこり、友人も澤山行つて葬ひが済んだ晩、國から妻の姉が來た。

灰葬には、私、妻、早瀬のおくさん、妻の姉、夏などが行つた。三河島の河ぶちの暗い溝水に沿ひ、俣が走つた。猫入らずの製造所の板塀にその廣告文字のかかれてゐるのが、目を惹いた。

妻もそこへ出て挨拶をした。玄關へ醫者を送ると、靜かに俣に乗るけはひがした。何も尋ねるな、左う考へた。

「わたしもう御用事がございせんから。」

看護婦もかへつた。醫者がきて四十分して赤兒が死んだのだ。

赤兒の顔の上に清い布が掛けられた。それを見い見い、やはり死んだかと、信じかねた。

「今死なうとする赤兒に灌腸するのはよくないぢやないか。あのと呼吸が上の方へグツと詰つたやうな氣がした。」私はあきらめ兼ねてさう妻に言つた。

「いえ、ああして助かることがあるのです。わるいことはなかつたのです。」

妻は、醫者のしたことの、最も正しいことであることと言つた。私は黙り込んだ。が、死兒をみると、どうも諦めかねた。怨むまいと思ふが怨むぞと、さう誰に向つてか絶えずつぶやいてゐる、あさましい私自身をどうすることもできなかつた。

四

初めての経験で何からしてよいか分らなかつたが、隣の早瀬さんや根岸のをばさんなどが來てくれ、車やさんと植市とが使あるきとお葬ひの手配りをしてくれた。

骨はかなりな量があつた。銀杏の實のやうな膝がしらや、パイプのやうな細い足の骨などが、竹箸のさきに觸れた。眼を泣き腫らせた妻は、箸のさきに小さい堅いものを引つけながら、

「齒が出ない出ないと言つてゐたのに、ほら、こんなに揃つてゐる。」

さう言ひ、それを拾ひはじめた。

「はぐきの中に埋つてゐた齒は焼いても碎れないんです。」

隠亡は、自分でも馴れた手付で、その幾つかを拾つた。

「齒がないないつて言つてゐたのに。」女はそればかり言ひ、はぐきを破つて出るちからがなかつたのだと、口惜しさうに繰りかへした。小さい素焼の壺に入れ、みんなは又俣に乗つた。

道路の曲り角に、床屋の白服をきた若者が、黒いものを棒のさきで衝ツつきながら、折柄正面から來た駄馬の轍に轆かさうとした。輪はごつとりと小石を乗り上げ、それを迂らうとしたときに、若者は小さい黒いものをひよいと棒切れで追つた。が、黒い小さい生きものは、そのはずみに二三寸ばかり先きへ走つたあとへ、輪がひと廻りし、私の俣が通つたのである。鼠はうまく生きのがれ、何となく私はやすらかな心地がした。

「イヤな事をする。」

「しばらく白い乾いた道路に震へてゐる影が目を去らずにゐる。」

て、不愉快だった。

私たちは毎日ぼんやりして、女は女で何をすることも元氣のない顔をしてゐた。子守唄が一年ばかりつづいたあとで、その日から絶えてしまつたので、これも家をひっそりさせるに充分だった。同じことを繰り返して、あきらめかねてゐた。

或朝、私は門の前へ出ると、そこに早瀬さんの三人の子供があそんでゐた。「ちよいと入らつしやい、抱いてあげるから。」さう四つの子にいとふと、はづかしさうに垣根にからだを擦りよせ躊躇つたが、思ひ切つたやうに走つて来た。

「なかなか重いな。つきはあなただ。」
その上の子も、妹のやうにしなを作つたが、さうされるのが嬉しいのか、これも走つてきて抱かれた。

「こんどは兄さんの方だ。」
一番兄は七つだった。重かつた。と、きふにそんな事をししてゐる間に、私はむやみに悲しくなつて来て、潜り門から家へ飛び込んだ。何といふ寂しい氣もちだか。——そしてしばらくその氣もちが離れなかつた。

妻は妻で、よその子さへみれば「ああしてみんな達者なのに自宅の子だけどうしてあんなに弱かつたのでせう。」と、口説いた。

「おれはよその子をみても、あれは餘所の子でおれの子ぢや用意な口をきくまいと思はれたからである。」またおあとがあるだらうから……さういふ風に言はれると私はさびしく黙つた。しかしあの通りの顔は世界ぢゆうに一人もないぞといふ氣がした。

妻が寺参りにでかけると、箆筒の曳出しのそばへ私はしばしば行かうとしては、ふいに立ち停まりあたりを見廻した。やはり静かな庭樹のかげが、障子に映り誰もゐる筈はなかつた。が、その白みある明るい光では、よく赤兒がしてゐた水枕のびちやびちやする音が、私の耳にきこえた。

「おれはいつたい何しにここへやつて来たのだつたか。」
私はひとりで呟やくと、曳出しの鍵に手をかけようとした。鍵は別の曳出しから取り出し、ひと廻りさせ、がつちりと開いたのである。そして私は手早くいろいろな品物や書類の累つてゐる中から、手さばりの角の荒い寫眞をつまみ出し、それを懐中にしまひ曳出しをしめた。さういふ感情には絶対にそれを人目にふれさせまいとする注意深さと、自分がさうすることによつて妙な感情になるまいとする努力とが打ち合つた。も一つは、そんなことをする詰らなさがたとへ人目にふれずにあても自分の心になにか羞かしさうな妙なものに街ふやうなうす痒さとが、かさなり合ふのだつた。

そして私はどかりとあぐらを組み、それを開いて眺めた。静かで快い氣もちがした。よく泣いたとき煩さいと言ひ叱つ

ないと思ふと、何んでもなくなるのだ。」

さう私は言つたが、やはりそればかりでない氣もした。そして童話なぞ書くことを頼まれると、よその子の喜ぶものなぞ書いてゐられるかとも、あさましく腹立たしかつた。二人とも、ひまさへあれば溜息をついた。

「何も面白くない。」

女は女でさう言ひ、朝早く大龍寺へ参りに出かけた。「何が面白いことがあるものか。」私は不氣嫌に毎日ぼんやり暮した。——或る知人に七人の子供があつたのに、長女をこの春亡くした。すると或る人が、「君は七人もあるんだから一人くらゐ亡くしても關はないだらう。」と言つた。するとその知人は「七人もあるからなほその一人を缺かしたくないのだ。」と言つたさうだ。私はその心もちが分つた。

坂の上にある或る彫刻をやる知り合ひが、ぼんやりうつけ者のやうに夕方あるいてゐる私にかう言つた。

「またコサへるさ。」

私はあたまがぐらぐらし、やつと口がきけたくらゐだつた。「あのとほりの顔がまたと生れてくるとでも君は思つてゐるのか。」

さういふと此男の子どもも、何かのついでに死んでくれればよいとまで、その瞬間にかつとした。さうなればこんな不てみたりしたことが、人並みにあんなに言ふんぢやなかつたともツイ思ひ出された。誰でもみんなが持つ稚ない感情がどやどやと足音をさせ、しばらく私をとりかこんでくるのが、何より嬉しかつた。

私は間もなく寫眞をしまひ込み、鍵をかけ室を出た。さういふ、つまらない事をしたあとで、きふに蜂に刺されたやうに悲しくなつて了つた。そこらの疊をがりがり引掻き、どこか遠いところを呼んだら、何かが戻つて来さうな氣がした。あ、耐らないといふ氣がした。あのとときどうにかならなかつたものかと、とも思ひ、もつとさきに醫者がきてくれればよかつたのに、さうしてそれを氣づかず居たのは何といふ馬鹿だつたらうと、わたしは文字通り疊をがりがりやつた。怨むまいと思ふが怨むぞと。頭があつくなり、かつとして氣でも狂ひさうになつた。

「この容子だとおれ自身あぶないぞ。」

さういふ氣もした。

お寺から妻がかへつて来ると、坐つてかう言つた。

「白いお骨の壺が三つならんでゐたので、尋ねると去年の秋から順繰りに三人の子供が死んだ家があるんださうです。二人目からそのおくさんがすこしづつ氣がへんになり、三人目が死んだときは、全く氣がフレてしまつて、たうとう此間田端の脳病院に入つたんですつて。何といふ話でせう。」

私は黙つてきいてゐたが、そんなに死なれては氣が違ふのも當り前のやうに思はれ、ならないのが不自然なやうに思はれた。すくなくとも左ういふ女はすうすうしいとも考へられ

た。

「最な話だ。おれにしても少しはへんになる。」

妻は、しばらくしてから、又ぼんやり部屋へはひつて來、何もいはずにうろろしてゐた。そして、

「子守唄もうたへないし……。」

ぼつんとそんなことをいふ。

「何をつまらないことをいふんだ。……寫眞はちやんと封をしておいたよ。見るとおたがひにいけなから。」

「え、見ませんとも、見たらそれこそ大へんです。」

實際、女はまだ一度も見ないらしかった。私がそれを好んで見、女はなるべく見ないやうにしてゐるお互ひの氣もちが、どういふ風にそれをべつべつに考へ違つてゐるのかと、をりをり私は考へた。がどこまで孰らが眞實であるかが分り兼ねるやうな氣がした。——ぼんやり食事をしていると、何かを考へ出し、それをお互に悟られまいとするやうなことが多く、箸をもつたまま眼で庭をさぐり合ふことがあつた。さういふとき不思議にわづかの間に遠い笛の音色をそらんじ、その消えてゆく尾について哀愁が起つた。さまざまな音色の笛がいつも赤兒の枕もとにおいてあつたから、それが何處からか

起つてくるやうな氣がした。

ちひちやい童子はいつも一人で歩き、持ちきれぬほど色彩のはげしい笛や太鼓や兎や犬を抱へ、菅で編んだ笠をかむり、足にはおぼえのある毛絲の靴下をはいてゐた。靴下はいぶ擦り切れてゐるのを見ると、よほど歩いたものらしく思はれた。くろぐろした瞳はやはり力なかつたが、その働きは四年も五年も一時に歳をとつてゐるやうな、濃い悲しさうな色をたたへてゐたのである。

「お前は左うして歩きつづめてゐるが、いつたいどこへ出かけて行くんだね。どんなところにあてがあるんだ。」

私は童子に近より、そのあたりに手を置いたが、童子は私の目をながい間ながめ、さうして初めて和やかに微笑つて私の手にその手を結びつけ幾度か逡巡ひくらか羞かしさうに口のうちで「お父さん」とさう呼びかけた。

「あてがないけれど、やはり此處ではちつとしてゐたより歩いた方がいいの。何がなし一日かうして歩いては少しづつ行くんだけれど、さつぱり分らない。」

「お前とおれのあるところ、は、よほど遠いやうな氣がするね。おとうさんにはよくお前の顔がわかるが、そのやうにお前にもよくおれの顔がわかるかね。ほんとにお前は其處にゐるんだけれどね。」

童子は、まだ新しい菅笠をちよいと傾け、そして小さい

荷物と石塊の上にそつと置いた。

「ええ、わたしにもよく分りますが、しかしおとうさんの向ひに誰かゐるのか、よくここからは見えなから。」

「あれはお前のおかあさんさ。よくないね、もう忘れてしまつては……。」

「いえ、ここからはよく見えない、聲だけはするけれど。」

童子は、しばらくすると又あるき出して、荷物をかついで寂しい足音を立てて行くのである。

「もう少し話したらどうだね。お前のやうにそんなにせかせかして行かなくともよいではないか。」

「あなたたちは左うしてご飯をたべて居らつしやればいいのです、ですけれど此處ではさういふ暢氣なことをしてゐられないのです。」

「なぜだ。」

「なぜでもあなた方とわたくしとはもう別なものですから。」

童子は、すたすた歩き出し、あとをも振りかへらうとしなかつた。私は目をすく、見送つてゐるうち、庭のあたりでこのごろ飼つた河鹿がしめやかに啼いた。

「啼きましたね。」

「ア、啼いた。」

私はふと思ひかへしたやうに、女が箸を下におかうとするときに言つた。

「あの子が死ぬ前の日に、(さんざんこの子は病氣してからわるくなるんぢやないか。)と言つたね。なぜああいふことを言つたのだ。あれは言ひあてたやうなものだ。」

「でもあのときは怎うもあんな氣がしてならなかつたのです。言つちやわるかつたか知ら。」

「悪かつた。へんにあの言葉があたまに残つてゐてあけな

い。」

二人はまた黙つてしまつた。食事はすんだが話をするでもなし、しないでもなしと云ふやうな時間がみごもるやうに重くるしくなつて來てゐた。……私はそれがほとんど隨所で全くフイにいつでも歩いてゐる童子の、定まらない足もとを見ることができた。机のわきでも電車に乗つてゐるときも、さうして外からかへつてきたときに出てくる女の肩の上にも、晩はわたしのすぐそばにも睡つてゐるやうに思はれた。

それが何事にもそのやうであるやうに、私はこころでいつもきれいな話をせずにはゐられなかつた。も一つは日を経るにしたがつて童子は四歳にも五歳にもなり、唇もとが縮まつて耳にも紅みがよけいにさして來たのである。さういふ歳をとつてゆく童子の顔は、やはり不良い蒼い色はしてゐたが、したしさうによく綾して微笑つたときそのまな姿でゐたのである。わけても鳥籠の下に、いつも妻や夏に抱かれては覗いてゐたやうに、私は机のわきから立つて、よくその赤い朱

塗りの鳥籠をのぞいた。そこに小鳥のために入れられた水壺が、わづかばかり冷たさうな色をたたへ、そのうすい色をうつしてゐた。それを私と同じやうに童子の顔がさしのぞき、すばやい小鳥の羽掻きをながめてゐた。

「あれからお父さんはいつもかういふ工合にすわり、さていつも元氣のないかほで何から何まで厭になつてしまつたのさ、しかし段々考へるとお前はさきに死んでしまつて或ひはひよつとするとよかつたかも知れない。」

そりやおとうさんのやうに長く生きてゐるうちには、さまざま面白いこともあるが、それさへあの笛の音いろのやうに——（おまへは笛がよく鳴るかはりにすぐ消えやんでしまふことはよく知つてゐるだらうね）——すぐあともなくなり、次から次へとつまらないことばかりが、さういふことを書いてある大きな書物があるとすれば、それと同じことばかりを繰り返してゐるやうなものだ。だからお前があつたやうに花につつまれて死んでしまつたことが、お前のきらひなとに會はずにしまつたやうな仕合せをも感じられるかも知れない。「それともお前はやはりお父さんのやうにいろいろなことを爲たりされたりすることがよかつたかも知れない。イヤなことでも知らないでゐるより知つてゐた方がよいかもしれない。そこまでゆくとどう言つていいか分らないくらゐだよ、お父さんはできるだけのことをしたが、おまへのからだは弱

かつた。しかしあのとときもつと早くおまへをどうにかすれば……。」

さうすれば、お前はさういふ姿で、そんなにまで悲しさうな顔をしなくともよかつたかも知れない、どこにあるかさつぱり判らないやうなお前にしなくともよかつたかも知れない、私がわるかつたかも知れない、しかしどうにもならないことだ。おとうさんも一度は生みつけたものを怨んだときがある。そのやうにお前もそれを考へてゐるかも知れない。私はしばらくすると私自身の腹の中に窃と聞耳を立てるやうに、何かをさぐりながら聞かうとした。

「おれはまた下らないことを喋り出した。おれはへんに惚々し出してしまつてしまひにへんになるかも知れない。」

私は小鳥の顔を見上げた。ツイツイと止り木を移つてゐる間に、うすうすその顔が目についた。

「オイ、あそこに、ああいふふうにも一人だけか覗きこんでゐる奴がある。ツイツイとうごいてゐる奴のそばに、も一人、たしかに覗いてゐるものがある。」

女はうしろ向きに、次の竹窓を隔てて疊の上に、何かに讀みふけつてゐるらしく見えた。

「鳥籠にですか、鳥籠はけふはどこへ出てゐるのでせう。」

「座敷の軒だ。」

「誰もゐない、ほんとに見えはしませんの。」

「ほら、その、鳥かげだ、すうつと映つてくる。」

女は、佇つたまま、眼を凝らしてゐたが、すぐに脆く泪ぐんだ。そしてなほ飽かずに鳥籠を見つめてゐたが、「此處の家はもう厭ですから越してしまひませうか。」と心からさう言つた。

「何處へ行つたつて面白くもをかしくもない世の中だ。つづめていへばイヤなことばかりだ。」

私はさういふと、ぐつたりと跪座を組み、さういふとき吐息をすると、それなりからだのちからが抜けてしまふやうな氣がするやうに、だらりとしてしまつた。がつかりして俯向いてゐたが、何も彼も詰らない、くさくさした氣になつて仕方がなかつた。起きるのも寝るのも、さうして、かうして坐つてゐるのさへ厭だつた。「おれはおれ自身をどうしていいのかさへ分らない。何て怠屈で不愉快なだらけた氣もちだらう。」と思へた。

「おれはちよいと醫者のところへ行つて見ようと思ふんだ。まだ尋ねたいこともあり、だいいち、あれがどんな原因で死んだかといふことも聞いてみたいやうな氣がするから。」

私は考へ考へゐるうち、ふとすつと先きから、執拗く心にねばりついてゐることを、そつと落ちついて、女に、さう大事でないやうに云つた。

「だつて今さらそんなことを言つたつて、どうにもならない

ことだし……だしぬけにそんなことを言つて行くものぢやありませんわ。」

「どうにもならないことだが……だが、あのとときそれを聞くことを忘れた。大事なことだ。」

どういふことが原因で、そして私どもも爲るべきことをどれだけ手ぬかりしたか、ああいふ風にしてゐたらあんな事にならなかつたとか、さういふ取り返しをつかない又氣のつかないことを、今になつてそれを知らうとするのは、何となく死兒へ挨拶をしたやうな氣もするし、私だちの心もちをも和らげることができさうに思へた。

「うつちやつて置けば、それなりに忘れてしまふ。忘れてしまへばなほ取り返しがつかない。」

さうも考へたが、わざわざ私が醫者のところまで行き、肩の凝るやうな氣もちでそれを尋ねることを考へ出すと、やはり辭陶しい氣がした。

「やはり行かないでゐる方がよいか。さういふことは尋ねるものでないかも知れない。向うにしたつて尋ねて行つたらどんなにばかばかしく考へるかも知れない。しかしまだ何となく私だちと醫者につながつてゐるものがある……。」

それは向うにないかも知れない、しかし正直に私にわだかまつてゐるものが、凝らずゆるまずに残つてゐるのはどうすることもできない。

「却つて微笑はれるくらゐですよ、あの子はああいふ弱い子だつたのですから、いまさら何と言つたつて——」
 「何と言つたつて爲様がない、ないがしつこくおれは何もかも瞭然と頭にイリかねるのだ。」

さう言ひかけ、私はばかばかしく死を疑ふぐどんな人間の頭になつてゐるのに、ふと氣がついた。「おれはおれ自身で諦めきれないで、逃げ道ばかり捜してゐるのだ。醫者にしろ誰にしる何を知つてゐるものか。おれさへ何かに觸れればそれにくつつかうとしてゐるのに、おれはなんだか少し卑怯になつてゐる。」私はさう思ふと、すこし肩がかるくなるやうな氣がした。

「初めつからかうなつてゐるのかも知れない。さうしてだんだん日が経つと私もしまひにはけろりとしてしまふのだ。人間らしく忘れてしまふかも知れない。」

さう思ふと心が軽くなつたが、消炭のやうにうすい不愉快さが、かげのやうに映つて來た。が不思議にそのかげはあざのある肌のやうに消えようとしなかつた。

後の日の童子

一

夕方になると、一人の童子が門の前の、表札の剥げ落ちた文字を読み上げてゐた。植込みを隔てて、そのくろくろした小さい影のある姿が、まだ光を出さぬ電燈の下に、裾すぼがりの悄然とした陰影を曳いてゐた。

童子は、いつも紅い塗のある笛を手に携へてゐた。しかしそれを曾て吹いたことすらなかつた。

植込みのつたの絡んだ古い格子戸の前へ出て、この家のあるじである笏梧朗は、さういふ童子のたづねてくる夕刻時を待ち慕うてゐた。青鷺の立ち迷ふ沼澤の多かつたむかしにくらべ、この城外には、蔓を立てた建物が混み合つてゐた。

「けふは大層おそかつたではないか、どうしてからだを震はせてゐるのか、犬にでも會つたのか。」

「いゝえ、お父さん。」

童子は、頭をふつて見せた。柔かい唐黍のやうな紅毛が、微風に立ちそよいだ。

「いつもお父さんのおうちのそばへ來ると、妙にからだかふるへるのです。べつに何んでもない。」
 「それならいゝけれどね。また加減をわるくするといけないから。」

笏梧朗は父親らしい手つきで、童子の、絹のやうな頬に掌をあてた。

「お母様は？」

童子は、さういふと家の中をさし覗いた。ココア色をした小鳥が離亭の柱に、その朱塗の籠のなかで往き來し、かげは日影のひいたあたりには既う無かつた。

「ほら、離亭で朱子を縫うてゐる。見えるかな、鳥籠のある竹縁のそばにあるではないか。」

「えゝ、呼ばうか知ら。」

「それよりもそつと行つて驚かしてみせたらどうだ。」

童子は、すばやく玄關から次ぎの部屋をぬけ、離亭への踏石へおり立たうとしたとき、一軸の佛畫が床の間に掛けられ、あるのを見成つた。



「どうしてあゝいふものを掛けておくの。あの繪は見たことがある……」

「あれはね。」

笏は、悲しさに童子と佛軸とを見較べ、躊躇つてやつと重い口をひらいた。

「あれは、おとうさんが妙に寂しくなると掛けてみたくなるものだ。お前があれを見ることが厭なら止めてもよいが……」

「でも、へんですね。」

「古い軸の上に、細い目をしたふつくりした顔があつた。蓮華を臺に、古い、さびしい佛は坐つてゐた。が、その感じは、月夜のやうに蒼茫とした明るみを持つてゐた。」

童子は、庭石の上に降り立つた。まはりを青篠でめぐらした離亭で、朱子を縫ふ針のきしみが厚い布地であるためか、竹皮を磨するやうな音を立てゝゐた。童子は、母親の、白い襟足と瘡せた肩とを目に入れ、そして可憐しさに心をあせつたためか、竹縁にぎしりと音を噛ませた。

「お母様。」

童子の手は、母親の胸もとへ十字にむすびついた。うしろから突然さうされたので、母親は驚いた目をしばらく静まらせ、間もなく嬉しさに輝かせた。

「まあ、おまへどうして來たの。」

母親は、さう言つたときに父親が佇つてゐる窓口を見た。

母親は、童子に向ひ、「おまへに季氏といふ妹ができたんですよ。お前は見たことがないだらうがね。それはかはい、子ですよ。」

童子は、曇つた目をしながら、さういふ母親の目をみあげた。

「僕は知らない。」

「いまに會ふことができるから。」

「童子は、答へようとしなかつた。ちやうど自分一人でなかつたことに気がつき、それを寂しむやうな表情が漂うてゐた。」

「季氏はこの子はあはせない方がよいかも知れない、何となく左ういふ氣がする。もし會はせたらそれきり此子はたづねて來さうもないやうに思はれてならないから。」

父親は、童子のたどとしてゐる足もとをみながら、暗くなつたあたりに仄浮いてゐる母親をかへりみた。

「しかし……」

母親は、言葉を切つた。いつの間にか逢ふやうになるでせうし、匿しきれぬものでありませんから。」と言つた。

「それもさうだね。この子の心もちになると寂しいだらうと思ふから言ふのだが、だが、どうでもよい。」

父親は、蜘蛛の巣に羽ばたく虫を拂ひ、手を石泉で漕いだ。「お父さん、もう僕かへらうかしら。」

童子は、立ち止つて言つた。

ふたりは微笑ひあつたが、どの微笑ひも満足さうな色を漂はしてゐた。

「おとうさんが、門のところへ出てゐてくださつてすぐ分つた。」

「でもお母さんはびつくりした。ふいにお前が飛びついてくるから、遠いところをよく來たわね。」

母親は、左ういふと一度父親を見た。空を見てゐたらしい父親はうつすりと暮縮んだ明りのなかで悲しさに微笑つて見せた。

「僕は、一日がけで歩いたつてなかなかお家へまで遠いんですもの。ぐるぐる廻つてばかりゐる道なんだから。」

母親は、童子をだき上げ、さうして痛々しさに眉をしがめた。

「ほんとにどんなに遠いだらうね。」

母親は、庭へ童子を拉れて出た。童子の好んだ青い扇のやうな芭蕉は、もう破れた龍旗のやうにはたはたと夕風に櫛目を立てゝゐた。

「お父さん、この子はどうしてかう顔色が悪いんでせうね。」

「さう、どうもよくない。」

二人は、かう言ひ對ふと、童子を真中にして庭後へ出た。

「季氏は？」

「もうかへるころでございませう。」

「ほら、もうお食事だらう、あそこに、白い布がかざられたし、みんなが御馳走をこさへてゐる、見えるか。」

「あの圓いものは何？」

「くだものさ。花もある、もうすこし温良しくしてゐるんだよ。わかつたかな。」

「え。」

童子は、しばらくしてから、きふに母親をみあげた。

「僕の時計はまだある？」

「ありますとも、鳩のトンで出るのでせう、あれならありますとも。」

「あとで見せて？」

「いゝとも。」

父と母とはまた顔をあはせた。あたりは全く暗くなつた。乳母車の音が微かに表からして來た。

「かへつて來たらしいね。」

「車があたらしいからよく軋みますこと。」

母親は、門前へ出た。乳母車の上には小さい女の子が、羽根のある帽子のしたで織い目を閉ぢ、すやすやと睡つてゐた。

「あんまりよくおよつてらつしやるものですから、そつとして參りました。」

そのため遅くなつたのだと、下婢は、幌をうしろへしづかに刎ねながら言つた。

「さう、ご苦勞でしたね。」

母親は、ぬくまつた小鳥のやうなからだを抱きあげると、あか兒は目をさまし、あたりを見まはしながら、暗くなつてゐるので怖いのか、きふに泣き出した。母親は、胸をひろげた。そこから葡萄の實ほどの、珠がすべり出、あか兒の唇へふくまれた。

「病院の奥さまにこの花をいただきました。枯れましたけれど。」

「水甕にいれてお置き、いつもよくして下さるのね。」

いつの間にか、童子は母親のそばへ佇んでゐた。さうしてあか兒を覗き込もうと、ひくい背を延び上げようとしてゐた。父親も、うしろに立つてゐた。

「お母様。」

「なあに。」

「僕にそのあかん坊をちよいと見せて下さい。」

「かうしてですか。」

「え。」

童子は、赤ん坊を覗き込んだ。そばから父親が、童子の肩のところの手をおいて、靜かに言つた。

「おまへによく肖てゐると思はないかい、鼻つきにしる目にしろ大さうよくおまへに似てゐる。」

父親は、あか兒の頬を指でふれてみたりして、それを童子

父親がそばから言つた。

「おさかなは人間に食べられることを生きてゐるうちは、あまり考へないらしい、だから悲しくはないのだ。」

「食べられてから悲しくないの。」

童子は、かういふと食卓の向側にある父と母とを、かはるがはる眺めた。——父親も母親もすこし青ざめ、しばらく黙り込んでゐた。

「おまへはむづかしいことを言ひますね、そりやお魚だつて悲しいにちがひはなからうがね。しかし死んでゐるんだからどうだか分らない。」

「死んでゐるんだから分らない？」

童子は、おなじことを言つて、眼で考へるやうにして見せた。父親はそのとき不思議なほど何かに思ひ當つて顔色を變化へた。その筈である。母親が眞青になつてゐたから——。

「お父さん、僕はどうしてかうして居るのでせうか。お魚のやうにはないでせうか。」

童子は、手に携つた笛を腰のあたりに差した。そして童子自身に困りぬいたかほをして見せた。

「おまへはおとうさんの子だから、さうしてお母さんの傍にあるのは當り前のことなんだよ。おさかなとはちがふ。ほらおまへはちやんとさうして其處に坐つてゐるではないかね。」

父親はさういふと、なほ一層わかりやすく話し出さうとし

に眺めさせた。が、むしろ童子の眼の中には明かに不快に近い曇色ある表情があらはれてゐた。父親にはそれが何よりさきに己が心にかんじられた。

「僕にはすこしも似てゐない、僕のやうな顔はどこにもない、お母様、僕には似てゐはしません。」

母親はその言葉を悲しさうに聞き、父親と顔をみあはせた。父親の顔には、何にも言ふなといふ表情があつた。

童子は、あか兒のそばを離れ、もみぢしたつたの葉をむしつてゐた。——食事のときにも、母親は、童子に小さい魚を火にあぶつてつけたが、童子はそれよりも野菜の方に箸をつけた。

「お母様、おさかなはどうして釣るもの。」

童子は、紅い肌をした一疋の魚を箸のさきで、指さし尋ねた。

「河にあるし海にもゐるの、針のさきに餌をつけ、おさかなの居さうなところへ垂げておいて、靜かにしてゐるのです。お腹のへつたおさかなが来て、フイに食べて針に引ッかゝる……。」

「おさかなは痛いでせうね。」

童子は、母親の顔を見て、痛さうな顔をして、「このおさかなも左うして釣れるの。」さう尋ねた。

「多分さうだらうね。」

た。

「さうしてゐるとお前にはお父さんの顔がよく見えるやうに、お父さんからもお前の顔がよく見えるんだ。だからお前は詰らないことを言つてはなりません。」

童子は、黙つて時計をさつきから見惚れてゐたが、その白い肌には遠い覺えを辿るやうなむしろ鬱陶しい目いろをした。

「あの時計は僕は知つてゐる！」

さう言つて文字を讀むやうな目つきをして立ち上つた。

「さうとも、おまへは何時も珍らしさうに時計を見てゐたんですよ。よく覺えてゐるのね。」

母親は、また言葉を継ぎ足した。「あのときから見ると、おまへは大そう歳をおとりだけれど、あの時分はまだお前は歩くこともできなかつた。」

「さう、僕は歩けはしなかつたのね、けれど今は歩けるのね。ほんたうに何んだかふしぎね。」

童子は、柱の下に立つた。さうして刻限をききむ音にちひさい耳を欝てた。白い肌をもつ時計には卵黄色に曇つた電燈のあたりが、光をや、弱めながら近づいてゐた。

「さうさ、あのころから見ると、この時計も古いものだ。わづかしばらくだつたが、おれには百年も経つたやうな氣がするんだ。」

父親は、時計を見上げながら悲しさうにした。

「でも此子はかうしてゐるんだから……。」
母親は、童子のあたまを撫でさすつた。「ほんとにお前を何處へ返すものか。」さう言ひ手をとらうとしたとき、いまのいままでゐた童子は、既う立關のそとに立ち出て、黙つてすたすた歩いて行かうとした。

「もうお歸り？ ひどいわ、そりや。」
母親は、立關へ飛び出した。さうして父親も。——しかし童子の姿は、植込みのかげにすら影を停めなかつた。

「あの子はもう歸つて了つた——。」
母親は門前に立つて笏梧朗を顧みた。笏は、腫を凝らして地面を見つめてゐたが、其處に童子のらしい小さい足跡が、やゝ濡れ濕つて印せられてあつた。

「ご覽、こんなに澤山な蟲だ。」
笏はさう言つて、足跡に蝟集まつてゐるうちうちしてゐる馬陸を指さした。——馬陸は、足跡の輪廓の濕りを縫ひながら、蠢乎として或る異臭を食みながら群れてゐた。母親の心には、優しい子息の足跡を舐める、この肌痒い蟲が氣味悪かつた。

「にくらしい馬陸。」
母親がその足の下で踏みまじらうとすると、笏にはかに止めた。古い話によると、亡きものの尋ねてきた足跡を踏むものではない、それはそのまゝにして置くものだといふ風に

笏と同じ年頃のその家の主人は、半好意をさしはさんで央げげんな人見知りな表情で、じろじろ笏の顔を凝見めた。
「いや、べつにお宅に用事はないのですが、妙な癖でこの道路をただ歩いてみたいだけで、ぶらついてゐるのです。あやしいものではないのです。」

「あやしいなぞとは申しませんが、しかしあまりによくお見かけしますから……ついおたづねしたのです。」
この木彫を仕事にしてゐる人の顔は、ねむげな腫ぼつたい

臉といひ、頬皺といひ、どこか酒を飲みすぎた人によくありがちな、くろずんだ皮膚といひ、一つとして笏の心に變な氣が起さずにはゐられなかつた。就中、その沈んだ人を馬鹿にしたやうな諦め切つてゐるやうな眼の色には、どういふ對手にも親しさうに話しかける光がなかつた。

「お宅はすぐ西洋館からすこし行つたところでしたね。奥さんにはよくお目にかゝりますが。」
「え、小路から二軒目なんです。」
笏は、なほぐずぐずしてゐたのは、立關の中に、人影らしいものが見えたし、着物のがらの大ききから言つて、れいの子供らしく見えたから、ひよつとしたら出てくるかも知れないといふ微かな期待があつたからだつた。それゆゑなるべく話を長びかさうとしてゐた。

そのうち子供は、珍らしい人と話してゐるのを、犬なぞが

言葉を挿入れた。

二人は、黙つて對ひ合つてゐた。——そして馬陸は、靴針のやうに童子の足跡を辿つて、幾重にも縫糸をかがつて倦くことを知らなかつた。

一一

笏は、夕刻にはそのふしぎな暗い森の中の家のまはりを、何か戀慕ふもののあるやうにうろついてゐた。森と言つても崖ぎしに家に過ぎない、たゞ非常に古い榎と椎とが屋根を覆うてゐて、をりをり路上に鷺の白い糞を見るだけであつた。

そこなら七八歳ばかりの子供が、出たり入つたりして、笏は、その子供の顔を見に出掛けるのだつた。笏には、その子があまりによく肖てゐるといふことばかりではなく、或日なぞ、笏のところを訪ねてくる子供が、そこらあたりで影をなくしたことに、氣を留めてゐたからであつた。

その夕刻にも、笏は、にはかに自分の姿を匿さうとして、垣根に身をよせたが、その家の、なりの高いあるじに、すぐ見つけられてしまつた。たびたび顔を合すが、お互ひに顔をかくしあふやうなことが多かつたのである。

「あなたは何かかういつも用がありさうに私の家のまはりを歩かれるが……何か用事でもおありですか。それともただ歩いてゐられるばかりですか。」

よくするやうに、わざと餘所目をしながら何かの葉つ葉をちぎりちぎり近づいて來た。——笏は、その顔といひ、まるい頭といひ、好ましい感じを與へる子供の近づくの待つた。
「あなたのお子さんですか、たいへん伶俐さうな。」

「え、氣がちひさくて家にばかり居る子なんですが、いや、私のやうに妙に物に厭ふやうに引つ込んでばかりゐるのです。あいさつをしないかな。」

子供は、ちよいと頭をさげた。笏は、永い間その顔を見つめてゐるうち、子供もふしきさうに眼を凝らしてゐた。
「おいくつですか。」

「七つです。」
子供は、おとなの話をむしろ陰氣臭い目をして、直覺的に自分の身の上に話をはこばれてゐるのに、注意深くなつてゐるらしかつた。

「ときどき遊びにいらつしやい。」
さういふ笏に、子供は寂しい微笑ひがほをもつて答へた。
「では失禮します。」

あるじは、突然さういふと、家の中へはひつてしまつた。子供の手をひいて——そして暗い戸を裏から閉めてしまつた。變な家もあるものだ。それにしても何といふ變化つた人だらうと、笏は自宅の方へ引きかへさうとした。

と、すぐ垣根にそうた暗みへ犬の足豆が擦れるやうな音が

して、小さい影があるいて行つた。からたちの垣根ばかりだからそのとげにでも手足を引つかけはしないかと思つてゐるうち、小さい影は笏の方へ向いてゐた。なるべく氣づかれないやうに笏は足音をひくめながら、その子のあとについて、垣根のきはをあるいてゆくうち、いつの間にか自家の前へ出てゐた。が、小さい影は、そこにもう無かつた。

「はあて。」
笏は、植込みをぬひながら、そつと、家の中を見た。女は縫物をしてゐる。そしてその傍にいつもの童子が坐つて、糸屑を弄つては丸めてゐた。よこ顔がそつくりさツキの家の子に似てゐた。が、女はすこしも童子のゐることに氣がつかないらしく、それに目を遣りもしないで、ときどき溜息をついては玄關の方をながめてゐた。恰も何かそこに影のやうなものでも折折見出さなければならぬやうに……しかし童子はおとなしく、たゞ小さい跪座をくんで、ひとり、それがひとりであるために充分であるやうに、丸めた糸をいくつも女の膝の上にならべてゐた。女は、それに少しも氣をとられないうでゐた。静かな電燈の下で、それらの光景が、笏梧朗をして家へはひることを思ひとめさせ、止むなく植込みの中に佇つてゐた。

童子は、それがいかにも安らかで他念なさうだつた。同じことを繰返しながら倦むこともなかつた。母親は、蟲のこゑ

にさそはれたのか、それとも何となく長い疲れが出たのか、針箱に手をさへたまゝ、うつとりと睡り込んでしまつた。母親とすこし離れて小さい臥床があり、そこには赤兒がこれも低い笛のやうな安らかな睡りを睡つてゐた。いつさいは曇色ある明りの中に、時計ばかり動いてゐる外に物音のない部屋は、きちんと仕組まれたすくりいんのやうに、おのこの影をひきながら在るまゝに在つた。

笏梧朗は、足音を忍ばせ家のなかへはひると、童子は、すぐに見付けた。そして父親のそばへ戀しげに寄りそつた。「わたしは先刻お前が垣根のへりを歩いてゐたのを見た。そして自家の前で見失うたのだ。」

「いえ、お父さん、僕は何にも知らなかつたのです。」

「それならそれでよいが……」
笏は、童子の面を見つめた。「お前はこのさきの、暗い家の子供を知つてゐるかね。まるでお前そつくりで、お父さんにも見境がつかないぐらゐなんだよ。お前が來ないときには、お父さんはよくその子供の顔を見にゆくことがあるんだよ。」さう言つて、童子のあたまを撫でた。

童子は、しかしそれには答へないで、悲しげに父親をさしのぞいた。

「お父さん、どうしてあなたはそのやうに似てゐるといふことばかりを捜してゐるくの。僕は誰にも肖てはゐない。僕は

僕だけしかない顔と心をもつてゐるだけですよ。」

父親はそのとき初めて氣がついたやうに、そして童子によくわかるやうに口を切つて言つた。

「それはお父さんのわるいくせなんだよ。お父さんには左ういふ詰らない似てゐるといふことさへせめての樂しみなんだ。お前にはそれがよくわかるだらうね。そしてお前がいつでも此處のうちにゐられたら、そしたらお父さんはさういふツマらないことなぞ考へはしなんだよ。」

童子は、黙つてうなづいた。そのとき母親がうつすりと目をさました。眩しいものを見つめようとして、それが能く見つめられない寝起きの人のやうに、しばしば溢らせながら童子を見成つた。

「まあ、お前そこにゐたの。いつから居たの。そしてお父さんも、——わたし睡つてゐたのね。」

彼女はさういふと、その夢裡になほさまようてゐるやうな上目をして見せた。

「わたしとうとしてゐると、大そう花のたくさん生えたところ、お前にあつただけけれど、お前はわざとのやうに知らない振りをして行つてしまつたの。なんでも暗いへんな彫り物をしてゐる方がね、ほらいつかあなたにお話をした。」
彼女は、さういふと急に何かを思ひあてたやうに、笏の記憶をゆすぶつた。

「すぐその、道路のまがり角にゐらつしやる彫刻家がね、なんだか岩の上のやうなところに立つて、わたしの方を眺めてゐらつしやる。——すると、この子がわたしの方へは來なくて、その彫刻家のそばへ行くぢやありませんか。しまひにその方がね、この子の手をひいて、水草の生えた花の浮いてゐる水田のやうなところへ行つておしまひなすつたの。そしていま目をさますと此子がゐるぢやありませんか。」

彼女は、ふしぎさうに笏の顔を見た。笏は、その妻が夢見てゐる間に、自分が彫刻家の家のまはりゐたこと、その子供をみたことなどを、思ひ出した。その事を彼女に話をしておいて、

「あの彫刻家がね、おくさまによくお目にかゝりますとさう言つてゐた、なんでもないとくにね。」

「え、わたくし町へ出ようとしてあそこ前をとほりますと、いつでも私の方を眺めなすつて大そうさびしい顔をなすつてゐらつしやいますの。いつだつたか、ふいに何かのはずみにご挨拶をしてしまつて、それからまだ黙禮だけいたしますの。」

笏は、女の顔をみながら己れもやはりそれと同じい、むしろ好意に似たものをおぼるげながら心に感じた。

「あの人は妻をなくしてから、あゝしてほんやりしてゐるらしい、あの子供とふたりきりらしいんだよ。」

「え、そりやわたくしもぞんじてゐますの。それにあのお子さんときたら、まるで此子に生きうつしなんですもの。」
 女は、いまさらのやうに童子の顔と、己がこゝろにある佛とを見くらべるやうな目色をした。
 「全くふしぎなほどよく似てゐる。」
 笏も女と同じことを言つた。

そのとき母親は、ふと童子の手に笛の提げられてないのに初めて氣づいた。
 「おまへは笛をどうかしたの。珍らしくもつてゐないではないかね。」

「ぼく、筋はつまらないから止した。」

「さうかえ、しかしお前はそんなにまで大人にならなくともいゝわ。まだ笛を棄て、もよい年頃ではない……。」

童子は、白いやうな微笑ひをもらしながら、母親にわざとのやうに或る哀愁をふくんだ聲音で言つた。
 「笛なんぞ携つていつも鳴らしはしないんですもの。」

「どうして鳴らないんでせう。」

「笛の孔が塞がつてしまつてゐるの、六つの孔がみんな開いてゐないんです。」

「お見せ。」

母親は、笛を手にとると、古い埃や泥のやうなもので凝固つてしまつた孔内は、吹かうにも息の抜けみちがないために

音色が出なかつた。

「ひどい埃ね。」母親は、それを縁端へ持つて出て、細い針金のやうなもので、孔内を掃除しようとしながら、

「いまによく鳴るやうにしてあげますから待つてお出。」

さう言ひ、孔の一つびとつに針金を貫しながら、器用な手つきで古い埃をほじくり出した。丹塗りの笛の胴にはひつてから密着いたのか、滑らかな手擦れでみがかれた光澤があつた。

「お母様、その笛をおさうじしてくだすつても、僕それを吹けさうにもないの。」

「どうしてでせう。」

「どうしてつて僕そんなものを吹いて居られないんですもの。」

童子は、暗い顔をした。蝙蝠のやうに動ずんだ或る影が過ぎ去つた。——笏も、その妻も、きふに壓し黙つて、哀れな己れの子供とその言葉を裏返しして眺めた。

「さうね。お前はさういふ笛なぞ吹いてゐられなささうね、母さんが悪かつた、母さんは大へんなことを忘れてゐたから、ついお前を困らせた。」

「いえ。」
 童子は、母親をなぐさめようとして、笛の掃除を止めかゝつたその時に、よく甘えるときするやうに靠れた。そして低い殆ど囁くやうな聲で言つた。

「それでも時々、ほんのときどきだけれど、僕笛を吹いてみたいの。」
 母親は泪ぐんだ。「さうだらうね、けれどお前の居るところではね。」

笏は、これも立膝をだいて道然として坐つてゐた。

「おれが吹いてやつてもいゝよ、よくお前のこないときにも、いつでもお前の居さうなところへとぐくやうにね。」

童子は微笑つた。さういふ父親を憐むやうな顔附をしてゐた。

「けれども僕のあるところへは、いくらお父さんの笛でも聞えて来はしない、僕そんな氣がする。」

「いや。」

父親は、むづかしい顔をする事によつて、己れの心にある悲しさうな表情をあらはすまいと努めるやうに、眉をしがめた。

「お前が聞かうといふ氣さへもつて居れば、きつと聞えるにちがひないんだ。最もおまへにその氣がなければ仕方がないが……。」

童子は、なかば疑ふやうにそしてなかば父親をなぐさめるやうに言つた。

「僕、聞かうといふ氣はあるの。」

「それなら聞えるよ。きつときこえるに決つてゐるよ。」

母親も、ことばを揃へた。

「聞えますとも。」

が、その三人の影はまるで有るか無いかのやうに、疊と壁の上に稀薄であつた。かれらは何か幽遠なものにでも對ひあふやうに、ひとりづつが、何を手頼つてよいか、そして何を信じてよいかさへ分らなかつた。かれらは唯忘れた夢をとりもどすやうに様々な己れの考へを考へるにすぎなかつた。

笏梧朗は、これはよく見る夢だと思ひ、母親は、これが次第に現實につながつてゆくものだといふ風に、女らしい未練な考へにふけつてゐた。

が、童子だけは自分がどこから來てゐるかといふことを、かれはかれの本體に呼吸づいてゐるだけ瞭然と知つてゐた。

「お母様、僕はもうかへるの。」

母親は、それをいつもの慣ひであるだけに止めることができなかつた。

「さう。もうおかへり？」

父親の顔をふと見た。笏は、煙草をふかしながら煙の中から母親のかほを見返した。

「ではお静かにしていらいつしやい。」

「え……。」

童子は立つた。間もなく表へしづかな素足の音がした。——あとを見送つてゐた父親はすぐ座を立つた。「何處へいらつ

しやる。母親は、真青になつた笏の顔をまともに見上げた。
 「あれのあとから行つて見る……。」
 笏の、さういふ聲音はふだんとはかすれてゐた。その上眼色まで變化つてゐた。女は、笏のどこかを掴まうとした。
 「あれのあとから行つても何んにもなりません。」
 「いや、あれのあとから行つて見る……。」
 笏は、さういふと玄關のそとへ飛び出した。白い道路は遠いほど先の幅が狭り、ちぢんで震へて見える。ふた側の垣根の暗が悒然と覆うてゐるかげを、童子はすたすた歩いてゐた。電燈は曇つてひかり沈んでゐた、と、黒いかげがだんだんに遠のいてゆくのである。

三

笏悟朗は、小さい影を趁うてゆくうち、じめじめした水田のやうなところへ出てゐた。限りもない水田のうへに圓い緑色の葉が浮き、そのあひまに白い花が刺繍された薄明りのさす四邊は、さざ波一つ漂はない、底澄んだ静かさだつた。その岸へついたとき童子は立ちどまつて不意にうしろを向いた。笏は自分の姿を見られまいとしてからだを縮ませたが、その姿はすぐ童子の瞳の中に映つた。笏は、何ごとかを言はうとしたが、童子はものを言はずに睨み込んだが、すぐ一沫の水煙を立てると、その水田の中へ飛び込んだ。笏はすぐ馳

けつけたが、いたづらに澄みかがやいた水田には、その波紋の擴がつてゆくばかりを見るだけで、童子の姿はなかつた。
 笏は、此處がいつたい何處であるかといふことを考へるより、自分がどうして此水田へきたかと云ふことを考へると、自分の歩いて來た道程があまりに近かつたし、そしてさういふ近いところにこんなにまで廣い水田があらう筈がないやうに思はれた。笏はうしろ向きになり歩いてゐるうち、いつの間にか、病院の前町へ出てゐるのに驚いた。さうすると直ぐ鐵橋の下の水田へ、自分が今行つて居るのだといふことが、判然と頭にうかんで來たのだつた。

笏は、わが家の前に立ち、さうしてわが家に不吉なことでもありはしなかつたかと、内部をさし覗いてみたが、かはりのない静かさが輝く電燈と一しよにあるきりだつた。そして妻は青い一本の草のやうなものさきに、火を煙らせてゐた。笏は、その妻の顔色が真青であるのに驚いた。
 「よくお歸りなすつた。わたしどうしようかとおどおどしてゐたのでございます。あなたがあはてていらしつてから……。」
 「水田のどこまで行つたが、そこであれの姿がなくなつた。あれが私の姿をみるとすぐに飛び込んだのだ。」
 女はそのとき、「水蓮といふものは晩は咲かないものでございますね。」
 「さうさ、朝からおひるころまで咲くものだ。それがどうし

たのか。」
 「いえ、ただその事が氣になつたものでございますからお尋ねしただけでございますの。」
 女は何か考へ込んでゐるうち、表に足音がした。それが佇んでゐるらしいけはひがした。ふたりは耳をかたむけた。眼と眼とでそれを聞き分けようとしてゐた。
 「どなたでせう。」
 「たしかに誰かが立つてゐるやうだね。」
 「たつた今しがたですよ。」
 「黙つて？」
 表でやはり人のゐるけはひがつづき、そして門の戸がぱたんといきなり開けられたときに、笏は新しい驚きやうをして顔をすかし見た。
 「私です。」
 笏は、その人がれいの彫刻家であることに、すぐ氣づいた。
 「あなたでしたか、どうぞ。」
 彫刻家は、わざと立つて、家ぢゆうをすかし見ながら、かすれた低い聲でおづおづ疑ひ深さうに言つた。
 「あれがもしか此方へまゐつてゐはしませんでせうか、いましがた犬を追つて出てから戻らないんで……夜分でしたがおうかがひしに上つたのです。」
 「いえ、お見えになりませんの。どこへ行らしたつたのでせう。」

女は、彫刻家のわびしげな眼のうちにをさまり答へたときに、笏は、そのことに自分がかかはつてゐるやうに思はれてならなかつた。そして、
 「あれとはどなたです。」
 笏は、さうたづねて見た。
 「子供のことです。」
 彫刻家は、わざとらしい質問をあざ笑ふやうに、大きな手で、子供の背丈をはかるやうにして見せた。「つまり私はなんだかお宅へ行けばわかりさうな氣がしたので、それを自分でおさへることができずに、かうして夜半でしたがお訪ねして參つたのです。」と、一步あとへ退きながら言つた。
 「そのうちにおかへりでございますよ。」
 女は、さう言ふと外へまで出て見ながら、彫刻家を見送つた。
 「あれがよくお宅の前……さう、ちやうど此邊に佇つてゐることが多いものですからね。どういふ譯なんですか、ふいにゐないと必然此處に立つてゐるんですよ。」
 女は蒼くなつて笏をかへり見たが、こんどは胸をおさへるやうにして、訊ねて見た。
 「いつころでせうか、坊ちやんが入らつしやるころは？」
 「さう、晩方ですな。どうも不思議な氣がするんです。」
 彫刻家は、さういふと「お邪魔をしました。」と云ふと、すた

すた暗いもと来た道路へあるき出して行つた。帽子のない、なりの倭い姿は、墨のやうに滲んだ影を、くらしい軒燈の下に落して行つた。

笏と女は、そのあとをぼんやり見送つてゐたが、笏は、そのかげのあとに、もう一つ、小さい影のあるのを見た。

「ほら、尾いて行くぜ。小さい奴がかがんでな。」

「ええ。」

女はからだを震はせながら、それを見送つた。と、れいの馬陸うすでがくろくろと門の臺石のところへ群れ、濕りを食ひあるいてゐた。

秋遅い荒れ冷えた風が吹き、何となくからだの一箇所に自分の手を觸れてゐたくなるやうな夕景には、童子は寒さうにもぢんだ姿をどす黒く門端に滲ませたが、どういふものか、その影は日に稀薄になつた。

古い寫眞繪のやうな、雨漏りのした紙のやうにきいろくぼんやりしてゐた。

女は、それがどういふ譯で、うすく、にじんで見えるのか分らなかつた。ただ、童子の手をとるごとに、自分の目をこすりながら、笏梧朗に言つた。

「わたくし眼が悪いんでせうか。この子がぼんやりとしか見えません。それも此頃になつてはげしくなるばかりですの。」

「お前ばかりではない、おれも何んだか此子の姿がぼやけて見えるのだ。まるで影みたいに遠くなつて見えるのだ。」

笏梧朗は、ふしぎに日に日に輪廓のぼやけた童子を見るごとに、童子が自分らのそばから日に日に遠のいてゆく前徴だといふことや、もともと影のやうな童子のことゆゑ、影はやはり影としか眼にうつらなくなるのだと、悲しげに心でうなづいた。

「この子が亡くなつてから、どれだけ経つただらうか。」

「三月になります。」

女は、さう答へると、曲げた指をもとのまま、膝の上に置いた。

笏梧朗は、童子の眼をみつめた。童子も、しばしば眼をしばたいたいては、何んだか絶えず不透明なものを仰ぎ見るやうな眼付をしてゐた。そして、

「お父さん、僕もやはり何んだかあなた方がよくわからないの。見ようとするとするほど、眼がかすんでしまつて能く見えないんです。どうしたんでせう。」

笏もその妻も目を合せた。三人が三人とも何か羅ろのやうなもので眼隠まぶしされたやうな気がした。

「お父さんの顔が見えるかね。そこからお前の目に。」

「え、ぼんやりと……」

童子は目をしばたいた。母親も心に苛立ちを見せながら

目をこすつたりした。

「かうしてお前とわし等とは、日が経つごとに縁が切れてしまふのだ。お互ひの影がだんだんに薄くなつてしまつて、お前にもわし等にもお互ひに見ることができなくなるのだ。」

父親は、さういふと童子の手を握りしめた。童子は、その手を父親のするとほりに委せてゐた。

「でも、そのうちに又見えるやうになりはしないでせうか。」

母親は童子の顔近く眼をよせながら、慄おそへられなさうに言つた。

「いや、もう再たまたと子供を見ることはできないだらう、何となく左う思はれる。いつまでも子供をみてゐることはできなくなるだらう。」

母親は、童子に縋つて泣いたが、童子は、間もなく門の方へ駆け出した。そして全くそのかげを消してしまつた。

その翌晩から、笏はその妻と食卓に對ひながら、ぼんやり門前をながめてゐたが、いつもの時間になつても童子の歩いてくる姿はなかつた。垣を覆ふつたの葉が、長い莖を露はして凋れ落ちる微かな夕風が亘るだけだつた。

かれらの退屈で陰氣な日が續いても、童子の寂しい姿すら見ることができなかつた。笏もその妻も、灯に對つて悄然と坐つたきりだつた。長い夜は壁ぎはから冷えわたるだけで、何一つかれらの心には温かいものがなかつた。

「あれはみな夢をみてゐたのでせうか。あの子の訪ねて来たことも、さうして話してゐたことも。」

母親は、やつれた面をあげ、夫をみあげたが、笏は、やはりちからなく坐つてしばらく黙つてゐたが、やつと唇々しい口をひらいて言つた。

「あれらの出来ごとはおれとお前とが、想像くわいあげてゐたやうなもので、それが今はあとかたもなくコハされたのだ、さう思ふより仕方がない。」

笏はその心に、童子の来たことも偶然に父と母との考へがいつの間にか毎日の出来事のやうに仕組まれてゐたに過ぎない。それもお互ひが子供のことを考へ合つてゐるとき、微妙な働きがあれほどまでに正確に動いてゐたかと思ふと、すこし恐ろしい氣もした。――笏梧朗はなにか考へ込んでゐたがふと慄おそ々した目をあげた。

「かうしてゐてもあれがやはり来てゐるのかも知れない、ただ、目に見えないだけかも知れないのだ。」

「さうね、わたしもそんな氣がしますの。」

女もさう答へると、あたりをうつすりを見廻した。わけても庭の方へその視線がたどらうて行つた。

「あれが来てゐると考へるより仕方がない。笏は、さう言つてあたりを眺めても、何も影らしいものすらなかつた。――二人は、青色を含んだ夜空の下へ出て、置石のそばへかかん

だ。妻は、石燈籠の灯石のあるそばで、燐寸を擦った。そして昔の生えた青い燈籠に灯を入れた。

「久しい間灯を入れなかつたな。」

笏は、くらしい繁りの間にその燈籠の灯のちらつくの眺めた。が、しばらくすると、女はひつそりした聲で笏を呼んだ。「たいへんな蟲。」女は、その濕りある地面を指さした。そこにれいのくろぐろした馬陸が、小さい足音を縫ふやうに這ひ動いてゐた。

「あれはやはり来てゐるのね。」

女の、その聲は嬉しさに輝いてゐたが、どこか凄氣のある青くさい聲音であつた。

「来てゐるらしい。」

笏は、女と同様に広い庭さきに目をさまよはせたが、蒼茫とした月明を思はせるやうにあかるい夜ぞらと庭樹の間にはそれらしい陰影すらなかつた。が、又何となくふしぎに目のとどくところに茫乎とした影が、ちぢまり震へて見えるやうな氣もした。繁りの奥や、幹が地に立つところに、かれらはその愛兒の姿の、ほとんど水に濡れたやうになつてゐるのを眺めた。

「あれの方でも探してゐるかも知れないのだ。だが何となく盲同士のやうな氣もするのだ。」

笏は、あたりを眺めながら、縁端へ来て何時までも佇つて

影を求めてゐる、やせ細つてゐる己が妻を哀れに思った。

「わたくし、かうして手をさしのべてゐますと、掌が温いやうな氣がいたしますの。あたまでが恰度ふれてくるやうに。」

女は、右の手のひらを伸ばして、何かに觸れてでもあるやうに、宙に浮かしながら目を凝らしてゐた。——笏には、その手の下に、誰かが背延びをしながら、なほそれにとどかないでゐる姿を描くには、何のさまたげもなかつた。

「だが、そんなことを爲るものではない、氣味の悪い。」

「え。」

女は、手を引込めた。

女は、夫のゐる縁側へ来た。ふたりとも、ぼんやりと庭をながめてゐた。疲れてゐるといふほどでもないが、ぼんやりと凡ては夢のうちにある氣がしてゐた。一秒間がふしぎに十年も二十年も経つやうな退屈な時間が、ゆるく廻つてゐるやうでもあつた。わけても笏には、途方もない大きな車の輪が、のろくゆるく廻つてゐて、その轍の間に、誰かが挟まつてゐるやうな氣がした。それは、童子でもありないうやうでもあつた。笏は目を凝らしてながめてゐた。

女は、立つてれいの光る小さい堂宇の前へ行つた。そして細い一本の草のやうな烟るものに火を點けた。かれらは、かれらの生んだものを慕ふそれにふさはしい、小さいお鉦鼓を叩いた。

笏は、立關へ出た。そして植込みをながめ、表へ出た。そして往來の遠くまで眺めわたしたが、何の姿もあらう筈がなかつた。晩のことで、豆ずれをさせながら、すたすたと犬が濡れたやうに走つて行つた。それを見ても、影がちぢまり小路へまがると、それきり何もない夜目にも一色の白い道路であつた。

「お父さん——。」

笏は、聲のある方へ振り向いた。背後にその聲があつた。さうかと思ふと前にも、そして空にも、また地ごもるやうなところにもあつた。どこを向いても、聲は、かれにむすびつた。

すたすたと誰かが歩いて行つたが、よく見ると、さきの犬がもとの道を小路から出てきた。どす黒い影だつた。笏は、その犬を呼んでみたが、ふりかへりもしないで、やはり寂しい豆ずれを曳いて行つた。かれは、間もなく部屋へかへると、れいの、織い笛をとり出した。そしてそれを静かに吹きながら見て見た。その笛の音について何かが惹かれてくるやうな氣がしたからである。

雨になつて笏の家の内も外も、ひつそりとしてゐた。かれら内側から雨戸を閉め、そして寸分の隙のないやうにして置いたらしく少しの明りさへ漏れてゐなかつた。しづかな雨がつついて話し聲もきこえなかつた。が、ふしぎに雨戸のきは

に小さい影がいつころとなく——多分、雨戸を閉めてからあとに、どす黒く滲んでゐて、すこしも動かなかつた。それは鳴らない丹塗りの笛をさげた、れいの童子の姿であつた。

嘆き

一

朝子はどうなることか？ と、母親の顔とをばさんの顔とをかはるがはる見成つては、母親が承諾してくればよいとどきつく胸をおさへてゐたが、母親はいつに似すすぐ受け合つたので、思はず飛びあがりたいうやうな気がした。

「では朝ちゃんをおかりすることにしまして……。」

「でもいたづらざかりでございますから——どんなにお骨が折れることかと思ふんでございますよ。」

「もうこんなに大きくなつてゐらつしやるんですもの。」

をばさんがさう言つて、朝子のあたまへ手を遣ると、朝子はその手の上へ嬉しさうに少し羞かんで、自分の手を乗せた。

母親はちよつと柔らかくきめつけるやうに、朝子の、何となく眩しさうにしてゐる眼を見た。

「優良しくしてゐるんですよ。もしさうでないとおとでみんなをばさんに聞きますから——。」

「え、だつてわたし何時だつてきかないことはないんですも

付で、ふきげんさうにしてゐた。

「が、いま考へるとそんな事——まで言はなくともい、だらうと思つたが、」

「わたしはずみで詰みつけたんですもの。蹴つたなんてひどいわ。」

をばさんをちらと見ると、微笑んでもおもしろさうな顔をしてゐた。

「だからこんどはそんな事がないやうにするんですよ。」

母親はさういふと、膝がしらを合せて、

「ではさうおねがひすることにしまして——今晚すつかり着物を持つて参りますから。」

「朝がお早いものですから、家から發つことにしようと思つてゐるんですよ。」

「まあ何から何まで——では後ほどおうかがひいたします。」

母親がかへつてから、朝子はすぐをばさんをつかまへて、

「あんなことを言ひ附けたのはをばさんでせう。ひどいわ、これからをばさんのことも皆言ひつけてやるから！」

「さう言つて朝子はをばさんを睨んだが、をばさんは頭をふつて、

「わたしぢやない——」

さう微笑ひながら言つた。

「ぢや、をばさん？」

の。

「此前湯河原へ行つたときに、をばさんを蹴つたつてんぢやないの、——。」

「まあ、ひどい。」

「一たい誰がそんなことを言つたのだらう？ をばさんでなければをばさんだ。——朝子はそれが本統のことでないといふことを表はすことが、ちよつと口にはいへなかつたために

涙ぐんで見せた。——何かのすみみ、あげた足が寝ころんでゐるをばさんの額を踏みつけた。……ごめんなさい、と、

さう言つて気がつくのをばさんは蒼い顔をして、自分の眼を見たまま、額へ手を遣つてどこか筋でもちがつたやうに痛さうに顔をしがめた。——どうかなさいまして？ をばさんが

さう言つてそばへ寄るとをばさんは頭が痛いと言ひ出して、きふにタオルで冷したりした。頭痛持ちのをばさんだけに氣になつて、も一へんごめんなさいといふと、何でもないよ、

と、その儘で済んだが、その翌日までをばさんは青い顔をしてゐた。……そんなことから何時になくをばさんまで恐い顔

の。

「さうかも知れないわ。——もう済んだことだからどうでもいいぢやありませんか。」

「をばさんに問つてみるわ。をばさんは何處へ行つたの？」

「明日の買物にいらしたの。」

「おかへりになつたら、うんと言つていぢめてやるわ。」

朝子はさう言つたが、「何のお買物？」と、些つと考へるやうにして、をばさんの顔を見あげた。そして言つた。

「あてて見ませうか。」

「え、あててごらん。」

「をばさんのものでせう。」

「朝ちゃんのものでせよ。をばさんの買ふものはきつと左うに決つてゐるんですから。」

朝子は嬉しさうな顔をして「何んだらう。」と言つた。……そしてをばさんが歸つてきても、例の事は言ふまいと考へた。

夕方、をばさんがかへつてきたとき、をばさんと朝子と、湯どのへ這入つてゐた。——なれた湯でないといけな言ふので、をばさんはけふも先にはひつたのである。

「いま直ぐ出るわよ。すぐよ。」

朝子のこゑが勝手に呼ばれたが、をばさんは「ゆつくり這入つてゐたらいい。」と、左う言つた。しかし朝子は間もなく飛び出したらしく、

「おかへりなさいまし。」
と、をばさんの眞似聲を襖の外でして見せた。
「まだ洗ひもしないのに、出てしまつちやいけないぢやないか？」

「だつてわたし入浴つてゐられないんですもの。」

「なぜ？」

「なぜつてわけはないけれど……。」

「屏の向うで同じくをばさんが言った。」

「風邪ひきますよ、そんなに温まりもしないで飛び出してしまつちや——。」

「風邪をひいたつて關はない——。」

「母さんに言ひつきますよ、いまからそんなに聞かないぢや、向うへ行つたらどんなにいたづらするか分らない……。」

「言ひつめたつていいわよ。」

朝子は屏のそとで着ものをきると、すぐ茶の間へ出た。そしていちばやくをぢさんの紙包みのポール箱を覗きつけるとそれに手をふれた。

「なあに？　これ。」

をぢさんは微笑つて、

「あてて見たまへ。」と言つた。

「何か知ら？」

朝子は指さきで紙包をひねりながら考へては、あれかこれ

かと、心で搜りあてて見た。——指さきがあんまのやうに器

用に紙包みの内をさぐつた。そしてはつと思ひついて見て、全くそのほかの何物でもないと思へると、いきなり叫んだ。

「分つてよ！」

「ぢや言つてごらん。」

朝子はそのとき湯上りのちひさい足をくるつと出して、その足の姿をひと撫でして見せたが、

「これでせう？」

「これとは？」

「靴！」

「當つた——。」

紙包みはすぐはしつこい指さきにつかまつたが、しで紐の結びがほつれなくて、心をおちつけるほど絡みついていらいらしてしまつたので、朝子は前歯できつちり當てがひ、紅い紐を二つに噛み切つた。——紙包みをばさばさめくつてあると、粉つぽいくせに濕氣のあるポール箱が出た。

「まあ、嬉しい。」

踵のほそい女靴が一足、すぐ庭さきの明りを宿らして柔らかさうに、朝子の手の上にあつた。

「はいて見ていい？」

「いいよ。」

一度足を入れてから、又思ひ出して、
「靴下をはかなきや駄目よ、きつちりしないわ。」

朝子はこんどは靴下をはいて、新しい靴を着けた。そしてちやうどいい——と、疊の上を歩いて見て言つた。……子供時分に靴などといふものを履いたことのないをぢさんには、それがちやうど自分が見たやうな氣もちを無理にも感じなければならなかつたほど、筒袖姿の、哀れな自分自身をふりかへつて見たのである。

をばさんは湯どのから出ると、

「まあ、いい靴。」

さう言つて朝子の肩を一つ、そつと叩いた。——朝子は肩をちぢめ、いたづらものらしくちい……と、をばさんに舌を出して見せた。をばさんはそつと睨むやうなまねをした。——が、をばさんの買ひものは一つもなかつた。

——晩に、二人は買ひものを整へるために又街へ出かけた。茶棚の上にある支那風なお厨子の、兩扉に龍紋のあるそれををばさんはぎいいと閉めた。いつも日暮れにはさうするのだつたが、けふは朝子の母親が來たりしてゐて忘れてゐたのである。——どうしたはずみか、供へた花が屏にはさまつて、白い花瓣を浮かしてゐる。をばさんはそれを中の方へ入れて、扉を閉めた。——をぢさんも黙つてそれを眺めてゐた。

「なぜ晩になると閉めるの。」

「お寺だつて晩には扉を閉めるぢやありませんか。」

「さう、そんなわけなの。」

朝子はさういふと、すぐ立關へ出て行つた。——かれらは暗い町から夜の明けたやうな電車のなかに坐つて、さらに明るい大通りへ出て行つた。そして飾窓を覗いてあるいた。いつも買ひつけの店へはひると、春のシヨオルが美しく下つてゐる。——をぢさんはそれを見てゐると、黙つてその柔らかない絹地に手をふれた。女ものは女に買つてやるより、かれ自身そのものが欲しいやうな氣のするのを、それほど深い意味で考へなかつた。ただ好もしい明色ある氣もちをかんじた。「あれを朝ちゃんに一つ買つてやらうぢやないか。よく似合ふだらう。」

「あれをですか。」

朝子はむしろそのとき本能的に、をばさんの顔をみた。をばさんの顔はすこし違つてゐるやうな氣がして、そのかげが自分の心にも落ちるやうな氣がした。——が、すぐをばさんは何か心づいて、へいぜいの顔いろになつたのを朝子は又倫み見た。

「朝子のお父さんには大へんお世話になつたから——。」

をぢさんは財布から金をつまみ出しながらさう言つて、朝子にシヨオルを巻かせた。朝子はあんまり突然にさういふシ

ヨオルを買つたので、吃驚したやうな顔付で、それを織い首にまきつけた。
「いいをぢさんね。おれいをおつしやい。」
朝子はやつと安心をしてをばさんの、へいぜい通りな言葉つきを聞いた。

「をぢさん、ありがたう。」
真紅に漆黒な斑點のある、うすい絹色はながれて、朝子の白い足袋の爪さきまであつた。をぢさんは朝子の嬉しさうな顔をそのまゝ、むしろ静かにこころよく眺めた。

「お前だつておれだつてそんなに他人から物を貰つたことはないだらう。そんなことはどうでもよいではないか。」

かれらはその店を出ると、茶を喫んで、また道路をあるいた。——朝子は嬉しさうに幾度もシヨオルを掛け換へたりしながら、そのたび、或る新鮮な感じを味ふらしかつた。二人の間にさういふ美しい小鳥があるやうで、明るい氣がした。

が、或るバラソルを賣る店から、突然縮緬の空色の派手な羽織を着た、まるで眼覚めるやうな美しい姿をした奥さま風な女が、まだ誕生過ぎくらゐな赤ん坊を抱いて、番頭や小僧に送られて、車道に待たせて置いたらしい自動車に今にも乗り込まうとしてゐるのが二人の眼に映つた。……

そのとき朝子は呆氣にとられて、その奥さま風な女と美しく着飾らせた赤ん坊とを立ち止つて眺めてゐるをぢさん夫婦

をかへり見た。——わけてをばさんの眼は自動車のドアが最後にあんと響いて閉められた後まで凝然と見詰めてゐた。

その奥さま風な女の母親らしいのがこれも店さきに立つて手をふつて見せると、よく磨かれた車の窓玻璃に映る赤ん坊の、きよとんとした瞳が紅と緑との着衣の間に浮んでくろくろと輝いてみえた。——そしてその奥さま風な女は赤ん坊に何かささやきながら、若い母親らしい艶やかな微笑を含んで、白い手を振つて、さよならを挨拶してゐるらしかつた。

間もなく自動車はうごいて、車道のかなたに消えてしまつた。——しかしをぢさん夫婦はぼんやりとまだ見送つてゐて、にはかに歩き出さうとしなかつた。朝子も些つと或事を思ひついてそつと二人の顔を見あげて些つと悲しがつた。——一分間は過ぎた。かれらは歩き出した。

「お里がへりらしいのね。赤ちやんを抱いたりして？」

をばさんの、その赤ちやんを抱いたりして——が朝子には何となくをかしがつた、にも拘らずをばさんの顔は左と右との顔色がまるで異つて、兩方の頬が何か言ひあらそひをしてゐるやうに悲しげに見えた。

「あの子供はきつと熱があるぜ、——あんなに瞳が、黒い筈がないよ、まるであねは熱で燃えてゐるやうだ。」
かれは何か慍つてゐるやうな顔をして、ことさらに荒々しく言つた。——赤ん坊にふうわりと被せられた緋縮緬のうちか

けのやうなものに、何か金糸で繡つてあつた模様迄が眼に残つた。そしてあの嬉しさうな顔をして自動車へ乗り込んだ若い奥さん風な、誇らしいとも華々しいとも言ひやうのない色氣——あれだつて——あんな美しいまるまるした赤ん坊だつて——と、かれは、口惜しさうに心で食ひしばつて、そりやひよつと風邪でも冒いたらそれきりだ、だのにさう殊更に眼の前であんなにまでぼつと見せびらかさなくともよいのに、さう思つたが、ひがんでゐると思つた。

「結局あれは何んでもない人の子だ。」
朝子はをぢさんのその言葉をきいて、それに答へないをば

さんは、いつまでも黙つて歩いてゐるので自身も黙つてゐる。シヨオルを片ちんば片つぽを長く垂らしてゐるのを掛かけかへたかつたが、そんなことをしちやいけない氣がして、我慢してゐた。

「あんなにしてお里歸りしたらさぞ楽しみでせうね、——ずるぶん嬉しさうにしていらしつたわね。」
をばさんは半分朝子にさう言ひ、また半分をぢさんに言つた。

「あの赤ん坊だつてちよつと悪くなつた日にや、もう取りかへしがつかなくなるんだよ。誰の赤ん坊だつて……。」
をぢさんは同じことを例の誰に對つて言ふでもなく慍つたやうな調子で言つた。

でもあんな子は育つものよ、育つようにできてゐるやうな

「わかるものか？ 育てて見なけりや分るもんか。」
三人は黙つて歩いた。まんなかになつた朝子をはさんで——さうして少しも屈托のない人間のやうな顔付だつたこの女のことですつかり思ひどほりになつて、すこしの綻びも出て來ない人人に見えたらう——さう見えるならそれでもよい……をぢさんはやはり慍つたやうな顔をして歩いた。

自動車は峠にさしかかると、濃い緑をかぶつた段々畑の蜜柑樹に、もう季節が過ぎたにかかはらず一杯の黄ろい實が揉みついて、そこだけ明るくなつて、傾斜に従つて暖かい色を燃して續いてゐた。——泥の色も乾いて白い眩しい光に照りかへされて、こんもりした蜜柑樹のかげは濃くこまかく見え

た。
「蜜柑が實つてゐる。——」
朝子は手を拍つて、その黄ろい實が渦をなしてゐる畑を天から降つてきたもののやうに喜んだ。全く天から降つてきたやうな美しい木の姿だ。——をぢさんである尙文は眼にうつりかはる景色をながめ、何となく蜜柑の木といふものは佛教くさいものだと思つた。明け方にその木の上に雲が浮いて見

た。
「蜜柑が實つてゐる。——」
朝子は手を拍つて、その黄ろい實が渦をなしてゐる畑を天から降つてきたもののやうに喜んだ。全く天から降つてきたやうな美しい木の姿だ。——をぢさんである尙文は眼にうつりかはる景色をながめ、何となく蜜柑の木といふものは佛教くさいものだと思つた。明け方にその木の上に雲が浮いて見

た。
「蜜柑が實つてゐる。——」
朝子は手を拍つて、その黄ろい實が渦をなしてゐる畑を天から降つてきたもののやうに喜んだ。全く天から降つてきたやうな美しい木の姿だ。——をぢさんである尙文は眼にうつりかはる景色をながめ、何となく蜜柑の木といふものは佛教くさいものだと思つた。明け方にその木の上に雲が浮いて見

た。
「蜜柑が實つてゐる。——」
朝子は手を拍つて、その黄ろい實が渦をなしてゐる畑を天から降つてきたもののやうに喜んだ。全く天から降つてきたやうな美しい木の姿だ。——をぢさんである尙文は眼にうつりかはる景色をながめ、何となく蜜柑の木といふものは佛教くさいものだと思つた。明け方にその木の上に雲が浮いて見

た。
「蜜柑が實つてゐる。——」
朝子は手を拍つて、その黄ろい實が渦をなしてゐる畑を天から降つてきたもののやうに喜んだ。全く天から降つてきたやうな美しい木の姿だ。——をぢさんである尙文は眼にうつりかはる景色をながめ、何となく蜜柑の木といふものは佛教くさいものだと思つた。明け方にその木の上に雲が浮いて見

えたら、ちよつと或る爽やかな感じ以外に、何か佛の裳のやうなものを見えはしないか？ と、さう思ひついたのである。
「薄田さんは迎へに出てあつしやるでせうか。」
充子はさき廻りしてゐる夫の友達のことを、今ふと思ひ出した。

「待ちくたびれてゐるかも知れない。」

自動車は宿に着くと、薄田は立聞きに出てゐて、毛唐のやうな眼でここに微笑つて立つてゐた。

「さつきから幾度も出て見たんだよ、——部屋は氣に入るかどうか知らないがとにかく見たまへ。」

薄田はさういふと、充子とも挨拶をした。

「朝ちやんてこの子かい？」

「手紙で知らしたのは、この子だよ。」

「朝ちやん今日は？」

薄田にさういはれると、羞んだがすぐ今日はと言つて、きらひな人でないと左う直覺的に思つた。眼の大きい西洋人みたいな顔をしてゐるのが可笑しかつた。——それに絶えず煙草ばかり燻べてゐるのも頭に残つた。

部屋は——鬱然と繁つた夏蜜柑の大樹の見える處に望んでゐた。その大きな實が粒々と枝から垂れて、そつと掌にふれてみたら重いだらうといふ氣がした。
「あれ、橙ですか？」

充子は明るい大きな果實をみあげた。

「夏蜜柑よ。」

朝子はさういふと、すぐその樹の下へ行つて、手をひろげて、聲一杯に何か感嘆したやうな聲をした。

「いい部屋だよ、ありがたう——君の部屋は？」

「二階なんだ。あとで来たまへ。——庭へ下りて見よう。」

三人は朝子のゐる方へ歩いた。——手を觸れてみると夏蜜柑は冷たくみつちりと水氣ぐんで固かつた。手で抱いてみると、些つと尊いもののやうな氣がした、とは云へ、何だか珍しい新鮮な或る人格化をかんじた。それに木のかげに佇つと無数の黄いろらむぶが點火れてゐるやうで、あかるいくすんだ光がぼうと黒ずんだ葉蔭に射してゐた。——こんな豊饒な光景にふれたことのない尙文は、こんなにまで幸福さうな樹があるものかと思つた。

「をばさん、ちよつと入らつしやい、いいものを見せてあげるから。」

「何？」

「入らつしやらなけりや駄目よ。」

充子は朝子の方へ行つたが、すぐ手に何か摘んで、それを掴んでこちらへ見せた。——そのとき尙文は何となく朝子の顔がいつもより紅ずきると思つた。あながち日光のかげんではないらしい——尙文は、すぐ朝子にこちらへ来るように言

つた。

「これ、土筆よ、まあ、こんなに大きくなつて——。」

尙文はさういふ朝子の唇をみると、紅く冴えて頬のいろもいつもより昂奮つてゐるやうだつた。

「ぢつとしてごらん——。」

尙文は朝子の額に置いた手のひらに、烈しい熱をかんじた。

同時に尙文は自分の背中にすつと寒さが通り過ぎた。——これはいけない。——

「熱があるよ。」

「熱が？」

充子の顔いろはすぐ變化つた。そして狼狽へて自分の手を朝子の額のうへに置いた。——毎日毎日病兒の額に置いてその熱をみてゐた手のひらは、すぐ朝子の熱がどれだけあるかといふことまで、じはじはと下からむくれ上る發熱を感じるに鋭敏だつた。

「え、ずるぶんあるやうですよ、——朝ちやん、氣もちはどう？」

「何んでもない——。」

朝子はさういふと尙文が又額に手をふれるので、

「熱なんかないわ。」

さう厭がつて言つたが、今ここで若しものがあつたら、自分らはどうしたらいいだらう？ 尙文は朝子の母親がわづ

かな遺産で育てて来て、行末は自分が朝子に據らなければならぬといふ氣もちであること——そして神経質になつて育ててきたことを考へると、尙文はこのままにして置いてはいけないと思つた。

薄田は醫者の子息らしく、平氣でちよつと額へ手をやると、

「自動車で揺ぶられたからだよ、何んでもない——。」

と言つて澄してゐた。——朝子は顔色までかへてゐる尙文

や充子よりも、すつと薄田がもの解る人のやうに思へた。

「とにかく朝ちやんはぢつと臥てゐなければいけない——よくなつたら遊んだつていいけれど。」

「だつてわたし何處もわるいところがないのよ、熱なんてないわ。」

朝子は自分で手をやつてみると、いつもよりすつと熱いやうなほとぼりをかんじた。それに顔色の變化つたをぢさん夫婦を見るだけでも、氣がうつるのか？ 何んだか息苦しいやうな氣もした。しかし臥るのがいやだつた。

尙文は朝子を臥かすと、帳場へ行つて検温器を借りて来て——いやがる朝子のわきの下へはさめた。この検温器を毎日見なかつた日がなかつた、——透してながめる検温器を見るたびに尙文はいつも呼吸がはずんで、心はしづみがちだつた。かれは左ういふ病兒を間にはさんで、充子の顔と、いろつやの不良い子の顔とをどれだけ眺めたかも知れない——もし朝

子にわるい事でも起つたらどうしたらいいのだらう——。

「八度二分！」
 充子の腫は恐怖さうに震へてみえた。その氣もちはすぐ尙文の心にもつたはつて、これはしまつた、といふ氣が足音をみだして胸のなかで荒れた。

「そんなにあるのか？」
 尙文は女中を呼んで、町醫を呼んで貰はうとしたが、宿のかりつけの醫者は外診で出てゐないから、その人のかへりまで待つてくれるように言つた。——では、その他に醫者はゐないのかと尋ねた。

「老人の方がございます。」

「ではその人を呼んでくれませんか？」

「その方はかりつけの方ぢやないんですから——。」

尙文は勝手な理窟をいふ女中を小面憎く思つた。

「君の宿のかりつけでなくともいいんだ。こちらに用事があるんだから枉げて呼んでくれませんか。」

「え、しかし。」

「ぐずぐずしてゐられないんだから、早く呼んできてくれたまへ。」

尙文はむしろ吐鳴るやうに言つて、出てゆく女中ののろい足つきまで不愉快な氣がした。——そして急に又思ひついて女中をも一度呼んで、氷をもつて来てくれるように言つたが

尙文は恥入るやうな思ひでさういふと、いくらか安心ができた。最後に醫者が老眼鏡をサツクに入れるときに、その手つきが可笑しかつたのか、朝子はにつと微笑つてみせた。——尙文はたしなめるやうに睨んだが、朝子は今度はあつちイ向きになつて微笑つた。

醫者がかへつてから、充子と尙文は眼を見合つて吻とした。それから一時間ほどして氷で冷しても、熱は降らなかつた。やはり八度あつた。

「こまるな、下らなくては何？」

氷嚢を額の上に乗せたがやはりききめがなかつた。

ふたりはまた震へるやうな先刻のおどした氣もちを繰り返した。——そこへ薄田が這入つてくると、紙巻を喫んだまま、

「熱は？」

と左う尋ねた。

「下らないんだ。困つた！」

「大したことはないよ、原因がわかつてゐるんだから。」

薄田はさういふと最うすつかり話の調子を換へて、

「今夜ちよつと活動を見にゆかうと思ふんだ。退屈で仕方がないから——。」

「へえ、活動をね——。」

「うん、宿にゐたつて爲方がないし……。」

女中は氣のないふりで、低いこゑで返辭をして行つた。——いまにお前も子供をもつたら、それが病氣をしたらこの氣もちが分るぞといふ氣がした。むしろ女中の背後から左う吐鳴りたかつた。

床につかせた朝子は先刻とは反對にこんどはいくらか蒼ざめた顔色をして、みんなが騒ぐせゐるか、悲しさうな眼つきをして、天井をながめてゐた。そして尙文と充子との顔と眼をかはるがはる見詰め、あいそらしく微笑つてみせた。——なんだか顔が小さく縮まつて見える：尙文は左う思つた。：いつでも天井ばかり見つめてゐた病兒のくるぐるした眼がそつくり朝子の眼と入れかはつて、尙文の眉をしがめさせた。電燈が點いてから、町醫はかたのやうな折靴を持つて這入つてくると、検温器を振つて挿めながら、老人らしくもなくぞんざいに診察してしまふと、意味のない微笑を一つしてから、

「胃がよくない——それにやはり自動車で揺ぶられたせゐで發熱したんですね。これくらゐなら——。」

安堵していいと言つて、

「お嬢さんですか？」

折靴を手にとつて左う言つた。

「いや、實はよその子をかりて來たんです。それでなほ憂慮したんです。」

尙文はこんな朝子がわるいのを知つてゐても、何一つ手傳ひもしないで、自分だけのことを考へてゐる薄田を些つと怒みたいやうな氣がした。しかも今日着いたばかりなのに自分だけの考へを勝手に決めてかかる彼を——さういふ事柄を何の感情をも挿しはさまないで言へるのを羨しくも思つた。しかも薄田は平氣だつた。

「今晚はかへりがおそいだらうから明日會はう。」

尙文はしかたなしに、「ぢや行つて來たまへ。」と言つた。

……時計をみると十一時に近かつた。どの部屋でも戸が閉つて明りが漏れてゐない——充子は近隣の部屋の人に遠慮しながら氷を割つてゐる。その音をきいてゐると毎日そればかり聞いてゐた病兒のゐたところの、あの厭な鈍いがりりした音が頭腦に倦るげに残つて、今それが、呼びさまされたやうに痛んでくるのだつた。

「氣もちはどう——。」

「何んでもない。」

朝子は幾度たづねても同じい返辭をくり返すだけだつた。そしていまはずつかり病人のやうな顔つきで、晝間のやうな元氣なところがなかつた。自分でもさう思つてゐるらしく思へた。——其うちうとうとしたらしく、低いいびきが聞えた。

充子はそつと検温器をはさむために、その小さい手もちあげた。そのとき尙文はきゆうとした悲しい氣がこみ上げてく

ることを感じた……かれの眼底にはこんな世に生れてこなくともよかつた我が子が、こんな世の中さへ知らずにさつさと消えて行つたことを、またしても忌々しく考へ出したのである。

熱はやはり下らなかつた、——白い額に汗がにじみ出ている。

「よその子供などを連れて旅行するものぢやないね、どんな事が起るか分らないんだから。」

尙文は充子の顔を見て、晝間の汽車や自動車の疲れが出て烈しい睡眠におそはれながら全く草臥れた聲だと自分の聲をさう思つた。

「こんな事になるなんてわたしちつとも考へなかつた。」

「誰だつて考へないさ。」

しばらくしてから薄田の部屋で障子をあける音がした。いま活動が済んだのかとさう思つた。が、次ぎに起る音は何もしないで二階はひつそりしてゐた——。

「薄田さんがおかへりらしうございますね。」

尙文は黙つてうなづいた。——十二時になつて八度を二分だけ下つた。

「下つた、助かつた。」

充子はまたガリガリ水を掻きはじめた。二時になると七度五分になつた。二人ともぐたぐたに疲れてしまつた。眠たさ

が折れ果つて鈍な重みを頭の上からおしよせて来る……溜息ばかりが衝いて出てくる。——そして二人の間に今もなほいまましく掠める影は何であるか？ そんなにまで此世を悲しがらせるものは何であるか？

遠鶏の聲がしたところに尙文は雨戸を一枚だけ残して置いたのに——靠れかかつて、いつかも同じいやうな姿で我が子の焼ける煙をそれとなく窺うた晩のことを思ひ出した。……夜明けと夜との間から人間にはいつも特別な嘆きをつたへる鶏鳴が、つかれた頭脳へひびいて、痛かつた。

「もう大丈夫！」

充子は水袋を頭からそつと退けたときに、朝子はうすい眼をあけて、まぶしさうにかれら夫婦をちよいと眺め、また織い眼をどちてしまつた。——朝子にはそれがをぢさんだかをばさんだか分らなかつた。が、自分の母親でないことだけはうろ覚えにおぼえてゐた。では一たい誰だつたらう？ さう、もやもやな意識のなかで考へてゐるうち、胴のまはりの紅い自動車が一臺、走つてみえた。——規律正しい蜜柑の木が植つてまるつこい實がクリスマスのあかりのやうに一杯點火れてみえた。

……それから、朝子は何んでも明るいところに立つてゐた。砂が白く、その砂原のまんなかに青いどろんどろんとしてゐる沼だか池だか分らない池があつた。池の上に、かいつむりが頭だ

けをかきな形で出しながら、

「今日は？」と言つた。

「今日は？」

朝子もさう答へた。すると、かいつむりは指さして見せて

「あれを見たまへ、あれは一體誰だらう。」

「あれとは？」

朝子はその方へ眼を遣ると、池のまんなかに青い一枚の葉があつて、をばさんがべたんこに坐つて、をかしな手つきで顔をおさへながら泣いてゐた。——朝子はをばさんがどうしてこんなところに来て、あんなに泣かなければならないのだらうか、さう思つてをばさんは何故泣いてゐるのだと言ふと、かいつむりがをばさんの大切なものを盗んで行つたのだと言つた。

「をばさんの大切なものつて何の事だらう？」

朝子をはじめてその時かいつむりを見ると、かいつむりはをばさんの赤ん坊をちやんと抱いてゐた。それゆゑ朝子はかいつむりに縋りついて、その赤ん坊を取りかへさうとしたが、かいつむりは水の中へ沈んで行つてしまつた。——朝子もくやしくなつてすぐかいつむりのあとへ飛び込んで、水の中へ潜つたがからだぢゆうが冷やりとした。死ぬんぢやないかと思つた。

「もう快いんだからね、をばさんはさきに臥ますよ。」

「あ、」

朝子はふと目をさますと、そこにまだをばさんとをぢさんとが、ずつと起きてゐたらしく眼をさましてゐた。——気がつくくと氷枕を取りかへたらしく新しい冷たさが滲透つて来たのである。……朝子は今朝からのことが百年も経つたやうな遠い気もちで又考へられてきたが、いつの間にか寝込んでしまつた——そして自分が寝てゐるといふことをはつきり頭になかで覚えてゐたが、やはり自家にあるのか、それとも初めて泊つた宿かが分らなかつた。

三

朝、目をさますと朝子はさつぱりした顔つきで、昨夜から

のことをすつかり忘れてしまつたやうにけろりとしてゐた。——そのさえざえした顔つきをみると尙文は特別に無事な穏やかな朝が来たやうにかんじられて、實つてゐる夏蜜柑の大きな黄ろい肌の片がはに、朝日をうけてかがやいてゐるのを美しいと思つた。——何だか非常な不幸のあとにこれは又思ひがけない仕合せがきたやうで、すこしづつ微風にうごいてゐる壯麗な果ものの光をながめた。

「わたし最うすつかりいいの、ほら！ 熱なんかすこしもないわ。」

朝子はこの頃は自分から額に手をやつて、尙文にもあてて見てくれと言つた。——それが決して自分は病人でないとい

ふことを信じてゐるやうで、いさぎよかつた。

尙文は手をやつてみたが、うつすりと冷たさで健康者の朝めざめた額の觸れ心地だつた。——充子も同じく手をあてた。

「熱なんてないでせう——」

「まあ、いい鹽梅だつたわね。昨夜どんなに心配したか知れやしない。」

充子も吻と呼吸をついて言つた。——尙文は縁端へさす麗かなひかりが、もう朝子の心をそっくり誘ひ込んでしまつて、静乎として居させないのだと思つた。——朝子は夏蜜柑の實を見ながら足をばたばた翼のやうにとんとん踏んだ。

「けさはもうしばらく寝てゐなきや悪いよ、午前中でもいいからね。」

「だつてもうすつかり快いんですもの。」

「だから暫くでもいいから臥んでゐるといい。」

「ぢや午後ならいいの。」

「あ、午後ならいいんだ。」

朝子は床へはひると、尙文は昨夜から何事も起らなかつたやうな落着きをかんだ。——薄田がすこしも朝子の病氣を問題にしなかつたことも、薄田がわるいのではなく、あの男の心には脅かされたことがないからだと思つた。それにくらべると絶えずおどしてゐる自分の病氣にたいする臆病さが、晴々とした日中だけに可笑しい氣がしてならなかつた。

添うてゐるやうに、薄田はやはりその退屈と一しよに歩いてゐる——。

話をするとすぐ倦きる氣もちよく薄田に似てゐるが、尙文のは、できるだけ退屈から身もたえをして逃げるやうにしてゐる點がちがつてゐた。——尙文は心にないことまでさまざま工夫して退屈と無爲とから離れようとする。退屈の方でそれを趁ひかけてゐる。が、どちらが本統かわからない——尙文はあるひは退屈からも書くことがある、どうにもならない剩つた時間をどうつぶしたらいいかといふときにも書くのである。その方が時間が経つてゆくからだ。

「も一つはおれは書いてゐるときと、書かないでばかんとしてゐるときとの區別がない——睡眠以外は何時だつて考へてゐるし考へてゐるうちは何時だつて疲れてゐる。だから書いてゐると書いてゐないと、どれだけの區別ができるかおれにはよく分らない。」

——結局いつでも心で書いてゐるやうなものだから——假りに晩方になると書かない日だつてぐつたりとつかれてゐる——眼をさましてから見た平凡な下らないものにも心をつかひ込んでゐるらしい、そのため晩方はぐつたりとしてゐる——。

「さう言へば左うだが、單に考へてゐるだけなら疲れはしないよ、考へて疲れて書いてなほ疲れてしまふんだよ。」

「昨夜のことはまるで夢のやうな氣がする——あんな厭な氣もちつたらなかつた。」

尙文は薄田にさういふと、薄田はそんなことはどうでもよいと云ふやうな顔付で、

「君はあんなに書いてよく倦まないね。」

突然そんなことを言つた。

「おれだつて倦きるさ——だが、それよりさきに倦き切つてゐるから書けもするんぢやないか。」

「僕なぞ二三枚の詩をかいたつて、うんざりする……」

薄田は暫くでも人と話するとすぐ退屈するその癖をもう顔いろに出して、ぼんやりさう言つた。十年間に二冊の詩集しかもたないかれは何一つ面白さうな顔をしないで、もの二三分も経つと既う對手に退屈しだした。

「おれは路傍で影のながい馬が休んでゐるのを見ると、まつたく退屈そのもののやうな氣がするんだ……いつまでも倦るさうに長い首をうごかしてゐる馬つてやつは、まるでくされた繩のやうに動かないんだ。」

と、さういつか薄田が言つたことがあるが、薄田の顔をみると、すぐその言葉を思ひ出した。かれは併しどんなに退屈をしたつてどこへも旅行するではなし遊ぶでもない——まるでその退屈をどうしたら料理できるかといふことや、その氣もちから離れようとはしてゐない——まるで馬の青いかげが一生

添うてゐるやうに、薄田はやはりその退屈と一しよに歩いてゐる——。

話をするとすぐ倦きる氣もちよく薄田に似てゐるが、尙文のは、できるだけ退屈から身もたえをして逃げるやうにしてゐる點がちがつてゐた。——尙文は心にないことまでさまざま工夫して退屈と無爲とから離れようとする。退屈の方でそれを趁ひかけてゐる。が、どちらが本統かわからない——尙文はあるひは退屈からも書くことがある、どうにもならない剩つた時間をどうつぶしたらいいかといふときにも書くのである。その方が時間が経つてゆくからだ。

「も一つはおれは書いてゐるときと、書かないでばかんとしてゐるときとの區別がない——睡眠以外は何時だつて考へてゐるし考へてゐるうちは何時だつて疲れてゐる。だから書いてゐると書いてゐないと、どれだけの區別ができるかおれにはよく分らない。」

——結局いつでも心で書いてゐるやうなものだから——假りに晩方になると書かない日だつてぐつたりとつかれてゐる——眼をさましてから見た平凡な下らないものにも心をつかひ込んでゐるらしい、そのため晩方はぐつたりとしてゐる——。

薄田はさう言ふと、どちらだつて同じぢやないかといふやうな顔をした。——尙文は何時までも書いてゐなければならぬし、それ以外には何にもできない自分を忌々しく感じてゐた。——書かすにゐるわけにはゆかないばかりか、一ヶ月も書かすにゐると、やはり書きたくなるやうな、書いて見ても書けないやうな寂しささへ感じるのはどうしたことか？ 若い時分から癖になつてゐるせもあるが、それより最つと本質的に原稿紙の上に顯はしてゆかないと、はつきり自分の心持を形の上に見ることができない——それではなかつたか？

「おれだつて一體いつまで書かなければならないかと思ふよ——そんな人生にしたつて生活にしたつて書くことがあるか知らと思ふんだ。だが書けば書くことが有り過ぎるくらゐなんだ。」

尙文はちびた筆の穂のやうになつてゐる自分の心を、どんなに鞭打つたつて結局は詰らない一つの作品を生涯繰り返してゐるに過ぎないやうな氣もした。すくなくとも自分はいつてもその窮屈で乏しい人生を、姿を變へ、心を幾様にも換へては書いてゐるやうなものだつた。それでもよいぢやないか？ かれは時をり苦しませにさうも思つた。

「君のやうな男は書いて書きなぐつて、そしてやつと一行か二行くらゐしか掘り出せない男かも知れない——初めから、その一行か二行を目的にできさうもない男なんだから——」

「それは當つてゐるかも知れない——結局は愚直で、その愚直ゆゑにむだを書きすぎるくらい書いてゐるのかも知れない。」

その愚直ゆゑに人一倍疲れて、人一倍損をしてゐるのだらう、——かれ自身もそれを知つてゐるが——十枚の紙数を二度も三度も数へなければその数の正確を信じきれない彼は、よそから見たらばかばかしく、齒がゆいむだな草臥れを感じさせるだけだらう。そんなむだを絶えず繰り返してただ好き勝手に勞れてゐる人間だつて、他人から愚直だと笑はれたつて、どうやら最後の一行だけを掘り當てればいいのではないか？

「徒歩競走つてやつがあるね——あの一番さきに一等勇敢に走つてゐる奴が、一番さきに草臥れてしまつて、追ひつかれて又思ひ出して走り出すのは厭なもんだよ——それより初めから走れるだけのものゝ走つてゐたらどうだらう——しかしそいつはつづまりびりになつてしまふんだが。」

「そのびりの方がいいよ、だが、君はそのどつちだか？」

薄田は話が初めて面白くなつたと云ふやうな顔をして、一つ皮肉な微笑ひをもらした。

「ところが佐藤春夫はどうだらう——ありや初めから走るのではなく、手をぶらぶらやつてまるでただ歩いてゐるのぢやないか。」

「後世をたのむ氣はないか？」

尙文は半分冗談のやうに言つた。

「後世なんぞといふものは、いまから見ると見當のつきかねるものだよ。ばかな後世に會つちや叶はないからな。」

ばかばかしい後世——そんなものを托む氣は尙文にはなかつた。咲いて散つて最後に何にも残らなくともよい。咲いただけでもよいと思ふより仕方がない。——が、なほ半白に老いぼけてやはり拙い植字工のやうに毎日心にもないことを書きつづけてゐなければならなかつたら、そしたらそれにもなほ世の罵りが加はるべきだらうか？ それとも猶こつこつとしやりかうべのやうな手つきで、人生のかすや残りものを拾つて歩かなければならないとしても、そんなに恥かしいことではない——と、さう言つて澄ましてゐられるだらうか。みんなが、みんなで左うやつて、恥も外聞も忘れてなほこの世の隅で嘆きをつづるべきだらうか——。

「藝術が亡びて友情が残るかな——老いぼけてしまつたらね。そんな氣もするぢやないか。」

尙文は實際は自分のやうな人間には、老いぼけても友情なんて美しいものが益々ひしやけてしまふものではないかと、心で疑ひながらも言つた。

「あ、さう、あの男は歩いてゐるんだよ、はじめから——。」

薄田は微笑ひ出して、尙文の顔をれいのじろじろと見た。

この薄田のじろじろ見る眼つきは、非常に陰氣で、陰氣以外の何ものでない眼付だつた。——薄田つて男は元來が惡黨なんだが、その生活の間に、惡黨らしいものを出ず機會がなかつた人なんだよ。さう誰かが言つたことを、當つてゐると思つた。——かれの思ひやりは外から強ひられると勝手にそれを支拂ふが、しかし彼自身は人のことなどあまり考へない、彼自身はいつだつて誰からも離れて獨りであるらしかつた。「おれは亡びるなら、勝手にほろびたつていいと思ふんだ。おれはさつさと亡びてしまつた方がおれのためにもいいと思つてゐるんだ。」

「現に亡びかかつてゐるぢやないか？ 君の書くものはつまらないし——それに僕はあまり讀まないせもあるが——今にみんな亡びてしまふんだから、早く亡びたらそれだけ樂になるんだ。それはもう時間の問題だ。」

尙文のつけつけ言ふ薄田の顔をやはり氣もちよく見た。一たいこの男ほど惡口をいひながら、惡口らしくひびかない男はないと思つた、何だかなだめられてゐるやうな氣もした。「君はどうだい。」

尙文は薄田に微笑ひながら言つた。

「おれか？ おれなぞは君の詩が残れば残るよ、君の詩が残

らなければ無論残らない——どうだつていいぢやないか？ 残らなくてもいいし残つてもいい。」

「後世をたのむ氣はないか？」

尙文は半分冗談のやうに言つた。

「後世なんぞといふものは、いまから見ると見當のつきかねるものだよ。ばかな後世に會つちや叶はないからな。」

ばかばかしい後世——そんなものを托む氣は尙文にはなかつた。咲いて散つて最後に何にも残らなくともよい。咲いただけでもよいと思ふより仕方がない。——が、なほ半白に老いぼけてやはり拙い植字工のやうに毎日心にもないことを書きつづけてゐなければならなかつたら、そしたらそれにもなほ世の罵りが加はるべきだらうか？ それとも猶こつこつとしやりかうべのやうな手つきで、人生のかすや残りものを拾つて歩かなければならないとしても、そんなに恥かしいことではない——と、さう言つて澄ましてゐられるだらうか。みんなが、みんなで左うやつて、恥も外聞も忘れてなほこの世の隅で嘆きをつづるべきだらうか——。

「藝術が亡びて友情が残るかな——老いぼけてしまつたらね。そんな氣もするぢやないか。」

夏蜜柑の木は暖かい日だまりにこんもりと繁つて、れいのあぶらぐんだ肌をてらてらと日光に沁らしてゐた。……みんな一つびとつうつ向いて一つびとつが椿の油のやうな美しい透明な滴を垂れて、ぼたつと重さうに下つてゐた。——朝子はよくそばへ行つて、その肌を手を觸れてみて、氣がついて狼狽て手をひつこめた。が、いつの間にか餘りの美事に又手を持つて行つて、冷たいぶつくりした實にふれた……そこに尙文が立つてゐるのが、朝子の眼にはひつた。朝子のかれの眼の前で、あまりに明るい日ざしのまんなか立つてゐるせぬばかりではなく、少しきまり悪さうな顔いろをした。尙文にはその心持が分つてゐるだけ、なるべくその木のそばへ

四

「或ひはさうかも知れない——老人の友情といふものは膠のやうな氣がするんだ。それほど面白いものかも知れない——。」

薄田はさういふと、ふいに立つて庭へ出て行つた。尙文はれいの退屈を感じ出したらしい猫背の友だちがあちこち歩いてゐるのを見ると、彼も歩きたくなつて庭へ出た。池の中の魚が二疋づつづつらなつてゐるやうに、何のためにさうしてゐるのか分らない——が、かれは煙草をふかして薄田と一しよに歩いた。それほど薄田が好きだつた。

行かなかつた。

「わたし先刻から幾つ實つてゐるかと思つて數へてゐるんだけれど讀みきれないわ。」

朝子はさう言つて木を仰いで眺めた。まぶしいくらゐに粒粒と輝いてみえた。

「朝ちゃんは一っほしいんだね。」

尙文は微笑ひがほをして、紅くなつた朝子の顔を見た。

「いやなをぢさん——ほしかないわ。」

朝子はさう言つて顔をねぢまげるやうにしたが、やはりその眼はうつくしい果物の肌についての間に注がれて行つた。

「な薄田、朝子は先刻からあれを一つ失敬しようと思つて、身構へしてゐるんぢやないか。」

薄田はこれも戯談らしく朝子の顔を見ながら微笑つて言つた。

「どうもさうらしいよ、さつきから傍へ寄つてゐると思つてゐたんだ。」

しかし朝子はその瞬間からすつかり先刻からの柔らかい表情を硬直させてしまつて、尙文を見つめたが、

「ひどいわ、失敬するなんて——。」

と睨んで言つた。

「だつて何度も手にふれて見てゐたぢやあないか。」

「手でふれたつて、そりや……。」

「だつてをぢさんが夏蜜柑をとつたやうなことを言ふんですもの。」

朝子は尙文の顔をみながら、あれだけ口惜しがつてゐたに拘らず、すこしづつ微笑ひをうかべかけた。——尙文にはもう戯談を言ふ氣はしなかつた。

「をぢさんが悪かつた、——そして薄田もよくないぜ。」

薄田は頭を掻いて、朝子の、もうすつかり微笑つた眼をまともに見たが、どうやう眩しさうにしてゐた。——もう感情を胡魔化すことをしなかつた。

「おれもよくない——。」

薄田はやたらにそこらを歩いてゐたが、朝子はふと思ひついて

「夏蜜柑が一番よくないのよ、あんなに實つてゐるから。」

三人は微笑つた、——そして間もなくみんなの頭から、この挿話が消えてしまつてからも、尙文は妙な不愉快さを感じた。——薄田にもそれが残つてゐるらしかつた。が、朝子はすつかりその事を忘れてしまつてゐた。

「子供といふものはすぐ忘れてしまふものだが、それを最う一度思ひ返すことがあるものだよ、妙に一生忘れないやうなこともあるんだ。」

薄田は朝子が野菜畑の方へ行つたのを見送りながら言つた。

朝子はさう半分言ひかけて、ふいに彼方向きになつてしまつた。と、うしろ向きになつたまゝの手が、顔の方へ持つてゆかれるのが見えた、泣いた、わるいことを言つて了つたと氣がついたとき、朝子はしやくり泣きはじめた。

「をぢさんも薄田も冗談を言つただけなんだよ、何も泣かなくともいいぢやないか。」

尙文は薄田の顔をちらと見て、さう言つたが朝子は黙つて物もいはなかつた。——薄田はへんな顔付で自分で自分の心持を胡魔化すために燐寸を擦つて煙草に火を點けた。——が、何か表情の中にはさまつたものでもあるやうな、窮屈な苦笑ひを一つした。尙文もそれに答へるために微笑をしたが自分でもきまりの悪い、心の赧くなるやうな、微笑だつた。

「どうしたの、朝ちゃん？」

そこへ充子がやつてきて、そして尙文をやり込めた。

「いやなをぢさんね。」

朝子はまだ泣いてゐた。が、尙文は充子がきてから、ちよつと心に重みが脱けたやうな氣がした。——戯談を戯談としてしまつて他人に及ぼした氣もちを胡魔化してしまふ卑屈さを知りながら、自分でもほつとした。が、薄田はまだ悪いことをしたあとのやうな顔付でゐた。あの男の心は正直だとかれはさう首點いた。

「何んでもないことを朝子が憤つてしまふんだから——。」

「大人になつてから思ひ出すことがあるね。」

尙文はそれだけ言ふと黙り込んだ。——薄田も黙つてゐた。朝子があちらで何か唄つてゐるらしい聲がする……。その繊い聲が濕つた空氣をふるはせて、さらに空へ抜けてゆくやうにも思はれる……。

夕方のことである。——朝子はふと尙文を手で招いた。庭さきの植込みのかけにゐた尙文と薄田は、築山の裏道から、朝子の方へ行つた。——朝子の顔はへんに昂奮して、眼がはしっこく動いてゐた……尙文は朝子の視線を辿ると離れにゐる十二三の男の子が、あちこち見廻しながらぐずりぐずりと歩いてゐた。そしてきふに歌をうたふかと思つと、柿の枯枝をへし折つたりした、——何だか心が、ある一點に集められてゐるやうで、それを自分でも紛らせようとしてゐるらしかつた。

「あの子が、先刻からあそこを往つたり來たりしてゐるのよ。そりやをかしいわ。」

尙文はさういふ朝子が、自分でも少し赤くなつてゐるのを眺めた、——朝子の眼はいつもよりいきてゐる。

「それでどうしたと言ふの。」

「見てゐらつしやい、そりや面白いんだから。」

子供は紺の服を着てゐて、大方今着いたばかりらしい物珍らしい眼付をして、あちゆき此方ゆきしてゐる——その眼付

が尙文には何となく……見當がつきさうな気がした。しかも子供はいくらか苦しさにさへしてゐたからである。

「そんなものを見るものぢやないよ、つまらない——」
「だつてほらね、ほら！」

子供は木のかげへ来て、そして幾度も指で美しい夏蜜柑の下つてゐるのに觸れた。しまひにはそれをしつかり手で握るやうにして、気がついてあはてて手をひいた。その度に濃い乾いた葉がすこしづつ揺れた——子供はあきらめることができないいらしかつた。何かじりじり心にじりついてくるものを感じながら——すこし木から隔れても、又いつの間にか木のかげへ佇つて、ぐずぐずと居苦しさにしてゐた。

朝子の顔もそれと殆ど同じ程度でいらいらして、その子供のすこしの動きまで見通すまいとしてゐるらしかつた。——一つは監視してゐる心と、一つは自分でやきもき苦しんでゐる心と、そして苦笑ひして立つてゐる薄田のへんな顔付と：尙文はいつそあの子が思ひ切つて、あの果實を探つてくれればいいのにと考へた。

「覺えがあるね、あんな變なくらくらするやうな氣もちはない？」
尙文は薄田の顔を見て、さう言つて、にが笑ひを一つした。自分で自分を恥ぢてゐるやうな、にがしい笑ひだつた。
「ふん！」

薄田は鼻さきで自嘲的にさう言つたが、腹立たしげに紙卷

朝子の顔はがつかりしたやうな、むしろ茫乎とした腑抜けのやうになつて、失望したやうな顔をしてゐた。

「だうと、取つたわね。」
「うん。」

尙文はたださう答へた。朝子はさびしい歪んだやうな顔をしてゐた。——薄田はと見るとこれも腹立たしげに歩き出した。三人とも妙なことから心がおちつかずに、くろずんだ陰影を落されて、それを拂ひのけることができないであつた。

を下駄で踏みつけた。そして

「あの子はどうしたつて我慢できないらしいな、あれだけじりついてゐるだけでもみんな許されさうぢやないか？」
「さうとも！」

尙文はすぐさう言つて、又氣がついて低い聲で言つた。
「けれども朝子は許しはしないよ。あんなに熱心なんだから——」

實際朝子の手さきはぶるぶる震へてゐるほど、ふしぎに昂奮してゐた。眼はちつと注がれてゐる。

そのとき尙文はぐいと袖を惹かれて、あはてて朝子を見ると朝子は一袖袖を引いてから

「ほら、見てゐらつしやい。」
と、鋭い聲で言つた。

——その時子供はもう木の下へ寄ると、思ひ切つて大きな夏蜜柑を一つ手にとると、ぼつきりと枝をへし折つた。そのぼきりとした音が、弓づるが撥いたやうに朝子の心臓を打つて、手を震はせた。——子供はその夏蜜柑をうらたへて洋服の上着の下へかくして、上からそつと押へて、まだ暫らくぐずぐずしてゐたが、誰も見てゐないと思ふと、すばやくその木のかげから出た。——木のかげは暗かつたが、そとはまだ明るい夕あかりがちらついてゐた。——そして何か口笛を吹いて、離れの方へ行つた。

ひ文世

わが世

いくら嘆いて見てもこの世は嘆ききれないものかも知れない、——それと同じいやな意味でこの世は嘆いて見る値さへないと言へさうだ。自分自身の感情をふりかへつて見ても、まつたくこの世のありさまを縮刷したやうなものでさまざまな氣もちにさへ出會すのだ。——一體、この世はそんなに美しいものでもなく、楽しいことの有餘るやうなこともない。もし楽しいことがあつてもそれはその楽しいことばかりに出會す男があつて、その男だけが充分な滋養分を吸ひ取つてしまつてゐるのだらう、そのためあとの男は一つ楽しさうな目にあはずにゐるらしい——と左ういふ考へは僻んでゐると言つて退けてしまつていいだらうか？ 實際は二つ咲く花はそれきりしかなくて、二つとも剪り採つてしまつたら何も残らないではないか——この世にさういふ二つきりしかない花を二つとも切り取られたやうな心持が、どこか自分の近間に残つてゐさうな氣がする……

私自身の考へからいへばこの世は楽しみすくないものである故に、何一つ思ふとほりにならないものであるから、自分

からすすんでこの世にあるだけのものを楽しんで味つて、それでもなほ出會すことがなかつたら、それは自分の不運の致すところとして、それまでは何一つ残さないやうに楽しみを樂しみつくしてやらう。——他人のことなどはどうでもよい。こんな微些な私といふけちな人間がどうでも捜せるだけの分を、その分け前にあづかつてやらう、私にだつて蠅が日光のなかにちつと身凝つて温かいひかりをあびてゐるやうに、それに似たくらゐのうたげはあるにちがひない——それでなくとも私らしい私の分はまだ私の目や心のとどこかないところにちやんと供へられてありさうな氣もするではないか——はじめからこんな下らない世の中だと言つて、諦らめてかかるなどといふとは食はずきらひの一つだらう。この世にどんないいことや、私に適當なものがあるにちがひない——この世に秋や冬の季節のあるのはわれわれのやうな貧乏人の感じるくらゐのもので、われわれの知るそのできない結構な暮らしをしてゐるものには、冬も秋もなく何時だつて春のやうな氣もちであるかも知れないのである。寒がつて腰をかがめて歩い

てゐるわれわれには想像できない温かい冬を暮らしてゐる人がどんなに多いことだらう——しかしそんな人は羨しくはない、羨しいのは明日も明後日も愉快で、その又明後日はなほ楽しげな人々のことだ。私もには今日も明日も面白くないくてさらに明後日になつたらどんなに退屈だらうと思へるからだ。明日になつたら何か楽しみがあるとか、その楽しみを今日から考へてどういふふうな味ふものか、などと考へるやうな人々私のやうな俗人から言つて羨しい——明日も明後日も同じい机の上で同じい下らないことを考へて、それをこつこつ纏めてゆくといふことほど退屈なことはない。それさへ世ののじりの的となることはともかく、世に恥ぢることをまで綴つてゆくといふことは、何とつまらない仕事をえらんだことだらう。——それだからと言つてこの詰らない仕事を止めてしまつたら私は一體どういふ仕事をして暮しを立ててゆくべきであらうか。私にはちから仕事といふものは出来ないし、商人のやうな資本の要るものは覺束ないばかりでなく、人一倍人と接ふことが厭ひで、いつも獨りで勝手なことをして自分の爲てゐることを決して他人に知らしめないやうな性分では、とうてい商人とやらになれさうもない。——ただ一つ自分に一番ふさはしいやうな仕事、結局紙とインキを持つて何か知れいよいよやながらむだ書きを一つづけると言ふやうなこと以外にできさうもないとすれば、

私はもと通り私の心が老い込んであぶら氣がぬけてゐるにかかはらず、無理にも空想のちからを頼つてゆかなければならぬ——あんなに濫費し過ぎた空想さへ間歇的にちびちび湧くだけで、それも清純なそれではなく、乾いた幹にふれるやうなものばかりで、しまひに何時でも嘆息をつくくらゐが落ちで一向その空想にさへ手頼られさうもない現在では、どうして私にいいものを書けるわけがあるものか。——いくら私にしても悪いものを書いて世を茶化す氣にはなれないし、よし悪いものを書いたとしてもその悪いものの中でも私は私らしい嘆きをつゞり込むか、又一ところに私は充分に良心のしびれてゐないところかを示して、やつと一と安堵をしてゐるくらゐである。

どんな自棄くそな藝術家にだつて、どんな淺猿しい心にもない物語りを書いてゐるとしても、その人のそんなにまで下卑な心にもなほ藝術家らしい褪めた色が匂ひ残つてゐるものがあるものだ。私は時々そんな藝術家の、ひとさかりを過ぎた作をよんでゐる時は充分な輕蔑もするが、さて何か知らずに觸れてきてちよいと本を伏せて考へ込むことがある。こんな老ぼれの作をむやみに遣つつけていいだらうか。之は單に詰らないと言つて最うその本さへ投げ出してつてゐるにかかはらず、何となく不安なおちつけない氣もちが残つてゐて、まじまじと何かを考へあてるやうな氣になるのは一體どうしたこ

とだらう。私はそんなとき詰らない作には感心できなくとも何となくさういふ詰らないものを書かねばならぬいじめな心を妙にさびしく思ひ出すのだ。——此人だつて一と時代があつたし世の中もそれをゆるしてゐたのに、いつの間にか影が元來影であるための姿を消すやうにさかり場から消えて行つて、いまは途方もないところに糞鷲のやうな灰色の翼は翼だけのものをひろげて、そしてやはり人生は退屈なもので決して退屈以外のものではないことを、つべこべと繞舌りちらしてゐる。——全く私にとつてこの世の悲惨なことは貧乏人が好んで貧乏してゐるのではなく、また時代思想とやらが黒白にわかれて唾み合つてゐるのではなく、私のつくづくと骨節にこたへるのは、こんなみじめな藝術家が、年々に殖えて行つて、どこか此世の隅の方でこつこつと書きつづけてゐて、やはりそれをすら賣らなければならぬそんな心をいふのだ。場末の褐色した家並み續きをうろついてゐる色さめた癡兵の白っぽい姿を埃のなかで見出すとしたら、あんな姿がみじめな藝術家の何かを考へあてるに適當なとに思はず手を拍つてみたくなるのだ。——大方、私自身だつてだんだんに埃つぽくなつて行つたら、あんな姿でやはりあんなうろろした物忘れしたやうな顔を處嫌はずに浮べて行くさだらう。そして結局人生はつまらないとの續きだつたことや、人生は嘆ける人にとつて嘆き甲斐のあるものだといふくらゐの思案をもつ

やうになつてゐるだらう。そして他人のことなどはどうでもよいと考へた舶來の考へがだんだん姿をちぢめて行つて、日本人らしくいつの間にか他人のことも自分の中へ加へて、さして悲しんだり嘆いたりしてゆくことであらう——。

いつの間にか、さう思ひ設けたわけではなかつたが、私はもう卅五になつて、ひとなみの暮しを立てるやうになつたが、それにしても此頃は私のいまの年齢の三分の一くらゐの年齢を私は誰かに依つて加へられはじかれた算盤を思ひ出すのだ。つとめて私は自分の年齢をよけいに見せる必要もなく、他人からも決してさう思はれたくなかつたが、何よりも此重い變なふうに着いた心がよけいに氣になるのだ。どんな罪惡だつてどんな破廉恥なことだつて、又どんな罵りだつてそれを一つ一笑に附してしまふやうな、いけすうすうしいと言へば云へる其心を所有してゐることが悲しくもあり頼もしくもあるのだ。どんな人間の前にだつて最初はいい相手の人格の新鮮さにふれると、ちよいと子供らしく頼なくなつて口籠つてすぐには話し出されさうもなかつた自分が、このごろでは左ういふ頼面することなどなくなつて、平氣でさつぱりと話し出してゐることだ。——相手に氣に入らうとするやうな心の構へ方が、生活の方の必要からもなかつたが、それよりも何よりも相手の人のことなどを餘りくどくどと考へないで、

枯淡に受けもする、そして流しもできるといふ心をいふのだ。そんな風になるために私は勉強した覺えがなく、そんな風にならうとさへ考へたことすらなかつた。——つづまり眼のいろを變へたり心にきりつとしたものをかんじないで、もつと言ひよく言へば靜かに一人であるときの續きを續かしてゐるやうな物腰で、人と自分を合はせることのできるのは、或はつづましい人生のうちの拾ひ物の一つかも知れない。——人一倍の羞恥と人一倍他人のことを氣にする私がなぜさういふ風になつたかと言つても、さう大して理由のある譯ではない、それは私のせゐであらうよりむしろ古くさい年月のしわざだらう。雨や苔や不健康な日の埋積がそれになつて、いつの間にか私の母のむかしの言葉でいへば何となくいけすうすうしくなつたのであるし、私のいまの心からいへばこれは拾ひ物で何よりも結構なものだと言へもするすうすうしさであらう——。も一つ言へば私が世の罵りの中に坐つて、毎月といはずに頼まれるままに書いて書きなぐつた頭の悪さや、書いたときに知らず知らず追ひ込まれた心の齡が、永い間つかひなれた湯呑に茶澁のついたやうになつてしまつたのであらう、そのたびに私の心には一皮づつの皮が纏つて行つて筍のやうに中身をつつんでしまつたのではないか？ だがその筍は中身は柔らかくはあるが、私の心は硬直してしまつたきりで元のやうな柔らかさに返らない——。

「人間はしかし何と言つても子供心は失せないものだ。さういふ心さへ私には疑はしい氣がする。それは今の私にしても時折子供の折はかうでなかつたとも思ひ、あの時分はもつとこれこれであつたといふふうに考へても見るが、それはこのごろになつて全然間違ひであつたことに氣がついた、と言つても左う新しいことではないが：：從令へば子供のときはたいへん温良だつたとか正直だつたとか言ふことも、あれらは子供のときのことだけを言つたものに過ぎない——悪くも善くもならうとするああいふ發育ざかりのときの性分や才能などといふものは、實際何一つ的になるものではなく假りにあてにした親だちがあつたりすればそれは馬鹿にちがひない、——この子はこんなふうにならうとは思はなかつたといふ嘆きをその子の上で感じるとすれば、なぜその子をさうなる前に、假りにその自分を温良だとか正直だとか言つて決めてしまつたのであらう、悪い性分のもは初めからそれを持つて出たものにちがひなく、それを初めに温良しいと言つて勝手に決めたのが悪かつたのだ。——今の私にしても時たま退屈まぎれに子供のをりああでもかうでもなかつたころの、その性分をかんがへると、あの時分とはすつかり違つた氣もちになつてゐることに氣がついた。さういふ子供時分のことを考へ出さうとするときの心もちは、何時だつて頼りなく一歩づつあとへさがつて行くやうなときだ。過んだことを考へると

いふことほど厭らしい風景観賞家はない、——あんな時分のことを考へて幸福になつたつて、それが何になるだらう、さういふ将来へまで搬んでゆけないものを人間は考へる必要があるだらうか——それに何一つにならない性分を性分としてゐるあんな時分に、人間はしかし何と言つても子供心は失せないものだ。」と言ひ得るだらうか。

それでは今おまへの幕し向きはどうだい——何一つ子供のときから考へ貯へたものを現はさないものはないではないか？——とさう言はれたら私は實際の子供の自分の考へはあの時分ぼんやり考へたことで、人間が三十五になつて、さて考へ出した子供時分のことを本物であるといふふうには、そこを確かなものであると言ふより仕方がない——人間はどうにもならない時に何か新しい考へにありつきたいものだ。その新しい考への中に子供時分のことをこまごまと考へ込んで今の年齢で築きあげたそれをちよつとの間考へ込むとしたら實際のところ卅五の男が編み出した幼年時代にちがひない、それより以外のものではない——だから人間は一生の間に子供時分のことは一つきりしかなくて、それはその時分にとくに亡びてしまつたもので、三十五になつても到底生きかへつてくるものでない。生きかへさうとする奴があつたらそれは時計のねちを逆に廻すやうなもので、ついその時計をまでぶち壊はしてしまふものではないだらうか？——それよりもい

考へ、小鳥は飽きることなんぞないのだらうかなどと考へる、——そして新しい思ひつきの影もないその後になつて、ただ溜息ばかりついて退屈な人生をただ坐つて受身になつて眺めてゐるより外に仕方がない——。或新婚の夫婦者が同じ暮しに倦いてしまつて、何か變つたことがないだらうかと捜してあるいたつて、所詮はどうにもならない同じことの繰り返しだと言つても、かれらは聞かないかも知らない。かれらはまだその性分さへ、その結婚といふものの性分さへ知らない子供だから——。

たとへば私のやうなやぐさの人間が、面白くも可笑しくもないこんな世の中に、どうにかして何か知ら面白さうなもの楽しさうなものを擇りに選んで、外面でも實際面白さうにしてる私が、——ことに人生は愉しみすくないものだを知りながら、やつと理想めいたものを持つて、私にだつて人生の残りものの楽しみくらゐはあるだらう、何々を買つて見たら！そしてあんなにも愉快なサアカス團や活動や舞踏やを見に行つたら、すこしくらゐは晴々とした氣もちになるだらうくらゐの考へで、時たま着換へをして電車道まで行く途中にも、三遍くらゐは立ち止つて考へ込んで、まだ自分の心持ちを定めかねるやうなことがある私は、ときには行くさきが急に厭になつてすすすとわが家へ引返す、——わが家へかへつて

つそ一と思ひに、人間が三十五になつて、そんな幼いころのことを新しく作りあげようとするところに本物があるやうな氣がする。

暇で困りぬいた夫婦者が、何か知ら新しい思ひつきがこの世の中にないかとよく考へ出さうとする。はじめからそんな思ひつきも、思ひ説けられさうもない世の中に、それが假りにあるものだと考へは誰だつて一遍くらゐは考へるだらう、そして結果として草花の種を蒔いたり小鳥を飼つたりする。が、結局小鳥を飼つてもたつた一日か二日のうちはその啼きごゑも美しくはあつたが、しまひにその美しさに馴れてしまつて、ただ、依然小鳥を飼はない前よりもよけいに複雑な退屈がやつて来て、いたづらに茫乎とその籠をながめ込むくらゐだらう。そしてこんなではなかつた筈の、その新しい思ひつきさへいまはどうにもならないのが本當だと考へるやうになる。が、さういふうちにも間もなく草花をいじくつたり、生れた子供を可哀がつたりしてくる。そしてやはり何か新しい思ひつきと、も一つれいの子供時分の、何か變つた遊びをしないか？——といふ考へに又しても打つかつてゆかうとするのだ。そんな絶え間もない同じ頁を繰りかへしてゐるやうな厄介な人間——結局はぼんやりと同じ小鳥の姿を籠の中に眺めこんで、この小鳥は何故あも目まぐるしく上から下へ、たえず宙返りをしなければ居られないのだらうかと

も却つて二重に不機嫌になつてしまつて、先刻なげすつと電車に乗つて出掛けなかつたらう、どんなにつまらなくとも家にあるより周囲は動いてゐるし、それに従つて自分だつて動いてゆくのだつたのに、なぜ勇を鼓して出掛けなかつたらうと同じことを繰り返しては考へ込むのだ、當然遊び仲間が仲間に入れてくれる筈の一人だつた私を無理にもその仲間から私だけを追ひ出したやうな氣がして、誰を怨んでい、か分らない怨みに似たものをぼんやり心にうかべる。そして私の行きそくなつた繁華な街のありさまをさまざまに考へなほして私は私のやぐさな性分のために溜息つくのだ。——そして私自身にもよく分らない筈の蓄音機を廻して、私にはがらにもないジュエルデザイン・アラアだのテトラチニだのガリクルチだのメルバだのを聞き澄すのだが、そんな、蓄音機などのそばへ寄つて、腰をかかめ、蝙蝠傘直しのやうな恰好をして——そして私はこんな華麗な異人の歌なんぞが分るのだらうかとさへ、自分自身に叱つてみたくなる。人をも叱れるなら存分に叱つて見たい私であるだけに、自分自身をどんなにたてよこに叱つたつて誰も何も言ふものはゐないだらう——そのせゐか、私は何のためにこんな大げさな蓄音機を買つたりして樂しまうとするのだらうそればかりではない、本當のところは私は私のがらから言つて、こんな貸家のにんぞり返つて一家の王者であるやうにでも振舞つて、妻や子や下女や、

それから國の母などに仕送つてやつたり、殆ど五日目ぐらゐに強制されるやうに持つて行かれる金なども、何んだか私らしくない私がやつてゐるやうな暮しのやうな氣もするのだ。と言つたら彼奴はあんな暮しをしてゐるからあんな工合な我儘なおしやべりをするのだらうと言ふ者があつたら、それは勝手にしろ——私のほんたうに若しこの世での唯一つ、じつくりと嘆いて見る氣もちを腹藏なく言つてみたら、こんな重く暮しい暮しが日を趁うて複雑になつてゆくことだ。——私は嘆くといふことを言つたが、實際、どうしても私はこの世のことを面白さうにもの語るよりも、むしろこの世のことを横からも縦からも嘆いて見ようといふころもちになるのだ。私自身を根に置いてこんな工合な暮しを今から建てなほすことはできないが、しかしこんな工合に私があたまを益益悪くして行つても、そのために私の生涯に取つて毎日づつがその生涯の百分の一か、あるひは千分の一かづつの壽命をちぢめて行くやうなことを私は仄かに知りながらも、なほそれを敢てしなければならぬ業腹なやくざな、そして悲しげな仕事すら何時救ひ出されることもない忌々しい職人——さうまで私は私を眺め叱るのだが、それにしたつてどうにもならないことではないか？ 世の中のこととはみんなそのやうにできるし、お前ばかりが何も苦しんでゐるわけではない——お前なんぞは方外な金を取つて方外な暮しをして、恬として

暮してゐるではないかと言ふなら、それならばそれでもよい、と言つて私はそれにもう二度と口をきく氣はないのだ、——なぜなればどんな場合にでも言譯をするといふことは悪くすい正直でなければ、その言譯自體の卑劣さをもつてゐるからである、それに私は私の暮しが普通の人間なみであるといふこと、そして普通世の中の誰でもが負ふべき暮しの責任を負つてゐるといふことに過ぎない——が、私は横着でなしに私自身を知つてゐるために最う一度私が人なみの暮しをささへてゐるための資格がこれまではあるとしても、これからさき有り得るかどうかといふ私自身にとつて本當の、これは一つ嘆いてみたいといふ氣もちである。——私を信じてゐる母親にしても妻子にしても、明日のことさへ分らない私の身の上を考へることは健康な間は一つ不安を抱かないであらう、たんに健康であるといふ一つのつながりに、その他のことは何も考へないだらう。だが健康であればあるほど不健康であるものも存在する。私のやうな人間が刻々そのやくざな仕事と苦衷によつて、たかの知れた壽命をすこづつ削つて行つてゐることすら知らないお人好しな人達、そんな人たちに私自身のことを言つて分らないだらうが、しかしそのために私は私自身に對つて、ほとほとこの世の面白くもない有様を嘆いてみたいのである。私にとつて嘆くといふ氣もちにはちやうど人人の愚痴とはかはりないのである。——

私はよく老人といふものを考へて見た。——わけでも私の隣室にゐる既う五十六七位の肥つた老人がゐて、田舎の百性娘のやうな女を一人連れて、これも浴泉の客らしく寝たり起きたりしてゐた。——私はなぜ突然にこの話を持ち出すかといへば、私にとつてこの五十六七になる肥つた老人が人並以上に醜くいばかりでなく、人並以上に健康らしく水々しい白い體軀をもつてゐたから——それを見るたびに何故か私の心が沈み込んで仕方がなかつたのである。私のやうに瘠せてゐるからだと併んで、この老人のからだは鈍重なほど肥つて白く、私と年齢を逆にしたやうなところがあつたからである。私は同じい浴槽に浸つてゐても減多に口をきくことがないので、この老人とは毎日顔合してゐても話一つしたことがない——ただ、この老人を見るごとに私は氣難しげな心になつてしまふのである。それは強ち田舎娘らしい女がこの老人の妾であるといふことばかりでなく、私だちの前でもれいれいしく年にも恥ぢないで、二人一しよに入浴つて少しもきまり悪がらないその心が私にはかなりに憎體にさもしげに又何となく誇らしげにも振舞はれてゐたからである。こんな齷齪つた自分の豫期以上に働く物欲の強い老人には、こんな小娘のひとりくらゐを連れて歩くといふことは、それほど世に恥ぢる必要もなかつたであらう、この老人にしてもやはりこの世の先例にならつて自分の老後をいたはるもの一人くらゐは

欲しかつたのであらうから、誰の前にも立派にそれを隠しもせず居たつていいのだらう——私はそんなことに私の心を腐らせるのではない、唯世の中には隠して置くことと現はしいしい事位はあるもので、その區別をこの老人は知らないらしいのが氣になるのである。——

濕つぽいやうな何處かぐずぐずしたところのあるその爲め田舎者に見えるその娘は、いつもこの老人の肥つた肩を叩いてゐた。そして何時も妙に氣のくさるやうな顔付で微笑んだところを見せたことがない——自分はこんな老人と連れ立つてゐるが、しかし人生といふものはみんな此處風なもので決して自分ばかりが、不幸なのではない——それはまだ運不運にわかれるくらゐなもので、ひよつとすると自分は相當の金のあるこの老人の世話をしてゐることが、あるひは世の羨望の的になつてゐるかも知れない、現に自分の母だの妹だのがそのやうなことを言つてもゐる——とでも考へてゐるやうに娘は人前を恥ぢてはゐない。ただこの種の強情で我儘な老人を相手にしてゐるだけあつて、恐ろしく沈鬱で、沈鬱それ自身が柔順な氣質にならせてゐるやうでもある。あるひはこの娘は生れつき少し位馬鹿でそのため柔順に見えるのかも知れないが、……そのどちらにしても何となく専制な老人からいみづみづつけられた分の陰鬱——ともすると直ぐにでもふさいで了ふやうなところ——などが私の心を惹いた。それとは反對に

老人はいつだつて怒つたやうな聲で、怒つたやうな顔付をして娘にものを言つてゐた。それも性分らしい我儘な所があつたが、その老人が僅かな石鹸を洗つて持つて行かないとか、自分が湯から上つたらすぐ酒の用意して置けとか言ふとまでまるで怒つてるやうな調子で言ひ付けてゐた。一たい此怒つたやうなこゑで物をいふといふのは不愉快なものだ。對手が妻だとか下婢だかの場合は怒つてゐられるが、それ以外の怒りのきかない連中には人間は卑怯にも黙つて済ませることがあるものだ。自分の妻だから怒つていいが、他人の妻だから怒つてわるいといふ理由はない——本統に心から怒りたいと思つたとき、私はむしろ黙つてゐた。人間の「本統の怒り」といふものはそれ自體その人の心の中で起つて、その心で亡びる性質のものだから——がみがみした怒りを妻や子の前にはあらはにしては何となく恥かしくなる年齢があるものだ。怒ることすらその鳥渡の前はかなり叮嚀にこれは怒つていいことだらうかとさへ考へるべきものだ。そりや我儘のできさうな人物を人間はときどき退屈まぎれに選んで、それにばかりこの世の我まを遣るのは悪いことではない、だが我ままでのきさうな人物を全然自分以下の者に選ぶのは卑怯だ。自分と同等のものか或はそれ以上の者かでなければならぬ——それだのにこの老人の我まは、娘をいびりつけるだけだつたらしかつた。

あらはな五月の朝日が美しい透明な湯の中にさし込んで、縮んで大きくも小さくも見える二つの人間の姿——その老人と娘とがさうして毎朝のやうに浸つてゐるのを見ると、私はしほらしくもこの世を悲しむといふより、むしろ老人の心を心として見て悲しかつた。それはれいの怒つたやうな顔の中に、いつもどんな表情があつたか？ そこには何時だつて面白くも可笑しくもない素気なさ、女にたいする興味も失せきつてしまつたくそ忌々しさが憎體にむしろ露骨にあらはれてゐたからだつた。むしろ荷厄介にもなり始めたらしい孤獨のいろさへ浮んで、暇さへあればこんな女となぜ一しよに連れ立つてきたのかといふ調子が湯捌きをする手つきの端々にさへ窺はれた。ときには女の湯のしづくが老人の顔にそれると、かれは不機嫌にちえ！ と舌の先を鳴らして、切れ長い鋭い一重瞼をみひらいたくらゐだつた。女は日を追うてにぶいやうな物腰とれいの沈鬱を殖やしてゆく一方だつた。——實際、さういふ明るい朝日のこぼれた湯舟に、あらうことか五十五六の老人と、二十くらゐの娘とが、しかも裸になつてじつくりと湯にひたつてゐる姿を思ひ出して見たまへ。——老人はれいの不機嫌さうにしてゐるし、女はおどおどと緘のやうに震へてゐるやうな姿で、身動きもしないである。——その表情にあらはれたものは憂慮に近い心配げな、どうしたら老人の氣に入るだらうかといふ、自分には些つとも異體の

わからぬ老人の怒りをしよつちう氣しにてゐるらしかつた。

私はそんなときむしろ淺猿しいといふ心もちを通り越して何も彼も爲つたあとの老人の、異常ないらいらしげな顔を左の頬にかんじながら、こんな男でも保養といふことの必要であること、又こんな老ぼれにさへ此處にまでも自由になる女がこの世にあるものだといふこと、こんな途方もない人間を客としてゐる旅館といふ變なものが存在してゐることなどを考へて、どれもこれも決して悪いやうにできてゐない人生だといふふう考へた。——もし私があんな年になつて、あんな若い女がほしくなつても、この男のやうにこんなにまで堂々と世間を向うへ廻しても少しも恥ぢないことができるだらうかと考へると、さういふ考へを持つだけでも不愉快な氣がした。だが、「おれだつてあんな風になつたらあんなに澄してゐられるだらうか。」と左う考へたとき久しぶりで恥かしさに顔があかくなるやうな氣がした。だが、よく考へて見るとお前のやうな圖太い人間が年をとるとみんな彼處になるんだぞ——そしたらこの男がどんな氣もちであるかが分るぜ——この男が生きたり死んだり不幸になつたりしたつて、この世にはかはりはしない、だかもう此男は私の心にじんて來て離れようとしぬのはどうしたことだ。

「年寄りといふものは子供みたいなものだ。そして年をとる

と若い女がほしくなる——年をとるほどほしくなる。」と、さう私は古くからも聞いてゐる。だがかうしてまざまざと眼前の二人をながめては、私はつい此世にざらにある筈の、決して珍らしくもないものの姿を何となく溜息なしで眺められぬのである。何といふ困つた人たちだらう——と私はかなり分別あるらしい氣になる。が決してこの女を可哀相だとか、改めて老人をにくしく眺めるとかいふ氣にならない、あの老人だつて寂しいだらうくらゐに考へて、もし近づきになつたら、

「あなたはやはり私の父なぞよりも上手で、あなたから見たら私の父などは飛んでもない正直者だつたのですね。」

さう言つて一生不犯の、自分の妻に虐待されながらゐた私の父をも一度思ひ出して、あんないい人なんぞ居るものではないと、さう父の徳をたたへたいくらゐに思ふのだ。自分では何も知らない善良、そこらにざらにあるうす馬鹿に近い善良、そんな善良をも私は私の父であるゆゑに今になつて拜みたいやうな氣になるのだ。——人間が三十五になつて親のことをほめるやうになるなんてことも、私のこの世での、これは尊いめぐり合せのやうな氣がする。私が母と諍つてゐると父はいつも手を振つて、「いや何も言はない方が、よい。」とさう陰で言つたものだ。——さうして母の前で母を叱らないでそのまま母の仕方なことを眺めて、それに小言をいふにはも

う倦きかかつてゐるらしかつた彼塵にまですなほになつてゐた心が、いまやつと私の眼前に浮んでくる。それは父の氣が弱かつたせるもあらうが、それよりも肝腎なことはもう對手を一生かかつて讀み終せたやうなところがあつたからだ。何を言つたつて能く分つてくれない人物——さういふ人物には決して怒つたつて小言をいつたつて、怒る方が草臥れてしまふではないか？ そんな枯淡なあきらめを自分で知らない間に會得してしまつた季節遅れの學問すら、やつと私にはいま微笑みの種となつて、扱つてほのぼのとした氣もちになるのだ。私はれいに依つてれいの老人となり合せに湯舟につかつてゐたが、ずつと前から顔馴染になつてゐたせいか、老人はしきりに何か話しかけたい容子を示したが、私には人と話すよりその人の顔を見てゐる方が、どれだけ多く話をしたやうな氣もちになるか分らないので、その朝も黙り込んでゐたのだが、何かのはずみにかればかう言つて私をかへり見た。「あなたはどこか病氣でもおありになつて、こちらへ被入つたのですか？ それともたゞの湯治なんですか？」

私は病氣つゞきだと言つた方が、いゝかも知れない、私には健康なときがすくないだけに、それゆゑたまにどこか悪くてそれが恢復つてしまふと、からりと晴れた日のやうな氣がする。人間にもし病氣がなくて何時も健康だつたら、これは又思ひがけない退屈な氣がすることだらう。

「病氣といへば病氣です。胃も腸も悪いです。」
かれは尋ねもしないのにかれらしく、そして例の怒つたやうな言葉つきでせか／＼と話した。

「實は私は水蟲にくはれてゐるんですが、醫者にかゝつて見ましたが醫者なんてものは決してにならないものだと思つてから、青森を振り出しにして淺蟲、會津、鹽原といふ順序で今年の一月から温泉廻りをしてゐるのです。水蟲には温泉だけしか利きませんからね。」

いまは五月であるのに、この男はもう半年も左うして旅行をして歩いてゐるのだ。こんな男が、そんなにまで氣にしてゐる水蟲は、左の人差指と親指と、も一本、なか指しか食つてゐなかつた。それもたゞ白く皮膚が剥けてゐるに過ぎない——さう言へばこの老人はいつも絶え間なく指ばかり磨いてゐたのを思ひ出した。考へても見たまへ、こんな男が一生水蟲に食はれたつてどれほどのこともないたつた三本の指——どうせ生きぞこないの業腹なこんな男がそれがよし恢復つたつてこの世には何の役立たない三本の指が、こんなにまで大切なものだらうか？——この男があんなにぞんざいに取扱ふあの女の一生をふいにしてしまつたつて、そんな事はどうでもよいことで、それよりも三本の指が大切なのだらう。この男はあの世まで水蟲に食はれたまゝ、搬ばれて行つて、この男のからだ冷たくなつてしまつたら、しぜん水蟲もそんな冷

たいからだに用事がなくなつて、しまひに離れて行つてしまふだらう。と、そこまで考へると私はひとり微笑ひたいやうな氣がした。こんな忌々しげな老いぼれ！ それにさへ私は微笑ひ出したことを考へると又不機嫌になつた。

「何も面白くて湯治に歩いてゐるわけではないんです。いろいろな湯治場へ行つたつてみんな同じですからね。」

老人はさういふと實際面白くもなささうな顔付で、れいの人差指をみがいであつた、——それきり私は何も返辭をしないのであるうち、れいの女が這入つてきて、私があるので躊躇つて衣物を脱ぎかけて、どうしたらいいだらうかといふ顔付で老人をかへり見た。「關はんよ、入浴つたつて——。老人は昂然として言つた。」

だが、世の中にはそんな老人が此處には一人きりだと思つてゐた私は、二階にも偶然にはゆる附添へをつれた六十ばかりの、これはさきの老人とは全然體質の違つた老人のあることに氣がついた。せいの高い何處か精肝な鹿のやうにかつきりした、せか／＼と足早に歩くくせをもつた老人だつた。此間からふしぎに思つたのは、私のある部屋のすぐ二階の手すりに靠れた下町あたりの大家の小間使風な女が、何か低い聲で歌つてゐたことで、そこにこの老人があることに氣がついた。かれらはなるべく人氣のない浴室の時間をはかつて、

これもやはり一緒に入浴してゐることが同時に濡手拭を手すりに乾かすことによつて、私にはやつと首肯けた。女はまだ二十一二位であつたから、何か柔らかい銘仙物を肌にくつつけるやうに着て、これはさきの老人の女よりずつと快活で敏捷で、どこまでも小間使ひ上りらしいところがあつた。この女が若いころで御隠居さまといふのが、よく私の方へきこえた。——どれもこれも人生には何一つ信じていゝ事があるのか、どこまで眞實など、いふものが、あるのか、私はこの御隠居さまを見出してから、さつぱり見當がつかなくなつてしまつた。二階から庭へとき／＼かれらは臆面もなく食後の腹こなしに歩きに出た。若葉かげのした広い庭さきは全くしあはせのよい人間には耀かしい青緑の陰影があつた。そして御隠居様は珍らしい樹や草の名を一々自分の孫のやうな女に説明して聞かせ、女はそれを一々じつくりと心から面白さうに聞いてゐた。型のとほり厭な文字をならべるならば、かれらは縁の樹がぐれに見えたり現はれたりしながら、人生はそんなに老い込んだつて失望するものでなく——さうして利巧な人間はもう死にかけるときまで、あるだけの物欲と幸福とを引延してゆくものだ。人間は無邪氣で一本氣で、そして何時までも子供らしく罪のない暮しをするのが本當で、引つ込み思案をしたり、餘計な身に負ひきれない考へごとなどをするのは以てのほかだともいふやうに、れいの鹿のやうな足つき

で歩いてゐた。

ひよる長い頬のこけた頭に毛のない人間と、そして片一方はみづ／＼しい鼻がしからさらに露でも垂れさうな、たりとした光澤のある皮膚をした女と——ひとり茶褐色の着衣姿で、一人は着衣の端々に紅い捌きや袖口のある姿でさうしてめでたくも美しい新緑の陰で、途方もなく楽しさうで平和で人生には些しの屈托も心配もない……

「ははははは……」

と、ご隠居は世にもまれな枯れたこゑで微笑つて、むつまじげに話をしてゐる。この世では凡そ不快なことは風邪一つ冒くことも厭で、興味いことを言つたら何一つ遁されないうな快活な老人、すこしも陰氣なところもなく、又考へることなど此世には存仕してゐなさうに見える老人——

私はこの隠居とさきの肥つた老人とを考へあはせたが、隠居は我まゝなところさへ最う卒業してしまつてゐるのに、もひとりの老人は、まだ人間らしく人生の宴には物足りない不平を稱へて、ともすると變な不機嫌にいら／＼してゐるらしいのと較べたら、この隠居は何といふ枯淡な氣もちであることだらう——隠居は何も彼もありつけるだけのものにおいていて、それにすつかり安心してしまつてそのためにも快活すぎるくらゐに快活になつてゐる。——も一人の老人は不服だらけの世の中にまだ自分はどれだけでも幸福になれなくて、む

しろ不仕合せだとも考へてゐるらしい。人生は疑つたり不平を言つたりすべきものであつて、あんなに高いこゑで、しかもあんなに哄然と笑つてゐられべきものではない、こんな水蟲に食ひ惱まされてゐるばかりではなく、何時だつて場末の塵埃箱にだつて棄てられるものなら棄て、しまつても關はないやうな女——人間をもそんなふうに取り扱つていゝ時代が来たなら、それを誰よりも一番さきに遣つて了はうとまで考へてゐるらしい老人にとつては、あんな隠居と若い女とのそぞろ歩きが障子硝子を通してあまりにまぎ／＼と、この世にある自分の不幸にくらべて、あまりに華やかに仕合せさうに影をうつしてゐるではないか？ 老人は障子硝子に眼をやつて扱て何となく老いてなほ己れを嘆いてやる氣もちで、さう、全く充分に自分のめぐりあはせを悲しんでみるやうな氣になつて、そして永い間二人のうしろ姿を見送つてゐるのではな

いか？——死にかけてゐながらそれに知らず知らず壓されてゐる身も世もない哀れな焦燥……そんな人間が思ひつめる何を仕出來すか分らない突然な果斷さへ見えるのだ。

次ぎの夕方、私は庭へ出て浴後の歩を拾つてゐたときにも、この隠居はすこし自分よりせいの倭い女と歩きながら、何か話してゐるのをきいた。私は二人の姿を何かの小説のなかにでてくる人物のやうな氣で、それが決して作者にも讀者にも不快なところがなく、ごく自然に何んだか人生といふものは

こんなものと言ふふうには、心に沁みてくるやうな氣もちでながめた。そしてやはり靜かに皮肉でない意味で一つ微笑つてみたいやうな氣がした。いつたい私も常から微笑つて見ようといふ氣もちになつてゐるときは、實際微笑つてゐるのではなくむしろ泣いてゐるものと言つた方が適當かも知れない——何かしら人間は心と反對な意味でよく微笑つてゐることがあるものだ。母親に叱られながら心は多分に悲しんでゐるにかゝはらず剛情に子供は母親に對つて微笑つて見せる。しまひにはその悲しい氣もちを持ちきれなくなつて、もの陰へ行つて思ふ存分泣き出す。——つまり私どもの時にしばしば一つ微笑つて濟さうかと考へたり、無理にも微笑つたりしてゐるときは疑ひもなく泣いてゐると言つた方がよい——いま眼前に縁もゆかりもない年老つた男と若い娘との姿を見て、さらにこの世はこんなものだ。お前にしてもこんな世の中にあるので、この世の中の外へ出られないのだと心でさう考へたら、やはり一つ微笑つて見たいやうな氣になる——そしてさきの老人の女は美しくないためにあの男は悲しんでゐるのかも知れないし、この隠居の女は若くて美しいための快活さかも知れない、その執方が本統であつても己れ自身が人生の殘者であることを氣がつかないだらう、あのまゝな姿があつたまゝあの世へすり落ちてゆくのではない、あれらは二つとも別れてしまつて、一番さきにあの男どもがあつたまゝの世へ落ち

てゆくのだ。それ故にあれらの姿があんなにまで私には悲しげに見えてくるのは、さう手近い間きはまであんなに勇ましくこの世の樂しみを愉しんでゐるところにあるのだ。かれらにも人並の嫉妬や悶着はあるだらう、ときには後悔や沈鬱なときもあるだらう、しかしそれがあんな人だちに何の値もない……ものの姿を見てこゝろから嘆いてみる氣もちを知らぬ人間に、どうしてこの世の味ひがじつくりと解る筈があるだらう——。この世の味ひのわかる人間はどんな時だつて健康な人間の心にはなくて、いつも病ましげな心にあることだ。そしていつも不幸なボロだらけな心をひきすつて、外面はどんなに快活に見えても、いつも物ごとを嘆いたり悲しんだりする心にあるのだ。

「こんど歸へると電話の番號がかはるんだよ。」

「さう、かへるとすぐ變るの。」

「あ、すぐだよ。」

なる程、この隠居は電話くらゐ持つてゐるであらう、そんな話がつい七八歩さきを行くこの間に交されたときに、私は今やつとこの電話といふ文明機關らしい言葉によつて、この二人が、こんな文明な世にあるのだと氣づいたやうに珍らしく二人をながめた。かれらは何か話してゐたやうだつたが、よく分らなかつた。唯わかつたのは、その女の言葉が決してご隠居さまにつかふ言葉つかひではなくて、自分とは同等の

ちよつと上の人くらゐな言葉つかひだつたことに初めて気がついたのである。それすら極く楽にいくらか甘えたやうなところもあつた。

私の考へはたまたまこんな二つの些細な、いはば有りふれた挿話によつて決して愛想も何も彼も盡きてしまつた人生だといふうちに言ひたくもなければ、さらにこの事に依つてさつき私の言つた所謂どこに眞實があるのか見當さへつかなくなつたといふことさへ、私は今は見當がついたやうな気がした。それは誰でもこんな事くらゐは平氣でやるだけのものを持つてゐるが、一生のうちをそれをする必要がなかつた人とか、やるだけの勇氣のない人とか、全然やれない徳をもつてゐた人とかに依つて區別されるべきであつて、みんながみんなで遣れないことだと言ふのは間違ひだらうくらゐの見當がついたのであつた。

では私の父は？ とさう考へてみると、これは全然さういふ事すら考へもしなかつた人ではなからうか？——それは母の眼もあつたらうが、何より左ういふ性分がなかつた人だと言へさうだ。あんな靜かな、そして自分自身すら投げ出して一生を我ままな母につかへるやうにしてゐた父としては、いま、どんなに考へたつてあんな恥かしい孫のやうな女をつれて歩く人ではなかつた。——それよりも却つて母の方にそんな氣もちどころではなく、どうやらそれに似た氣質があるや

うに思へた。——父の靜かな、干渉がましく暮しのなかの母は、あんな平和な田舎にゐてさへ役者を家へあつめては酒と歌とで日を送つたものだ。その役者も一人や二人ではなくて同時に三四人も招んで、夜明けまでさわいでそしていつも決つてゐたやうに、最後に一人残つて行つた役者——それが朝日のさした田舎町の裏口からいつもこつそりと歸つて行つたではないか？ いつも蒼白い顔をしてゐた役者はそんな晩をどれだけ私の家の二階で送つて行つたか分らない、そんな晩父は何をしてゐたか、自分の決めてゐた晩酌の酔を抱いてさつさと自分の寢床へ引きさがつた父は、また煙管の音をときたま、さう、ときとすると夜明けまでつゞける以外にはべつに小言らしいことも母にむかつて言はなかつたではないか？ 自分の居間のすぐ二階に何か話してゐるらしい自分の妻と、そして全然違つた他人とが何かひそひそと話しごゑをさせてゐる。それを父はいつまでも寝ないで、その癖小言一ついはないで黙つて聞いてゐる。——私はそのときまだ子供だつたが、しかし今思ひ出して見ると何と我慢の強い父だつたらう。そりや人間はそんなときは誰だつて怒鳴ることはできるが、黙つて過せるものではない——餘程の馬鹿か、餘程の利巧な男でなければ黙つて見て見ぬふりをできるものではない。——

では父はそれ程の馬鹿だつたらうか、いやさうではない、

それでは利巧な方だつたらうか、どうやらそれでもなささうだ。結局馬鹿でも利巧でもなかつた父にあつたものは、もうあきらめることが出来てゐて、それより外のハケ口がなかつたものだと言へる。自分で凝平と悲しさうにさまざま考へを押へ、自分ひとりの不運だといふふうにあきらめてゐたのだ。——さういふ時でも決して遠慮がましいことをしなかつた母は、ほとんど向不見にむだ金をつかつて、明るい春の晝日中に重詰を下げて腹心の人を誘つて、いつも芝居小屋の埃の中に坐つてゐたことを考へると、何となくこの隠居や老人に似たものを感じさせる。他人のことを淺猿しいと考へるひまに人間は何と自分や自分に近いところに、そんな多くの淺猿しさが腐つた滓のやうに残つてゐることだらう——だが、あんな酒や淫盪な暮らしをした母が、もうそんな一切の過去のことを忘れつくして、たゞ父の位牌ばかりを眺めては、今年はその七年忌にあたると言つて、それをどういふ風に修めるべきであるかといふことを、私にわざわざ相談してくるやうになつたのは、何といふしほらしい女になつたものであらう——老人にも二種の暮しがあるもので、はじめはこの世の歡樂に近いものを養つてさうと焦るころと、それが又存外話らないものだつたりすると、もう無爲な、何かいい加減な偶像でも石ころでもいいから、それに手頼つてこの世を胡魔化してゆかうとするころとがあるらしい——そしてどんな

に眞面目にこの世は老人であるといふ一つのつながりにうまうまと胡魔化されてしまふことだらう。——ちやうど水盤の魚が何かなし逃げようとすると、ひと濁り水をくもらせてゆくやうに、かれらも眞顔になつていと殊勝げに左うあとを濁らせてゆくのである。

「こんな老人だちを世の中の人は面白い人物だとか、元氣なお方だとか言つてしまふのだらう。」

全く考へると恥かしいことなんて人間の世に一つもなくそれをことさららしく恥かしがるのは、氣の弱い私の父とか父に似た珍らしい徳をもつてゐる人が言ふことであつて、生活のちからの強い人間には何だつて不思議なことではないらしいのだ。たゞ氣の弱い人間はできるだけこの世では損をすることになるのだらう。

しかし私はさらに恥かしいといふ單なる事實を何處までも徹底させた人物をこの二老人以外に見たときは、全くその男に對して「君はいたいこれは本氣であるのかい！」とでも言ひたいくらゐな気がした。

——その男は下町のあたりの商家の主人らしく、そして私が滞在した一週間を頼の尖つたその男の同年輩のらしい女と一しよにゐた。私は疑ひもなくそれが夫婦者であると思つてゐたのだが、或朝、ふと浴室で出合したときに、驚いたことには！ 相手の女が昨日のそれではなく水々しい鬘に結つた

若い下町造りの、それも極く近頃めとつたばかりの新妻らしいのに驚いた。——では昨日まで一緒にゐた女はこの男の妾だつたらうか？ それにしてもその女はどうしたのだらうか、さう思つて女中に尋ねてみると昨夜おそく女は東京へ發つてこんどは奥さまの方が入らつしやつたのだと言つて、でもすいぶんですわね、と女中さへ呆れかへつて言つた。——上一週間を妾と送つて、下一週間を本妻を呼んで同じい旅館の、同じい衆目のなかで送らうとする男、そんな事くらゐに顔色一つ動かさずに、しかも私などの眼前にその本妻をつれて悠然と入浴してゐる有さまは、全く私をして並々ならず驚ろかした。こんなには澤山の女中や浴客のあるなかで、この男の平氣で押し通してゆかうとする生活は、よし正しくあつてもなかくても、その心の圖太さには私も感心した。自分ひとりの考へた事柄や欲求のために、世間のどんな微細な心の動き方にも、又恥を恥とするにはあまりに人間の心を粉微塵にしすぎた仕打にも、表情一つ動かさずに恬然としてゐる男——君だちはどう考へようと君だちの心とは關係のない自分だといふふうには、かへつて澄しかへつてゐるやうな人物、——全くそんな人物こそ初めから良心を持つてゐないし、恥といふもの本統の姿さへ知らない男ではないか？ がそれさへその男の本統のなにも彼も犠牲にした生活だとしたら、私だちはなにも言ふことができない、たゞそんなときに私だちの言ふこ

とは言葉といふ形式をとらずに、
「この男だつて私だちと同じ人間で、そして喜怒哀樂さへわかつてゐるらしい人間の一人だらう」
とでも言つて、すぐにこんな人間の、ことなぞに頭をつかはないやうに仕たいものだ。だが人間は頭をつかはないやうに仕たいと思ふ事ほど、人間にとつて大切なことはない——いやなことは忘れてしまひたいと思ふのは人情だらうが、しかし厭なことは到底忘れられるものではない！
私はその本妻らしい女を見て、これはそんな性質の悪い女でない、むしろ善良すぎるくらゐにまで少しばかり氣たところのある女かも知れないと思つた。女は利巧なほど古風なところがなく、新しい器物のやうに手ざりは粗いものだ、——すこしばかり利巧でそのためにも少しばかり馬鹿げてゐるやうな女には、どこか古風なところがあつて好ましいものである。この女にもどうやらそんな傾があつて、顔付に古風な、直覺の鈍感があつた。これは何よりその女がそんなにまで不偶な位置にあつても、それを知悉することのできないうらしいその女にとつて寧ろ幸福らしい位置をあたへてゐるらしかつた。それ故女は自分の訪ねてきたすぐ前の晩まで夫がどういふ女と一しよにゐたかと云ふことなど、すこしも知らなかつた。かの女はいつも夫が不自由をしてゐるとしか思はないで、そして久しぶりである夫の新鮮な心にふれる思ひで、何かし

らそはそはと不尠らず嬉しげにさへ見えたのである。そんな心には決して不幸が急に綻びかかつてくるものではない、その不幸は完全にさへ包まれてゐるではないか？ しかし女中の一人がうっかり口をすべらして、あの男の昨日まで一しよにゐた女のことを話し出したとしたら、この女はいきなりへたばつてしまふほど吃驚してしまふだらう。——人生といふものには決して油断をしてならないもので、そして自分もそれに充分な心をつかつてゐたのに、突然自分の夫の上にそんな厭らしい事件が覆ひかぶさつてゐるなんて、これは一體信じていゝことだか悪いことだか、と左うあの女は善良らしい性分のあるだけで心勞するだらう、そして今までの自分の性分に最上一層の烈しい新たな性分が加はつて、その本來の、すこしばかり馬鹿げたところと少しばかりの利巧げなところが、即座に拭き去られてしまふだらう、あとに何が残るか？ あとは唯不愉快げな女ができ上つてしまふばかりである。——それ故私は心ひそかに思つた。あの女に何も知らせるな知らずにあるまで知つてはならないことだから？ が、私は依然その日から變な心の沈むことをかんじた。それは世の中には平凡な人間の二人分或ひは三人分の生活をしてゐるもの存在してゐることそのせいではないが、又の一人分さへ充分に生活できなゐる人々のあることなどを考へた、——當然自分自身にさへ興へられるものまでそつくり不合理に、

しかもがむしやらに奪ひ取るやうにした男の三人前分の生活が、何とそこらに多いことだらう、私自身のことを言へば人は喘ひ出すだらう、だが君だち一人づゝの分け前がどんな工合でか、いつの間にか減つてゆくことがあるではないか？ 誰彼れが持つてゆくわけではないが、何となくその二つ三つづゝをつまみ食ひされるやうに、ほんとうに夢のやうに何かさがらばれて行つてしまふやうな氣がするではないか？ あんな二人の老人やこんな男の生活ばかりでなく、もつと知らないである分のものが、刻々にこの世から消えて失くなる：：そして一人前分の生活さへできないやうな不幸な生活者は、その一人前分の半分までそのために奪はれて行つてしまふのだ。
朝、目がさめると、これらの人々にどうしても顔を合さねばならず、さうなれば、ひとりだけで考へてしまふために、朝は私の心に本當の意味での悲しい氣が起つた。庭といはず山河の荒い街道すぢにこれらの姿が、世間から隔れた筈のこんな山奥の至るところに黒ずんで浮んで見えた。何も知らずにいそいそしてゐる例の妻をつれた男の散歩してゐる姿や、小娘をつれた老人——もうそんな不合理な姿すら此處では當り前のことのやうに思はれてゐるらしい止みがたい風俗、人間の心をさまざまに映して見ることでできる飛んでもない安樂

「何といふ併し困つた人だちだ。」

さういふ私も何といふ籤引の弱い、そしてがらにもなく恥を恥としてゐる下らない着實さうな男だらう——ふと、全く實着さうによそほつてそして何も彼もあるだけのものを仕て見たくとも手出しもできない不甲斐ない男の一人であらうぞ——ちやうど私の父が商業上のことから女客でもあると、對手が女客であるといふ單なる一つのことからして、なるべくその女客が早く歸つてくれればよいといふ詰らない母への遠慮のために、どんなに屢々そはそはと居苦しさうにしてゐたことだらう、それは外からもよく見える慌て方と、そして何と糞正直と弱氣とを兼ねた人人だつたらう——

「そりやああなたの心にも何かがあるからですよ、そのためにもそんな慌てかたをなさるのだ。」

とさう母親はいくらか冷笑つて氣の毒な父に言つたものだった。

しかし父はそれには答へずに、その場を切り上げて小人らしく吻と息をついて、さて寂しさうに、

「女客といふものは何となく氣の置けるものでな。」

と、何か考へ込みながら云ふとそれきり啞のやうに黙つた。こんな氣の毒な私の父、何かのはずみにはたゞ嘆息をしてそれでもうこの世には何もいふことなんて一つもなささうだつた父が、どうかすると口でいふほどもなく、何となく持ち

あぐんでゐたやうな女客をまできつさと歸してしまつたあとで、そのうしろ姿を眺めかくしてゐるやうなところのあつたのも、私にはわるい氣もちではない——全く左うあらう筈の父だつたらうと思へるのだ。

「口なんて調方なものさ？」

さう母はたまたま言つて、何もできませず仕もしない父のすなほな心に、理由もなく觸つてみて扱て退屈さうに欠びをしてゐた母の心も、私にはわからない事もない——觸つて見たつて觸り甲斐のない父の心には、ほとほと母も退屈のあるだけをして、馬鹿扱ひにしてゐた。

母はいまはまるで自分の夫でもなければ、又自分のそれほど親しい人間でなささうに寧ろむきつけに言つて全く煩ささうに煙管に火をつけたりして父に與へた。——父はそんな母に對つても全く自分自身の世話の焼け過ぎる病體を厭ひながら言つた。

「お前には氣の毒だと思つてゐるが、いつ靜かになれることかいと左うしよつちう考へてゐる。」

父の左ういふ言葉にはどこか謝まつてゐるやうなところがあり、すこしも母の仕打に對しても反感も持つてゐないらしかつた。——そのうち自分だつて靜かになつてしまふだらう。それまではお前だつて不運とあきらめて介抱してやつて呉れといふ、ほとほと嘆願に近い調子さへ交つてゐた。

母は冷淡に、むしろ罵るやうにつんけんと言つた。

「いつでも同じことをあなたは言つてゐる人だ。」

母はさうきつぱりと父をやり込めると、それきり相手にしなかつた。こんな死にぞこなひ！ 母の顔はにくにくしさうに尖つて見える。老いれば老いるほど尖るものは女の顔ばかりだ。それだのに反對に父の顔は一日づつ物優しげになつてゆく、つい昨日とか一昨日とかに微笑つた表情が、そのまゝ夢を凍らせたやうになつて、その形をくすさずに残つてゆく……これはあの世まで持つてゆく顔にちがひない。餘命のないものの微笑の一つ一つに名残りををしむやうな色があるではないか？ もはやそんな怒つたり泣いたりするものなどはない、あるものは喜びだけを記念してゆくと、あんなにまで優しいこの世からの凱旋ではないか？ あんなにまでに善良になりきつてゐるではないか？ 私は何を言つてこの人を喜ばしたらいいだらうかと、さう考へては中途で止して、しまひにはなるべく父の顔を見ないやうになつた父の顔を見つめることは息苦しい氣がするのである。

何といふいとしげな父だつたらう——と、さう今考へる私はやつと自身の肉親を拜むだけの資格を人生から與へられてゐるやうな氣がした。——そして父の死後母は何といふ安らかに暮してゐるだらう、父へつくせなかつた私は却つて母親に仕送りをした。私の兄も手づたつて母を安樂にした。——

當然父の分け前であるべきこの世の宴の二人前を、母はめでたくも受け取つてそして何不足もない——だがあの世の父はそんな事をねむやうな人がらではない、あの世からもなほ微笑みを投げて喜んでゐられることだらうか？

私はこのごろ國にある七十五になつてゐる母のことを考へて見ると、兄や私はそばにゐなくて、唯一人で毎日膳に坐つて一人で食事をしてゐる姿を思ひ出した。一と箸つづ考へながら食べてゐるやうな姿、それでゐて決して何も考へてゐないやうな忘失されたやうな顔付——人生の何も彼もがゆつくりと時間通りに過ぎ去つてしまつて、そのあとには唯食つて生きてゐるだけの仕事が残つてゐるだけの、あんなにも所在ない姿。父のある間は半死の父をさへおもちやにしながら、どうやらかうやら自分を胡魔化してゐたのが、急にいまは何もするところがない——人生には口小言さへいふこともなければ、又進んで何かを言つて見ようといふ氣さへ起らない今の有様は、母親をだんだんに物優く鈍く、ともすると睡り勝ちな人間にしてしまつた。そして自分の息からの金を少しづつ貯めながら、それで自分の葬ひの費用にするのだと言つて、葬ひ迄は決して子息達の世話にならない、さうしては濟まないと、言つて、蟻の餌ほどの金を積んでゐるやうな殊勝げな母親——役者を買つたり父をいぢめたりした人物は別にあつて決してこの母親ではなささうに思へるほど、何も彼もがなだ

らかな性分になつてしまつた。そんな事から人間の過去にあつたものが何も彼も忘失され帳消しになるものかどうか分らないが、しかし人間はこんな佛像めいた老母を前に置いて最一遍過去の事をならべ立てられるべきだらうか？ あなたはこれこれの事をしたが併しあなたの事は何時の間にか風雨にさらされて消えてある——あなただつてそんなことは忘れてしまつてあるやうに世間でも最も忘れてある。あなたの現在の、そんなに素直な心が何も彼も消して了つてあるではないか？ あなたは死ぬまで素直な美しい心をもつて行かれるだらう。そして佛像めいた顔が日に日に皺に光澤を含んで悲しい分は悲しげにちぢれ、平和な分は平和にだんだんに彫られるやうになつてゆくに違ひない——そして父が最後に残して行つたやうな微笑み、この世をも一度じっくりと眺めて何となく微笑んで見てゐたあんな顔に、母の顔もだんだんに近づいてゆくに違ひない……

「これはお葬ひのお金です——これまでお前たちに苦勞をかけて本當にすまないと思ひますからね」

さういふ母親の手をみてさへどんな淺猿しいことだつて私はすぐ忘れなくなる。弛んだ澁紙のやうにくちやくちやになつた手と五本の指——それはともすると、すぐ物を拜むために合掌されやすい手で、合掌することが最う母親にとつてこの世の仕事のやうに残つてゐるのだから……これは紛ふ方も

ない私だけの人生の母親で、この世にとつては貧しい蟲けらのやうな取るに足らない私のひとりの母親である。

朝は毎朝のやうに晴れあがつて、この世には何のかはりもない——何か知ら變つたことがありさうにも思へるがその實何一つ變つてゐない——れいの二組の老人と、商家の主人らしい男とが、新緑の樹の下を歩いてゐる。何の屈托もなく考へることなどあらう筈がなく、昨日のやうに今日は又別段に晴れた美しい日のしたを、かれらは娘のやうな女を寵愛するために選んだこの山奥の初夏を愉しんでゐるらしい、それによい、何も彼もよい、私はあんな人だちに氣むづかしい顔をするのは、つくづく私の頑固からするのであつて、誠は向うから挨拶をしたなら、私だつて冷たい新緑の光をあびてこんな新鮮な朝はさらりとした顔付になつて無理にも快活になつて、さて

「お早う！」

と、さう答へては私は私だけの樹の下を彼らとはべつべつに歩くべきであらう。こんな世の中で頭をなやますべきではない、却つて快活になつて朝は遅れずにお早うを繰り返すべきであらう——私はさう考へて無理にもはればれしい氣になつて、この狭苦しい山の奥にもある人生の朝ぼらけを人なみに新鮮らしげな顔つきで歩き出したのである。

わがこと人のこと

胡瓜と唐茄子、さやいんげんと水蜜桃、それから走りの秋草を壺に入れたのを茶の間と座敷との間に置いた。おしげはおがらを指さきで同じい長さにびしびし折つてゐる。——それに珍らしく咲いた水蓮を一つだけ剪つてそれを又壺に入れた。

「ぶい、はまだ青うございますけれど、ひと房だけ採つたらどうでせう。今年は實りかたが、去年よりかすくないぢやありませんか。」

「去年實つたから休みかも知れない、——しかしあんなに實つてゐるから休みでもなささうだな。」

「ぶい、は休みのないものかも知れませんが、おとなりの先生のおはなしでは、やはり若木でない駄目らしいんですかね。あんなに大きくなつては？」

梯子をさして一房切つて見たが、まるで青くてやつと珠なりの形をつくつてゐるに過ぎない。が、それもやはり縁側の、れいのお盆の上に置いた。みんな揃つたので腰をおろした。「龍井さんの亡くなつたおくさんが、いつか田端へ越してい

らしたときに、ほら御一しよに挨拶にお見えになつたのでせう。あのときにぶい、の棚をみなすつて、いつでも、ぶい、はよう實つたかどうかつて龍井さんにお聞きになつたと言ふぢやありませんか？」

「よほど氣になつて——楽しみにしてゐたらしいね、だから龍井君が来たときに何日すこし願けたぢやないか。よく忘れやうだいな。」

「おわけしたか知ら？ さう、さう、たしかにお上げしましたね。何とか言つてあらつしやいまして？」

「あの男のこつたかられいの調子で黙つてゐたよ、あんな男といふものは嬉しいことでも、それをすぐ口でいへないものだよ、だからいつもしんねりと微笑つてゐるばかりなんだ。」

龍井君と話してゐると肩が凝つてしまふ。

「あの奥さんの童話はどうなつたのでせう。」

「さあ、氣まぐれに書いてやぶつたんぢやないか知ら？ あのおくさんのいいところは、ちよつと童話をかいてみようと思つてもしなくせに書いてゐるやうな、かあいらしいところに

もあつたやうな氣がするな。」

あまり近くでも人のところへ出かけない私は、いつか龍井君の留守のときに行つたら、机を置いてあるらしい外へ向いた障子がすつと開いて、奥さんがうつ向いてゐたらしい目を私へ向けると、羞かしさうに微笑つて、唯いまちよつとあひにく出かけたものですから……いいかげんに歸へりませうが、又入らしてくだされと左窓のところだつたか立關だつたかと言つた。あとで、あのとき童話をかいてゐたんだつたと龍井君はをかしさうに言つた。——あそこの家は私も二年ばかり住んだので、あそこへ這入ると何故かいつも些つと考へごとをした。私が越したあとでも、龍井君は手洗鉢の下だとか、ぬれ縁のきはの篠竹のなかとかに、何だか芽が生えてきたやうですが、あそこにも何を植ゑてをいたのですかとよく尋ねた、さあ、鶏頭だつたか、縞のすすきだつたか忘れたが、どつちかでせうねと答へたりした。だがダリーリヤは生えませんが、どつちかた、わづかな庭さきのことをお互ひが借家人らしい消息を漏らし合つてゐることが、いまから思ひ出すと仄かないたいけな氣もちになるのだつた。

おしげは伊織のをばさんや宮島さんの奥さんの供へ物をも一しよに縁側へ出して、庭さきをもう一遍だけ掃いて、「碩道さんはどうしたのでせう。あんなに固くおたのみしてをいたのに。もう十時になる。」

さう言つて大龍寺のぼうさんのくるのを間違がつた。いつか門のせまい潜りてしたたか頭を打つた氣の毒な、をかしげな碩道さんを思ひ出すと可笑しかった。

「お盆だからきつと忙しいんだ。田端だけでもかなり澤山まはる檀家があるらしいからね。」

「でも十時ですもの。」

「来るには来るよ、龍井君のところも新盆ぢやないか、いや、去年だつたかな、しかし本當の新盆はことしなんだらうね。」

「うちとは一ヶ月くらゐのちがひだつたのですから、ほんたうのお盆はことしなんでございませうね。」

碩道さんの来たときは縁の日ざしが遠のいて、すこし暑くなつた十一時過ぎだつた。俵で廻つてゐるんですけど、數が多いので廻りきれない、——それで心ならずも時間がおくれたのだと言つて、塗の黒い、中には紅い繪のある扇をはたはたうかした。そして思ひ出したやうに、

「椎名さんの奥さまからよろしくとのことでした。あの、坂を上つたところに引つ込んだ家がありますね。あそこに居らつしやる方です。」

「へえ、椎名さん?——」

おしげの方を向いて、「お前その椎名さんてお方を知つてゐるかい? 坂を上り切つたところださうだ。」

「いいえ、一向ぞんぢませんわ。あそこの中から眼の大きい

奥さんがよく出ていらつしやるところを見かけたことはありますが……若しかしたらお寺でよく會ふその奥さんぢやございませんか知ら? 女のお子さんをつれて繪日傘をさしてゐらつたりする方ぢやありませんか?」

碩道さんは坊さんらしく、いつも開いてゐるやうな口を動かすと、膝の上の風呂敷包みをときながら言つた。

「さうです。その方ですよ。——こちらさまでは御存じぢやないんですか?」

「ええ、すこしも。」

實際、私もおしげも知らなかつた。ただ私は町へ出るたびにその坂を下りて行つたりするが、その奥さんらしい瞳の大きい異人めいた女の人、——ときどき女の子をつれたりしてゐるその人によく出會つたものだが、あの女の人にちがひないと思つた。おしげの話では去年の秋ごろから大龍寺の位牌堂でよく會ふ女の子があつて、どこかの奥さんらしく何んでも十ぐらゐの男の子をとられたのだと言つて、ほんとにお氣の毒です。あんなに大きくしては思ひ切れないでせうにと言つた。が頑固な私はそのときにも、十歳で亡くなつたのなら十年の間親だちはその子を手づから育てたわけで諦めめよいが、わづか一年足らずのこちらの不足した分は、一たいどうなるのだと食つてからかつたほどだつた。——が、あとで靜かに考へて見ると一つや二つで亡くなつたのならあきらめら

れるが、十歳にもなつてゐるから諦めかねるのだと言つたら、私はどうこたへていいだらう。それでもやはり一歳でなくしたからなほ諦めかねると言ひ張るだらうか? いやこれは年月の問題ではなくて父親なり母親なりの心の問題だ。さういふ年月なぞのを言ひ出すのは、泣きじやくつて向うの見えない言分だ、——私はさう思つて黙つてしまつたが、いまあの奥さんからよろしく言はれた氣もちは、これはおしげの心に通じさせる優しい挨拶のやうなものだらう、自分のあんなに悲しいやな氣もちを裏にひそませた挨拶に違ひないと思つた。それにしてもその言傳は私にはいい感じをあへた。おしげも何時も會つてゐておたがひにお寺で黙つて別れたのに、かうして間に人を入れて言葉をかけあふ氣もちには、何となくじつくりと親しまれ同感することができた。

「こんどお出でになりましたら、わたしどもからもよろしく申してゐたつて仰有つてくださいます。いつもおあひしてゐるくせに何かのはずみに御挨拶しようと思つてゐても、ついしおくれてしまつてゐたものですから。」

碩道さんはさういふおしげの言葉を呑み込んで、「ええ、さう申して置ませう。よく世間には、——ことに不幸な事がお互ひにあつたりすると知らない人間同士で知るやうになることがあるものですからね。」と言つて、「實はけふ上りましたら、これができましたから御らん下さいと一冊貰つてまゐり

ました……」

碩道さんはさつきからむづむづ動かしてゐた風呂敷包みのなかから、一冊のうすい三六判型の、一分くらゐの厚さもあるうか！ その小冊子を私の机の上に置いた。私はその瞬間の氣もちでは何だくだらない！ といふ職業的な輕蔑めいた氣もちを否まれなくて、手にはすぐ取れなかつた。紫の絹糸で綴つてあつて、小さいかたみにと女らした優婉な文字がかかれてあつた。大方、その十歳になる子供の思ひ出を親たちが思ひ出しては書きつづつたものにちがひない。——それならばそんなに見たくもないことだ。私はあの奥さんが物好きでも遣つたものとしか思はれなくて純粹な氣もちにはなれなかつた。一つには私自身がそんな印刷物になれすぎてゐるために、他の印刷物に對する微妙さを讀みつくせないかも知れないが、どうも詰らない氣がしてならなかつた。

「お子さまのお友だちの文章や、亡くなつたお子さまの鉛筆畫だのが入つてゐるんです。」

碩道さんほも一度私の机の上から小冊子を手にとつて、ばらばらと頁を繰つて、目をうつしてゐたが、私はそのとき二三枚の繪に目がついた。景色のやうな色鉛筆でかかれたやうなものだつた。その感じはきつすゝな感じだつた。

「よく集めたものですね。どれ、ちよつと見せてくれませんか？」

何氣なく私は碩道さんの手から、この小さい本を受取つて

やはり碩道さんのやうにばらばらと頁を指さきで捌いて見てゐたが、巻頭に三輪車に乗つてゐる男の子の洋服姿が寫眞になつてゐて、その伶俐げな眼付がしんとして私の眼にうつつた。あゝ、この子なら見たことがある、と左う口へ出して言つたが、この悲しげな三輪車にも見覚えがあつた。どこかの坂道を危げに三輪車に乗つて走つてゐた子ではなかつたか？ 「どうも見覚えのあるお子さんですね。最も家が近いから見ることがあるに違ひないが……」

おしげもそばから覗いて、「よくあひましたよ、このお子さんには！」 いつもこんな姿をして。」

さう言つて急に感情をさわがされたらしい顔をした。全く覺えがある、あの奥さんの子どもだつたのか、さう思ふと大きい異人さんのやうにまんまるい母親の目つきそっくりだつた。——私はこの小さい本に對する私の先刻から考へてゐたものを、何時の間にかそっくり捨ててしまつて、眞剣な氣もちになつて頁を繰つてながめた。受持先生や同じ學校友だち——十か十一くらゐの子の思ひ出や追想記が一杯につめられてあつて、肝心の親だちの心もちを書いた文章といふものは單に子供の年代記が出てゐるにすぎなかつた。それ故私はなほこの小さい本をいとしい氣もちでながめた。——私の一番感心したものは色鉛筆で描かれたこの子の母校だつた田端小

學校の全景だつた。あそこには櫻がある。その幹は代緒と紫とで書かれてあつて、葉はおほかた十月終りころだらうか？ 朱の交ぢつた鉛筆でさつきと射しつけられた秋の日の景色でさうして何か寂落として見える。——小學校は全て茶褐色で明るい窓がゆがまないで描かれてあつた。私は私の記憶にある小學校を心に浮べたが、そのときこれは上手いと思つた。

この子の親だちがこの繪を大切に保存して置く氣もちは全く何に譬へていいだらうか、私の先刻碩道さんがこの本を机の上に置いたときの、惡ずれのした心は何といふいやな氣もちだつたらうと思つた。——その他にいろいろな繪や習字があつた。私は習字といふもの、墨筆で書かれた子供の文字といふものに、初めて正純な悲哀を感じた。凝乎と見てゐると墨の字が親の心を受けついで泣いてゐるやうだ。これは誇張ではない、十分間見つめてゐたまへ。——あんなに悲しい大日本といふ文字が犇々と胸に迫つてくるやうではないか？

「これだけの材料があればこんな本にして置きたくなるだらうね。本といふものもこんな風にしたら別の生きた値がでてくるものらしい。」

私はおしげにさう言つて、碩道さんには、「全くいいものを見せていただきましたね。妙なことを言ふやうですが、こんなにすぐ感情的に迫られる本といふものは久しぶりに見たやうな氣がします。」

さう言つて、その子供の友だちの書いた追申文をよんでみると、みんな實感と直接の感情が書かれてあつた。——きみの腹がわるくて寝てゐるといふことをききましたが、お見舞しようと思つて出かけてゆくと、君のお母さんが君の亡くなつたことを門のところと言ひました。僕はかなしくなつてすぐ家へかへつてお母さんにさう言つたら、お母さんはうそぢやないかと言はれ、そして君のところへ一しよに行つて見たのです。そしたら君はあつちい向きになつて寝てゐました。僕はだまつて君がいつまでもあつちい向きに寝てゐるのだと今でも思つてゐます、——

「これなぞはまるで實感ですね。……さんりんしやの好きな君はいまでもさんりんしやに乗つてゐるやうな氣がします。……か、さんりんしやは文字からして悲しさうですね。」

私はもう一度腹のなかでさんりんしやと左う言つて、得もいはれず哀しく詩のやうな氣もちだと思つた。おしげはこんなにして亡くなられたらどうしたらいいでせうと言つた。全くこれは諦めかねると思つた。そして子供は永い間育つたのほどど亡くしたら耐らないだらうと、ちよつとの間だけ私は私の分の氣もちを忘れようとした。——そのうち、おしげは頁をくつてゐたが、きふに元氣な聲になつて

「安國さんの文章も出てゐますよ、ほら、尋四、行村安國つてのが……。」

「へえ、安國も友だちだったのか。」
そばから覗くとやはり安國のも出てゐた。私はその文章をよんで微笑んだが、ちよつと行き詰つた氣がした。——碩道さんはさつきから黙つてゐたが、

「そのお子さんはごぞんぢですか。」

「ええ、うちの子によく肖てゐますので、しよつちう遊びに來てくれるんです。まるでもうどう言つたらいいかと思ふくらゐ能く似てゐるんでございます。その子の來るのを待つやうなことがあるんですの。」

「奇體なこともあるものですね。」

碩道さんはただそれだけ言つて別に深く聞かうとしなかつた。——その安國といふ子は一軒置いて隣りの彫刻家の子供だつた。私はよく通りすがりに遊んでゐるのを眺めて通つたが、いつでも似てゐると思つた。家へくる平林と一緒に町へ出るときも、どうだ似てやしないかと言つたらこりや全でそつくりですと云つた。しかし私には眼鼻立ちよりもどこか病的なあざぐるい、どうかすると少しくらゐ蒼みのある皮膚がひどく似てゐると思つた。すこしでも過激に運動したらすぐに青くさめやすいやうな皮膚が、私を刺戟してならなかつた。

そんなわけで私はまる六ヶ月といふものは、その子に言葉こそかけなかつたが、楽しみにして遊んでゐる姿を見詰めた。

しげも言つたりした。こちらから行かなければ向うから來るだらうねと私もこたへた。

「しかしよくなつてゐらつしやいますね。」

「まるで家の子のやうに毎日來てゐるんですよ、日曜なんかまる一日かつきり來てゐるんですよ。」

おしげはさう答へると、もう用意ができましたといふ女中のおんないを受けた。碩道さんは立ち上ると、

「ぢやご回向をあげませう。」

と、けさの風呂敷包みを解いた。おしげも私も次の間へ行つた。

うら盆の夕方である。——おがらを焚いてうすくらがりの庭を明るくした。撥けた火が美しい。自分でぢかに眺める機會のない火といふものは、清淨な思ひがするものだ。おとなりでも庭の方で、くらがりにお迎への火を焚いてゐるらしい明りと話聲が垣根越しにきこえた。

「國の海岸のお寺では、お招靈さまの灯を一番高い樹のてつべんに上げるんだよ。紙を張つた四角な燈籠でそれだけしか灯れてゐるものない砂丘のふもとなんだから、全く招靈の寂しい感じが出てゐるんだ。」

「尼寺のことですか。」

「うん、あんな高い樹のてつべんにどうして灯を點すのだからと思ふとね、ぢいやさんが夕方どきに登つて行つて灯して

くるんだとき。」

國の方では盆の日のあとさきには、ちよつと氣のきいた家の座敷の縁近くに、裾の長い盆燈籠が吊される、支那風な、賑やかなうちに十分な寂しさがある、ああいふ燈籠も一つほしいと思つた。裾紙に牡丹を透かし抜きがしてあつて、青い露蟲か何かが庭から飛んで來て止つてゐる記憶があつた。

おがらは燃え盡きようとしてゐる。それで又一とときり燃えて、こんどはしんと消えかかつた。もう來るものなら來てしまつてゐるかも知れない、明りはもう十分だといふ氣がした。

「迎へ火なんて誰が考へ出したんでせうかね。」

くらがりに俯いておしげはさう言ふ。

「さあ、よほど考へぬいてやつと思ひついたりやうな氣がするね。今どきの人にはそんな考へさへ失くなつてゐるだらう。」
若しそんな考へを持つてゐた人がむかしにあつたとしたらその人は悲しみ抜いてやつと思ひついたり趣向にちがひないと思つた。

安國のお母さんが玄關から晩方になつて訪ねて來られた。

——多分そのうち見えられるかも知れないと言つてゐたのがうまく當つて今夜は顔を合はすとすつかり古い懇親のやうな氣もちで、つたの葉の垣根にそつて立つた奥さんをおしげは

あちらでも無邪氣に微笑つてゐたし、こちらにもこにして

遠くから微笑ひかけて歩いたほどだつた。そのうちに何時だつたか遊びに來ないかと言つたら行くと言つてゐたが、やはり來さうもなかつた。……よく似てゐる子だが遊びにこないかな、さうおしげにいふと、おしげはそれぢやわたしがうまく呼んできませうと言つて、いつのまにか連れてきたのが始まりで、しよつちう來るやうになつた。一しよに飯をたべようといふと家へ言つてこないと悪いからと走つて行つて斷わつてきて、食べたりした。食べながらも私は私のはいなさから氣が愠いで、やれやれこれはどうしたことだと思ひすくむことがあつた。片一方ではまるで子供らしい氣質をもち、片一方では老人くさい分別くさいこれが私のすることだらうかと、この安國さんをながめた。しまひに安國さんは私の室にある刀劍を持ち出したりして悪戯をしたが、私は全く破顔一笑といふ氣もちでだまつてゐた。——そして向うの親だちからもをりをり菓子などを持たせてよこして、これをおばさんに呈げると言つたりした。お母さんが一度參る筈ですけれど忙しいからきつとそのうちに行きますと言つてたとか、おぢさんにはお湯で會つたことがあると左うお父さんが言つてゐたとか、いつかお友達同志で童話の雑誌のおぢさんの名前をわざわざ表札と合せてみたら同じだつたと言つたりした。——そのうちきつとお母さんがゐらつしやいますよ、と、お

顔一杯にわらひを含んで呼び入れた。
「まあ、わたくし一度お伺ひしようと思つてゐながら……でも初めてではございますし。いろいろ考へあぐんでやつと思ひでおたづねしたんでございます。——申し遅れましたが安國がいつもお邪魔ばかりいたしましたして。」

「このごろよくおうはさしてゐたんでございますよ。そのうちきつといらつしやいますだらうつて。——ほんとに能く入らしていただきました。どうかお上りになつてくださいますし。」

「夕方どきでおいそがしいでせうから、けふは此處でしつれいいいたします。おかまひくださいますな。」

「いいえ、もうご飯もすんでしまひましたし、これから涼まうと思つてゐたんですから、願うてもないところでございませわ。折角ですからお茶をひとつ召しあがつて下さいまし。それにお話がするぶんたくさんでございますから。」

奥田の奥さんは、そのお話でまた和々わらつて、その可笑しさを顔容に持ちきれないやうに、微笑んだ口を、手で覆うた。

「そりやもうお話はたんもございませうけれど。——」

「とにかくお上りくださいいな。そしてその「お話をしようぢやございせんか？　するぶん溜つてゐる筈ですから。」

「え、そりや澤山溜つてゐるんですもの。——ぢや、せつ

「おいくつで——」

「三つだつたんでございましたけれど、何しろ初めての子供だつたものですから、がっかりしましてその當時何も手がつかないやうな氣がいたしました。」

奥さんはちよつと言葉を溢つて、何かおしげに言はうとしたが黙つてしまつた。が、はじめての子供つてものはこちらの考へ方も一生懸命だけに、可愛さも二倍も三倍も深うございませうから、とられたときは全く何一つ面白い氣がしませんでした、と言つた。

「それに初めての子といふものは、そのつきに生れた子が大きくなるに従つて、あれが居れば四つだとか五つだとか指折つてみて、全くつまらない寂しいやうな氣がいたすんでございますよ。」

「そりやもう全くでございませうね。わたしなどは全くひとりの子だつたものですから。」

おしげがさう切り出すと、おしげよりも十も年上の奥さんはやつと安心したやうに口を切つた。

「いつも安國がおばさんが省てゐるなんて言ふが、一たい誰に似てゐるんでせうと言ふんで、うちではみんなで笑つてゐたんですよ、それについてちよつとしたお話があるんですよ。——お宅が越してゐらつしやる前のその前の——名越つて方がございましてね。どこか學校へおつとめになつてゐらつし

かくですからお邪魔することになります、そのかはりおかまひくださいますな。」

おしげは何となく氣さくな、心の置けない奥さんだと思つた。これまで時々通りで出會つてゐてもちよつとした挨拶ぐらゐしたに過ぎなかつたが、どうやら今から考へるとあの時分から別の懇親しさがあつたやうに思はれた。——も一つは今夜のやうに話のつきが、すべりつくなくなつては、ずんでゐるのも心嬉しい氣がした。それに些つとした不斷着のま、で來られたのにも話しよい樂な氣もちがあつた。

「まあ風通りがよございませうこと、いつも安國がおばさんたちはそりや涼しくつてい、つて言ひますが、これぢや夏でもしのげさうでございませう。——こんなにきれいに住んでゐらつしやるのに、安國が何かいたづらをしましたら、うんとお叱りくださいまし、まるつきりやんちやんで、うちでも手のつけやうがございませうのですから。」

「い、え、いけないつて事はなさりはしません。失禮ですけれど頭の方もなかなかよいやうだとさう言つてゐますの。ちやんとすつてゐらつしやるやうですし……それに何んだつてわかりのよいところがございませうね。」

「え、あんまり分りがよくて、少しおちやべさんですの。あの子の兄の、も一つ上に女の子がございましたんですけれどとられました——」

やつたやうでございました。その方のお子さんがまるでわたくしどももなくした女の子にそつくりなんでございました。」

おしげは家主からそんな名前を聞いたことがあるやうな氣がした。なぜかと言へば、この家はこれまで獨身者の借手を斷つてゐたさうで、一つは茶人めいた家だつたから汚されるのがいやさに、さうしたものらしかつた。——おしげの越して來たときには柱や厠に子供のゐたらしい鉛筆のらくがきの痕があつたし、襖には飼猫の爪あとなどが鋭く残つてゐた。

「それで何時でも主人と相談しては、あの子をちよつと借りようぢやないか？　つてふうに、毎日三十分づつ借りてきたものでございませう。眼や鼻の工合がよく似てゐました。——そんなことがあつたものですから、お宅へ安國がしよつちゆ上てゐるのも、何だかふしぎなやうな氣がいたしましたね。」

「何かかう目にみえないご縁があるんでございませうね。そしてそのお子さんはよくお育ちでございましたか知ら？」

「え、まるまると肥つてゐらつしやいましたよ。まるで手なんか括れてばたばたしてゐましたの。」

おしげは何だか不思議な因縁めいた話だと思つたが、自分よりさきにこの家で子供が生れて、それがうまく育つたことを聞くとそんなに縁起のわるい家ぢやないと思つた。——奥さんは快活さうに微笑つて、

「安國がそんなに似てゐるなら、もういくらでも可愛がつてくださいとさう家でも言つてゐるんでございませぬ。——それにあの子は小さい時分から少し癖性でございませぬ。夜中にいきなりわつと言つて立ち上つたりなぞいたしますものですから、へいせいからあの子だけは言ひなりに育てないと、却つてわるくなつたらなぞと大事を取つて育ててきたものですから、そりやもうわがまま者になつてこまるんでございませぬ。いけなひところがあつたらうんと叱つてやつてくださいませぬ。ほんとに他人のそら似つてよくあるものですね。けれどもわたくしは何だかそら似でなくて本統に似てゐるところがあるのだと思ひますの。」

「全くどこかが眞けん似てゐるのでございませぬ。安國さんが家へきてゐらつしやるるときに、親しいお客さまでもあるとわたし何時もかう言ひますの。ほら、よく肖てゐるでせう、まるで額や目つきなんかも色のあさぐろいのもそつくりちやありませんかと言ひますと、たいがいの方は、これや驚いた、まるで坊ちやんそつくりだなんてびつくりして仰有いますの。すると安國さんがいやな顔もしないで、僕アそんなに坊ちやんに似てつかないとこにこ微笑つてゐらつしやるんです。たいがいのお子さんなら何とかいつてたてつきなざるものですけれど、安國さんはそりやまるでこちらの氣もちでも判つてゐらつしやるやうにこにこしてゐらつしやるんです

もの。」

おしげはさう言つて目のふちを拭いて、いつかもをばさんの家の子になりませんかと言つたら、そりやおとうさんやお母さんが受けあへばなつてもいい、——うちは一軒置いておとなりなんだし、何時だつて行きたければすぐ行けるんだから、どつちの子になつたつてかまはないの。此間もおとうさんがそんなに毎日をばさんの家に入りびたつてゐるんなら、いつそひと思ひにをばさんにおとうさんからさう言つて貰つてもらふやうにするから、其でもない、かと言つたから僕どうでもない、つて答へて置いたの：：さう言つてゐらしたときなぞ、何か人間同士の間因縁めいたものがあつて假令へそれが子供でもよく分るのか知ら？ と思ひましたが、

「全くは子供だから分るんだとも言へさうな氣がしますの。」奥さんはさういふおしげが話をしてゐるのにも、隠すことができない弱り方をしてゐるのが自分にも較べて見て、手痛い覺えがあつた。しかも今夜この立關へ這入つて來たときも、すつと前の京都へ行つた名越の奥さんが、自分の顔を見るときとすぐ氣をきかして、わざと碎けて、「まあ、お宅のお嬢さんはこんなにお母さんの入らつしやるのを待つてゐらしたんですよ、ほら、こんなに既うなついでどつちがほんたうのお母さんだかも分らないやうですわ。」さう言つてお嬢さんを借してくれたが、そのたびに、「ほんの三十分！」と左う言つ

て眼でわらつてはよく借りてきたものだが、いつも三十分が一時間にも二時間にもなつたりしたことがあつたばかりでなく、しまひに女中が、「名越の奥さまが門の前へ出てこちらの方を茫乎とながめてゐらつしやいますよ。きつとお嬢さまがゐらつしやらないで寂しがつてゐらつしやるんですよ。」とよく注意することがあつた。いちどなぞはわざわざ自分の家の前まで來て入りくさうにして歸つたこともあつたらしかつた。——まるでその若い名越の奥さんが先刻こへ自分を迎へに出たやうな氣がして、すぐ物言ふこともやすやすと云へたし直ぐ親しむこともできた。それだのここの名越の奥さんは何といふ不仕合せな、そして自分の子どもなぞ可愛がつて、いくらかづつかつて自分もしたとおなじいやうに、氣もちを胡魔化してゐるのだと思ふと、やはり不思議なつながらを感じた。

「よくみなさまがおつきがすぐおできなさるんだからつて言つて下さいますか：：そんなおつきではなくてやはり一等さきの子がほしうございませぬ。」

奥さんはさういふと、やはり腹の底にすつとさきの一歩はじめの子供のことを考へてゐるらしかつた。——おしげはその當時よその子なぞ可哀がるものかと初めに反感をもつたがこのごろはよその子供でも何んでも可哀がつた。あんな考へをもつたこともあんなに酷くやられたあとのねぢれた心から

だと思つた。

「え、いつそ何も言つてくだらない方がようございませぬのね。なまじ言つてもらふよりね。それにわたしなぞはしよつちう鬱々と何か考へ出しましてね。ごらんないまし、けふはやつと送り火を焚いたあとなんでございませぬ。」

庭の敷石に片寄せておがらを焚いたあとが黒々と、開け放した電燈にさらされて、水でもかけて消したらしい跡があつた。——奥さんは自家の庭でも招靈の送り火をさつき出がけに焚いてきたばかりの、焚火らしい艶のある明りを思ひ出した。

「わたくしの宅でも済したばかりでございませぬ。お迎へはようございませぬが、送り火といふものはお寂しいものですね。やはり三日間といふものはどうも來てゐるやうな氣がいたしますのね。」

「え、子供は參つてゐるやうですわね。——それにあなたが來てくださいませぬなんてやはり何か諍へないものがあるやうな氣がいたします。」

おしげは庭のくらしい蔭に腫をやつてゐたが、そこから腫をうごかさうとしなかつた。——奥さんもやはり同様に庭をながめてゐたのである。その間十分ばかりふたりは黙り合つてゐた。おしげはその十分間に三度ばかり亡くなつた子供の顔を思ひ出した。

「もう遅うございますから、わたくし失禮いたします。なんだか肩の荷が下りたやうな気がしますの。おあひしているいろお話したものですから。」

「わたしこそ、すっかりいゝ氣もちにおしやべりして——ちつともおかまひしませんでした。」

ほんとによく来て下さいましたとおしげは最う一度それを繰返して、つたの葉の茂つた玄關へ送つて出た。軒燈のあかりのあんばいであらう。格子がらすにしほりのやうなつたの葉の異なつた影があつた。

「ではおやすみなさいまし。」

奥さんは表へ出て行つた。おしげは茶の間へかへると、なんとなく勞れた氣もちで坐り込んで、茫乎と庭さきをながめてゐた。

何も見えはしなかつたが、くせになつてゐるので唯ぼんやりと庭をながめてゐたのである。

冬はどこかからだに熊のやうな健康がうごいてゐるやうだが、夏になると頭のわるい私は何一つできなかつた。一時間ばかり生眠りをして、又次ぎの一時間もそれにつづいた倦い眼の濁るやうな氣もちになつた。が、ことは、女が妊んでゐるので、その八月終りにはかへらなければならぬ約束で上野から信州行きの汽車に乗つた。——暑い日中の列車のな

かに、年のころ三十を三つばかり越した女のひとが、大宮あたりから泣き出した赤ん坊をあやしなから、その泣き聲に自分まで汗ばんで、私も乗客に氣兼ねをしてゐた。その焦つた氣もちは全く氣の毒だつたが、暑さは暑し泣き聲は歇まなくて、しまひに私は悲しい氣もちになつて了つた。うちでも今月終りは又あんな泣聲がするだらうと、この前るとき寢られぬ晩があつたことを思ひ出すと、頭が重くなつた。が、なぜかこんどはどんなに喧しく泣いても我慢して見ようと思つた。泣く兒も暑からうし母親はなほ暑いだらう、さう思つて私は新聞に目をさらしたが、やはり泣き聲が止まなかつた。しまひに私自身さへ悲しくなつた。

一人の子供が泣くと又別の子供がそれに合して泣くのもこんな時だなと思つた。

私は何かその女の人に言はうと思つたが、乗客はみんな苦しい顔をして、ときどき女の人を見た。そんな乗客はもう十か十二三くらゐの子供がありさうな年ごろで、赤ん坊時代を卒業した人たちだつた。だから母親の氣もちにはひれぬらしかつた。

「どうもお暑いのにこんなに泣かしてすみません。」

座席に一等近い私にさう女の人と言つて、汗をふきふき眞赤な顔をした。赤ん坊は乳首をちよつと舐つてつつけんどんに突き放しては泣き立てた。それだけでなくさへ氣の狂ひさう

な暑さのなかで、私はげんなりとしてゐたが、しかし言葉だけはどうやら静かにいへた。

「どうしてそんなに泣きになるんでせう。どこか悪いのぢやないんですか？」

「いいえ。」

女の方はさういふと、

「どんなものでございますか、汽車に乗るとすぐお乳が出なくなつたんでございます。もうたくさん出た乳なんでございますけれど。」

なるほど左ういへば赤ん坊のぶりぶりした顔つきは全く慍つてゐると言つていゝくらゐだつた。それを騙さうとして乳房をあてたりするのが悪い。乳といふものはどうかすると出なくなるものだと思つたが、私はどう言つていゝか分らなかつた。

「すこしも出ないんですか。」

「え、もう先刻からいろいろやつて見てゐるんですけどちびりとも出ないんでございます。」

「それぢや牛乳でもおやりになつたらどうです。」

「これを抱いてゐるものですから、呼ばうとしてはつい……」

女のひとは又汗をふいた。さつぱりした顔だが、あまりいい暮しをしてゐる人でもなくきれいでなかつた。そのため

か此麼人には却つて物を言ふことがやすやすと出来るものだ

——私は停車場ごとに牛乳を求めに窓から顔を出したが、日ざかりの小驛には牛乳はなかつた。たまにあつてもアイスクリームばかりだつた。私はいらいらして窓から首を出したり、明るい砂利道の外へまで出て見たりした。子供はだんだん烈しく泣き立つて、母親の額の汗は雫のやうにおちてゐたし、乗客はますます苦蟲を噛みつぶしてゐたりした。これが美人なら私は何もしなかつたらうが、さうでなかつたために私は氣の毒でならない氣がした。——しかも女の方は越後の柏崎へ行くのだと言つてゐた。上野からまる半日はかゝるのだ。しまひに女の方が牛乳がないので失望して汗をふいてゐる私をみると、こんなお暑いのに本統に恐れ入りますと却つて氣の毒がつて言つた。これは兩方で氣の毒がつてゐるやうなものだ。私は悲しいやら暑いやら可笑しいやら、さうして他の乗客の落着いてゐるのがいまましいやらで、全く氣がふれさうになつてた。赤ん坊はしうねく泣き立つてゐたし……私はいくらでも泣けくそと思つたが、どうしても牛乳をさがす責任があると思つた。

が、高崎まで行かなければ、牛乳がないと驛員からきいたときに、女の人私も見えず泣く子が泣かぬやうになるのを見殺ろしにするやうなものだと思つて、世間は闇のやうな氣がした。——高崎へ着くと私は歩廊へ飛び出して、牛乳を

三本抱へると女の人にすぐ飲ませるやうに侷めた。私のそんな出しやばつた遣口を内々うしろめたい氣もちがしないではなかつたが、わりに平氣で遣れた。

そんなことにも年齢と境遇とがしつくりして居れば譯無くやれるものだと思つた。

「まあこんな夢になつていただいて居ります、どんなにおいしうございますか？」

女の人は禮を言つてから、左言つて少し反齒な口つきをすぼめるやうにして、ここから安心をして微笑んだ。その顔は全く母親らしく一杯な嬉しさに充ちてゐて、別な意味で氣もちのよい顔に見えた。母親の美しさはこんなものだらうと思つた。

「おとなだとも、あんなに永い間待ちきれませぬね。」

さう私は言つて久しぶりで子どもが、びちやびちや乳を吸ふ口つきと音をきいて、何か楽しい氣がした。自分で牛乳を買つてきてやつたことも嬉しい氣がした。

信州で私は下車したが、そのとき女は氣がつかないであつらしく、別に私からも挨拶をしないで別れた。列車の窓にその小さい束髪が見えた。

その晩からずつとづついて月夜になつて、西洋人の多い避暑地だけあつて、あちこちの緑の小徑の白衣のむれが、父親とか母親とかと一しよに散歩してゐた。あるひは六人か七人

くらゐの子供をつれたのや、一人きりの乳母車を押してゆくものなどゐた。どれもこれも子供をつれない散歩者は殆ど稀れだつた。西洋人を見ると私はいつも種の大ききを感じた。私のやうな見るかげもない、ばらばらに見たらこれがどうして生きてゐるかも判らない瘠體者の、こんな詰らない種なんぞは美事にそだつものでないと思つて時々不愉快な思ひをした種は小さくとも芽は一杯あるのだといふふうな自信がなかつた。人間を動物的だといふ話をまともに考へたら、西洋人はけだものに近く、それも大きいほうのけだものだとおもつた。私などは小さなほうの、そのためにも素早いカンガル―見たいなものだらうか？ なんとなくそれに似てゐるやうな氣がした。

私が去年来たときの宿の子は、もう一人でよちよち歩いてゐたが、ふと私は何氣なくこんな寒い土地に小さい子供がそだつたものだと思つた。雑巾がけをしてゐると、それがすぐ凍つてしまつたり、頭髮を洗ふと針のやうに凍えてしまふ土地で、よく冬越しができるものだと左言つたら、

「東京のやうな八十度九十度もあるところで、よく子供さんが暑さにあてられもせずには育ちますね。」

と皮肉でなしに宿の主人が言つた。これも一理はあると思つた。やはりこれは種の問題だ、——さう思ふと私のやうな年中腹の中に蟲があるやうにきりきり痛んだり、大きい西洋

人を見るとその健康に壓迫されるやうな氣もちになつたりするもの、種は弱いに決つてゐると思つた。そのためにも私は健康になりたかつたが、寝ざめは物憂く散歩にも骨が折れるので、やはり痛い腹の蟲をおさへて凝乎としてゐた。

別荘のつゞいた縁にかこまれた通りを歩くのが、だんだん何故か知ら氣がすまなくなつた。一つにはたたくさんの子供を集めてさわいでゐる西洋の母親たちをみると、あまり楽しみ過ぎてゐるやうで腹立たしかつたからである。世間に遠慮といふものがない！ さうも私は心で愠つてみたが、何のためか遠慮する必要があるものかとも又考へた。——ともあれ私は晝間は宿に寝ころんで、晩になるとマンペイホテルの露臺へ行つて何か飲物をのみながらゐた。その客間の隅にいつでも六つくらゐの男の子と、四つくらゐの女の子とを膝の上に乗せながら、大方就寝前にお伽話でもきかせてゐるのであらうとも思はれる一人の家庭教師が、英語で子供に本をよくみながら話をしてゐる。子供はときどき聲を出しては笑つたりしてゐる。他の客は一人としてこの小さい團欒に注意をしない。西洋人ばかりだから當り前のことだと思つてゐるのだらう、——だが私は三晩つゞけてこの小さい集を見たとき、子供はあんな風に育てたい、なといふ氣になつた。家庭教師は話をすませると本を閉ぢてさつさと子供をつれて寢部屋へかへつてしまふのである。私はそのうしろ姿を右と左とに

ぶら下つた子供の小さい膝小僧をみながら、ついためいきをついて冷えた茶をのんで、がっかりしてやどへかへるのである。

何のためにそんなホテルなぞへ行くんだい！ さう言はれたら私は何も言へないが、あんな小さい團欒さへ私は繪をみるやうな氣がした。いつたい西洋の子供といふものは美しすぎて嫌ひだつた。

「あなたはコックさんですか？」

さう何日が散歩のときに子供から言はれたことがある。いやおれは大學の先生だと左言つたら、ふしぎな顔をして見返した。どの子供も日本語がうまかつた。が、この大學の先生はホテルで家庭教師の右の手にある本もよめなければ、何を言つてゐるのかさつぱり分らなかつた。しかし私は人間の表情だけでどんな意味のものが話されてゐるか云ふくらゐのことは分つた。それ故私はつゞけて月夜になつてゐるホテルへの道すがら、いつでも家庭教師と二人の子どもが、けふも客室の隅にあるかなと楽しみながら思ひ耽つた。そこには日本人はすくないから、話のできない私は黙つて茶をのんで居ればいゝからである。

ちやうど一週間目あたりから教師は話しながら、私にをりをり書物の内容から来るらしい微笑をそのまゝ私にも近づけた。私は微笑といふものゝ親切をかんじた。私もそれを

かへしてその英語のお伽話を聞いて居れば分りさうな顔付をして、椅子の上に坐つてゐた。
 晩はじめて私は日本語で、
 「こんばんは——」

左う言つて頭をさげた。すると教師も「こんばんは？」と言つた。二人の子供らも同じく「こんばんは。」をくりかへした。教師は白衣の縁取りレースを着て真紅の肩かけをその上からほつそりした頸のまはりに羽織つてゐた。さういへばだいぶ今夜は寒かつた。かれらは話のさい中でも折々コックにも見え、大學の先生だと自分から言つてゐる嘘つき、可笑しげな男の方へ振り向いて、お伽話がおもしろかつたのか、くつくつと笑つた。私もわけが分らないが笑つた。そしてお話ですんでしまふと又昨日のやうに階段へ上つてゆくのである。私はそれを見送つてやつと起き上つて原の方から宿へかへるのである。——

「一體おれといふ人間はどうも少し可笑しすぎる人間だ。毎晩あんなホテルへ行つてあんな家庭教師と子供を見て、何の氣になつてゐるのだらう。——だが、あの人達のあんな優しい團欒といふものは、主として形式的ではあるが何といふ纏まりよく調和のとれてゐることだらう。」
 私は原の方へ出て、たくさん別荘のある灯をながめながら、

今夜もいゝ月になつてゐるのを美しくながめた。それに霧のかゝつた草の上にたくさんの蛾が遊んで飛んでゐるのが見える。——ホテルの通りを出はづれると、二人づれの少女が懐中電燈で道を照しながら来るのに出會した。白いふうわりとしたうすものを幾枚も重ね、どこか、ふつくりと鶴のやうに白く清げに見えた。——
 「まるで鶴が歩いてゐるやうぢやないか！」さう思つたが、その鶴は低い聲で啼きながら、ホテルの林の中にかくれてしまつた。

人生

一

栗島のお母さんといふひとは初めて會つたのであるが、ずっと以前から知合ひになつてゐるやうに和々として、
 「いつも栗島がおせはになりますよ。——こんどはまたお近いですからいろいろご厄介になります。」

と、ふくふく肥えた顔に美しい血色のよい笑ひ顔をした。年老つてから福々しく温和に肥えたのといふものは、眺めてあても安泰な氣がするものである。

「僕こそ却つておせはになるかも知れません。」
 「いいえ、あのとほり栗島は陽氣な性分でございますから……いまもちよつと通りへ行つたんですが、すぐかへりますからお待ちくださいまし。」

お母さんは茶を淹れに勝手へ行つたが、あたりは引越したばかりで取散らかしてあつた。勝手に若い女のひとの聲がした。開けられた障子に體を半分露にした女のひとが、勝手の道具を始末してゐるらしいのが見え、誰か知らと思つた。

離れのやうな四疊が鏡型に椎のある庭へつき出て、座敷の八疊からは好ましくその障子が見えた。竹垣のそとは小路になつてゐる。垣に絡みついた末枯れの朝顔の蔓に輪の詰つた白つばい花が着いてゐた。栗島が初めて家を持つにしてはよい家だと思つた。

「こない家があればあたるなんて、ほんたうに仕合せなことでございます。」

お母さんはほくほくして居られると思つた。自分で越す前に雑巾を用意してゐたといふ此のお母さんは、まるで小春日和のやうにほがらかな感じであつた。

「ごめんくださいまし。」

さう言つて大がらな女の人が庭へおりて庭を掃きはじめた。見たことのない女のひとだつた。紺の派手な、あらい單衣をびつたりと身に著け、髪をあたまのてつべんにぐるぐる巻きにせり上げて束ね、それも亂れてゐるがそんなことに關はない風采であつた。わがまゝで肥つたやうなところがあつた。

「やあ、——。」
 と言つて栗島は玄關から這入つて来たが、「この邊に障子紙がないもんだから電車通りまで行つて来た。」
 「おかへりなさいまし。」

庭にある女のひとは左言つて勝手へ廻つて行つた。

「とにかくいい家が見つかつてよかつたね。これなら僕が来たいくらぬだ。」

「僕より母親がよろこんであるよ、初めて家を持つたんだからね。」

栗島は煙草の灰をそこにある茶碗の中へ落した。お母さんはすぐ煙草盆を持つて来て、よごれた茶碗を引いて行つたが栗島は平氣な顔貌だつた。

「二階へ来て見たまへ、一と間しかないんだが、日あたりも中々いゝんだよ。」

栗島のあとに尾いて上つた二階の縁側に日がさしてゐて、書物や机が雜然と散らばつてゐた。人家の屋根に乾いた日ざしが射し返つて、遠いのは、帆のやうにきらきらして見えた。栗島は坐り込むとまた煙草の灰をこんどは窓のところまで拂つた。

「食事の方はどうするんだお母さんがするのかい。」

「母は姉の方にあるもんだからそんな譯にいかんよ、實は君はもう見たらう。あの女がしてくるんだ。」

栗島はやゝ心持を改めたらしく言つて、

「よそへ勤めてゐるんだが、僕の食事だけはしてくる約束なんだ。どうも女のひとでないと食事の方はこまるからね。」
 「よくそんな都合のよい人が見つかつたものだね。」
 「うん、すこし知合ひでね。」

栗島はまじめにかう言ふと、その他のことは話さなかつた。かへりに玄關先きでこの女のひとはさよならと子供のやうな甘えた聲で言つて挨拶をした。それから門を出ようとすると一人の少年がわたしの顔を見てにつこりと微笑つてあいさつをした。手に原稿紙の綴ちたのを持つてゐた。錢湯で三四度會つた少年で、いつも、隅の方で、少年らしい美しい肢體をして洗つてゐたが、わたしを見るたびに挨拶をした。神經質な、色の白い、眼にすこし高慢なところのある少年だつた。そのときからどこか文學的な少年だと思つてゐたのである。

それ故、かれが微笑つてあいさつをすると同時にわたしもやあと言つて、ちよいと首を下げ挨拶を返した。が、かれはそのとき原稿紙をおぼつたの手にわたさうとした。わたしは黙つて當然これは見なければならぬやうな氣がして、何心なく手に受け取つた。

「これを見るんですか？」

美しい少年は顔を赧らめながら、きまり悪くそれでも決心したやうに、

「どうぞ見てください。」
 と言つた。

「君はこの近くにあるんですか、よくお湯屋で會ひますね。」
 「ええ、すぐ崖の上に家があるんです。」

さう言へば、崖の上の雜木のある小路から出てくるこの男を見たことがあつた。紺緋の筒袖を着てゐるがその容貌の中には、なにか敵を作つて絶えずそれに挑んでゐるやうな狷介な表情があつた。わたしはこれは藝術家のもちものだと感じた。すればこの白面一介の少年も藝術家だと思つた。が、顔に吹き出ものなぞのある少年輩ばかり見てゐたせゐか、この少年は清く惱んでゐるところが、蒼白い年齢よりませた高慢な目付を中心にしてその唇や鼻さきまでに現はれてゐた。

「これは小説ですか。」

「ええ、下の方になつてゐるのは去年書いたのです。」

かう話してゐるうちに、家のうしろの原になつてゐる空地へまで歩いてしまつた。家へは小路を曲ればすぐである。

「では来たまへ。」

わたしは部屋へこの少年を入れると、原稿をばらばらと眺めた。文章はかなりうまかつた。こくめに雑誌や本などを讀み耽つてゐるうち、ひとりて書けるやうになつた。文章らしかつた。その器用さなぞもこんな年ごろのわたしなぞには書けさうもなかつた。わたしはふしぎな時代の遠隔を感じた。

「ぢや何ですか、僕が栗島のところにあたことを知つてゐるんですね。つまり待ち伏せてゐたわけですね。」

「ええ、昨日はこのおたくの前を何べんも通つたのですけれど、這入りにくくて止したので。ところがけふ栗島さんのところへおはひりになつたのを見ましたから待つてゐたんです。」

話し振りに少年らしさはあつたが、陰氣くささが際立つて見えた。色の白い崎型兒めいた感じがした。

「栗島の詩もよむんですか。」

「ええ。」

と答へた。

「學校へは？出てゐないんですか。」

「え、姉さんと弟とおとうさんとだけゐるんです。」

「文學で食ふつもりですか。」

「わかりませんがさうなるようにと思つてゐるんです。」

「お父さんがそれを許してゐるんですか。不賛成ぢやないんですか。」

わたしはかう言ひながらお母さんはあるのかどうかと思つた。

「父は何ともいはないんです。却つてこんなことをしてゐるのを喜んでゐるやうに思はれるんです。」

「いくつです。」

「十八です。」
 「どこからだが悪いんぢやないんですか、顔いろなどあまり良くないやうに思はれるが……。」
 「いえ、どこもわるくはないんです。」
 その小さな、ちよこなんと畏つてゐる膝を見てゐると、それとほぼ同じくらの少年がかれの背後をとほり過ぎた。この男の眼には文學志望者の悲哀が話してゐるうちに顯はれ、しだいにその頬の上まで色に染めた。小説の原稿を見てゐるとわたしの文章のねばりが含まれてゐ、それが何氣なくわたしを可笑しくさせた。

「君は小説をかくことを知つてゐますね。」

わたしはこれだけ言ふと少年はまた赧い顔をした。べつにわたしはどういふ場合でも他人の文學を停めるやうなことはない。たとへ危険があつてもそんなことは他人のことである。わけて文學などといふものはその人の一生の内はどういふ發展をするかわからないものだけに、どういふ人々に對しても冷然としてわたしはわたしの説を述べることがなかつた。一生のうちに書けなければその人は書けない人である。書ける人は矢張それを目的にして進んだ人であらう、それ故わたしは他人のことには私見を述べない、若し述べるとしたらその人はわたしのものはや他人ではなくなつてゐることに氣づくだらう、この少年に酬ゆるわたしの心も亦同様であつ

た。

「これから時々おうかがひしていいでせうか。」
 「仕事をしてゐる時はしてゐると言ひますから關ひません。」
 わたしはさう言つて夕方の方の玄關先きに少年を見送つた。すこし顔を上向きにして歩いてゆくかれのあとに、先刻と同様な、かれと同じ年齢くらの、何者かのかけをわたしは自身の間に見出した。

「ああいふ男はお前だちから見たらどう思ふかね。なかなかきれいな少年ぢやないか。」

「けれども顔がつんとしてゐますね。」

「さうつんとしてゐるね。あれがあの男の身上らしい。あんなのを見るとあんな時分の自分のことを思ひ浮べていかな。その氣もちがあつた男と話させた原因にはなつてゐるが……。」

「一生懸命らしいでございますね。」

「一生懸命だとも。——。」

わたしはそのとき己れがやつと一人前になつたことを、まざまざと自身に感じた。その感じは何か濁つてゐる氣がした。抵抗力のないものに自分の力量をかんじることが、恥ぢてよい力量だと思つた。女の言ふところのつんとしてゐることが、わたしの眼に停つた。

二三日後に崖の上の、控地になつてゐる芝の青いところを

ぶら／＼歩いてゐると、雑木にかこまれた家から山羊の啼く聲がした。見れば小さな小屋がけに二頭の山羊が繫いであつて、こちら向きになつて貝のやうな口をもぐもぐ動かしてゐる。も一正の山羊は青草の上へべつたりと冷たさうに坐り込んでゐた。すると其處の古い家の縁側に誰か人が立つてゐる。その男はわたしの方を向いて頭を下げ、そして庭へ下り雑木の間をくぐりぬけて出て來た。れいの少年であつた。いつか來たときより元氣さうなつや／＼した顔いろをしてゐた。

「君のうちはあそこなんですか？」

「え、あなたがここへ入らつたのを先刻から知つてゐたのです。縁側に人がゐるでせう。あそこがわたしの家です。」

「あれは姉さんですか？」

「ええ。」

椅子によりかかつて本を讀んでゐる女はよく見えないが、顔だけぼつと白く古い家の中に浮いて見えた。山羊はこの少年が出て來たときに坐つてゐたのが起きなほり嚙き立てた。しかも二正ともこちらの方を向いてゐる——。

「山羊の世話は何がしてゐるんですか？」

「父がしてゐたんですけれど、このごろは手傳つて僕もしてゐるんです。五疋ばかりゐたのが犬にとられたりして二疋きりになつたのです。」

何日かの夜この近くの犬が群れて山羊の小屋を襲つたとき

に、殆ど手のつけやうもないくらゐ、犬の吠える聲がむら立つて怕かつた。父と一しよに犬を追ひ立てると掘り棄の井戸の中へ山羊を入れ、その上に板や棒杭を置いて夜明まで番をしてゐたが、遠巻きに犬の吠える聲が氣味悪くてならなかつたと言つた。

「優しい可愛いものですよ。」

少年は口笛を吹いて山羊の方に何か懸聲するやうに顔を振つて見せた。山羊は雑木の間を乳白のからだをもがいて、頭につんとひびくやうな聲で啼き立てた。いかにも馴れてゐるらしい。かれは又口笛を吹いて手を振つて見せた。

「なるほど能くなれてゐるやうだね。」

この美しい少年もなにか山羊のやうに優しく見えた。「乳をしぼるときなんぞ眼をほそめてゐるのが、可哀いものですよ。」

「乳はうまいんですか？」

「匂ひがきらひですけれど一杯さし上げませうか。」

「さあ。」

「すぐしぼれるんです。わけもないことなんです。」

少年は前へ歩き出した。

わたしは黙つて膝くらゐある雑草を踏み越え、雑木の下を潜つて廢れた垣根を跨いだ。その小屋がけの山羊は少年を見たと、短かい尻尾を振つて媚びて少年の手もとにからだを

擦りよせた。わたしはこの生きものの優しい眼をながめ、柔かい毛並におおづ指先を觸れて見て、女性的な或る感じを受けた。

「これがめすです。」

「うすあかい乳房がぼつたりと膨れて垂れてゐる。それを少年はぐんにやりと掴んで見せた。すこし熱のあるやうな鈍いが永く眼に残る紅い皮膚が、なほこつこつわたしの掌中にあるやうな気がした。かれはコップを持つてくると、兩手に力を込め上から乳首の方へごりごりとしぼりおろした。乳はどくりどくり脈打ちながら透明な玻璃體の半ばを白く凝固させた。山羊は依然眼をほそめ時々びくびく細かく驚いて首を振るばかりで、あとは静かにしてゐた。その手つきはいかにも乳首をしぼるに慣れてゐるらしく思つた。こぼれた乳は草の葉の上に蟲の繭か何かのやうに點々として白かつた。

「これでも機嫌の悪いときはなかなか絞らせないんですよ、からだを動かしたりなぞしてしましてね。」

「今日は機嫌がいいんですね。」

「ええ、まあ、そんな方です。」

少年は弱々しく笑つて見せた。

コップの乳はすぐ口にする気が起らなかつた。匂ひが青みをふくんで、あたりの雑草の匂ひによく似てゐた。どうも僕にはいきなり飲めさうもないね。目のあたりしぼつてゐたと

ころを見てゐたせぬだらうが……」

「さうですか。」

少年はべつに失望もせずにあ僕が飲みませうと言つて、コップを口のところへ持つて行き、半分づつ二た呼吸で飲んでしまつた。初めてこの少年らしい野蠻さがわたしの目に留つた。かれはそのコップを古い板戸を開けて勝手へはこび、又ひよつこりと出て来た。そして山羊の毛をなでてゐる——そのとき庭の方へこの少年とは二つくらゐ年下の、眼の大きいたけの低い少年がふらりと出て来た。やはり近眼鏡をかけてゐる。その鐵ぶちがなほ眼を一そくろくろと陰氣さうな顔つきにして見せた。

「あれが弟です。」

わたしは兄に劣らず陰氣だと思つた。弟の方はいくらか淺ぐろいせぬもあつた。こちらを見ると慣れない小鳥のやうにすぐ家の中に這入つてしまつた。椅子はからになり、古い縁側に新聞紙が擴げられたまま、座敷との境目にあつた。庭も荒れたままであつたが、垣にそつた鶏頭のとさかが美しく冴えて見えた。古い家ばかりではない、樹の茂り合つたところや家の中が暗くなつて見えるのや、それらが何か落葉としてゐた。もと日本橋に店をもつてゐたわたしの國の町の有名な老舗とも取引があつたが、母の死後、商業の方がうまく行かなくなつて、この郊外で山羊を飼つてみたが、犬にとられ

てからもう何もする元氣が父にはないらしいと言つた。その山羊も遠い知己に欺されて買つたのだとも言ひそへた。

一一

「ゆりえさん、はばかりさまお茶です。」

栗島は二階からいつも女のひとをかう呼んだ。階下でははいと答へるのがあいと返辭するやうにも思へた。

「つまり君の藝術のなかにある詩は賛成だが、あんな官能的なことはいかんよ。」

「君は君子だからね。」

栗島は微笑つて、「べつに君子ではないんだが、僕は君のあいふ種類の作品はきらひだよ。」さう言つて、「つまりだねものの健全さが缺けてゐる點ではですね。」

栗島は人に教へる形を壓さうとする。わたしは頭を振つて「君の言ふところは分るよ、もう澤山。」

と言つた。

栗島の机の上はいつも原稿で散らばり、一向仕事が抄取り兼ねるらしかつた。かれは幾晩も徹夜したあげく、瘡せやつれた髪の長い顔を机の上に置いて、絶え間もない客と應酬してゐた。若い客ばかりであつた。かれはさういふ客に自分の思ふところを説明し、そのためにも疲れてゐた。自分でもそれに氣附いてゐるらしいが矢張り遅々としてすすまなかつた。

「昨夜は非常によい月夜だったので、夜中にふと目をさまして見ると、雨戸が一枚明いてゐるぢやないか？ 變だと思ふとそこから射した月あかりが縁側を越えて、障子の下の棧へまでとどいてゐるんだ、あ、いい月夜だとすこし寢ぼけ眼をこすつてゐると、その月あかりが突然すうと消えた、眼のせゐでないと思ふとこんどは吃驚してしまつた。」

「たしかに雨戸は閉めて置いた筈なのに、それが開けられてゐるからいよいよ變だと思つて、そつと床から起き直り、こんどは障子をすこしづつ開けてそつと外を覗いて見たのだ。庭にも縁側にもべつに人がけはない——起きて縁側へ出てみたがべつにどろぼうらしい影もなかつたのだ。ただ非常によい月夜だつた。」

「しかし變ぢやないか、そんな夜中にももの影がするなんてね。」

「それから縁側をしらべると足痕があつたりして、裏木戸が開いてゐたところから見ると、僕の目をさましたときに何んにもない家だとあきらめたららしいんだね。ただ、僕のふだん着が四疊にあつたものだからそれは盗られたがね。こんな家へ這入るなんて餘程とぼけてゐるね。」

栗島はさういふと聲を出して笑つたが、飾り一つない階下の茶の間に射す月あかりがわたしには興深く覺えた、障子をあけて外を覗いてゐる栗島も目に見えるやうだつた。

「それにこんど庭のところへ鶏頭を植ゑようと思つてね、鶏頭は一度植ゑたことがあるから大丈夫つくだらうと思ふがね。」

栗島にしては面白いことを言ふと思つてゐると、しばらくして、わたしの顔をのぞき込みながら言つた。

「感覚や神経末梢の藝術は世道人心を毒するね。そりや君の場合には美はあるが、しかしあれでは困るね、これからあとが恐ろしいから——。」

「また始まつたな、その話はよさう、僕は氣の向くままに仕事をしてゐるんだから、君からどう言はれたつて直りやうはないんだ。」

「いや、それが君の場合には、他の君のやうな頹廢的な傾向のある作者の場合には、僕の考へをもつとはつきりと言つて置きたいと思ふのだ。自然主義的系統を引いた作は當然もう亡びてもいいんだし、一方さういふ作であやまれる人生があるとしたら……。」

わたしは何時も睡眠不足らしい赤い眼をしてゐる栗島が、こんな問題をどこまでも渠らしい眞摯さで押し通す根氣には呆れたが、何時も聞くことなので微笑ひ出して、頭をふつて見せた。

「僕はそんな議論はきらひなことは君も知つてゐるぢやないか。」

にありがたいが、議論は議論として押し進まなければならぬから！」

栗島のさういふ片頑な、自分でも好きな論戦にどこまでも身を投じようとする心持ちは分るが、しかしそれにも増して著しい疲労がわたしには氣の毒であつた。どうかすると失笑しかねないからかひ半分の對手の間にぎゆぎゆ壓されてゐる栗島の、その一番あとに受け取るものはかばかしい失笑くらゐであることが能くわたしには分つてゐた。戯談を言ふことを知らない固苦しい人物、——その議論の中にゆとりのない眞面目一本の綱渡りは、危氣ばかりではらはらした。それ故、かれが何か言ひ出すとまた今夜もみんなから遣り込められるのかと、ひと事に心が掻きむしられ寂しかつた。さういふ歸途には同じい郊外への道のあるきながら、わたしは今もなほ栗島が議論の餘憤をもつてゐるかどうかは知らなかつたが、一種の、疲労以上の疲労で、ぐつたりしてゐるのに氣附いた。

「あんなところで議論なんぞ止したらいいぢやないか、それが君がたしかに言ひ伏せたつて高が知れてゐる對手ぢやないか、僕は聞いてゐると腹が立つた。」

「あれが僕のくせなんだよ、それに僕には戰闘的精神がいつも湧き立つてゐるんだよ。さういふ精神の命令では黙つていられないんだ。しかし君のいふところは分るよ、君がああ言

「さうさう君は議論はきらひな方だつたな。ぢや止さう。」

栗島は又けろりと忘れてしまつたやうに黙り込んだ。どういふ會合に出ても、栗島は何時の間にか議論の渦の中に巻き込まれ、對手かまはず挑戦するのが常であつた。かれは一種の保守主義で同時に人生派であり、道徳的であつた。かれはかれの思想を表現する時に何故か吃りのやうな、廻り諒い表現をしたために若い人々から彌次られることがあり、何となくまた栗島の議論かと言ふ好意のある併し狡猾なからかひ氣分を人々から持たれることがあつた。左ういふときの彼は益益眞面目な熱情で片つ端から當つてゆくが、却つてそれさへ冷笑のうち何の影響もなく吹き出されてしまふことがあつた。さういふときの栗島の疲れた顔にやきもきした焦燥がいたいたしく浮んでゐるのを、わたしは心づらく眺めた。或る詩人の會合でも同様にみんなから遣り込められてゐるのが、見るに見兼ねる氣にならせた。へいぜい黙つてゐるわたしもついで、

「そんなに一時に君たちが寄つてたかつて栗島にあたるのはよくないぢやないか、第一考へてゐる暇もないぢやないか？」

左う言つて四方の論客を對手取つたかれに同情したが、栗島は平氣で手をふつてわたしを遮つた。

「いや諸君の言ふことはよく分つてゐるんだから、君はもう少し聞いてくれたまへ。僕は君のさう言つてくれるのは非常

つてくれたことは嬉しかつたよ。しかしだね、ああいふ君の好意にすら僕はつい戰闘したくなるんだよ。」

「さうか、さうなら勝手にしたまへ。」

「君はおこつたのか。」

「いやべつに怒らない。だが僕はあんなときの君を一口に言へばいぢらしくなるんだ。僕は議論はできないが黙つて聞いてゐられる議論と、又、聞いてゐられないそれとがあるものだ。君の場合はいつても僕をやきもきさせる、しまひに君がにくらしくなることがあるよ。」

「それは分るね、さういふ一種の友情はよく分るが、しかしそんな友情以外の精神も存在してゐるし、それをどんどん發展させることも必要だし……。」

「何を言つても君はその調子だ。」

わたしは栗島がどういふ時でも知らず知らず議論めいてくるのに、いまさららしく溜息をつくやうな氣がした。しかも栗島は何時でも疲れてゐないことはない。机の上にはじりじり汗やあぶらを掻く原稿紙が、かれの蒼白い顔を映してゐるやうで無氣味な氣がした。

「仕事はどうか？」

「一向進まない。客が多すぎるんだ。それに僕のところへ来る客は一日坐つてゐるんだからな。」

「歸つて貰へばいいぢやないか。」

「それがね、つい話し込んでしまふんだ。」
一週間前に来たときの、何かの論文がまだ二三枚しか進んでなかつた。締切のあとの次の締切まで待つて貰つて、それを一週間も過ぎてしまはないと、栗島の原稿は書き上らなかつた。かれはその間どう蒼白く歪んだ顔付で、絶えずそれに氣を奪られながら、自分でもふしぎさうに、むしろ、わたしなどには呆れ返るほど暢氣な嘆息をすることがあつた。
「どうして僕は書けないんだらう、しかし徹夜さへすれば決つと書けるんだ。」

三二

或晩、栗島はいつもとは違つた昂奮した顔附で、わたしが部屋へ通つたとき机の前へ坐つて、わたしの顔を見ると物としたやうな顔つきをした。かれは原稿も書いてないらしく、煙草のけむりが部屋のなかを綱でも張つたやうにぼうとさせてゐた。何か考へつめたやうな眼はいつも優しげに瞬いてゐるのだが、けふは角々しく昂奮してゐた。
「書いてゐるのか。」

「いや書いてはゐない——」

かれはかういふと何か考へつめてゐることを、わたしが這入つて来て中斷されたので、その考へのを追つてゐるやうな眼附で、そのためにか落着かない臆々してゐるところが

あつた。

「すこし何時もとは違つてゐるぢやないか。何かあつたのかね。」

栗島は凝乎とわたしの眼の中を覗き込んで、溜息のやうなものを一つ吐いて、「さういうふうに見えるかね。」と摺えたやうな聲音で言つた。

「いつもより變だよ。」

栗島はさういふわたしを又しても氣味わるく見詰めかへすと、喉ちんこをぐつくり下の方へ落した。氣味のわるい一瞬間であつた。さういふ氣はひはわたくしの心をいち早く莊重にしてしまつた。わたしにも呼吸苦しい何者かが宿り込んで、息づかひを小刻みにさせ、妙に胸の處を壓しつけた。こんな氣もちは栗島と會つて初めて感じるもので、かれが何時もより異常に硬ばつてゐる事を感じた。夜は晩かつたせゐか、この二階が靜かさに冴え返つてゐた。

「煙草を飲みたまへ。」

わたたくしは煙草の袋を机の上に置いた。かれの紙巻はもう一本もなかつた。

「ありがたう。」

かれは紙巻を黙つてふかした。そのあげくに、ふと思はずにたりと微笑つて見せ、そして續けさまに顔を赤らめながら大きな聲で笑ひ出した。わたしは吃驚してかれの顔を覗き見

たが、言ひやうのない昏亂と羞恥に似た或る感情が一時にそのときの栗島の顔一杯に上つた。そして笑ひが、途中で吹き消されてしまつたやうに止まると、かれは取り直したやうに眞面目な、むしろ氣難しい顔容をした。

「君がこの間僕が議論をしてゐたときに僕に止めろと言つたね。あの心持は僕には大へん嬉しい氣がした。君の心もちが見えるやうでね。」

わたしは再びかれの顔を見ながら、この男は何を言ひ出すのかと思つた。

「君がみんなを論敵にして鳥渡待つて下さいと兩手で制するのを見ると、まんまと對手に釣られてゐるやうな氣がしたからなんだよ。なぜ今になつてそんなことを言ひ出すのだ。」

「ちよいと思ひ出したものだからね。」

栗島はまた黙り込んでしまつた。
わたしは煙草をふかしてゐながら心に落ちてくる或る想念を拂ひのけられずにゐた。それは正確に近い想念であつた。わたしは、それに間違ひがなければむしろ微笑をさへ漏らし兼ねない氣がした。かれが先刻突然笑ひ上つたのが必然に少しくらゐ病的に笑つたのかも知れないと思つた。かれはわたしが室へ這入つたときよりずつと落着いては來たが、特異な昂奮はまだ鎮まらないで、その蒼白い額の上を去來してゐた。

「僕はよく人からお人善しだと言はれるが、決してお人善しぢやないね。むしろ人の悪い方かも知れない。」

「君にはぬけたところがあるのでそれがお人善しに見せるのだらうね。しかし君は悪黨めいたことを計畫してやれる人物ぢやないな。」

栗島はあたりを眺め廻して、聲をひそめ、むしろわたしにでなく、誰か他の人物にでも言ひ聞かすやうな低い聲で言つた。「僕はそんな世間で言ふやうなお人善しぢやないんだよ。」
「だが悪いすれつからしの人間ではないよ。君は徳をもつてゐるからね。」

「徳を！」

かれはにはかに正直者のやうに眞赤になつてしまつた。それがあまり突然であつたため寧ろどきまきしてゐるやうだつた。しかしそんな徳をもつてゐるやうな氣がしないのだ。それよりもつと僕は悪い人間なんだ。ひとを欺くことすら往々あるんだからね。さう言ふと、口を結んで何か口惜しいことでもあるやうなえがらつばい表情をしてわたしをぬすみ見

た。
そしてかれは急に何か新しい思ひつきを浮べたやうに、しかしお人善しなところもあるんだ、これは君、書いてはいけないよ、こんな話があるんだ。栗島は急に考へ出した事からのために、ひどく愉快さうな顔貌になりながら話し出した。

「或る婦人だがね、僕はよくその家へあそびに行つてゐるうちに、その婦人を考へるやうになつたわけだ。ところが或る月のいい晩にその女が何かきふに巫山戯たかつたのだらう、乳母車の中へ這入り込んで、それを僕に押しつけてくれと言ふのだ。庭のひろい家で、芝生には露が下りてゐる。しかも家人は寝んでしまつて誰もゐないのだ。僕はべつに何も考へないで乳母車を押しながらゐた。それこそその女がどういふ氣もちで僕にそんな役目を言ひ附けたか知らないが、月あかりのする庭を車を押しながら歩いてゐるうちに、何度もこれは馬鹿々々しいこつたと思ひついたが、それよりも左ういふ命令を恭々しく奉じるといふことが、そんなに不愉快でなかつたから、僕はそのとほりにした。」

「そのうち庭を三度くらゐ、——ちやうど花壇をとりまいた小徑を廻つてゐるうち、いいお月さまですわといふ女の言葉を聞いたきり、あとは二人とも黙つてゐた。あんまり黙つてゐるのでよく氣をつけてゐると女はすこし俯向きに、あごを前襟のところに食つつけたままやすやすと眠こんでしまつてゐるぢやないか。起すこともできず停めて居れば蚊が群れてくるし、しかたなしに同じい道をぐるぐる廻りをした。迅く動かせば乳母車のことだから揺れるし、そこらにある礫にまで注意深くして十二時近くまで同じことを繰り返した。しまひには涼しい風に打たれてゐると僕自身さへ睡くなつてしま

つて、車を押しながら居睡をした。僕もなかなかお人善しぢやないか。」

これはいかにも栗島らしいことだと月あかりの、女のねむつてゐる乳母車を押ししてゐる姿が目に見えるやうであつた。さういふ高びしやな氣持で栗島と話してゐる女の心が、にがにがしくわたしの心にうつり、それを知つてゐながら通つてゐた栗島の心を笑へなかつた。

「それからどうしたのだ。」

「夜露が毒だからと言つて女を起した。女はまあわたし睡こんでしまつたのね、すつと引いてゐてくださったのと言つて乳母車から下りたが、僕はいろいろな混み入つた感情からわざと黙つてゐた。女はさすがに氣の毒がつてこんどは僕に乗つてみないかと言つたが、僕はそれを斷つてやつと妙に物佗びしい悲哀を感じた。そんなときの女のお愛想らしい心持が目にして透いてみえるだけ自分をあさましく考へた。女はすぐわたしを送つて家へ這入つたが、變に月のあかるいのでが身にしてみてもまだに忘れられないのであるのだ。」

栗島は珍らしく眼をほそめてゆつくり話をしたが、妙に硬張つた顔色が沈み込んでなほ固苦しく泣いてゐるやうに思はれた。「いまとくらべると今の方が悪くなつてゐる。あんな氣もちではあれきりで無くなつてしまふのだらう。」栗島はさう言ふと何やら昏迷してゐるらしい考へに操られながら、むんず

りと黙つて了つた。たまに私の顔を見ても何も言ふことがないやうな空つぽな表情をしたが、瞬間的に何かちくちく刺戟されてゐる感はしい或る想念をどういふふうに現していいかと云ふことに、尠からず迷つてゐるらしかつた。のどちんこが落ちたり、又、上つたりした。その氣持は先刻室へ這入つて來たとき感じたそれを、なほ、一層事新しげにわたしの心内に喘へがせた。友だち同士がやあと聲をかけ合つたときから、その次に言ひ出すまでの變な呼吸織ぎの吃つたやうな氣もちを、もつと憂鬱にしたそれが栗島とわたしとの上に覆ひかかつて、身動きすらとれないまでに凍え上つてゐることに氣つき、それがどこから來てゐるか云ふことを苦しげに栗島から反射されてゐた。夜は更けて寒さが破壁とまだ張りかへてない障子のそとまで陰氣にした。

「その女はそれから後どうしたのだ。」

「それきり或る事情があつて逢はないのである。」

栗島は何か言ひ出さうとしながら急に思ひついたやうに、黙りこんだ。わたしはやや退屈な氣もちですぐ頭の上にある腰高障子を開け、人家の暗い屋根の上を眺めた。

「木村君。」

栗島はさう呼びかけた。私はふり向いて彼の顔を見た。そのとき栗島は先刻からとは一層緊張した色をかべて、非常な眞面目な、むしろ憂鬱な暗いやうな聲音で突然に言つた。

「女といふものは深い谷間のやうなものぢやないか？」

「さあ、——」

わたしは何故かれがこんな事を言ひ出すのか分らなかつたが、かれの言ふところの、深い谷間といふ言葉が何か知ら女といふものを穿つてゐるやうに思つた。

「さう、そんなふうにも見えるね。」

栗島は低いこゑで、同じことをもつと壯重な面持でくりかへした。

「何か知らかうふしきな谷間のやうなものさ！」

かれは左ういふと初めてにこりと微笑つたが、言ひあらはし得た會心の微笑みのやうでもあつた。かれは先刻からこれだけのことを言ひ表はすためにあんなに陰氣くさく考へ込んでゐたのであらうか、——かれは今やつとこの言葉を思ひついたので違ひない、そしてかれはむしろ先刻から見ると爽乎とした洗面のあとのやうにらくらくした顔になつてゐる……しかしまた言葉の絶えた次ぎの刹那には焦々した或るもどかしい氣分に驅られてゐることを感じた。それは先刻からとは別ないら立たしさであるらしかつた。深い谷間——かう心に浮べて考へてみるとわたくしは眼前にえも云はれず深淵なものを感じた。女ばかりではない、人生のうちから暗簾したものがかげに、暗い、削り落された谷間を目にえがいた。やぐさな、取り得のないわたしの想像はその谷間の底をとぼと

ぼ迫る何ものかを、わたし自身のやうなものや、或ひは栗島自身のやうなものや、また、他の様々の人間やが非常に暗示的な姿をして歩いてゐるのを見た。

君はなぜそんなことを言ひ出すかが判りかねるが……併しその谷間つて奴は目を閉ぢて考へると恐ろしく象徴的でもあり、劇的の場面のやうでもあるね。」

暗色の幕がそれから吊られてゐる、そしてそこに表はれるものは何か人間以外の、それでゐて人間に近い何ものかが算用数字のやうにぼつりぼつりと浮いてゆく、蟲の繭が點々としてつづいてゆくやう……

「僕は卒然と考へついただけだよ。他に理由はない——。」

「さうか、僕は何か君が話をもつてゐさうに思はれるのだ。」

栗島は再び暗然とした。
窓の外はくろくろく煤の埋まりだつた。それに手を出して掻き廻してみたら、手はたちまちに黒ずんで染まりさうであつた。谷間はますます深くそして底知れない濕潤のある空気を冷やしてゐるやうであつた。ふと見たとき机の上に栗島の疲れたかほが、そしてわたしの視界をさへぎる何かがあつた。

わたしは四角な窓を隔れた。

「君は結城を知つてゐるね、あの男が昨日ひよつこり訪ねて来た。」

が一つ空いてゐたといふことは迂濶なことだ。」

かれはこんな風に嗟嘆した。

わたしは栗島がわたしへ氣を兼ねてゐるらしい結城の來訪を、ことなげに氣にかけないやうな調子で言つた。

「あの男にもう四五年経つたら會つてもいいと思ふよ、あの男が僕のことなんぞ氣にかけなくなつた時分にはね。それとも一生會はないかも知れないが、とにかくむかしの友達といふものはむかしからの持ちくされの感情で行き合ふのは、いろいろの場合考へものだよ。」

栗島はうなづいて見せた。わたしは又つづけた。

「もしそんな古くさい感情で行き合つたら折角のものも打ちこはしき！僕はあの男ばかりではなくむかしの友達にあひたくないんだ。友だちはどうかすると僕のやうな何時もひとりであるものには、だんだん要らなくなる。ほんの、三人か四人くらいあればいいんだ。」

わたしはたち上つてかへりかけた。

栗島は何度も止めた。結城の話が出たので君はへんに不愉快になつたのではないかとみられるらしい優しい心を窺かしながら言つた。それもあつたが然しもうかへりたくなくなつたのだとわたしは不思議にいまは平靜になつたかれの顔を見詰めた。かれは平常のやうなお人善しの眼差しのうちからわたしのいくらか不安さうな顔を見た。

わたしの心は一轉して或る不愉快なものに閉された。

「結城新之助か？知つてゐる。」

「この近くに越して來てゐるんだ。君とは仲だがひしてゐるやうだが、相渝らず悪とう振つてゐるよ、善人のくせに！」

「ふう！あれも善人か？」

わたくしは身近く迫まつてゐるこの文學的な紳士が、遅かれ町で行きあふか、あるひは栗島の部屋で會ふかすることは最大の不幸であると考へた。とるに足らないわたしの文學的名譽の不健康な状態にさへ、古い文學的紳士等は何かに事づけてわたしに當つた。かれらのあるものは熱心な數日間の葉書をわたしのところに投書して、わたしの古い身上を洗ひ立てるか、あるひはその卓絶な批評をわたしの上に馬乗りになつてやつつた。わたしはそのたびに苦笑をした。

苦笑することの勉強はわたしを一段にすうすうしく不死身のやうにしびれさせた。

結城新之助——かれは詩人で聰明で當然小説をも世に示すに足るべき紳士であつた。かれとわたしとの文學的マラソンは、まだどちらにも決勝點がつかない、にも拘はらずこの紳士は忌々しく、又、腹立たしく時々つぶやいた。

「あゝ、あの馬鹿野郎が假りにも筆硯で世に立つてゐるといふことは、何といふ世の移り變りであらう、まだ完全に日本の文字さへろくろくしりもしない彼の馬鹿野郎を預かる椅子

「ゆり枝さん、お客さまおかへり！」

と、梯子段の途中で、かれは極めてしぜんに出たやうな聲音で言つた。うたたねしてゐたのか、まばゆい眼付でゆり枝さんが例のあまたたきで、あいさつの手を白く古疊の上についた。

そとは蟲聲で一杯であつた。あたまの奥が疲れて蟲の聲が痛かつた。

四

少年は貳木と云つた。狭い玄關に寄宿するやうになつてから、貳木は終日机の上で何かを書きつづけて、原稿紙を裏かへしに使用してまで書いてゐた。かれはからだか弱いせゐか何處か老人のやうに蹠み込んでゐた。或る時、かれはひどく胃を悪くしたあとで、ひよろひよろしながら電車をわたしと一しよに歩いてゐたが、そのとき何處からか白い一疋のこれもひよろひよろした小犬が危ない足どりで電車をよこぎらうとしたが、ふと忘れ物を思ひ出したやうに自分の歩いて來た方へ戻り出した。そのあとへ猛然と長い橙々色の電車の胴が過ぎて行つた。

「まるで僕みたいな犬ですね。」

彼の言葉どほりの弱々しい小犬は、手帕の吹かれてゆくやうに町角の雜貨店から反對の通りに匿れた。うまくいひあて

たものだと思つた。

「それはうまく言ひ當てたものだね。」

貳木はれいの空の方へ顔を向け、高慢な顔附でしかたなしに微笑つて見せた。ひよろひよろした胴の長い貳木は、このごろ買ひ求めた新しい籐の洋杖を一つからんと地べたに敲いて歩き出した。——れいの山羊を飼つてゐる父の家を出たがつてゐた貳木は、たうとう、わたしの家へ来たが父なる人は矢張りそれには苦情を言はないで好きにするがいいと言つて、好きな酒をのんでゐた。朝からでも一人でちやんと坐つてちびちび飲んでゐるらしく、山羊はすぐ近くにある山羊舎へ賣り飛ばしてしまつたらしかつた。僅ばかりの有金を使ひ減らしてゆく貳木の父は、べつに小言はいはなかつたが、自然貳木をゐにくくした。弟は電話局につとめてゐた。

或る夕方であつた。貳木は門の前を通つてゆく古い二重廻しを來た老人を指さして、こころで、

「あれが親父です。」

さう子供らしくわたしに言つた。

この老人ならよく見る……いつも古マントの下から酒徳利を下げてゆくひとだ、これが貳木の父親かと思つた。頑固さうな、しかし健康な鹿のやうな足をもつた老人だと思つた。弟の月給も一文もとらない、そのかはり何も關つてやらないことは貳木同様であつた。何んでも自分の食事のことも姉

には失笑したがお互ひ顔を合しても直ぐ眼をそらしてしまふほどだから、貳木からみたらわたしはひるまの蒼白いゆうれいであつたかも知れないと思つた。

「君、かきおきなんてをかしいぢやないか。僕のうちにゐてかきおきをする譯がないぢやないか。」

あるとき貳木は遺書といふ原稿をかいで、自分の病弱であることや、仕事からくる厭世観などをかいて月日まで認めたものを机の上に持つてゐた。そしてその氣もちはよく少年時代には持つ厭世観だと思つて分つてはゐたが、わたしは一應問ひ糺した。

「いや、ちよつと書いてみただけです。」

かれは恚ういふと、少しづつ、青年になるらしい皮膚の厚さを見せて、頬を赤くした。しまつたといふ顔いろであつた。

「厭なことを書くぢやないか？」

貳木はきまりわるくになが笑ひをしてその原稿をくしやくしやにしてしまつた。そして庭へ出るとツイと顔をそらに向け何やら悲しさをした。少年のをりに苦しんだわたしでありその心もちが見えてくると、何の理由もなく黙つて不機嫌にしてゐた一週間が家族へも又貳木へ、氣をかねるやうな心もちを感じて、

「君ちよつと外を歩かうか——」

さう言つて誘ひ出すのであるが、戯談や坐山戯る事や子供

がゐなくなつてから一人で濟してゐた。そして少しづつの酒を飲んでゐるらしかつた。どうしてあんな金があるのか分らないと言つた。

貳木はわたしのゐない日の食卓に、おひるの残りのお菜がついてゐたりすると、箸の先きでつうと小皿を卓のまん中へ迂らしてしまつて、それを食べようとしなないで氣むづかしい顔をした。女中が黙つてその代りのものを持つてゆかないでゐると、つけもので涼しい顔をして食べて濟した。わたしは卵の黄味ばかりを食べてゐるせゐか、

「白みをぬいておあげしませうか？」

さう女中がたづねにゆくと、かれは昂然として、

「黄味ばかりにしてくれたまへ。」

かれは機嫌のいいとき、あるとき女中に僕はすこし他の人間と變つてゐるんだからと言つて、故もなく脅かした。かれは終日絶え間もなく書きつづめてゐた。わたしの機嫌のわるい日が一週間つづくと、かれもその一週間で黙つて一軒の家で暮すせゐるか、蒼白く病的な額をして机のところを離れなかつた。もとよりわたしは一言も口をきかない。かれも黙つてくらしした。かれはさういふときに書きちらしたのか、机の上の原稿紙にはゆうれいといふ詩を書いて、かれの身邊にそのゆうれいが追うてゐるありさまを描いてゐた。わたしはそれ

らしきの失はれてゐる貳木は、冷たく美しい顔を凍えさせるやうに凝平とさせてゐた。が、たまにはわたしは鶏頭が好きなこと、その花が貳木の家にあること、親父が鶏頭一本をも中々機嫌のわるいときには呉れない事を苦にして、そして、

「今夜にでも鶏頭を取つて來ませうか。」

と言ふことがあつた。

「しかしあとで知れたら却つておとうさんに濟まないぢやないか。」

「いや關はないんです。」

かれはかう言つて、鶏頭を夜おそく取つてくることがあつた。人に氣を利かすことを知らない粗ではあるがぼんやりさんのかれは、また、物に大様なところがあつた。メリヤスの襦袢や足袋、着古しの浴衣はねぢ狂げてゴミ箱のなかへ棄ててしまつて顧みなかつた。それも換け代へのないものでも一切かまはずに棄てた。

「君にはものをいたはる氣もちがない。もつと年をとると分るが、しかしよく考へてみないか？」

貳木はしかし頑固に、「あれはもう着られはしないのです。」さう言つて自分のものを自分で處分するにふしぎはないといふやうな顔容をした。それはわかる、わかるがよく考へてみないかともう一度わたしは口へ出して言ひ出す親切氣はあつても、言ひあらはすことが厭なやうな氣がした。

「さうか、折角棄てたまへ。」
 貳木はしかしすこしも書くことを止めなかつた。すこしの暇をさへ偷んでは細かい神経質な文字をならべてゐた。小さな魂が絶えず日々試練されてゐるやうで、それがこれまで静かであつた家の中に何か一點刺戟をふくんで感じられた。わたしが忙しい仕事に趁はれてゐればあるほど、かれも亦わたしに負けずに書いてゐるやうで、目まぐるしかつた。自分がかくことが厭なときに貳木のかいてゐるのを見ると、一層疲れるやうな氣がした。だがその小さい魂には手應へがあつた。わたしは何度もあいつ時分のことを思ひ出した。そしてわたしはわたしの机の上で、書き書いてみるといふやうな氣がした。いつか貳木の原稿をよそへ紹介したときにその編輯者から返辭さへこなかつたので、それ以來、わたしは紹介はしなかつた。それ故、かれは一人で出掛けた。それがよいとわたしも言つてゐたが、原稿はよく戻されて来て、それを待つてゐるかれが例のいが笑ひをして、悄々としてわたしの部屋へ這入つて来た。

「また戻つて来ましたよ。」

「さうか、ちよつと見せたまへ。」

ひととほり書いてゐるが、無名ではだめだらうと思へるものであつた。が、どう言つていいか分らずに、「こんな事くらゐはしよつちうあるもんだよ。」とわたしは成るべくかれ

が樂々とこの問題を取扱ふやうな調子で言つた。

「また書いてみるさ。」

かれは黙つて部屋へ引き返さうとした。それをわざわざ呼び止めて、

「此間春木と一しよに芝の方へ行つたときに、みんなの詩を出すとき君のも出す口約束をして置いたから書いてみるんだな。」

「あの雑誌ならいいですね。」

かれはすぐ元氣づいて部屋へ行つた。

口約束、そんなものが的になるものかとわたしは自分自身で左う思つた。次ぎの部屋で小さな文學的紳士がせつせとペンを走らせてゐる氣はひがしてゐる。結果さへ人間の氣まぐれで運命を右ひだりにする……紳士は何にもしらずにかいてゐる。弓づるを張つてゐるやうな心が見えなかつて仕方のないことである。わたしの運命さへそれであつた。わたしは仕方なしに又かれを呼んで言つた。

「いま言つたこともそれは氣まぐれな編輯者のことだから、一概に信じてしまつてはこまるがね。」

わたしは書けば書くほどらうそくのやうに細々と痩せてゆくことを、貳木の上と感じ、その凄さまじい魂を次第に好意をもつて眺めた。そしてかれの書いたものが年少ではあるが、既に書き過ぎて疲れてゐるやうなところを折々かれの書

きものの中に見た。人間は一生のうちに三度くらゐ文章の底が抜けて行つて良くなるものであるが、かれはまだその底が一度も抜けずに、もう書き疲れ書き荒れてゐるのはどうしたことであらう。かれ自身よく書けないときには、不機嫌に黙り込んで、れいの高慢な顔つきでつんと空の方を向いて、さも頭がくさくさするやうに門の前へ出たりした。

「どうだい機嫌はいいかい。」

わたしは氣まぐれに左う言つて此の年少の紳士に聲をかけるのであつたが、かれは明らかに不機嫌らしい、蒼白い顔をれいに依つて上へ向けながら言つた。

「あまりよくありませんね。」

と左う言つた。

五

ひと睡りしたあとで表の戸を叩くものがあつたが、その音はどろどろに濁つた故意に叩いてゐるらしい烈しい音であつた。いまごろ誰が来たのだらうと思つた。

「誰か戸を叩いてゐますね。」

女はさう言つて耳を立てた。どなたですかと左う言つて床の上に置きなほつたときに、表のぬしは尖つたこゑで、

「おれだよ、分るだらうおれだよ。」

さういふ聲に聞き覚えはあつたが、いまごろ交際つてゐる

友だちの中で、夜中にわたしの家を叩く不屈者はゐない筈だと思つた。どうも思ひつかない。——時計をみると十二時に

十分前であつた。どなたでせうかねと女はおろおろ聲で言つた。わたしは玄關の障子を開け念のためにもう一度訊いて置く必要があると思つた。

「おれではよく分らないが名前を言つて貰ひたいですね。」

さう言ふと表のぬしは暫らくして、「おれだよ、左う太い濁つた聲で、あざ笑ひの中からその聲を絞り出した。わたしは呆然とした。同時に格子戸をがらりと開けた。軒燈のあかりのなかに酔ひどれた飲酒のあとに沁み出たあぶらの含んだ蒼白い顔を据ゑた結城新之助が、さも快よげにげらげら冷笑つて佇つてゐた。

「ふむ……」

同時にわたしのからだにあるだけの、十年前くらゐに持つてゐた痼癖と醜いごろつきのやうな感情が、泥波のやうにだくだくと腹の方から頭脳へ搔き上つて来た。その感情は十年振りに襲つて来たわたしには新しい感情の發作でもあつた。

「よく来た、だが何の用事だ？」

かれは玄關へ這入り込むと、その三尺縁に腰をおろし、わざとらしく落着き拂つて、「久し振りだ、座布団を出さないか？」さう眞顔で言つてへら晒ひを古めかしく絞り出し

た。そこでわたしはこの紳士をどういふふうで處分すべきかを考へた。これは外へ出す方がよいと思つた。
 「むだは止して外へ出て行つてくれないか？古くさいことは一切止しだよ。」
 「久しぶりぢやないか、左う言ふなよ、氣取つたつてだめだから——それより一杯交際はなにか。」
 「おいでたね。」
 わたしは左う言つてへどの出るほど笑つた。「よせ、夜中ぢやないか、ひるま堂々とやつて来て貰ひたいもんだ。何か僕に言分があればだね。」

かれはそこでそのにが笑ひと、低い聲音をしまひ込んでそして出来るだけ大聲でかれらしく吠え立てた。

「莫迦野郎！」

かれは自身眼舞ひでもしてゐるらしく、左う吠えるところから笑つた。そして又低い撫でるやうな聲で、ふふと唇と鼻の先で息をついて、二十圓ばかりでいいから貸せよ、おい貸せよ、と、何かゴム玉でそつと投げつけるやうに言つた。そして出来たらすぐ返すとしようぢやないか。左う言つてわたしの膝がしらを撫で廻すやうな顔附をした。わたしはその白い糞度胸とでも言ふやうな芝居じみたかれを立つたまま痺れるやうな氣もちで見据ゑた。

「そこで、僕がそれをまんまと出すと思つて來たのか、金

のことはどうでもいいなんて言ふ體采はきらひだよ、夜中にそんな相談がうまくまとまるなんて空想するのはすこし古い言草ぢやないか？」

「ぢや、できないと言ふのか、——」
 「おひと善しめ、もう出て行つてくれ。」
 わたしはくらくらした。指さきに何かを引裂いて棄てたやうな氣もちで、結城の肩さきをつかんだ。

「どうするおれを！」
 かれは脚氣にかかつてゐるらしく、よろよろした。この男に病氣があつた。

「なるほど！」
 わたしは再び、「ぢあ、きれいに出行つて貰はう、僕は夜中にくだらない問答を耐らなくなつた。」

さう言つてかれを出口へ押し出さうとしたが、かれはそのとき又新しく笑ひ出した。その笑ひ聲は表にまだ誰かがあるらしげに見えた。するとまだ連中があるのだなと、卑怯ものといふ感じがした。

「同勢をつくつて來たな。」
 わたしは何か先刻から何羽かの小鳥の首を振ち切つてでもあて、その餘憤をからだぢうに燃えつくしてゐるやうな殺伐な氣もちになつてしまつた。しかもかれが同勢をつくつて來たことが忌々しく憎まれた。

「誰もゐはしないよ、出るな。」

かれはその本體を見られたくないのか、わたしの袖を取つて止めた。わたしはどういふ人間がこの男と一しよになつてゐるかが見たかつた、そして不思議に結城なる人物よりも彼れと同勢になつてゐるものが憎惡的になつた。さういふ感情はむしろ珍らしい氣もちであつた。

わたしは表へ飛び出したとき、小路の角に二人の男がのつそりと立つてゐた。が、結城はそのときにはかに勢ひを得たもののやうに猛り立つて、その杖をふり上げでもするやうに身がまへ、

「叩いてしまへ。」と言つた。

わたしは初めて語音を切つた聲で、「ははは……」と嗤つた。わたくしは氣が狂れでもしたやうに何も彼もむちやくちやにしてふ氣がした。あちこちの長屋の雨戸を繰る音がし出した。わたしどもの聲があまり大きかつたからであつた。

「脚氣でも割引はしないぞ、近づいて來たら。」

こんなときに國言葉が出ようとは思はないほど、けだものがからだに荒れた。そのとき家の中から女が飛び出して、まんな中へ這入つたときに何故家にあてくれないんだらうと思つた。

「もう遅うございますから明日入らしつてくださいますし。」と言つた。

結城はせせら笑つた。そして奥さん、これですな、と左う

言つて、かれはかれ自身の胸元をその手で上げたり下げたりして見せた。それは恐らく心臓の鼓動を暗示したものにちがひなかつたらう、それがいかにもかれらしく悪どかつた。わたしは女を退けてかれにつきかかる氣にはならなかつた。女の出てきたとき一人前の自分が大人げなくわめき立てた淺猿しさをつくづく感じた。

「もう行け、目的はもう達せられたらうからな。」

わたしはかう言つて、かれが何かしらわたしだちを騒がせるために、最も都合のよい時を選んだのだと思つた。

「奥さん、この男は待合あそびもするらしいんですよ、ははは……」

かれは左う言ふと、酔のさめ切つた顔つきでとぼとぼ歩き出し、町の角にある二人の男と影を一しよに合せた。その影はいかにも酔のさめたものの倦い足もとであつた。わたしは腹立たしさをあまりに立てすぎたので、心は落莫としてゐた。

「なるほど。」

わたしはかう呟いてこの文學紳士が、その鬱積した氣もちに氣がついた。なぜ、あああいふ振曲つた心をもち合はせてゐるのだらう、だが、わたしはおかげで永い間不愉快であつた。そして考へつたことは、ただ古い友情がくされてど

ろどろ横はつてゐることであつた。こんなものがあつたために、それを辿つてかれはかれらしくぼんやり違つて来たものらしいと思つた。

夜が明けてから栗島をたづねると、かれはまだ床の中にあつた。そして何か物思ひだけにしてゐたが、わたしへの氣を兼ねてゐるらしく逡巡してゐた。わたしは直覺した。結城がわたしのところの歸へりに立寄つたものらしく思はれた。

「昨夜、結城が来たよ。」

わたしは栗島がやつと吻として、「君のところの歸へりに僕のところへも来た。」と又言つた。

「一人でかい。」

「いや、行平俊郎とも一人知らぬ男とだつたよ、そこで僕はなぜあの男が君をたづねたかを言つておいたよ。君には氣の毒なことだつたね。」

「僕はそのときこそ嚇としたが、古い友だちがああいふ形式以外では、訪ねて来られないものも感じたよ。あんな形式を取るその心根はいやだ。」

そのために妊娠中の女があまり烈しい争闘の中へ這入つたために、何か異常が起りはせぬかといふことをわたしは氣づかつた。わたしは悪いゆめのやうな光景をもう一度眼前に髣髴させた。

「僕はあの男が来たとき寢ようとしてゐたが、あの男が君に

興へたものは知らないが酔はさめてゐたらしい。」

「ふむ。」

蒼白い夜中に来た紳士は、栗島のすぐ近くのカフェでなほ飲酒したことを栗島は寂しさうに話した。行平俊郎まで一しよにあたことは不快であつた。「行平はかれと一しよにゐることを君に對して恥ぢてゐたよ、それを君に話してくれるなと言つてゐた。」

「行平俊郎がか？」

この丈の高い紳士はわたしの書齋に出入する正直もので、人に誘はれたら斷わり切れぬ男であつた。カフェからカフェを流れ歩く人物ではあつたが、亂次ないだけ抜けたところだらけの紳士であつた。かれが結城と一しよにあたことを恥ぢてゐたのは、何か一味の清純さを感じさせた。が、わたしは町角に立つてゐた人影のひとりを行平として考へるには、なほ充分な不愉快さがあつた。あの男のことだから漫然と一しよの卓で飲んだに違ひはなからう、ものの結果なぞ考へない男であるから——。

「とにかく結城はよくない——」

栗島は溜息をついて左う言つた。

「若しあのために、ああいふ氣分の劇動から女が流産でもしたらただ置けないやうな氣がする。そんなことのないやうにと思ふがね。」

「けさはどうだつた。」

「嘔氣はすると言つてゐたがね。」

わたしは依然仕事の進まないらしい栗島の机の上を見ると朝の間に長居は疲らせると思ひ立ち上つた。

「とにかく……」

栗島は適當なわたくしへの慰安の言葉をすぐ發見されないことを戻かしがつて、ちよつと苦笑したが、ひるすぎにでも話しに行かうと言つた。せひ来たまへと言つて別れた。

或る會合が果てたとき行平俊郎は酒氣をおびてゐたが、いきなりわたしだけ四五人が歸へらうとしたときに、かれは諸君ちよつと待ちたまへと叫んで、電話室へ馳け込んで、しばらくくすると一人で昂奮して飛び出して来たが、かれの顔は明らかに物好きに、そして騒ぎ立てることに夢中になつた混亂の表情が烈しく入り亂れた。

「諸君、しばらく待てと言つたら待て！」

かれは再びさう叫ぶと先刻電話で命じたらしい自動車がこの料理店の前で止まつた。行平はみんなに乗ることをすすめた。會合に集まつた紳士たちは當代の詩人であつた。かれらは屈托のない泰平な表情で、この感激しやすい二十五六の青年のやうな行平の昂奮を興味深く、頬笑みさへ浮べて眺めた。危惧なぞ一つもなかつた。あたかも行平俊郎が大金を懐中し

てゐるやうにさへ思はれた。でも中には君乗つてもいいのかねと嘯くものがあつた。

「一切引受けてゐる！ けちけちするな。」

かれは顔ぢゆうを眞赤に痙攣させ、異常な神経でがたがた震ひながら言つて、運轉手に行く先を命じた。或る繁華な大通りの裏にあたる名だたる待合であつた。自動車のドアが罐詰のふたを開けたときのやうな音で閉められると、行平は眼をすわらせ自動車の外の方を凝視してゐた。その横顔に既にいちぢるしい神経の疲勞があつた。そして黙りこくつてゐた。「大丈夫かね、君はまた妙に出すぎたことをして困りはしないかな。」

わたしはかれの耳もとへ左う嘯いたが、かれはふつと夢でもみてゐて、それが一としきりさめたやうにけりりとしたが、

「いや引受けた！」

車中の紳士はその何人も行平以上の収入をもつて居、また行平がどういふ氣まぐれからこんな突飛な夜行を思ひ立つたかと云ふことを、おぼろげに理解してゐた。しかし全部の理解をすることを退ぞけてゐた。そのためいくらか陰氣になり低いこゑで何か話し合つてゐた。

自動車は或る大きな支關をト廻りして、瀟洒な植込込み

に向いて横づけになつた。かれはわたしの袖を引いて、自動車の分だけわたしのむと言つた。わたしはそれを出した。女中が二人、中腰になつてみんなを迎へた。
「這入りたまへ！」かれはみんなに左ういふと、再びまた昂奮を新しくして、自動車の分は濟んだのだと左う女中に言つて、靴をぬいだ。女中は呆然として何か不平さうにしてゐたが頓着はしなかつた。

二階へ上るとかれは酒を呼んで、妓どもの名差をし、口早やにビールか酒か、何か食べものはいらぬかと一人でやきもきして、パットの長いパイプをかちかち前齒でならした。異常の昂奮でかれの全身がこまかく震へてゐるやうな、何かおこりにでも罹つてゐるやうに見えた。そしてかれは溫和な或る作家をつかまへ、ここは一流なんですよと言つた。

「ほう！ 一流ですか？」
溫和な詩人は二間打ち通しの大廣間と金屏風と、坐るときくらげのやうに鳴る座布団とを見廻した。そして白襖のかげからほつそりと次から次へと迂り出る、弱腰の、どきりとくる感じの美しい妓どもも珍らしくながめた。かれらは一様に典雅で落着いた物靜かさもつてゐた。唇さへ考へ考へ動かしてゐるやうな夜中の淑女たちであつた。

行平俊郎はこれらの凡ての妓どもと相識であるらしく、やあとか、しばらくとか、肥つたとか、瘡せたとか、目まぐる

かに仁王立ちになると、諸君、さう叫んだ。

「ライオンの眞似をして見せるからよく見てゐたまへ。」
かれは左ういふと、六尺に近いからだを四ツに這つて、美ごとな長髪をふり亂しながら、もの慵さうによたよた歩いて見せると、うをうををとうなり出し、そして座敷をあちらこちら歩いた。その感じにはライオンの逞しさがあつた。拍手のうちにかれは酒席に返つた。そして一杯引かけると疲れたらしい顔いろをしたが、それはいかにも彼らしい怒號のやうであつた。

「うをうををお……。」
と、かれは聲だけでも一度やつて見せ、妓どもに誰かおどつて見せよと言つた。妓どもはみんな辭退したが、そのうちの若い妓が二人、うたにつれて疊の上に手をついて踊つてしまふと、れいの、義太夫の先生がおどりを始めた。あちにもこちにも唄つた。みんな酔つてしまつた。しかし行平俊郎だけはしやんとした性根で、絶え間なく酒を命じ料理を言ひ附けただれだれを呼べと、しきりなしに喋つた。そのあげく物忘れしたやうに例の長いパイプを唾へがちがち鳴らした。
かれは或る一人の大きな妓どもの、胸の兩側にふくれてゐるものを指さしながらわざと言つた。
「それ何あに！」
「これ猫の子よ。」

しく言つて、一人で酒をぐいぐい飲んだ。かれのあごの骨が寂しく皮膚の上に形をあらはすほど、飲酒のためにやつれ込んで見えた。美しい妓どもたちは何か言つては、紳士たちの間へそれが勤めのやうに手ぎはよく晴々しく割り込んで、或るものは煙草をふかし始めた。一さいの光景は物しづかではあつたが、なまめかしく華やかであつた。紳士たちはいくらか茫然としてゐたがみんな落ちて着いて、茶化したり巫山戯けたりした。

「これは大事になつたね。」
溫和な散文詩家はしかし泰平な調子でわたしにささやいた。

「何しろ行平俊郎の宴だからね。なかなか大したものさ。」
わたしはそのうち最も勇敢である新進の或る詩人が、もうその得意な義太夫で満座の妓どもを呆然とさせてゐるのを、煙草のけむりの中に見た。ほどよく肥り細目のいい男であるかれは凡ての酒席の音頭取りであるごとく、今夜もまた最も素晴らしい人氣のうちに既う二三人の妓どもをそば近く坐らせ、よい喉で何かのさわりをうたつてゐた。それはもはや堂に入つてゐる調子であつた。行平俊郎はその優越ぶりをかれらしく無闇に喜んで、も一つ、も一つと叫んでやたらに拍手した。かれはむちやくちやくに騒ぎたかつたらしかつた。しまひにかれは憤然として怒つてゐるやうに唐突に座敷のまん

妓どもは左う言つて乳房のふくれてゐるのを、上の方からそつと撫でて見せた。白い一疋のふうわりとした猫の子、それを抱いてゐるやうに見えた。

「猫の子とは面白い、五十錢遣らう！」
行平は王者のやうに左ういふと鏘然として五十錢銀貨を卓の上に投げ出した。銀貨はきりきり舞をして大きな光つたからだを夜更けの電燈の下にかがやかせた。
「もう一疋あるわよ。」
妓どもは又左う言つて最う一つのふくれた方の乳房をぼつたりと手につかんで見せた。

「は！ もう一疋あつたのか——。」
れいの溫和な詩人は左う心からをかしさうに言つて笑ひかけた。みんなが大笑ひをした。しかしもう一疋の分の銀貨を出さうとするものがあなかつた。わたしは仕方なしにもう一疋の、欲張つた猫の子の分の銀貨をぼつちりと卓の上に置いた。そこで行平は嬉しさうに異體の分らない拍手を續けた。
散文詩家は不圖、何かを振顧つて見たやうに、「一體こんなことをしてゐていいのかね。なんだか後のたたりがありせんかと思ひますがね。對手が行平君ですからね。」
わたしは微笑ひながら言つた。「こりや願け前を出す氣でない、あとあとに間違ひが起り易いやうですね。」
が、行平俊郎はどうかすると、一座が白けかけようとする

と、それを盛り返す爲めに絶えず苦しい努力をつづけ、しまひに力盡きてしまつたやうに飯だ飯だと叫び出した。實際、もう電車はとつくになくなつてゐたし、海近い二階の障子のそとは秋冷えのうすら寒い空気に充たされてゐた。誰かがいまから飯を食つてどうするのだと言ふと、かれは頑として頭を振つて見せた。

「いや此處にはそれはそれは可愛いお握りができるんだ。白い象牙のやうな温かいのが……」

が、これまで黙つてゐた栗島は、もう我慢が出来なくなつたやうに、今まで匿れてゐた一座の隅からこれも夜更けらしい蒼褪めた顔をさし出して、行平を遮ぎつてそれは餘りだと言つた。

「もう引上げようぢやないか、かなり更けてゐるし、僕はもう御免だ。」

しかし行平はすぐ言ひ附けたらしく、全くそれはそれは可愛い、ちひちやいお握りがこんもり何かの白い盛り花のやうに出されたときは、みんな不思議な或る驚愕に均しい感情でそのお握りを凝視した。季節に早いほそぼそした大根が添えられてあつた。散文詩家は感服したやうに、その世にもいとしげなお握りを眺めながら言つた。

「なるほどね、こんなふうなお握りもあるもんだね。」

行平はそれを手掴みにして、これは何か天から降つて来た

やうなものだよ。」

さう言つてむしやむしや食べはじめた。妓どもたちもそれに手をつけた。時はづれの食事が一座に沈潜した或る想念を興へてゐるのか、或ひは氣難しげに黙つてゐる栗島が容易に話し出さない故か、妙な息づまりが完全に行き互つた。そして妓どもの一人が貰ひをもらつてかへりかけ、次の一人がまた去つたときには、とても動かしがたい寂寞に似た氣もちが流れ出した。その寂寞に抵抗しようとして企ててゐるらしい行平の意圖が、どうしたせゐるか妓ども一人が「藝者してゐる間は子供だよ！」さう叫んだ瞬間から一切が破れて了つた。

散文詩家はあくびをした。栗島が立つてわたしを呼んで、出ようぢやないかと、かすれた聲で言つた。

「かへらう。」

そのわたしの聲を合圖にみんなが立ちあがつた。行平もしかたなしに急に狼狽したやうに歸らうと言つた。行平の行きつけと見え、かれは金を拂はないで一しよに外へ出たが、行平は思ひ返してもう一度みんなに向つて、ちよつと待つてくれと言つた。そして待合へ這入つて行つたが永い間経つてから出てくると、いま自動車が、くるからと左う疲れた聲で言つた。

みんなは黙つて自動車を待つた。

間もなく深夜の街路を坦々として自動車が走り出した。途

中で一人二人降りてわたしと行平とが残つた。かれは過勞のために黙りこくつて、物憂さうに喉の乾いたやうな様子をしてゐた。そして水道の水を飲まうかと言ひ出した。上野廣小路の松坂屋の前で自動車を停め、水道の水をかれはがぶがぶ飲んだ。そして又自動車に乗り込んで、疲れたと言つて烈しく息をついた。

「みんなに分け前を取つてやれよ、今夜の分は？」

わたしは笑ひながら左ういふと、かれは意外にも眞面目な顔つきで、恬然として言つた。

「もちろん取つてやるつもりですよ。」

さう言つて恐ろしく憂鬱に考へ込んでしまつた。上野の林のなかをくぐりぬけ、蟲の音のながれる間を行つたとき、かれはもう一度かう言つた。

「取れるだらうか？」

さう言ふかれの酔はずつかり醒め切り、どこか寂しさうに膝がしらを撫でた。大丈夫だよ、みんなもその積りであるらしいんだよと言つた。が、實際はわたしとても知らなかつた。わたしは今明らかに後悔に似た氣もちで凝然と考へ込んでゐるかれが、再び先刻仁王立ちになつたライオンだとは思へさうもなかつた。

が、自動車が本郷動坂近くに來たときに、かれは窓先から町並みを眺めてゐたがにはかに元氣づいて言つた。

「まだ起きてゐるから最う一軒寄つて見よう！」

と言つた。

さう言へばブラジルといふカフェの硝子窓には、まだ、あかあかと電燈が點れてゐたのである。わたしは頭を振つた。

「もう晚い、よしたまへ。」

「ふうむ。」

かれは左う言つたきり再び元氣のなささうな顔つきに返つて、氣難しげにしてゐるわたしの顔を見ないやうにした。夜色は水のやうに窓から吹きかけた。

六

貳木正吉が或る球戯場の二階の入口を借り受け、わたしの家を出てから僅かな金で自炊を始めてから、屢々わたしはかれを尋ねた。かれはしよつ中書いてゐた。この小さい紳士へは定めた以外にわたしから心づけしなかつたので、童話や童謡を聞いて暮すやうにしてゐた。そして決してわたしから金を借りようとはしなかつた。

「飯かい？」

かう言つて段梯子を上ると、かれは狼狽して赤い顔をして手で何かを覆ふやうにした。かれはきちんと坐つて今から食事を始めようとするところと見え、茶碗が一つ、かれの机の上に置いてあるきりであつた。

「ええ、寝坊をするものですから——」
かれは左ういふと聲變りのした青年らしくなつた顔をまた
報らめた。どんな苦しいことがあつても父親のところへ行か
ずに、自分一人で耐へてゐた。父親の方でも決してこの子息
を顧みなかつた。

「そのくせこの窓の下をよく通つてゆくんですよ、好きな
い酒屋が町にあるものですから、それを三日目くらゐに買ひ
にでかけるんです。」

「そんなときどんな氣がするかね。」

「何とも思ひはしないんです、ふしぎなのはそんな酒なぞ買
ふ金はとつくの昔になくなつてゐる筈なんですがね。」

貳木の父親の暮しは貳木にも分らないらしく、わたしの腑
にも落ちかねた。銀行の方はとくに引出してしまひ、保険ま
で出してしまつたので賣食ひより外にはないらしかつたが、

貳木は賣食の様子さへないと言つてふしぎだと言つた。
「それはまだやはり金があるんだね。自分の餘生の分だけを
ちやんと小刻みにつかつてゐるんぢやないか？ 子息の世話
になることもできないから能く自分を知つてゐる遣口をして
ゐるのぢやないか。」

さうでなければ長續きするわけがない。いつか貳木がト
月ばかり山羊の家へかへつてゐると、曾つて来たことのない
父親がわたしの留守中に遣つて来て、貳木が何んにもしない

で遊んでこまるから、どこかへ下宿するなりして一人前の方
針を立てるやうに先生から話してください。と頼んで行つた
ことがあつた。わたしは貳木にそのことを言つて此の球突場
の二階へ移させたのであるが、親父は貳木が引越したあとか
ら、「親に黙つて越す奴があるか。」と叱責したさうであつた。
自分でそんな風に仕向けて置いてそれを妙に親父らしげな思
を著せて吐る腹の中が、見えすいてわたしには不快であつ
た。

商人でもあり又子息の世話にならないつもり貳木の父親
の、その日暮しには貳木やわたしの分りかねる暮しがあるら
しく思はれた。貳木はたゞ分らないと言つたきり餘りたづね
もしないらしかつた。

「飯をやりたまへ。」

さう云つて四角な窓ぎはから見えるテニスコートをわたし
は眺めた。貳木の食事するところを見るのが手痛くもあり貳
木も好まないらしかつたから、——しかし貳木はたゞの白い
飯の上にソースを振りかけ、平然として食事をすました。か
れにはこんなことが屢々あるらしく、また、わたし自身のわ
かい時のことを考へても珍らしくはなかつた。ただ、かれは
甚だ平然としてゐるところが羨しく思はれた。

「大したご馳走ぢやないか？」

「え、すこし口淋しい氣はしますが、慣れてしまひましたか

らね。」

かれは甘美さうに朝日の一本を口に唾へ、いかにも食後の
喫煙は甚だ結構ですよ、と言ふやうな泰然とした顔附をし
た。しかも急いで食事したので少年らしくいい顔の色をして
ゐる——いつもこの球突場にある中婆さんが貳木に食事のも
のを領けるのだつたが、氣に入らないものだとかかれはゴミ箱
に棄て、しまつて食へなかつた。氣を利かして金なども立て
換へようとしても貳木は陰氣くさい顔をして斷つたりした。

何をしたら氣に入るのか、又、どんな事がかれを喜ばせるの
か、中婆さんには解らなかつた。「あの子は全く風變りです
よ、日の暮れるまで何にも食へないでも平氣らしいんで
す、さうかと思ふと一度に五合飯をあがるんですもの、全く
あんな人たらありませんね。」と、いつか夕方かれの留守中に
たづねたときに、中婆さんは左う言つて、「いつたいあの方の
お腹はどうなつてゐるのでございませうね。」と左う言つた。

さうだな、あの方のお腹はあれは？ さう言ひかけわたしは
苦笑して、まんざら人事でもあるまいとわたし自身市井に
住んでゐたことを思ひ出して暗然とした氣もちになつた。

貳木は窓際へやつて来て、「此のコート奥の方が寂しくて
中々よござんすよ、まるで原つばのやうな野蠻なところがあ
りましてね。」と言ひ、すゝきの生え亂れたコート奥の方を
指差した。

貳木はしよつ中からだを悪くしてゐたので、よく水銀座薬
を用ゐては通じをよくしてゐたが、このごろ、その座薬も利
かなくなつたと言ひ、わるい胃袋を忌々しがつた。が、わた
しはその話をきくと苦笑する前に、何か言苦しい氣もちにな
つた。

「第一お腹に何も這入つてゐなくては、座薬もきかなくなる
わけですからね。肝心の食物が這入つてゐなくては？——」
かれは左ういふと例のなが笑ひをした。なるほど！ 肝心
のものが這入つてゐなくては出やうがないと思つた。

「あとでよくそんな事に氣がつくことがあるんです。幾日も
ろく／＼食へないときにはですね。」

かれはまたなが笑ひをした。そして「あんまり腹が減りす
ぎると却つて反對に頭がよくなつて來ますね。何か顔が蒼褪
めてくるやうな氣もちで——」

わたしは不圖かれの顔を見てゐるうち、一本の白い道路を
行くわたし自身の姿を目にかべた。何日何處を歩いたとい
ふ覺えはないが、しかし眩惑に似たものを頭腦とそして胃袋
とに感じてゐた。さういふときに最も恐ろしいものは日の當
つた道路を歩くことであつた。その光線は胃袋の中までいな
づまのやうに閃めいた。そのたびにわたしは眩惑を感じた。

けれどもわたしはどう云ふ用事であつたか記憶しないが、や
はり勇敢に歩いてゐたのである。

「それに僕はどこか畸形のやうですね。何だか若死にしさうでそれが可笑しくて仕様がないうですよ。」
 實際、かれは身體が纖細過ぎてゐるやうなところがあつた。その蒼白い皮膚は弱々しげに見えた。しかしそれにも拘はらず強情ほい骨のやうな骨づくりが、父親から受け継いでゐるらしく見えた。

日本橋に店を持ちながら本所から車で通うてゐた父親は、よく貳木をその車に乗せて店へ連れて行つたが、そこで彼れは店の人々からすつかり甘い坊ちゃん育ちにさせられた。父親はそのころから一こくな剛直な人であつた。かれはその時分の日本橋界隈のことを時々話した。

「本所の家に池がありましたね、それを能く店のものが浚ひに來たものです。母がそんなとき皆を喜ばせるやうな御馳走をして自分も楽しんでたのですが、父はやはり難しい顔をしてゐましたよ。母はい、人でしたよ、母が生きて居れば家はまだちやんとしてゐたかも知れません。」

東京で生れた貳木は、日本橋あたりの日のさした町すぢのことや、さういふ町であそんだことを靜かな詩にかいて見せたが、何かこの少年にふしぎな由緒が匿されてゐるやうな氣がしてならなかつた。何日だつたか食膳に向つたときに、
 「うなぎなら頭でもき、ますよ。」
 さう心から言つて氣がついて、弱々しくは、と笑つたこ

とがあつた。

「僕はよく淺草へゆくとうなぎの頭を食ふんです。何だかあれがばかに利きさうな氣がするんでしてね。」

わたしはこの男がうなぎを食ふところを思ひうかべ、町々の灯のありさまや、人が群れてゐる通りのことを考へると、ほつそりした貳木がうなぎの頭を舐るのを小鳥が麻蟲をつつくやうな氣がしてならなかつた。英國製の鳥打帽子をかぶつたこの紳士は又言つた。
 「あいつを食べたあとにはばかに元氣になるんです。」

七

「ゆり枝さんが來て居りませんか？」

晩の十時過ぎに栗島が表から家の女にさう聲をかけた。さう言へば一足先きに少し何時もとは違つた氣はひで、ゆり枝さんがわたしの家へ來てゐた。——書齋でわたしは一人で微笑みがうかぶ氣がした。

「來てゐるよ、どうしたんだ。」

栗島は蒼い顔をして固くなつてゐた。何んでもないんだがしかし遅く濟まないね。」

茶の間はひつそりしてゐる。ゆり枝さんと女とが身をちぢめて靜まつてゐるらしい氣はひが感じられた。
 「實はね。」

栗島は聲をひそめるやうな調子になつた。

「あのひとに勤めの方はよしたらどうだと言つたんだ。一日ぢう出掛けてゐては折角來て貰つても手數がかかる一方だからね。しかしあのひととは聞かないんだ。もう少し勤めて色々なものを拵へたいと言つてゐるんだ。」

「さうね、勤めを止めるのは僕も賛成なんだが、やはり身のまはりのものを作るためにも出掛けてゐた方が無事だと思つてゐるらしいんだね。」

栗島はちよつと遠慮めかしい眼色をしたが、親しげな聲音になり、

「身のまはりのものくらゐならたかが知れてゐる、——僕は左う言つて止めるといふ言つてゐるんだ。」

「結局勤めの方は止した方がいいね。君としては矢張り早くかたがついた方がいいだらうし……。」

其處へ當のゆり枝さんが茶の間から出て來て、わたしに今晚はと挨拶をして、栗島へはただ笑つてだけ見せた。笑ふと子供のやうな福々しい顔になる……。

「あなたは黙つて家を飛び出すなんてよくない。」

栗島は中學の教師のやうな訓辭めかしく言つて、「おたがひによく理窟が立つやうにしないと困る。」と栗島らしく眞面目くさく言つた。

「でもよくわかりましたのね。こちらにゐると言ふこと

が……。」

ゆり枝は平氣でさういふと、うちの女と顔を見合せて笑つた。が、栗島は笑はうとしなかつた。

「あなたのその平氣なところがわたしには合はない……。」

栗島はれいの理窟めいた調子で、依然、顔色を蒼褪めさせ睨んでゐるやうな眼いろをした。

「だつてそりや仕様がななことなんですもの。わたしの性分よ。」

ゆり枝は栗島の昂奮してゐることに氣もかけないで、ねえ奥さん、と左う言ひ笑つてしまつた。栗島はさういふ無邪氣さうな對手を一段とにがにがしく、わたしの手前でもあるのか氣難しく「そんな性分はなほさねばいけない、あなたの一番よくないところだ。」と此の男らしく併し毒のない調子で言つた。

わたしは黙然として栗島とゆり枝とに、なるべくぢかに眼をふれないで見てゐるうち、悲哀の味はひが追々沁みて來た。この、ぼんやりさんの天使、そして生涯飽くこともない理窟やの學徒、その交はりの妙に清らしく映るのはどうしたことであらう、かれらは何も隠してゐない、結果がくるまで平然としてゐるではないか？——

「お歸へりなさい、こちらでも遅く迷惑だらうから。」

栗島は嚴然と左う言ふと、ゆり枝さんは黙つて素直にうな

づいて、
 「わたし明日また参りますわ。」と立ちあがつた。
 「どうも君いろいろ、——」
 栗島は苦笑して立聞きさへ出ると、ゆり枝さんを五六間さきに遣り過していくらか落着いた安らかな聲音で、
 「ゆり枝は君、自然兒ですからね。」
 と言つた。

「あゝあの人はまるきり子供らしいところがあるね。」
 かれらの足音が小路のくらみに消えた。そして心もちは人ごとでありながら愉快であつた。

栗島のところへ此頃になつて愛讀者といふ女が、いつも茶の間に坐つてゐた。べつに何を話すといふこともなく茫乎としてゐるばかりだつた。

「篠原さんと言ふんだ。」

栗島は紹介してそれつきり茶の間に置去りにして、よくわたとしと二階へ上つた。そんなことに一向頓着しなかつた。晝も朝もあるらしかつた。ゆり枝さんとも友だちのやうになつてゐる、——ふしぎな女だと思つた。小柄でくりくり肥つた腫の大きい、ひと懐こい娘のやうな女だつた。

「會社員の妻君なんだが晝間ひまだから来るんだよ、いい人でね。」

物珍らしげな眼附でわたしなぞの顔を見る女である。栗島

射止めればともかくです。ははは……。行平はまた言葉を繼いだ。「東京くらのああいふ若い細君のある都會もすくないかはり、東京くらの性根の決つてゐない女のあるところもありませぬよ。さういふ意味での東京の若い女といふものは、至極落着かないと言つた方がいんですな。つまり彼らは自分が女であるといふことを、かなり深くもつと性的にも考へてゐるらしいぢやないか？」

行平はもう三人の子供の父親だつたが、いまの細君は或る地方での、最も新書の女性文學者であつた。かれは大學時代にただ地方の（かれの郷里である京都の）新聞にその女の詩や短歌が掲載されてゐる珍らしい事實に、また左ういふ優美な藝術的淑女の存在が行平をむやみに昂奮させた。で、かれはその優美な詩や短歌の世界での、その處女としての女の暮しに或ひは間違ひでもできたりすることの假定的な空想は、單なる讀者としての彼れの目ざめを苦しめた。かれの地方の新聞にその詩や短歌を見出すごとに、かれの心はずつかりその見もしない女を假想させた。かれはしまひに思ひ切つて地方の親父のところへ電報でその女を賞ふことを告げた、前から手紙で問ひ合せをして置いたことも實際であつた。

かれらは——彼れ自身言ふところの此の悲しむべき一片の電文によつて結婚したのであつた。それゆゑ、わたしは結婚するときに彼れはまづかう言つて脅かした。「結局疑つても疑

の留守にも来てゐる。ああいふ小柄なくりくり肥つた女といふものには、情熱をおもちやにするところがあるものだと思つた。「中々美人ぢやないか、さう言ふと、なかなか美人だよと氣にも咎めずに答へた。

「折角来てゐるんだから話してやりたまへ、僕はかへるから。」

「いいよ、ああして置けばいいんだから。」

栗島はべつにこの女に些しの昂奮もかんじてゐないらしかつた。——行平俊郎に言はせると彼れは何ものよりも、この女を問題にした。

「ねんばりと坐り込んでねちねちした物言ひをしてゐるのは、何か物欲しさうぢやないか？ 栗島はあんな男だから女になれ、ば何とも思はないのは實際かも知れないよ。然し——たん坐つたら中々かへらないでゐるところに何かがあるな。」
 行平はああいふ女は不道徳であつても本人は何んとも思はない、おひと善しなものだとも言つた。

「つまりばかみたいなのところがある……。」

行平はさういふと最も卑俗な言葉で何か言ひ當てて、大聲で笑つてしまつた。だがです。栗島もああいふ無頓着で通してゐるんだし、あの女には興味はないらしいんです。それゆり枝さんとああいふふうになつてゐるんで、あの男の道學者めいたところから言つて至極無事です。他の誰かが

ひつくせない人生だとしたら、そつくり諦らめて疑はない方が何よりの得策ですよ。わけて分り切つてゐる女の場合では？——まだ女といふものがそんなに清淨であつた例をどういふ意味にでも證據立てられない今の時代です。そりや科學的にはあるだらうが、さういふものが結婚をしようといふ若い者同士にはたうてい役立たないものですかね。」

かれは何日かの晩のやうに一切が熱情的で、そして忽ちそれが消失しやすかつた。そのためか悲しむべき一片の電文をかれはよく話して、僕のやうなものは今でこそ子供はあるが、がらが結婚するがらじやなかつたんですよ、いやはや、みんなさう云つて悔むにちがひないだらうが、いやはや……彼れは笑ひ出した。「しかし栗島の場合は何と言つても良縁ですな。かれらは二人とも氣さくで、そして道學者の妻らしく暢氣で道學者自身もそれ以上に暢氣なんですからね。天の配劑といふ言葉がありますね。全く翫味すべき言葉ですよ。」
 行平は何日かこんな風に栗島を批評した。

その日、栗島は突然かう言つた、妙にわたしの顔を見つめた。

「僕は結婚しようと思ふがね。今のやうだと却つて人から妙な解釋を強ひられるやうになるからね。」

わたしは栗島がたうとう言ひ出したなと思つた。むしろ、こちらから待ち構へてゐたやうな問題であつた。「姉が一切面

倒を見てくれるんだ。僕はこのとほり素寒貧だからな。それに姉はあのとほりに僕の今までの事はすっかりして呉れてあるんだから！」

「そりや何よりだ。僕も實は君にそれを勧めたいくらいに考へてゐたんだよ。姉さんならみんなして呉れるだらうね。」

栗島の姉さんなる人物は、殆ど栗島を今までに育てたやうな人であつた。第一の論文集の出版されたときも姉さんが全部金の方を持つた。あちこちを放浪したときにもこの姉さんが下宿屋へ行つてあと始末をした。そこでだね。君ら夫婦が仲へ這入つてくれるように姉に話をして置いたんだ。姉はそれが何よりだと言つて、(ともかく一度お目にかゝつて何彼とお話したい)と言つてゐたから、このごろのうちに君を尋ねるから會つてくれたまへ。」

「いいとも。ゆり枝さんもそれを望んでゐるんだね。」

「早い方がいいつて言つてゐるんだ。あれの國の方とも打合せが必要だし……こんな話は初めてだからどういふ工合に運びをつけていいか分らない。」

栗島は何日かのやうに憂鬱ではない。いくらか明るくなつてゐる。人生の一つの形式が栗島にも必要であるらしく思はれた。

「此處の家に縁があつたやうなわけだね。いまになると？」

栗島は色つやのわるい顔いろで、妙に寂しく笑つて見せた。この間から書きかけの原稿は汚れてまだ書き進んだところさへ見えなかつた。何に精力を消されるのか？ また、しよつ中客のために時間を奪られるのか、わたしには分らなかつた。こんな様子だと何時になつたつて書けはしないよ、左う思つて遣り始めるんだけれど駄目なんだ。」

栗島はきふに思ひ出して、手を叩いて、ゆり枝さんと呼んで茶をもつてくるように言ひ、茶をはこんでくると、

「例のことを今話して仲へ這入つて貰ふことにした。それで姉にも會つてもらつてね。」

ゆり枝さんは鳥渡ぬ顔をして、そしてこんどは平氣で、

「どうぞ、——。」

さう言つて微笑つて階下へ下りて行つてしまつた。栗島はそのあとを見送るとそれが全く左うであるやうに

「あれは全く君、自然兒だからね。それで困ることもあるんだが……。」

いつかと同じことを言つて可笑しさうに笑つた。何か一と息ついたやうな寛ろいだ栗島の顔に、これまでになくゆつくりしたところがあつた。が、いつかの晩、かれがこの部屋に坐つてゐたときの、陰氣くさはどうだつたらう、まるで別人のやうに思へた。

「この障子なども張りかへるといいんだが、つい、うつつやらかして了つてゐるんだ。こんどは張り代へよう。」

かれは冬近い障子の外を透して見た。屋根には夕しめりが催してゐて、暗みが褐いろをおびた晩秋の色であつた。何氣なく覗いたわたしにも障子の破れが身に沁みだ。

八

武木は晝間のうちは外へ出ないやうにして、なるべく日常りを嫌つた。なぜかと言ふと日當りだと上逆してしやうがない、さう言つて火鉢さへ用ゐなかつた。この少年厭世家は夏は洗面器に氷を入れ、その氷に頬をあてるやうにして暮してゐたが、冬は足袋も穿かずに机の前に坐つてゐた。用事以外には球突場の二階を離れなかつた。

「君はまるでさうしてゐるとお經を上げてゐるやうぢやないか。」

「は！ さうですか？——」

かれは微笑つて、うかうしてゐるより外に仕方ありませんからね。」

諦らめ切つたやうに言つた。

「すこし勤めてみる氣にならないか？ 原稿暮しなぞと言つてもまだ早いぢやないか。」

わたしは時々さう言つて勤めをすすめるのだが、からだか

弱いのと、人中へ出るとかつとして何もできないと言つて聞かなかつた。も一つ心臓が弱かつた。

「その氣にはなつてゐるんですが、勤めたつて駄目なことは分り切つてゐるんですから……」

「勤めないさきに分るものか？」

「いえ、分るんです。」

武木は自分を盡してゐるやうに言ひ切つて、そんな事は聞きたくもないといふやうな表情をした。そんな時のかれは故意とらしい眞面目な色をした。かれは唯一人で、どんな不自由をしても机の前に坐つてゐることが相應はしいと考へてゐるらしかつた。それ以外の生活はあり得ないものと考へてゐるらしかつた。

「けれども左うしてゐたら困る一方ぢやないか。」

「そりや左うですが、しかし勤めるより此の方がいいんです。」

武木は頑固に左う言つて、袴や着物、それから毛布まで賣つてしまつたと言つた。自分のことは自分ですと言つた彼の氣性らしくみすみす無ければ不自由なものでも關はないで賣り飛ばした。

「僕はこれきりですよ、が却つて樂な氣がしますね。」

實際、かれは着のまま、平氣で、そんな事にこだはらない風であつた。一日の暮しをささへるものがあれば、一日の

うちにまるで生涯のいろいろなことを縮めて生活するといふふうであつた。かれはまだ十九歳であるが併し二十代の暮しも暮してゐるやうな顔つきをした。「病氣なんていふものも今では僕には趣味としか思へなくなりましたよ。こんなにいるいろな病氣がたかつてゐますとね。」かれは何日かかう言つて、わるい胃や心臓や鼻などを一切ひつくるめて、かれらしく弱々しく冷笑して見せた。「唯、可愛さうなのはこんな自分をささへてゐるいのちくらゐなものです。」

「君には何を言つてもだめだから好きなやうにするといひが困つたときは何時でも僕のところへ來ればいいぢやないか？ 知らない仲ぢやないし。」

わたしは貳木がどうして困れば窮るほど來ないのか分らなかつた。呼びにいくとやつと來るくらゐだつた。

「が、このごろ僕は困るほど行きにくくなつたんです。すこし幾干か、ほんの幾干かが懐中になれば、それだけの元氣でお宅へ行けるんですが、何んにもなくて、その上食事の方ばかりの目的では、どうしても行けないんです。困るほどその感情が募るばかりなんです。」

「それは僕にも經驗がある、なるほど、君はいまそれをやつてゐるか——。」

わたしは遠い或る心持ちを貳木の言葉を通して、愕然として思ひ至つた。あの變な、絡みに絡んだ心もちは、もう、と

「僕はすこしぐらゐ寒い方がいいんです。暑いといひつがだるくなりましてね。」

貳木はそのこいつを言つたときに、心臓のところを指差し「しかしこいつは冬になると普通わるくなると言ふぢやないか。」

「ところがですね。」

かれは病氣の話になると、いつもの異常な力をこめた言葉づかひになり、「冬になるとこいつが胸中にある姿が、（笑つちやいけませんよ）何んだか非常に透明になつて見えてくるんです。どう言つたらいいかな、何かかう魚の浮袋みたいな奴に見えてくるんです。そして不思議に冬はそんなに悪くなることありませんよ。だから夏よりは冬の方がしのぎよいんです。」

「かうして寒い晩なんぞ坐つてゐると、こいつが透明に凍てあがつてゐるやうに眼に感じられてくるんですよ。だから何日かあなたをお呼びしたことがありましたね。あのときは最う全く駄目だと思つたくらゐでしたが、このごろではこいつの方で愛想を盡かして冬の方がいいらしいんです。」

貳木は何日か酷く心臓をやられたときに、こんどはひよつとしたら危ないかも知れないから、ひまがあつたら是非來てくれ。それも暇が、なかつたらよいと書いてよこしたときに、

つくにわたしの心から遠のいてゐた。貧するほど烈くなる正義、それと戦つてゐる間にその正しさに乗り取られるほど

飢ゑてがつがつになる氣もち、なるほど、貳木はいまそれを嘗めてゐるのか？ わたしは初めて氣づいた。

「そんなときは思ひ切つてやつて來るさ、存外そんな氣もちは樂に取扱へるものなんだよ。」

「ですが僕はそれを感じると、どうも行けないんです。思ひ切つて行つてもその氣持をあなたに見透かされるのが、厭ではないのですが、つまりその、そのとき僕のかんじるセンチメンタルな氣もちがこまりものなんです。」

「だから平氣でくるさ、一人でゐてそんな事にくよくよしてゐるから、頭ばかり働くんだよ、最も胃袋のはたらきが君の説のやうに頭へ上つてしまふと言へばそれまでだが……。」

「はは……。」

かれはをかしさうに微笑つて、ときに親父から貰つた火鉢も賣つてしまつたと言つた。あんまり安かつたがそんな事を言つてゐられないんで賣りましたよ、ことにあの火鉢はむかしから家にあつたので、いろいろな事を思ひ出して不快だつたものですから、ひと思ひにかたをつけたのです。」さう言つて冬がきてゐるのに、北窓に向つた部屋をべつと寒がりもしなかつた。

「冬さきに向つて詰らないことをしたものだね。」

かれは床の上に臥たきり、ここのところ（心臓）が重くて仕方がないと言ひ、呼吸苦しげにしてゐた。そんな時の彼はまるで少年そつくりであつたが、どうかすると堂々として喋り立てた。

「栗島さんですか、あれは半分頭がよくて半分わるいんですよ、そのよい方の半分で喋るときには議論もわかるが、れいの悪い方で喋るときは對手にわかりつこは無いんです。あの人はしよつ中何か考へてゐますが、あれはれいのものを半分づつ搗き交せてゐるので、本人にすら見當のつきかねることがあるんです。いい人はいい人ですね。暢氣さうで、そして決して他人を不愉快にする分子を持つてゐませんからね。」

それに不思議にあの人はどんなに疲れてゐても、何か話し出すと元氣になるのは、黙つて考へてゐることが彼の人に非常に有害なことを證明しますね、と言つた。

「栗島も君のことをかはり種と言つてゐたやうだよ、だがかはり種といふやつは毎年種を採つて見てゐるうち、數年のうちにはただの種子になつてしまふことがあるさうだから……。」

「は……はは……。」

貳木は微笑つた。「僕はまだ種子ぢやないんですよ、いはばまだ花にもならない方なんです。」

貳木はきふに思ひついて興味さうに言つた。「變り種子で思ひ出しましたが、行平俊郎さんこそありや正しく變り種です

よ、全く、珍らしいくらゐです。」
 「ふん、それは當つてゐるね、しかしあの變り種子は變色しないやうな氣がするぢやないか？」

「え、あの人は變り種子の本元のやうです。どんなことがあつてもただの花にならないでせう。此間僕のところへ遣つて来て、このごろ或る雑誌を出すから何か書けと言つてくれましたから、原稿を渡したけれど雑誌がまだ出ないと見え何とも言つて来ませんよ。」

武木は初めつからのにならないやうな氣はしたが、あんな元氣がよかつたからつい書いたんですが、そんな話を聞きませんかと言つた。いや聞かないといふと武木はこのごろ原稿の行先きが落ちつかなくて困ると言つた。

「一體原稿といふものはむかしから流水のごときものだよ。けふは西、あすは東といふふうだからな。」
 「さうですかね。」

わたしはわたし自身で言つたことが分らず、武木もまた解りかねるやうな顔色をした。しかしその間に漫然と解つてゆく何かを釋明されてゐるやうな氣もした。それはわたし自身の傷のいたみでもあるやうだし、武木の新しい日々をいたみでもあるやうでもあつた。取るに足らない雑誌の原稿のことまで、いまは武木の心をひどく厭世的にならせたりする時代のやうに思はれた。

だいぶ以前からゆり枝さんのお腹が大きくなつてゐることは、女の注意でそれとなく知つてゐたが、式を舉げたときは目に見えて大儀さうであつた。栗島の姉さんは皮肉つて、大きくなつてから式を舉げるのも變でございませう、ああいふ暢氣な人だちですから今となればその方が却つていい意味に取れて、つみのない笑草で、それも何も彼も引つ括めておめでたうございませうね、と左う言つて下町の育ちらしくきれいに笑つて見せた。わたしは首俯いてそれが當節よくあることなんですとつい笑つてしまつた。

会場へは栗島とゆり枝さんとが電車で、わたしと栗島の姉さんとが乗合自動車で、わたしの方が十分ばかり乗るのが遅れたが、高島屋の前のあたりでかれの電車とわたしの乗合とがすれすれに同じい馳驅をつづけてゐるうちに、吊革に右の手を提げてこち向きになつてゐる栗島の顔が、明るい街燈に映し出されてゐた、向うでも此方に氣がついたのであらう、かれらしく、
 「やあ、——」

さう言つたらしく窓のところで手を振つて見せた。こちらでも可笑しいやうな、また興味いことのやうに窓のところへ手を振つて見せた。尙よく見るとゆり枝らしい女のひとが、うしろ向きに直ぐ栗島の立つてゐる下の座席に坐つてゐるらしく見えぬ。栗島が電車に乗つてゐますよ、ほら、こちら

向いて手を振つてゐる……さう姉さんに話してゐるうちに電車は停留場で停つた。その間に乗合はいままで二倍くらゐの速度ですつと抜いてしまつた。

「あの子も一しよのやうでございましたのね。」
 「え、多分、よこに坐つてゐたのがそのやうでした。」

会場へつくと栗島はひと足あとになり、大きな聲で笑つて、あの時はなぜか可笑しかつたと言つた。にも拘はらずわたしは一瞬間かれが妙にさびしく引釣つたやうな曖昧な、極りわるげに微笑つたのを忘れなかつた。偶然ではあるが兩方の乗りものすれ違つたこと、そしてあの時乗りものが同じくらゐの速度であつたために、却つて一點に停つてゐるやうに思はれたことも、なぜか頭に残つた。

式の後には栗島はゆり枝と電車で歸ることになつたが、栗島は疲れた顔の中に妙なほらひを浮べてゐた。ゆり枝さんはいろいろどうもと言ふと、栗島よりもさきに電車に乗つた。——姉さんはすぐ下町へかへると言ひ、会場から俵に乗つた。

「母もこれで安心するだらうと思ひます。どうもおつかれさまでした。」

「いいえ、どうしまして！」
 わたしは何日かの、ふくぶくした顔の栗島の母親を目にうかべた。

或る冬の朝、大がらな栗島のゆり枝さんが菜漬の大束をか

んかんとした朝霜の井戸端で、きしきしいふのを桶の中へ振ぢ込み、振ぢ込みながら荒鹽をばら撒きにしてゐた。朝日の中のさういふ光景は勇敢でもあり壯麗でもあつた。なぜかと言へば、莖漬の菜の鮮綠の中に眞赤になつた大きな手が、朝日の光の中で笑つてゐるやうだつたからであつた。

「お早う、栗島君は？」

「お早うございませう。栗島はいまのいままでその垣のところにゐましたが……」

わたしは振りかへつて見た。垣根がつづいて庭になつてゐる、その折戸のかげに揚子をくはへて栗島が立つてゐた。

「やあ——」

「そんなところに居ようとは思はなかつたよ、すこしも此方から見えない。」

栗島は揚子をつかひながら含み聲で笑つた。ゆり枝さんはそんなところを振りかへりもしないで、菜漬をいそいでゐる——となり家の屋根のトタンの笥へ霜とけが落ちては歇んで又聞えた。

座敷へはひるときふに明るくなつたことに氣がついたが、それは障子が新らしく張り換へられたからであつた。かれも一棹、わたしも一棹づつを月賦で買つた筆筒が白々と置かれ

てあつた。が、何か足りないものが感じられ、それが何であるか分らなかつた。

「篠原といふ女の人はあれから来るのかい。」

かう口に出して言つて見て、この人が坐つてゐたのがゐないから物足りなく感じたのだと思つた。

「たまに来るよ。」

栗島はまた少しく遠くへ越したものだから来られないのだらうと言つた。「君の崇拜者か？」といふと、「なあに、ひまがあつたり男の中へ這入ることが好きなやうなたちな人なんだよ。」と、その返辭はよく女を見てゐるとわたしに感じさせた。へいぜいのかれは何故かそんな事に氣附いてゐないやうな人がらであつた。

「結婚前になると、ああいふ飛入がよくあるものだよ。」

「飛入か？」

栗島は笑つた。わたしはふと思ひついて言つた。「しかし僕はああいふ男の中へ這入つて、そしてにこにこしてゐるやうな隙だらけの女といふものの氣質には、全く陶然としたやうな好ましさがあるやうな氣がするんだ。危険ではあるが……反對に美しい氣もするよ。」

「君の言ひさうなことだ。」

「それにだんだん來なくなるのが當り前なんだよ。」

「さう、そんな譯かな。」

「おむつだの、汚れものを拭くものがありますの。」

「いや何にも無いんです。」

「さう、ぢや、わたしすぐ用意して參りますから。」

女は急にあはてて、「栗島さん！　すぐ産婆を呼びに行つてゐらつしやい！　すぐですよ。」

「何分たのみます、何しろ。」

栗島は又玄關へ飛び出した。そして「君も來てくれ。」さう言つた。行くよ、わたしは左う言つたものの、女が女中をつれて出て行つたあとから、のこのこと歩いた。何か騒しい中に一脈の清冽な冷たさが頭をながれてゐた。女は女中に湯を沸かさせた。ばちばち燃える薪の音をききながらわたしは階段のところまで、ゆり枝さんが陣痛の中にあることを知つた。そのくるしさうな聲が足もとをわなわなふるはせた。風のなほ晴れた日が窓のところにあつた。

「産婆は？」

栗島が這入てくると、わたしは昂奮したかれの顔をみながら病氣にならなければいいかといふ考を持つくらゐ、眞蒼な顔いろを見つめた。

「いま直ぐ來るさうだよ、どうも奥さん濟みません……。」

かれは産室にゐて、女がゆり枝さんに、しつかり、しつかりと言つてゐるのを見て言つた。「ポロ切れを集めておいて下さい。」女は栗島にさう言つた。

栗島は微笑つてゆり枝さんが這入つたときに黙つてしまつた。式は擧げてから後のゆり枝さんの顔に落着いた血色さへ上つて見え、道具の少數いこの家の、柱や押入れや、疊にまですつかり慣れて調和されてゐるやうに見えた。行平の言ひ分ではないがこれまで借りのものやうに見えたといふのがすつかり本物になつて見えた。

或る朝の霜どけの日かげの温かくなつたところに、突然けたたましく門のところから馳け込んで眞青になつた栗島がいきなり玄關へ飛び上ると、つづけなりに白井君と左う叫んでわたしを呼んだ。わたしは狼狽して玄關の間へ飛び出した。

「出たよ、出たよ君！」

栗島は明らかに手と足を震はせ、顔ぢゆうに泣くやうな微笑ひを泛べた。

「何が？」

わたしは即座に直覺した。

「こんなに早いとは思はなかつたんだ。奥さんは！」

女も茶の間から飛び出した。「そして誰がとり上げなさいましたの。」

栗島はあはてて先刻の言葉を取消し、「いや、實はもう出かかつてゐるんだ。何しろ僕一人なもんだからどうしていいか分らず……。」さう極りわるげに言つたが、女は多分さうだらうといふ顔をした。

産婆が來てから、すぐ生れた。女の子であつた。

「女だよ、君。」

「さうか。」

わたしは栗島の額に汗とあぶらがにじんでゐるのを見た。なるほど、あれぢや二人して生んでゐるやうなものだ。みんなそんなものか知らと思つた。産婆がかへると赤子のこゑが高々と泣き立つて、窓の朝日が玄關の間へ移つて來た。栗島はまだぼんやりと長火鉢の向うに立つてゐた。

「おめでたうございます。」

「いや、どうも！」

栗島は女に頭を掻いて見せ、はじめて父親らしげな、すこし威嚴のある微笑みを漏らした。こんな瞬間にそんなに人間の顔が豹變るものではない、が、しかし落着いた平らかな顔の中には悠然たるものが感じられた。

「僕は亡くしたが君のところの子がうまく育つといいね。」

「いや、君の細君が來てくれて全く助かつたよ。」

かれは額の汗とあぶらを拭いた。ゆり枝さんはすやすや睡つてゐるらしい。赤子もしばらく泣き歇んだ。栗島は氣がついて長火鉢のところを坐ると、君も坐りたまへと言つた。わたしは茫乎と立つてゐたらしいことに氣がついた。

「人間は實に大變なことを經驗するものだね。」

かれは、つくづく感心したやうに言ひ、一時はどうしたら

「いかと思つたと言つた。」

「もう見たのか? ——」

「まだだよ。」

産室から産婆の助手が白い服のまま、襖から半分からだを現はして、この種の女によくある端嚴な顔つきをして、栗島を見て、ちよいと微笑ひながら、

「どうぞお這りくださいまし。」

さう言つて、また、忙しく姿を襖の中に消した。

「はあ、もういいんですか。」

栗島はわたしを顧みて君もどうかといふ顔をした。先づ君からの順序だと言ふと栗島は産室へはひつて行つて、すぐ五分も経たないうちに出て來た。

「まだ人間らしい形がついてゐるばかりだね。」

さう言ふとむんずりと黙り込んで了つた。わたしも赤子を見ると、栗島と對ひ合せにしぜん黙つて坐つた。こんなときに人間は別に言ふことが無いものらしい、——栗島は何か考へながら赤子が泣くたびに氣がかりらしく産室の方をふりかへつた。

「これからぼんやりしちや居られないな。」

栗島はふと思ひ出したやうにかう言つて、先刻からの疲れをかんじ出したやうに、ははと笑つた。

「何かかう忙しくなつたやうな氣がしてくるね。」

押し花

「唯今、——」

さういふ聲がすると俊子はうしろ向きになつて立關から飛び込んで來たのに、お歸へりなさいと言つたがさういふ隙間もなく襟合せから、冷たい手を挿し込まれて乳房のあたまを觸られた。

「きらひ! そんな出し抜きにお乳房などに觸つたりするのは?」

「でもけふは早いでせう。一番さきに歸つて來たんだもの。」
少しくらゐ極まり悪るさうにしてゐてもいいのに、寧ろけろりと別のことを言つたりして子供らしくもないと思つた。そのけろりとした顔付でまだ手を胸のところから出さうとしなかつた。

「そんなに急いで歸へらなくともいいわ。お友達と一しよにかへつてあらつしやればいいのに。」

「お母さんは一人きりだから寂しいだらうと思つて早くかへつたの。」

俊子は微笑んで黙つて光三の手を自分の胸からハネ退け

「壓されてゐるやうだよ。」

暫らくしてわたしは立ち上り、遅い朝日のちらつく通りへ出た。

「あとで又來よう。」

栗島はせひ來てくれと云つて、通りに立ちながらぼんやりとわたしを見送つてゐた。振り顧るとかれはなほ無表情のまま、向ひ家の屋根の上を眺めこんでゐた……

た。光三はその手を所在なささうに膝の上に置いた。——俊子の母親は、あの子が一番心配だつたのだが、ふしぎに馴染んで了つていい鹽梅だ。あの子にすねられたら立つ瀬がなくなるよ、——と左う言つたが、俊子は黙つて微笑つて、「六年も母親なしで育つて來たんだから無理はないのよ。けれどもあの子は年恰好から言ふと酷くませてゐるんだから別に馴染むわけもあるやうな氣がします。」と言つてべつにその理由を言はなかつた。

子供らしくもないと思つたことは再度や三度ではなかつた。もう一つ何處へ行くにも連れ立つて歩くので、どうかすると姉弟としか思はれなかつた。とつて六になる俊子は、十一になる光三とは、若づくりなだけ弟のやうにも人の眼に際立つて見えた。それに人込みや電車の、かで光三は言ひにくさうにもしないで、お母さんと呼んで俊子のかほを賑らめさせた。ただ馴染んであると言ふばかりでない。——何となくその馴染み方がくどいやうな氣がした。俊子はそのことを考へると怕いとも思つた。

「お前が来てから妙に光三が外へ遊びに出なくなつたやうだよ。以前はちつとも家にはゐなかつたんだが……おれも光三がなついで呉れるんで何よりだと思ふんだ。あのくらの年になると却つてどうやら分りのよいものらしい。」

夫の新井も左う言つて、やはり俊子がよくしてくれるからだと考へてゐるらしかつた。俊子には初めはよく光三の氣が分らなかつたので、ただ平常のやうにしてゐたが、來た翌くる朝からお母さんと呼んだのは愕いてしまつた。

「姉弟みたいなお母さんだわね。」

俊子は戯談に言つてみたものの實際はその通りに見えた。そんなことも氣になつて買物に出ても、拉れ立つてゐる光三がひどく不調和で、親戚の男の子とでも歩いてゐるやうで、決して親身のものとは思はれさうもない——。

「だんだんお前たちの仲に苦がついて來て、しまひには本統の親子のやうになつて見えて來るよ。」

「だつてあんまり大きいんですもの。」

俊子は今のうちは光三も珍らしいからなつてくもの、珍らしくなくなると、あの子の氣性だと辛いこともあるだらうと、さうも心づかひがされた。——ちよつとした手紙を書いてゐても、煩さくそれは何處の誰に出すのだと言つて聞かなかつた。そればかりではない、家中にきれの長い可愛らしくもない眞面目らしい眼付が瞠つてゐて、氣の弛むところもな

かつたのである。——今もびつたり體軀をよせて動かうとしない……。

「そんなに家にばかりゐると弱蟲になりますよ。ちつと外へ出てみなさんと遊んでゐらつしやいな。」

「外へ出たくないんだもの。」

「ぢやお母さんは忙しいんだから、あつちへ入被つしやい。そばにばかりゐちや何もできはしないから。」

「だつてお父さんがそばにゐて僕がゐてはいけなかつてことは無いぢやないか。僕何もすることは無いんだもの。」

俊子は平氣でさういふ光三をみると、やはり尋常の子ではないと思つた。

「そんな口のきき方をするものぢやありません。よその子はみんな面白さうに遊んでゐるぢやありませんか。」

「遊びたくないんだ。」

俊子はぢや勝手になさいと言はうとしたが、いまからそんなことを言ふ日になつたら、未々困るだらうと思つて黙つて了つた。光三は不圖こんなことを言つて、俊子を吃驚させた。

「お父さんがお留守のときにはなるべくお母さんのそばにゐるんだよ、と左う言つてゐたんですもの。」

「何故？」

「なぜだか知らないけれど……」

「それでお母さんの傍ばかりにゐるの。まるでお母さんの見張り役だわね。光ちやんは？」

「だつてお父さんの言ひ付けなんですもの。けれど僕何も言ひつけはしないんだ。」

光三の顔を見つめてゐると、その顔が新井そつくりと拘り變へられたほど、似てゐた。應揚でそのくせ細心なところのある新井のことだから、これは光三の作り事ではないと思はれた。それにしても光三とそんな話をしてゐる閑暇が何時あつたのだらう、——そんなこともあるかと自分でも能く注意してゐたのだつたが、よくよく閑暇を偷んだものに違ひないと思つた。

「光ちやんはよくそんなにお母さんなんて來たばかりのわたしに言はれるのね。それもお父さんから教はつたのでせう。」

「ええ、すつと前から左う言はなきやならないつて言はれてゐたんです。」

「ぢやわたしの來たのがやはり光ちやんには嬉しかつたの。きつと然うでせう。いつも獨りでゐたんだから無理もないことだわね。」

俊子はむしろ甘やかしさうに優しくさういふと、光三は脆く感情的になつて、もぢもぢして顔をあからめた。それがすぐ根くならないだけ、俊子の注意を惹いた。いつか新井が、肝腎のおれよりも光三が夢中になつて、何日來るなんて毎

日せがんで爲様がなかつたんだ。そんな關係からも目取りを早めた故もある。」と言つたことを思ひ出して、光三が、待ちあぐんでゐたことが分るし、しぜん可愛相な氣もして、できるだけ甘やかして遣りたいと思つた。けれども才が撥けて何んでも氣のつく光三だけ、氣味わるいところが咎めて、向うでなつてくほど、心では却つて冷淡な氣もした。

「さきのお母さんとどつちが好き、——」。

「どつちも好きさ。」

「どつちも好きぢや分らないぢやないの。餘計に好きなどころのある方を言つてごらん。」

俊子はわざと光三の手を取つて、表情のない顔から腹の底までも見透すやうな眼付をしたが、やや考へてゐた光三はふと此處ことを言つた。

「さきのお母さんの事はもう忘れてしまつたの。」

「そんな筈はない！ たつた六年にしかならないぢやないの。」

俊子は自分にもなく意氣込んで、初めて氣付いたが、光三はれいのけろりとした語勢で言つた。

「ほんとに覺えてないの。まだ小ぢやかかつたんですもの。」

そんな筈はない！ 俊子は小まじやくれた光三の顔を見るだけでも腹立たしかつたが、反對に言葉は優しかつた。

「さう言へばさうね。五つや六つでは何もおぼえてゐられは

しないのね。」

「けれどもお母さんも好きなの。」

光三は気が済まない顔をして、あまえて俊子の膝にもたれかかったが、俊子はそつとその手を除けた。——光三にはその平氣な顔をしてゐる俊子が際立つて冴えた眼をしてゐるだけ、コワイ氣がした。——暫らくしてから光三は

「僕そとへ行つて遊んで来ようか知ら。」

これまで言ひ出したことのない事を寂しうに言ひ出した。俊子は脅かされたやうな氣がした。が思ひ切つて、わざと柔しい聲で言つた。

「え、行つてゐらつしやい。」

が、光三はべつに遊びたいやうな氣振りも見せないで、まだぐずぐずしてゐた。あんな當て付けを言ふほど心が振れてゐる……と思つた。

隣の寫眞屋の植込みを隔てて、もう一叢だけこちらでも植込みをしてあるだけ、をりからの椎の若葉で青い反射のくる縁側に、たてに長い總象牙の古い支那の鳥籠が吊されてあつた。鸚哥か何か入れたらさぞ美麗しいだらうが、いまは空のままになつてゐる。丁字形の止り木にもまだ一度も鳥を入れた痕がなかつた。

「何か鳥を入れたらどうでせう。こんな空の鳥籠を吊つてお

くのはをかしようございますわ。」

新井は何度も俊子から左う言はれても、鳥を入れようとしなかつた。

「空の鳥籠といふものもいいものぢやないか。ああやつて置くと中にゐるやうな氣もするから——朝なんぞ全く中にゐるやうだよ。」

「まだ一度も入れたことがないやうですわね。すこしも汚れてゐないんですもの。」

「中にいつでも居ると思へばいいぢやないか。」

「古くからあるんですの。」

新井はすぐ答へなかつたが、光三は籠を覗き込んでゐたが、思ひついて言つた。

「僕この籠に蟬を入れてはよく逃がしたりしたの。目がこんなに粗いんだから幾ら捕つて入れて置いてても、朝になるときつと居なくなつてゐるんだもの。はじめは少しも氣がつかなかつた。」

「蟬ちや逃げてゆくでせうね。」

そんなに古くからあるのか知ら？——俊子はそれ以上問ねないで黙つてゐた。新井は何か辯疎らしい調子で「何時でも今度こそ鳥を飼はうと思つても、ふしぎに途中で人に會つたりして買へないんだよ。だから飼はないことにしてゐるんだ。」と言つた。俊子はその言葉がはつきりと頭に残つた。

「餌を入れておくところにSの字があるでせう。戸の鍵のところだね。これだけあとで拵へたものらしいうございませぬ。」

光三のそばへ寄つて何氣なく俊子は、白い象牙の、いかにも後から細工したものらしいSの字を見た。支那の鳥籠にこんな西洋の文字があるのが些つとふしぎな氣がした。

「細工人が勝手にこさへたものさ。あとで氣がついたんだがどうにも爲様がなかつたものだから。」

新井は鳥籠に目もくれないで、新聞の上に目をさらしながら、べつに變らない聲音で言つた。Sの字——俊子は思ひあつて、鳥籠を離れた。

「何か鳥を買つてきて頂戴。——青い鳥がいいな。」

「でもお父さまが、入れない方がいいつて仰つてゐらつしやるんだから……べつに飼つたらいいわ。」

新井がそのとき突然に顔をあげて言つた。

「飼つたつていいよ。」

「どんな鳥がいいでせう。」

「さうだな、鸚哥がいいだらう。」

「鸚哥つてどんな鳥か知ら？」

「青いきれいな鳥だよ。あの籠だと恰度大きさもいい。」

新井はすぐ俯向いて又た新聞の上に眼を注いで了つた。なるべく俊子と話を深入りさせまいとするらしい。——俊子は今からすぐに鳥屋に行つて呉れといふ光三をなだめながら

も、ひよつとすると此の鳥籠に何か因縁があるやうに思はれてならなかつた。左う言へば何時か新井の手文庫の何かの書類のなかに入れてあつた半身の寫眞の姿が、その鳥籠のそばに立つたこともあるやうで、わざと鳥を入れないで吊つて置くのにも深い意味が匿はれてゐるやうに思はれた。——その後寫眞をもう一度見ようと思つて捜したけれど、手文庫の中にも若しやと思つた新井の財布のなかにもなかつた。俊子は隣の寫眞屋にまだ種板が残つてゐるに違ひないと思つた。

「でもね。お父さんが買つていらつしやるまで待つてゐる方がいゝわ。今からつて直ぐ出掛けられはしないんだから。」

「そんなに待つてゐちや何時のことだか分らないんだもの。詰らない。——」

光三はすぐ立ちさうもない俊子の肩をゆすぶつてゐたが、ふと新聞紙から放れた新井の鋭い眼さきを感じて、ぐずぐず言ひながらも拵げて言はなかつた。そして不機嫌さうに立關から通りへ遊びに出た。

「お前だけだと妙に家にばかりゐるやうで、おれがあると遊びにでかけるのはをかしいね。ためて氣つけて見てゐるんだが……。」

「そんなところもありますね。」

新井が不在のとき俊子のそばに居るやうにと言つたのは、あれは光三の作りごとだつたらうか。あんな子供がさう甘く

作れるものぢやないと思つてみたが、いまの新井の言葉を聞くと新井は何も知らないやうでもあつた。
 「光三はすこしも關つてやらなかつたものだから、まるで野放しそつくりなんだよ。だからお前も氣骨が折れるだらうが、まあ面倒を見てくれるんだね。それに馴つてゐるんで何よりだと思ふんだ。なかなか馴つかないものらしいからね。」

「それはわたしもいい鹽梅だと思つてゐますの。あんまり人なつこい子なものですから却つて……まるで姉弟のやうに見えますの。」

「あの通り大がらだからね。」

新井のさきの女は、寫真で見ただけでも肉厚な、光三のからだ付きから察しても色の白い女らしかつた。よく光三の言ふには茶の間の電燈が新井よりも女の方が、スキツチを捻る役目をしてゐたことだつた。いつか俊子は茶の間に下つてゐる古い電燈の球の下へ立つたが、電球までには充分二寸は隔つてゐて、爪立てをして漸つと指さきが、とどくくらいだつた。だから身長もよほどすりと高い大がらな女らしくも思はれた。初めのうちは何とも思はなかつた新井の亡妻が二月三月と経つたこの頃ではまだ生き永らへてゐる對手のやうに思はれ細かい些つとしたことでも知りたくてならなかつた。隣の寫真屋へもそれとなく七年忌だとか言つて、寫真

を一枚だけ手元に取り寄せて、どんな女か最う一度よく見て置きたいと思つた。それにしても新井は自分が手文庫の寫真を見たことを、どうして知つたのだらうかいや知らないで片づけたのかも知れない。
 「それにあいつはすこし變だよ。あんなに懐いてゐるのも、たんにお前を母親としてではなく女としてなつてゐるやうなところがあるよ。」

「まさか、そんなことはありませんよ。まだ十二やそこらぢやありませんか。」

「あれは他の子供とは違ふ。よく氣をつけてごらん、きつと思ひ當ることがあるから……。」

新井の言ふまでもなく、俊子にはいろいろ肯づけることもあつたが、故意と知らないふりをして、呆れたやうな顔容をして見せた。新井は考へるやうにして俊子を見詰めたが、いくらか光三のことを言ふことが、明らかに俊子に示す好意の顯れでもあるやうにも、眼慧い俊子は見取つた。

「いつ頃からあんな風になつたか分らないが、實際驚くほど變化つたませ方をしてゐる。——此間大森へ行つたときお前は誰かに會つたらしいね。」

俊子は、あれを口止めして置かなかつたのが、今になると却つてよかつたと思つた。若し左うだつたら、その口止め

までしたことが、そつくり新井に知れたのだと思つた。

「伊豆でおあひした方ですの。三木さんで方でございますの。光ちやんがそんなことまで言つたんですか。」

「うむ、それも何だか子供らしくない告口だからね。べつにその他のことは言ひはしなかつたがね。」

切長い新井の臉が神経的に震へてゐるやうで、俊子はこんな夫の表情をいま初めて見ると言つていくらくらゐだつた。滅多に怒らないねつちりした性分だけに、異様な壓迫があつた。が、言葉は依然靜かで冷然としてゐた。

「わたし些つとご挨拶しただけでございましたが、光ちやんにもこまりますわ。そんな風に取られちゃ全く！」

「あれも何氣なしに言つたんだらうと思つてゐたが、しかしあとで考へると奈何にもあれらしい見付け方だと思つたのだよ。いや氣にするほどでもない。——」

新井の口さきばかり靜かなところが、却つて俊子には何も彼も監視づけて置いて、自分は一向それに預らない風をしてゐるのは、質の鈍い切れもので觸られたやうで、觸つた氣もちになつた。——あながち光三ばかりが悪ばしこいのではない、新井の附智恵が手傳つてゐると思つた。

「温泉にある間にお知り合ひになつただけですもの。それきりなことなんです。」
 何か尋ねるかと思ふと、新井らしくそれには答へないで、

その話をけりりと形づけてしまつて、

「しかし學校の成績はわるい方ぢやないんだ、あれで學校までわろくては最う完全な不良少年だよ。」

と言つて、學校だけはすつと質さへよければ、大學まで續けてやるのだと言つた。いかにも楽しさうで望みをかけてゐるらしい口振りだつた。——俊子は、大學の制服を着けた光三の姿を想像するだけでも、急に末恐しく行手が塞がるやうな氣がした。

日が移ると縁側の障子に鳥籠の影がある。日かげがうすれりと、籠の目がおのづから薄墨色にぼかされ日かげがなくなると、籠の姿がない……。

「見てあらつしやい。こんどもすぐ消えてしまふから。」

曇天の日で、光三は俊子のそばを離れようとしなかつた。頸だとか手だとかに煩さく纏ひついて、むやみに甘えるときは方圖もなく甘えた。……たてに長い鳥籠は日かげがすると映つたり又消えたりする。俊子はやはりその傍に新井の亡妻が立つてゐるやうな氣が、昨日見た寫真の感じからも手傳つて、變な氣もちになつた。

「ほら、あの柱が窪んであるでせう。あれは何時かお父さんが、疳癩を起して、文鎖を投げつけたんだよ。せんの母さんのあるころなんだ。」

柱の角がへこんで、まだ生新しげな傷があつた。氣になつてゐたが何氣なく光三の言葉を聞くと、へいぜい黙つてゐる新井の内攻してゐる氣持ちが手に取るやうに見えもした。直ぐ傍に寫眞の女のツツ伏してゐる姿が、やはり目に見えるやうな氣がした。

「しよつちう其麼ことをなさるの。」

「しよつちうぢやない、——旅行から歸ると何時もさうなの。いつかも母さんと話してゐて茶碗をへし潰してしまつたことがあるの。こんなにして——」

俊子は、光三の手眞似をしてゐるのを見ると、その細い手つきまで新井に似てゐるやうで無氣味だつた。

「此間電車で挨拶をしてゐたのをお父さんに告ひつたのね。」

「ええ。」

光三はちよつと極りのわるい赤い顔をした。

「あれはお父さんから尋ねなすつたの。それとも光ちやんが言ひつてたんですか。」

「お父さんからなの。僕悪いことを言つてしまつたな。これから言はないから、こんどはごめんさい。」

「言つたつて關はないことなだけけれど、いろんな事をたづねられると困るからね。光ちやんも言つていいことと悪いこととは知つてゐてもいいわね。」

「ごめんさい。」

光三は、正直にさういふと、眉白んで情氣でしまつた。俊子はわざと光三の手を取つて、膝のところへ引き寄せ、何か内密のことでも話すやうに生優しい聲で言つた。

「これからずつと光ちやんとしよに暮らしてゆくのでせう。だからどつちも助け合つて行かなければいけないわ。光ちやんのいけないところがあつても、みんなお母さんがかばつてあげるし、又お母さんのいけないところも光ちやんは我慢しなければいけないわよ。そして二人でちやんとして行つたら家の中が楽しくなるのよ。」

光三は凝乎と聞いてゐたが、子供らしくいい氣もちになつて、

「僕これから何んでもみんなお母さんの言ひなりになる、——そして意地わるも告口もしないから、これまでの事はみんなごめんさいね、僕、わるいつて事はみんな知つてゐただけれど……。」

と言つて、熱のあるけはひを眼の内に見せた。俊子は甘い言葉で益々やさしい調子になつた。

「たとへば光ちやんが些つとしたことからお母さんの告口をすんでせう。したらお母さんも自暴になつて光ちやんのあら捜しをはじめでせう。そんなつまらない事を繰り返してゐたら、一生かかつて追つつかないことだし、お互ひ唾

みあつてゐるばかりぢやないの。それよりかお互ひに善いことばかり仕合つて居れば、毎日氣もちよく暮せるんだからね。」

俊子はさう言ひながらも自分でもつい感情的に昂奮してゐることに氣がつくと可笑しくもあつた。

「寫眞の事だつてべつにお母さんがお隣へ頼んで焼いてもらつたわけぢやないの。ひよつこり應接間の古い寫眞帖に挿し込んであつたのを貰つて来たばかりだから——考へてもごらん、お母さんが先のお母さんの寫眞が何んで要るものかね。光ちやんにしたつてさう思ふでせう。」

「ええ。」

「それを光ちやんが見ただけでせう。だからそんな事なんぞ言ひこなしにするのよ。お母さんはもうできるだけ光ちやんを可愛がつてあげるんだし、光ちやんだつてお母さんを大切にしてくれるでせう。」

俊子に抱きすくめられた光三は、追つかけて話されてすつかり涙ぐんで、何を言つても首肯づくばかりだつた。それにこれまでになく温かい胸のところを抱かれてゐるので、光三は心の内でも俊子の喜ぶやうなことを言ひたいと、そればかり頭のなかで考へたが、あひにく目新しい俊子を嬉しがらせることも思ひ當らなかつた。

「それにね、光ちやんが大きいから、一しよに外を歩くとみ

んな姉弟だつて言ふでせう。それでも關はないぢやないの。それとも厭？」

俊子は自分で自分の言葉に酔つて、光三の冷たい頬に唇をあてた。そして光三が呆れながら感激をしてゐるのを見ると、快よい勇ましい氣になつた。

「僕、關はないけれど……。」

やつとさう言つて、これも半ば酔うたやうな眼を上げた。

「心の内でさう思つて居ればいいわ。けれどもそんなことを人に言ふものぢやないものよ。自分一人だけでちやんと考へてゐるものよ。」

「え。」

が、俊子は妙に色の白い表情のすくない光三の顔を見つめてゐるうち、不圖櫻の蕾のやうな腫れ物を額に見出すと、何だか汚らしいものに觸れたやうな氣がして、先刻からの快よい昂奮もすぐ消えてしまつて、徒らに重い光三のからだを持て餘した。も一つこのころ氣づいたことであるが、光三の體臭がすこしづつ匂つて、俊子の鼻さきをおそうてくることだつた。

「ちよつと退いて頂戴。」

俊子は光三を前へ坐らせると、膝のしびれを感じた。急にこんな子供をつかまへ、かなり熱心に話してゐたかと思ふと、自分でもどうかしてゐると些つと苦笑ひが浮ぶやうな氣

がした。しかし光三は好意に輝いた眼付をして、凝乎と俊子を見てゐた。何か話すことがないか知らず、光三は俊子に對ふ新鮮な好意をどう表はして、かにかに迷つて、頭を悩ました。

「光ちゃん少し遊んでゐらしたらどう。お母さんはそろそろ晩のお支度をしなければならぬから。」

とにかくあの寫眞のありかを知つてゐるから、光三のゐないところへ匿すなら隠して了はなければならぬと思つた。

何氣なく隣家で複製して貰つて歸ると、帯を解いてゐる間に、ひよつこり這入つて來た光三の眼に發見つて、これなあに、と然う言はれたときには隠すことが、できなかつたのだ。自分の母親の寫眞だと氣附いたときの、眞面目な歪みを見せた全く子供らしい顔貌が、すぐ小利巧げに匿されて了つて、わざと元の位置に置いて何處にあつたかとも尋ねなかつたのは、新井の性分によく肖てゐた。却つて俊子の方でまごついて取亂して言譯らしいことを言つたのも、今になると口惜しくもあつた。ちよつと見ると子供らしくはあるが、腹の奥底は解らなかつた。

「ぢや僕、電車通りへ行つて來ます。」

充分な俊子の愛撫に甘やかされた光三は、急にあらはれた俊子の煩さげな眼付には有繫に氣が付かなかつた。

光三が表へ出ると、俊子は箆筒の上にある一枚の寫眞を取

り上げた。百合の花を生けた卓子に倚れた先妻のかしらは古い束髪が乗つてゐて俊子にはそれが可笑しかつた。がそれにも拘はらずふくら肉の、垂り煩な、がつしりしたからだつきに品があつて、劣情ばかりの男には却つて好かれるところがあるやうに思はれた。俊子はちよつと新井の顔を思ひ浮べると不快な氣もちになつた。はじめ新井との話があつたときにも、新井の品行などに目も呉れないで手元の樂なことを、姑のないことに話を纏めてしまつて、そして俊子自身もきれいに過去のことを洗ひ上げて了ふ氣だつた。第一嫉妬がましい氣の起ることなぞもなからうと思つてゐたが、かうして寫眞を見てゐると對手がもう亡くなつてゐてさへも平氣で眺められなかつた。それほど新井を愛してゐるかと思ふと、そんな氣もしなかつた。新井にしたつて家の中の道具くらゐに思つてゐるのだらうし、劣情以外には役立たないとしか思つてゐないらしい——さう俊子は寫眞を手早く箆筒にしまひ込んで考へたりした。——先きの永田へ嫁つたときは、何んでも吃驚りしたやうな氣もちの續きだつたが、新井のところでは却つて落着いて、新井の眼付きさへ見て居れば、大概のことは考へたとほりの新井だつた。

永田と三年同棲してゐるうちよりも、温泉へ行つてからよく永田のことを思ひ出さないうではなかつたが、それも二三月経つとすつかり忘れてしまつた。からだの悪かつた俊子は、提げて通ふ温かい湘南の温泉町に、片側だけに日かげが麗らかに射し込んでゐるのを、毎日のやうに楽しく眺めて通つた二階家が、よく俊子には唯一つの楽しい時のやうな氣がした年の若いくせに氣のつく琵琶歌の先生は、俊子の訪ねてくるころには眞水のすくないこの町の端れまで汲みに行つたのを沸かして、すぐにでも茶を淹れられるやうにしてあつた。或る時二階の窓から顔を出して、浴客の散歩姿の間を縫うてくる若作りな俊子の顔を見ると、手で招いてまで見せたので、よく極りの悪い思ひをして人眼にあやしく映つたりしたが、今から考へるとあともさきもない、あんな圖法螺な、しかし楽しい時はなかつた。

「おつれさへ關はなければ些つと歩きませんか。」

耳近く電車の中で會つたときに囁やいたが、ふとその呼吸づかひさへ懐しい氣がしないではなかつたが、眼を掃るてゐる光三が眼にはひると、俊子はすぐ心を引き緊めることができた。

「いえ、わたしおともは既うできませんの。わるく思はないでくださいな。」

俊子はいくらか凍として言つたが、對手はいつものやうに何度もおじぎをして、あれだけ關係があつたにも拘らず、諦めよく別れてしまつた。いかにも素氣ない氣がしないではなかつたが、それくらゐの事に新井と固めかけた身をしくじ

實家の親戚の手傳ひに行つた温泉の或る大きな料理屋で不圖したことから關係がついて、まる二年といふものを或る呉服屋の旦那の世話になつてゐた。それも實家の母からや釜しく言つてきたので、つい毎月仕送りしたらと言ふことになつてその爲め母親も爲方なしで、金錢づくで、俊子の好き放題にしてゐた。その旦那には本妻もあつたし、他に妾もあつたから、俊子はしまひに少し自棄になつて琵琶歌をならふのだと言つて、町の或る二階にある學生のやうな男のところへ通つてゐるうちに、それが旦那に知れて、温泉場を引上げることになつて、間もないこんどの縁談だつた。それ故面白く可笑しく暮らすことも、みんな温泉場で仕盡したやうな氣がして、こんどは腹を決めて眞摯な暮しをしないと、落着くさきがないやうな氣がした。

「女といふものは男を疲れさせなければ、つまり何んだな、その、思はせ振りつて奴も必要なんだよ。」

旦那だつた何も彼も仕つくした男は、こんなことを言つて下卑た笑ひ聲を立てた。お前のやうな乙な上品めいた、言はば蟲も殺さない顔容をしてゐるものは、それだけで何も彼も胡魔化すことができるとも言つた。——電車で合つた琵琶歌の先生とも、身を固めかけてゐるので、俊子はむしろ他人がましい挨拶をしたに過ぎなかつた。自分でも白々しくできるものだと思つたくらゐだつた。何時も少しばかりの手土産を

つたら——と云ふ氣さへした。

「あの人、誰？」

俊子はさういふ光三を、この子はなぜ人の眼の内を見つめる癖があるのだらうと思ひながら、何んでもない風をした。

「ちよつとした知り合ひですよ。」

「帽子に大學の徽章がついてゐたよ。大學へ行つてゐるんでせう。」

俊子さへ氣のつかないのに、素早い眼だと思つた。まだ何か問ひたさうにしてゐる光三を急がして、すぐ電車を下りた。

俊子は新井には永田へ一度嫁つたことを言つたが、他のことは一切何も話さなかつた。ただ、からだが悪くて温泉にゐたことと、永田とも一年ばかり一緒に居たと左う簡単に話して置いただけだつた。

中野の實家へ行つて一泊して歸へると、新井が縁側へ出て、小火鉢に膠を煮立てて、何か缺けものを繕いでゐるらしかつた。光三が初めて外泊したのが珍らしく、そのためか大きな聲で格子先きから吐鳴つたが、新井は熱心に俯向いて碎片を繕いでゐた。

「唯今、——もつと早くかへりたかつたんですけれど、お母さんが無理に停めるものですから。」

も、このごろの繊細な文様や質にくらべると、まるで別物のやうに變つてゐた。

「カフェなどへ行つても、場末でないかぎりこんな珈琲茶碗なんか使ひはしないよ。しかしどこか古風なところがあつて可笑しくていいぢやないか。」

「ええ、ですけど矢張り繊細なのがようございますわ。何んだかお百姓の茶碗みたいぢやありませんか。」

「さう言へば左うだが、しかし五六年前はまだ家庭なんかに今時のやうに珈琲茶碗なんか使つた家はすくないよ、今ぢや氣の利いた裏長屋だつて用つてゐる家があるけれど……。」

「ぢやそのころハイカラでしたのね。この家は？」

俊子は諷刺めいて言つたつもりではなかつたが、新井はきふに返辭をしなかつた。——寫眞を見てから癖になつて浮んでくる、品のある育ちもわるくないらしい先妻のおぼろげな顔貌が、おぼろげなだけなほ明瞭と俊子の眼を遮ぎつた。男といふものは全で見當の違つたところの子供らしいことをするものだと聞いたことがあつたが、俊子の留守に珈琲を淹れて喫むなどといふことも、そんな思ひ遣りもあるものだといふことに、俊子は不圖氣づいたが、そのせみか先刻立關から這入つて來たときに新井がいくらか狼狽してゐたことや、暫らくして却つて落着いて見せたことなど思ひ浮べた。そんなときに冷笑つて見たい氣もしたが、反對にこんな年中土地賣

俊子は外着のまま縁側へ出たが、新井は、あ、さうかと言つて、やはり膠を筆の穂につけてゐた。

「どうなすつたんですか。」

「珈琲茶碗さ、——淹れようとする、把手から破れてしまつたものだから……。」

俊子は新井がさう言つたまま、やはり熱心にやつてゐるので、あとから爲てもよささうだと思つた。それに珈琲茶碗が此家にあることを初めて知つた。

「わたし初めて見ますわ。どこにあつたのです。」

「もうせんからあるんですよ。」

光三が横合からさう言つたが、新井はうつ向いた人らしい憂鬱な聲でこたへた。

「四五年も使はなかつたが、それでも破れてゐるのは此ばかりなんだ。閑暇だから繼いで見たが、どうだいこれなら大丈夫だらう。」

膠が汚なくハミ出してゐるが、しかしがつしりと繼げてゐた。わざわざ自分が繼がなくともいいのにと何故か俊子は氣に障つた。

「このごろでは此麼無細工な珈琲茶碗なんて最うなくなつたね。これでも以前はかなり新しい方だつたが、時勢つて變なものだね。こんなものにまで推移があるんだから……。」

藍色で呑み口に二本の線があつて、厚手に頑丈なだけで

買のために地圖と睨みつこしてゐる男にも、ほら、しい氣があるものかと、不圖琵琶歌の先生のことまで思ひ出した。

「さあ、ハイカラの方だつたかも知れないね。をかしなハイカラだが……。」

新井もいくらか誰に示すともなく自嘲してみせた。俊子は一體何處にしまつてあつたのだらうと、自分の手のとどかないところのある此家の中を思ひ浮べた。

「でも何處からお出しになつたんですの。わたしこれまでこんな物があることは、少しも知らなかつたのです。」

「高押入れにいろんなものが一杯詰つてゐるのよ。ねお父さん、あそこから出したのでせう。」

光三は押入れの上の、天井ぎはに二尺戸のある高押入れを指差した。火鉢や上敷などの詰つてゐることは知つてゐるが、何しろ大變な埃で手のつけやうがなかつた。どうせ碌なものなからうと思つてゐたが、今になると俊子の見知らない秘密めいた先妻のものが、或ひは思の外積み重ねてあるかも知れないと思つた。

新井はちよつと光三を見たが、不機嫌さうに肯づいてみせた。そして言ひがかりらしい爲方なしに俊子を見て言つた。

「高押入れも一度掃除して置かなきゃいけないな。久しく打つちやつて置いたものだから大變な埃だ。」

「何が入つてゐますの。」

「がらくた物ばかりなんだ。——よく覚えてないがどうせ詰らないものばかりなんだらうよ。」

「わたし氣はついてゐたんですけれど、黙つてお掃除するの何んだし……ちあ、そのうち致しますわ。今日だつてしたつていいんですけれど……。」

「今日はいいよ、お前も疲れてゐるだらうしするから。」

新井はハッキリ止めて置いて、「實家の方はみんな達者かい。」と尋ねた。そして光三が庭の廣いことを仰山に言つて、すぐ新井をつかまへて、

「僕、金魚の卵つてものを初めて見たの。透きとほつた粟粒みたいなものよ。それに小さい金魚の子がたくさん居た。——まるで蓄音機の金針かねはりみたいな。それが一杯に泳いでゐたよ。」

「すこし貰つてくればいいのに、——惜しいことをしたね。」
「ほしかつただけけれど、をぢさんが呉れはしないんだもの。」

「をぢさん、——つて誰のこと？」

新井は俊子と母親と妹きりの家に、そんなをぢさんなぞ會つて聞いたことがないだけに聞き咎めた。

「離れに下宿してゐる方なんです。その人が金魚を飼つてゐるのです。好きで遣つてゐるものですからなかなか分けてくださらないんです。長岡の人で遠縁に當りますの。私立大學

へ行つてゐるんです。」

「ふう、初耳だね。」

新井はかういふと黙つた。

「僕、金魚つてものは、あんな鹽鱈しほたけなんぞ啄つついてゐるものだつてことは、初めて知つたの。外には何んにもやらなくていいんだつて——僕もこれから然しかうしようか知ら？」

光三はそれから、金魚だつて日射病があるとか、米粒は胃腸をコワすとか、聞きかじりのことを喋つて埒がなかつた。

——俊子は何か新井の頭にこだはつてゐることがあるせいで、妙にいつになくむつりしてゐるのだと見て取つたが、やはり泊つて来たのが氣に障つてゐるのだらうと思つた。ひよつとしたら泊つて来てよいかと言つたら、そんなに不機嫌さうにもなく、あ、いいとも、とさう言つて、却つて俊子の留守を喜んでゐた容子さへ見えてゐたのに、どうもやはりしんねりと新井の心持ちの硬さが感じられてならなかつた。——或ひは何か高押入れから搜し出して、さきの妻のことでも憶ひ出したために、(男といふものは存外きちやうめん)に失つた女のことを考へ出すものだ、と言ふより絶えず他の女と自分の女と較べてゐるものだ、と俊子は考へた。——温泉場にあるときでも、留守をすると定つて旦那の機嫌がわるかつたが、いつでも眼慧い俊子にも原因がわからなかつた。それが大して深い魂膽があるものでなく、言はば氣の愠いぐやう

な氣分のつづきで、そのために急になほりさうもなかつた。

——俊子は、新井の氣もちも大方そんなところにあるのだらうと思つた。

「お前のところでは、あの離れをしよつちう人に下宿させてゐるのかい。小じんまりとした勉強するには持つて來いつていふ部屋なんだから——。」

俊子はさう答へると、實家の遣り繰りを棒切れで觸られたやうな氣がして、自分にもなく顔を赧からめた。

「知らない方には一切おかしくないんでございますの。引つかけられたりすることが能くあるさうですから。」

「その方がいいね。専門に食ひつぶす奴があるから。」

「でもそんな人は初めて見てどこか容子が粗野ですから、何となくわかるやうな氣がしますわ。」

「分るよ、そりや——。」

新井の言葉は俊子には鋭くひびいた。離れの六疊には實際どれだけの人が出たり這入つたりしたか分らなかつた。暗い枇杷が屋根を襲うてゐたが、それでも父のゐたころ普請道樂だと言つてゐたほど凝つた建具ではなかつたが、しかし今になると些つと廉くは建たない。——戸袋、押入れ、床の間などにも金目を胡魔化すやうな材料がつかつてあつた。そこへ交る交るさまざまの人が下宿して行つたが、しかしどの人も

居心地のよい部屋のわりに落着かなかつた。どんな理由だかよく分らなかつたが、永田へ嫁に行つてからの俊子には、下宿人の落ちつかないところが能く分つたといふより、腹の底の見え透いた人々をどうして自分があの時分解らなかつたのだらうと思ふと、いつも苦笑された。がその反對にそんなこととの一切分らなかつたあの時分が、いまより綺麗だとは考へられなかつた。——西日のさす冬でも温かい部屋の中で、實際ほとんど下宿人のみんなが俊子の手や心にふれることばかりに専心してゐたことも、よく分つた。今になるとそれも尤もなことだと思ふが、しかし男といふものは邪氣のあるやうでないものだとも、考へた。

晩食後、新井が依然むつりしてゐるので、俊子も黙つてゐた。光三は相滌あはらす俊子の肩さきにまつはりついて、煩さくてならなかつたが、時が時だしなるべく避けるやうにしたがしまひに新井の方で煩さがつて、

「すこし復習ふくしゅうつたらどうだ。煩さい！」

さう聲を荒くしたが、光三は新井に向つて沸々言ひながら、

やつと俊子の胸から手を出した。俊子が擦ぐつたがるとなほ面白がるのも子供らしくない別の人間にいぢられてゐるやうで、吻つとして俊子にはだけけた白い胸元を正した。

「父親を睨む奴があるか？」

新井がかう言つて、怒つてゐる光三の顔を見つめると、口

惜しさうに後手を組んで、びつしりびつしりと指を折つて、音をさせた。俊子は新井がもつと怒り出してくれればいいと思つた。

「睨んであやしないよ。」

「口答へする奴があるか？」

「だつて——。」

俊子はしかたなしに立つて光三の肩に手をやつて、「さあ行つておやすみなさいな。これから煩さくしなければいいんだし、それにお母さんがよく謝まつて上げとくから。」さういふと、光三はしくしく泣き出した。「あいつの泣き出す聲つたら、まるで一人前の大人が泣くやうだよ。」新井が何日かさう言つたが、全く厭らしい泣聲で可愛らしくも哀れでもなく、むしろ不快をともし陰氣さがあつた。

「着物を着かへてね。」

俊子は寢間へ光三を連れて行つて、床をとると、すぐ光三を入れた。——昨夜、實家で寝る前にも甘つたれて、しまひに煩さくなつたので、思はず手荒く突き飛ばしたといふ氣ではなかつたが、煙草盆に躓つて光三が倒れた。それでも起直つて煩さくむしやぶりついて來たので、疝にさはつてこんどは意識的に突き飛ばした。それが障子際へ叩きつけられたのにも拘らず、却つて興味がつて何度もそんなことを繰り返した。しまひに思はず平手で一つそつとやつたつもりだつた。

「そのうちにゆつくり温泉へでも行つて見ようぢやないか。お前のゐたといふ伊豆あたりへでも——。」

「ええ、よござんすね、けれども最うあちらは温か過ぎはしませんでせうか？ 東京とは十度くらゐ違つてゐるんですから。」

「温かい方はかまはないよ。さむいよりいいから。」

俊子は心であの湘南へは行きたくなかつたが、若し夫に腹を見られたりしてはと思つて平氣で答へたものの、あちこちに知り合ひがあつたりして、煩さいことを躰ぎ出されはしないかといふ危懼がすぐ起つた。も一つ先きから話はあつたやうなもの、新井に何か下地のある考へがあつて言ひ出したのではないかと疑はれた。いつも黙つて一切合切根を掘つてものの正體をつきとめるまでは、何も言はず眼と心で捜る新井のことだけに、俊子の胸や心に有り餘るほど苦手なところも多かつた。しかし今日の話の模様では動機が動機ゆゑにそんなに深い氣もちが潜んでゐないやうに思はれたが、それと言つてもどう變化つて躰ぎつけないでもない。——

「でもお仕事の方が片づかないと行けないぢやないんですか。」

さう誘ひを出して見たが、常から物質的に強い男だけに遊びの方にも強かつた。

「なあに、關はないよ、それぢや行くとしよう、——あれも

が：光三は有繫に泣き出して、あとの機嫌とりが面倒だつた。何を言つても聞かなかつた。そのくせ直ぐに眠入つてしまふと、子供はもつた経験はないが、眠てゐる頬をいくら憎らしくても抓る氣にはならなかつた。「あの子にはもう懲々よ。」さう俊子は母親にいふと、「厭らしい子だがあんな子は却つてうまくなつさせることができるものだよ。そこが骨の折れるところさ。」何事もなく言つたが、母親には光三の氣性がよく判つてゐないらしかつた。

俊子は光三を寝かせて夫の居間へくると、新井はそんなに不機嫌さうでもなく、むしろ宜いほうだつた。俊子は心でうなづくことができた。

「もう寝たか？」

「ええ横になるとすぐ……。」

新井は暫らく黙つて眞面目な顔をしてゐたが、俊子はその故意とらしい眞面目さの中に何があるかといふことを、むしろ冷淡な氣もちで推し測ることができた。俊子のかんじてゐた人生の微妙さの中では、極めてこんな男のくそまじめさが過去のもの影と一しよに頭を掠めた。そんなとき俊子はいつでも對手に惚れてゐてもやはりだまして見ようと言ふ好奇心が湧いた。半分は自分自身のため、又の半分はだまして見ようといふ氣が手傳つてゐたのである。それが夫と定めてもやはり急所々々角が出てならなかつた。

連れて行かすばなるまい——。

「その方がよござんす。」

俊子のべつに嬉しさうにもしないのを、この女のいつも落着いてゐるくせだと思つてゐるらしい新井は、べつに氣にも止めなかつた。俊子は不快な氣もちで別に一人で寝たいと思つたほどだつたが、そんな譯にもゆかなかつた。——夢ともうつつともなく、何時の間にか湘南へ行つて例の千物屋の二階の、琵琶歌の先生の居間で、若いくせに年寄りじみた先生と話してゐるかと思ふと、光三が表を通りかかつて二階の窓を見上げてゐるのに慌てて障子を閉めると、眼がさめて、光三が廁へ行くために俊子を呼んでゐる聲に氣がついた。

海岸通りにはまだ海水浴の客はなかつたが、初夏らしい湿つぽい聲をしたものが、松並木を砥ぐ潮風のまにまに啼いてゐた。すぐ目の前の樹にあるかと思はれる啼聲は、殆ど際限もなく遠いところから起つてゐるので、光三は無駄足をつかつて、それでもあちこちを馳つてゐた。

「へえ、あれが蟬かい。——それにしてもまだ蟬の啼くには早すぎるぢやないか。」

「こちらは東京とは一と月くらゐ何んでも早いんです。三月には蟻が這ひ出すんですもの。」

「ぢや蟬もべつに早くはないわけだ。蟬の啼くのをきいてあ

でも、やはり東京を離れてゐるといふことがハッキリしてい
いね。」

新井はこちらへ来てから上機嫌だつた。しかし俊子はなる
べく町を歩く機会を少数くして、誘はれて爲方のないときの
散歩は、いつも海岸通りか町端れを選んだ。大通りは軒並み
に知つてゐるし、うっかり挨拶でもされたらといふ懸念も手
傳つて、去年の庭の廣い旅館の方へはわざと行かないで、
松原の旅館が親切だと言つて泊つた。幸ひ知り合ひの女中も
なかつたが、番頭の顔に見覚えがあるやうな氣がしたので、
わざと此土地は初めてだと言つて置いた。——かうして散歩
してゐても眼ざとく通行人を物色するだけでも俊子は寛りと
した氣もちにならなかつた。ふとしたことから手なづけた表
通りの足袋屋の白犬までも、そんな恰好の犬を見るたびに久
振りだといふふうには飛びついては來はしないかと、空恐ろし
く氣懸りだつた。あんなに陽氣にしてゐたこの土地が一年も
経たないうちにこんな居苦しい氣もちに趁はれて歩くなどと
いふことも、行末が分らない人間のことでも、餘りに違ひ過
ぎてゐるのを今さら振り顧られた。
「なるほど冬は温かさうだね。」
「ええ、そりや温かでございます。まるで冬知らずですも
の。」

ほかほかした松林の中に、幾組かの若い男女が散歩づかれ

へた。この間からなるべく外へ出さないやうに仕向けてゐた
のは、あんな人柄だから何を聞き出すかも知れないと思つた
からである。——それなのに不意に出かけたのも、自分の眼
の届かないせゐだと、些つと口惜しいやうな氣もした。

「松島屋といふ太物屋はこちらへはひりませうか知ら。」

「いいえ、こちらは北村の方が來つて居りますの。」

「奥さまはよくござんじでございますわね。」

「いえね、表でもよつと見かけたものですから鳥渡おたづね
したんです。知つてゐるものですか？　こちらは初めてです
もの。」

俊子は女中が曖昧に笑ふので、何だか知つたか振りがして
見たかつた。が餘り立入つて物言ひも危ないやうな氣がして
舌を出してみたいやうな巫山戯た氣がした。——海の方では
おと汽笛がものうげに鳴つた。

「熱海へのおしまひの船ね。」

女中は着物をたたみながら、ちよつと可愛い上眼づかひを
して、「まあ、ほんとによくござんじですね。十日もあらしつ
ても時間の分らない方がありますの。汽車だの汽船だのの時
間はいくらくも覚えて置かうと思つても忘れるものですよ
に、奥さまは、まあ——。」と言つた。

「だつてもう四日もあるんですもの。」
俊子は熱海からよく小田原へ出て東京へ出たことを思ひ出

の足を投げ出して、碧い海づらを眺めてゐるのが、全く陽氣
さうに見えた。が、俊子の不安ばかりに刺戟されてゐる心は
は、なるべく早く歸つて、人目のない旅館でゆつくり憩みた
い望みで一杯になつて、何を見ても楽しみどころではなかつ
た。

「あれはみんな干魚にするのかね。あれちや全で蠅の中で干
してゐるやうなもんだね。」

「こちらでは註文しておく、干魚はすぐできるんです。ま
あ大へんな蠅ですわ。」

鱈や鯛が銀紙をならべたやうに干してゐるのに、どこから
集つて來たのであらう。蛇ほどの蒼蠅がめいめい羽根をぶむ
ぶむさせながら、紙鳶のやうになつてゐた。俊子はそんな
ものにも脅かされて了つて、かへるときには少し註文しとく
といひねなどいふ新井の言葉もそこを通り過ぎた。

宿へ着くと俊子は初めて氣を弛めることができたかはり、
きふに草臥れて湯にも入らなかつた。同宿の人は大概知らな
い人ばかりなのに氣がゆるせて、すこし疲れ過ぎたと言つ
て、涼しいつげの木の青いやつの覗く圓窓の下で一寝入りし
た。眼がさめたときは日暮れに近かつたが、新井は湯にでも
入りに行つたのか居なかつた。光三はと見るとこれもあな
なかつた。俊子は起き上ると、そこへ女中が這入つて來たので尋
ねると、ちよいと町までと言つてお出掛けになりましたと答

して、そのたびにかなり餘裕をつくつて樂しかつたことを考
へ出した。今だつて餘裕はあるがこれは新井の金で、あの自
分は自分のからだに就いた金のやうに思はれた。金にもこん
な區別があるか知ら？　と可笑しく思つた。——太物屋と別
れ話の出たときに「そりやあなたはわたしにも未練はあるん
でせうけれど、内實はわたしにこれまで下すつたお金にもみ
れんがあるよ。男つてものはお金にみれんがあるのと、女
にみれんがあるのと一しよにしてゐるんですよ。女の方ちや
根が女だからお金にみれんがあるんだとばかり考へるんで
す。」と左ういふと、さすがの男もそりやよく當つたと言つて
笑つてゐたが、別れ際のよい男だつた。——俊子はこの土地
で何も彼も仕盡したあげくに、かうして遣つて來ても誰一人
それと氣のつかないところなぞ、ときどき人間は迂濶なもの
だとたかを括つてせせら笑ひたいやうな氣になつた。それに
太物屋にでも表の通りで出會したら、あの人は一たいどんな
顔をするだらうと思つても見た。

女中と入れかはりに、新井が光三と一しよにかへつて來た
が、光三はすぐ、

「明日運動會があるんだつて——この町と村との聯合運動會
なんですつて。つれて行つて頂戴。」

と言つてきかなかつた。さう言へばそんな季節か知らと思
つたが、ふと鯛づくめの料理を考へると、毎年お祭のやうな

運動會のあることを思ひ出した。
「あんな人出はお母さんは頭が痛んできらひよ。それにハダレたりするとこまるから止した方がいわ。東京で最うしてしまつたぢやないの。」

「だつて僕、田舎の運動會つてもものを見たことがないんだもの。どこかきつと變つてゐるよ。」

「かはつてはあませんよ。どこだつて同じですよ。」
が、新井が横合ひから「退屈さましに行つて見るのもいいぢやないか。町の子供はもうけふから豫習のやうなことを遣つてさわいであるのを見ると、大人だつて見たくなるよ。」

さう言つて足首をさすつた。——この土地の運動會は子供のためより町の人の退屈さましのやうなもので、實際近村からも人が集つて祭禮と同じ騒がしい賑やかさだつた。俊子は去年は待合の子をつれて出かけたが、心の浮くやうな砂埃の立つた町外の景色も、いま考へると慄鬱しく頭も濁るやうな氣がした。それに誰かに見付かるに定つてゐるし行つてはならないと思つた。

「わたしはさわがしくて厭なんです。ぢやお父さんにつれて行つてもらつたらいいでせう。」

俊子は光三にさういふと、呼鈴をならして飯をいそがせた。
「お前のあたといふ宿屋は此處とくらべると大へん立派ぢや

かれるやうになつたでせう。」

「え、何處でもよ。」

「ぢや、ひるま大風館へ行つたのは、初めつからお父さんがあそこを尋ねて行つたのかね。」

「途中でたづねてやつと分つたくらゐなの。あそこは今でも一人でゆけないやうな氣がするの。」

「ぢや、ただ前を素通りしただけなんですか。」

「さうなの。」

俊子は吻と息をついた。通つただけなら關はない！ そんな氣がした。光三はなほ俊子に甘えかかつて明日は是非つれて行つてくれと言つたが、この子まで人の氣も知らないでと思つて、手をハネ退けた。どういふものか光三は俊子から邪険にされるほどあとを慕つて、何んでも用事を聞いて歩いた。それが俊子にはなほいやらしかつた。女中の前でもお母さんなどと故意とあまへるのも、この子の氣もちの淺猿しさが透いて見えるやうで厭だつた。

新井が不圖こんなことを言つた。

「お前は妙にこちらへ來てから外出をしないやうにしてゐるね。ここは東京と異ふから歩いたつて、そのままの着物でも關はないぢやないか。」

散歩をいやだと言つたので新井は色をつくつて言つた。俊子は自分の顔が、赧くなつたか知らと思ひながら言つた。

ないか。ありや一流だといふぜ？ なぜあそこにしなかつたのか、全くこことくらべものにならないほど庭なんか廣くていいよ。」

やはりあそこを見に行つたのだ。黙つてする遣口がにくらしく腹立たしかつた。

「わたしあそこには暫らくきやゐなくて、すぐ町で室屋借りをして自炊してゐたんです。あそこは客もいいせゐでせうが、取扱ひがひどいんですわ。だから止しておいたのです。」
新井は考へてゐたが、そんなところもあるにはあるが……しかし立派だ。」

さう言つて飯を待遠しがつた。

「わざわざ見にあらしたんですか。あんなに遠くまで……」
「いやね、つい廻り道で出てしまつて、氣がつくと大風館ぢやないか？」

俊子は新井の語尾にあせり氣味なところのあるのを見て取つて、さぐりを入れられてゐるといふ氣がはつきり感じられた。が、新井はすぐそれをかんづいたのか、「二流どころが却つて親切でゐるごちがよくていいかも知れないよ。」と言つて、自分で立つて呼鈴をならした。

晩、新井の入浴してゐる間に、俊子は光三を呼んで、わざと優しい聲をして、兩肩に手をやつて涼しい縁側で言つた。
「光ちゃんはこちらが好きになつたの。もう表はひとりで歩

「そんな氣ぢやないんですけれど……唯靜かになつてありやよい氣もちなんですの。さうおつしやるとわたし厭味を言はれるやうな氣がしてならないんでございます。」

「だつて些つとも外出をしないで、外してばかりゐるぢやないか？」

「でも出る氣がないんですもの。」

俊子は剛情にさう言ひ張つてみたが、新井は「それなら仕方がないさ。」と穩當に言つた。俊子は妙につツかかた氣がした。

「わたし故意と出かけないわけぢやないんです。」

新井は黙つてゐたが、ふいと立つて庭へ出て行つた。俊子は自棄な氣もちで光三が何か慰さめ顔に囁するのを耳騒がしく感じながら、新井の家へ來てから初めて諍ひを忌々しく感じた。

翌日は晴れあがつて女中まで交替で運動會へ出掛るのだと言つて、晝のお伺ひを何日になく早く聞きに來たりして、俊子は朝から落着けなかつた。

「ぢや出掛けようぢやないか。」

新井は羽織を引かけながら、まだ鏡臺の前に濡手拭で襟足を濕してゐる俊子の前へ來て言つた。光三は俊子の外出着を一隅へ着よいやうに積みかさねてゐるのが、なほ俊子をいら立たしく悲しくさへさせた。

「ええ、でもこの儘ちや出られはしませんわ。——光ちゃんそれをいぢくらないで頂戴。」

さう光三を優しく叱つて置いたが、何だ子供らしくもない女の着物なぞをいぢくつたりして？」新井は傍から又口を添へた。何時でも着られるやうに一とところに集めておくんだ。さう光三は長い帯をしつしつと鳴らせながら言つた。

海岸べりで景氣のよい花火がぼんぼん騰つて、そのたびに大勢の人々のわめき騒ぐ聲が起つた。俊子はそのたびに胸も冷える不快な思ひに閉ぢられて了つて、指さきに力もなく、刷けない白粉がべたべたして氣もちが悪かつた。

「そこに立つてゐらつしやると、わたし困りますわ。」

俊子は何だかけふの外出さきで、誰かにつかまりはしないか？ それだけでも運の盡のやうな氣がしてならなかつた。濁つた砂ほこりの彼方にいろいろな人の顔がさし覗いて、あのころでさへ町の人からしやれ者のやうに異端視せられてゐたから、けふ會つたら決つと後指差されるだらう、——それをちかに新井が仕組んだやうに見えるのも、こんどの温泉行の本統のやうに思はれて、あんなに心を入れ換へ、じつくりと一人前の暮しに辿りついてゐる自分の將來が、もう滅茶苦茶になるやうな氣がした。俊子は腹立たしさと、も一つ自棄な糞度胸とで、やつと帯を締めながら鏡をさし覗くと、白粉にむらがあつて、それを見ただけでもかつとして了つた。

「早くしてくれないか。」

洋杖を持つた新井の姿がきふに何か人間を折檻する男のやうで、黒檀の洋杖まで硬苦しげな手痛い音を敷石の上にひびかせた。あんなにして自分を引き摺り出さないでもよさうだと思つて見たせゐか、これまで知つた男にない慘酷らしげな額の詰つた顔が、鏡の中でいらしく映つた。

「そんなに急がせたつて駄目ですよ。」

つい氣が焦つて光三の手さきを突き拂つた。新井の眼前だつたが、なに、鬨ふものかといふ太々しい氣になつてゐた。なるべく地味なつくりをして出て、パラソルを深くしたがるでも人眼に立つて、パラソルを深くさしたので暑くはなつてならなかつた。——通りの人込みを避けて裏へ出て、會場へ出た。風船賣や氷店などがぎつしりと詰め合つて、顔見知りの人があちこちに雜つて、そのたびに一々胸にこたへるせゐか、光三を引いてゐる掌がびつしより汗を掻いて、氣分悪かつた。

「ずるぶん出たものだ。」

あんな靜かな町や近村によくこれだけの人が出揃つたものだ。——新井は往來の女に眼をつけてゐるのを、俊子は氣づいて認めたが、不圖見たことのある女だと思つたのが、れいの瑠璃ちゃんといふ出島屋にゐた藝者とも女中とも分らぬ女だつた。俊子のゐたころもその風儀の悪い町の中では瑠璃ちゃん

やんは王女のやうに振舞つて、しまひに何とかいふ博士の息子と別荘住ひしてゐた。ふとり肉で眼の大きな女學生風なそれであつて女優とも肯づける顔立ちは、すぐ新井の眼にふれて思はず振りかへつたりしたのを、俊子はにがしく加之も可笑しい氣もちでながめた。この女には見られずに済んだがいつも我儘放題で暢氣に温泉につかつて同年輩の男と一しよにゐるのが、今のちやんとした自分にくらべて、亂次なく、あひかはらずの女だと輕蔑するやうな氣になつた。

ところどころに二三日前からこの町へ入つて來た朝鮮人の飴賣が、白い觀世振りを五六本、客の前へ突き出して何か咄ひながら鬨引きをさせてゐたが、どれも當らないらしかつた。

「ぐるぐる廻つて、一と廻り。男か女か子ができて……。」

俊子はその群衆のそばへ寄らうとする光三の手をぐいとわざと邪険に引いて、歩き出したとき不意に又花火が上つたので、俊子は聲を立てるほど吃驚して思はず新井の手につかまつた。

「氣が小さいぢやないか？」

新井にさう言はれたときに、俊子は頭痛を催した。が、會場ではそれぞれ遊戯がはじまつた。走つたり飛んだりしてゐる子供が、疲れてきよときよとしてゐる俊子の眼には、むしろぼんやりとしか映らなかつた。あたりを知つてゐる人もゐる

かつた。たゞ、むやみに暑苦しく呼吸をすると吹き返されさうな生熱い人いきれと目の匂ひに蒸されたあたりには、酸ばい食物の臭ひが走つてちくりと鼻さきを刺戟した。そのためにも嘔氣がつづいた。——俊子は何かの赤い旗がはたはた動いてゐるのを自分の頭の中にあるやうな思ひで、そればかり茫乎と眺めてゐた。そのときどうしたのか向側の人垣のあたりが少しづつ崩れはじめ、何か叫びごゑらしいものさへ起つた。蟻の穴をほじくつて散つた蟻のやうに十分間後には、向側の人山の崩れが波紋のやうに次第に大きく、次第に亂次なく、しまひには反對の側までも散りはじめた。間もなく俊子のまはりの人人まで少しづつ動き出した。——その時は全く向側の人垣は完全にくづれた。俊子はうしろのめりになりさうな自分をやつとささへると、うしろでも叫びごゑが起つた。

「何だらう？」

新井がさう言つて誰かに聞かうとしたが、そのときには場内に巡査が走り出した。そしてすぐ近くの蜜柑山の方へ人なだれが次第に餘勢を盛つて、ながれ出した。もうとくに運動は中止になつた。そしてみんな蜜柑山の低い平地をさして走つた。一とかたまりの人が走ると、それに又新たに一と群れがさそはれ出したのが、最後に大群衆になつて騒がしく喚きながら走り出した。俊子はそんな大勢の頭数のうごくのを見

ると、さつきから耐へてゐた眩暈が急に引き摺り出されさうで、こんどは前のめりにならうとした。——先刻の朝鮮人がどこかの子供をさらつて、山へ逃げ出したのだと言ふものが多かつた。實際、山の方へ群衆はみな馳け登つた。そろばん玉のやうに詰つた人々は山平を込めて、喚き立てるを上げた。俊子は縄張りの杭につかまつてゐたが、その縄がぐらぐら動くので體軀までうごいた。そのとき初めて自分の名を呼ばれて、新井にもたれて歩き出した。——「あれは誰だい、お前のそばへやつて来たのは？」俊子は自分の耳を疑つて、「誰とも話はしなかつたのですのに、へんなことを仰いますわね。」

さう言つて気がつくつと、いろんな人が自分の顔を覗き込んでゐる。——黄ろい皮膚が一杯に張りつめられてゐるやうな気がした。宿につくとほつと呼吸をついて、今朝から張りつめた気がゆるんで、初めて涼しい思ひをした。が、新井はむんずりした顔に冷笑をうかべながら、寝そべつてじろじろ俊子を尻眼にかけた。俊子はあのととき何か下手なことを言ひはしなかつたか？と、さう考へたが「ひとりぢやないんです。」ときつぱり言つたきりだつたこと、太物屋もそれきりあの男らしく氣を利かしたのだつた。——が、眼前に新井の溢り切つてゐる顔を見ると、疲れてしまひには倒れさうになつたあの時だけに、ひよつとしたら見付つたかも知れないと思

つた。

「明日あたり歸らうと思ふんだ。しかしお前はまだゐるつもりかい。」

「歸つてもよござんすね。こんなに暑くつては？」

俊子はふと新井を見たが、新井は微笑つて黙つてゐた。それが俊子には氣味わるかつた。何んでもあけすけに言つてくれないで、いつも一分試しにするのが男でもないと思つた。それにしても早く此町を切り上げて、ゆつくりと手足を延して寝ころんで居られる東京へかへりたいと思つた。こんど歸つたらこんな危険な土地に近づきまい、——そしてやはり最初の決心のやうに身を固めようと思つた。どんな男だつて同じだといふ氣もあつたが、新井の一風變つた遣口は、ひしひしと骨に沁みるやうな氣がした。

寝る前に一浴したが、相變らず光三が一しよに入りたがつた。そのしつこさも、どうやら此頃になつて新井によく肖てゐるところが多かつた。

翌朝、自動車を迎へに來たときに、やつとこの土地へ來てから初めて安心が出來た。早く歸京したいといふ心持ちは何となく新井の不機嫌さうにしてゐると較べては、氣懸りではあつたが、歸京すれば何んでも言ひ遁れができることを信じてゐたから、氣もちは樂だつた。「干物はどうしたんだ。」

新井は思ひ出して干魚のことを言つたが、俊子は出かけなかつたので、註文してもなかつたと答へた。

自動車が本通りへ出ると、れいの毎日通つた二階屋に青い伊豫簾がかつて西洋葵の花が一鉢出されてあつた。西日に焼けた疊の日影を趁つて止まる蠅を氣にしなが、我儘を言つて若い學生を困らしたことが、その窓を見上げたときに思ひ出された。全く俊子は何も彼も……心もからだも彼の二階家で濫ひ果して了つたやうで、懐しい氣で今は反對に生涯再度と訪ねて來る機會とでもないこの町を振り顧つた。そしてどんなにしても身を固めたいと深い決心をした。

笛吹く人

寺詣りの歸りらしい女車の簾の中から、靜かな優しい聲がした。供のものは簾をかかげそば近く寄りそつた。春のことで中から美しい稚兒の顔があんず色の頬をほつそりとあらはした。

「あれは何んです。あの男が糸つけて持つてゐるものは？」

供のものは主人の瞳の向いた方を眺めた。その埃っぽい日向の花影に一人の男が跼みながら、糸で結んだ小さい生きものの羽根の鳴るのを面白さうに聞きながしてゐた。生きものは何んであるか判らない、——ただ、ぶむぶむと弓ひくやうに鳴つてゐる糸のさきの遠い蟲であつた。

「尋ねてまゐりませうか、ここではわかり兼ねるやうでございます。」

「尋ねて見よ。」

供のものは直ぐ男の前へ行つた。そして糸のさきの生きものを眺めた。が、ついぞ見たこともない美しい黄金色の羽根のある蟲であつた。糸を腰につけたまま圓を糸がいては、明るい光の中を舞うてゐる。——

「何ぢや、これは？」

「これか？」

男は供のものに怖ぢもせずゆつくりとその顔を見返しなから、

「蛇ぢや。」

と言葉すくなく答へた。

「それにしても珍らしい蛇ぢやの。われらの御主人、それを眺めたいとの仰せであるが、その身にあまる榮あることゆゑ、行きてお見せにならぬか。」

男は女車の方をながめた。美しい瞳はまたたきもせず蛇の上にあつた。男はほほゑんで日向くさいからだを起しかけ、その蛇を持ち、

「お見せ申してあげよう。」

供はこの男を女車の近くへ呼んだ。稚兒さんは黄金色のからだをしてゐる蛇が旺んに圓を糸がいてゐるのを見ると、もそつと近くへと言つた。

「針をもつて居りますゆゑ、それはかなひません。」

男の眼はあんず色の頬の上を這うてゐる。——稚兒さんは供のものに、蛇がほしいと言はれた。また、あのやうな美しい蛇は見たことがないとも言つた。

男はわらひながら、その糸を稚兒さんの細い手に持たせ、「おもちなさいませ。」と言つた。

女車は間もなくうごいた。稚兒さんは優しい瞳でその珍らしいものを呉れた男を眺め過ぎた。が、供のものの中の一人が、大柑子を三つ紙につつんで男の手にもたせ、これは上からぢやと言つた。

「よいお慰めになつて供のものも喜んでゐるところだ。」

男は大柑子の匂ひをかいで別段嬉しさうにもせず、微笑つて再び花影のうつらうつらとしてゐる寺つづきの日向に跼んでゐた。大柑子の匂ひは激しい春光の中を玉なす香氣を射りつけてゐた。男はその香氣にあてられたばかりではないが、うつとりと女車のあとに立つ埃の行方をながめた。すだれから迂り出た杏いろの頬から、何氣なく漏れたあどけない子供らしい微笑みが、まだ此の埃の奥にあでやかな瞳を冴冴させてゐる。——男は低い溜息をもらした。そして大柑子を手の上に乗せながら、相滌らずぼんやりと遠いところを眺めてゐる。

そのとき男の眼に由縁あるらしい忍び歩きの供をつれた女房の、その一むれがこれも詣でがへりらしく歩いてくるのを

見た。かれはその女房のあでやかな姿をひと目みると、むしろ悲しげな顔をした。かれには左ういふ世に美しいものを見るのが、悲しかつたらしかつたのである。それが自分と生涯の間に關係ある筈のないことが、なほさら悲哀の情を増してくるのであつた。

が、男はそのとき女房の供のものが自分の方へ近づいてくるのを見た。何の用事があるだらうと思つたが、さりげなく大柑子をうしろ手に隠した。

「おたづね申しますが、このあたりに清い水のあるところを御存じはないか、一塵を交へない清い水をわれら尋ねてゐるものでござるが……。」

「清い水？——」

男は水に近いあたりを考へて見たが、糸井戸にも遠く、築地の流れは飲めなかつた。五六町ゆけば飲み水はあるが、さしあたり此處にはない——

「このあたりには水とてはござらぬ。お氣の毒！」

供のものは當惑した顔をして、頭を掻きながら、

「われら御主人の、不意のおん喉乾きに要るのぢやが困つたの。」

「では柑子のやうなものはいかがでございますか？」

供のものは、「柑子あらば奇蹟も同様、この春の半ばにそれを望むことができたなら、何のわれら困ることがあらうぞ。」

供のものは稍々慍つたやうな顔容までした。が、男は例の大柑子を一つ手に乗せ、供のものに持たせた。
 「季節外れではあるが、香もこのとほり佳い、ご主人にお侑めなさい。おん喉の乾きもをさまるであらう。」
 供のものは呆然としてこの男を顧みた。男は平氣で早く持ちなされい、われら今ここでお稚兒さんからいただいた大柑子でござると言つた。

「これはかたじけなし、御主人にさし上げるでござらう。」
 供のものは去つたが、女房は男の方へ向いて挨拶をした。男もていねいにそれを返したが、女房が近づいたときに、
 「いづくの方ぞ、話しておきませ。」

と、その藪がましい眼をしばたいた。男はうつとりとそれを見返したが、ただ微笑つたまま、
 「われらお名乗り申し上げるまでもない青侍でございます。柑子のご所望ならばいつにてもお聞かせください。」

さう言つて男はがつしりしたからだを起した。
 「まあ、柑子はあれでたくさんでございますが、おところだけでもお聞かせ置き下さい。」

「そんなところなど持つものではござりませぬ。」
 女房は去るときに、供のものに三反の絹を持たせ、男の前に置いたが、男はべつに嬉しさうにもせず眼にふれもしなかつた。それよりも男のともすると荒々しくなる眼付には、露

初更の春夜である。

男はとある橋の上まで来かつたときに、ひどく酔歩が亂れてゐることを感じた。心は愉快げに波打ち何か巫山戯たい氣もちになつてゐた。男は橋のらんかんに靠れながら程なく通りかかる一人の女に目をとめた。あきらかに彼れの眼底にその女の身と心をとらへる機會が、その女自身でもつくつてゐるやうにさへ思はれるほど、女はゆつくりと歩いてゆくのを見た。かれはそこで小石を澤山ひろひながら身につけ、らんかんに跨り身を川に投げようとして見せた。

「……………」
 女はしづかに笑つて見せた。

かれはそれから黙つて女のあとへ連れ立ち、或ひは女にさき立つても見せたが、女はやはり男のあとに尾いて歩いた。疑ふべくもない豊麗に近いからだをもちらした彼女を男は完きまで心にゑがいて見た。それが既に己れに手近いところに鬱然たる白裸をきつてゐるとしか思はれなかつた。かれは女のそば近く寄つて行つた。

「いづくへ罷られる……………」
 男はすぐ賤しい感じを左う言ひながら感じたが、しかし女にはまだ初々しさがあるやうな氣がした。しかも女は答へずにしづしづ歩いてゐる——
 「われらとても一人、——寺門のあたりへまゐられぬか。」

骨な、何かにすがらうとするらしい、さもしい心の悶えたあたりさまが、女房の、世にもしなした手やゑりくびのあたりにじりついてゐた。

「ご縁あらばおあひ申す。」

男はかう言つて左の耳の下にほくろのある女房にあたまをさげた。女房は供のものに取巻かれて埃の中に消えた。男の眼には春らしい埃の中にしばらく虹のやうな色のある姿が、花かげの下にうららかに照りそひ、次第に遠退いて行くのが見えた。

「ついぞ見たことのない女房だ。」

男はあのやうな女房がまだ一度も目にふれずにあつたこと、さういふ美しいもののある此世を暫らく楽しく感じた。この世にはまだまだ目にふれぬ美女があることを思うたが、しかし彼は、又あさましく顔色を沈ませた。かれはさういふ美しいものの世界に身と心とを入れることのできさうもない、本來の荒々しい己れの心をかへり見たとき、かれは何か冷然として物怒りしてゐるやうな顔付きをした。——が、かれはしばらくの後に、今日は佳いことのある日だと思つた。二人の美しいものにふれたやうな男の心には、荒唐のきざしと、また、優婉のけはひとを兼ねたものが宿つてゐることを、男はやさしく身づからを護るきもちになつてゐた。

女はまだ黙つてゐた。そのぼかんとしてゐる顔付の中には特有な、或る目まぐるしい情痴を唆るものはあつたが、一切を咎めるきびしさがなかつた。まるく長い、そして垂れてゐる頬のあたりに星ぞらのおかるみが、ひとすぢ落ちかかつて艶めかしかつた。男は一尺ほどそば近くよりそつたときに、手首をぐいと掴んだがその手首はぐんなりとむしろ靠れかかるそれらしいものさへ持つてゐたのである。同時に女からははよろよろとよろめいた。

「雨にはならぬの。」

男は左うたづねた。春夜のそらには星が一杯にきらつてゐる。

「ええ。」
 「まゐれ。」

男のこゑは左う女をきゆつと締めつけるものを有ち、それで鞭打たれた女は依然しづしづあるいた。

「なぜ身を投げようとなされましたか？ 川には水もあのやうに充ちてゐたのにわたしおどろきました。」

女はかういふと、くすくす笑ひをした。蒙昧の純な半ば睡つてゐるやうな表情があつた。

「おん身さまゆゑぢや、あかぬ世を死なうとしたのも。」
 「うそ！」

女は寺門のかたはらの花かげで、膝を立てて美しくもしや

がんだ。男はそれを眺めたときに、絹を女の前にさらけ出し事もなげに言った。

「お持ちあれ。」

女は絹に手をふれて呆然とした。夜目にもねんばりした鬱した光は蜘蛛の網のやうに光つて見えたのである。

「このやうな品ものは身にあまり恐ろしいくらゐでございませ。」

「何の。下着になどして置くのだ。あやしい品ではない。」

女は絹に頬ずりをして喜んだが、男はさびしさうにそれを眺めた。——白い埃の中にきた美しいもののがけが、いとなくかれの胸のあたりに描かれた。お名乗りくだされませ。」女房はさう言ひ、品のある腫を投げた。あんな品のある腫付のなかに、男は得も言はれぬ情痴の高貴さをつくつく感じた、——にも拘はらず眼前にあるは唯の一介の肢體にすぎなかつた。

「このあたりであまりお見受けせぬ方のやうですが……。」

「わしかの。」

男はさもしく笑つた。

「わしはこのあたりの者ではない、他用あつて来たばかりぢや。ただの、青侍一匹にすぎぬ。」

男は女の身にそつた。心とは反對にこの女のからだが可愛かつた。が、心ではこの女をにくみ賤しんだ。女は絹をかか

つた。男はあちこちを窺うてゐたが、どこの家も一寸の隙間もない固い戸締りがしてあり、屋後に皓然たる月あかりがあつた。月あかりの寒さ！ 男は初めてそれを感じたくらゐに冷たい月あかりの肌身に逼るのを厭うた。

男が家々のはづれの、露深いところに出たときに今まで遠くにしてゐたらしく思はれた笛の音が、森かげから卒然として聞えた。笛の音色は正しくうつとりするくらゐである。男はその笛の音のする方へ歩き出した。一つはこんな佳い月夜にぬくぬくと笛を弄する憎みと、も一つは、あまりに快よい調べとの二つが森をひと廻りさせ、その笛聲のぬしに近づけた。

「何ものぞ。」

男の心は第一にさう呟いた。男は森かげで笛のぬしの衣物をちらと目に入れると、すぐ己れのものにする氣になつた。指貫の股立ち取り上げ、絹の狩衣を着、ゆつたりと下着もそれと目に立つくらゐであつた。かれは月に向つて笛を休めずに行つた。月は眞上にあつた。そのかげ縮まつてゐるところから、背後へ廻る方がよいと思つた。——男は笛のぬしを尾けはじめた。

森のつぎに森があり人家の灯は遠い、男は四五間あとへ近づいたときに、ひと思ひにと太刀のそりを打たせたが、笛の音が近づくごとに澄みかがやいて邪魔氣で仕方がなかつた。

へたままで居たのである。——男はそれを見ながら、「しばらくその絹を放したらどうぢや、絹に足があるわけぢやあるまいし……。」

女は微笑つて依然として抱へてゐる。男は苦笑した。そして女が再び男から絹を取り返しでもしたらといふ不安があるらしいのを見て取つた。

「さあ、もう行きなさい。」

男は立ち上つた。女は絹を抱いてくらやみの中へ消えるときに、このごろのうちに會うてくれるかどうかと言つた。その言葉には何氣ないあはれがこもり、男がいま立ち上つたときの卒氣ない心を惹きとめた。

「そのやうな約をふむことができぬ。またの縁を頼め。」

「では？」

男はうすぐらい花かげから這ひ出た。そして一人で歩き出した。かれには唯の疲れがあるだけで、ひるまのお稚兒や美女の姿も、先刻ほどはつきりしなかつた。さういふ味氣ない心せんさくしようともせず、むやみに寂しかつたのである……。

秋の半ば近い晩であつた。

男はうそ寒さの迫る夜頃に、今宵こそ衣物を得よう心にな

耳もとに沁み互り頭のうしろへ抜けて行くやうな音いろであつた。男はあせつた。これしき笛の音に己れの心にぶること

が口惜しかつた。かれは思ひ切つてぎりぎり太刀をうしろへ抜いた。それを脊中にかくした。冷たさを脊中にかくしながらも、かれは隙間をねらつた。が、隙間はふしぎになかつた。右の肘をはねた脇腹にある隙間に、はねた肘が尖つて妙なふさぎをこしらへてゐた。男は一町ばかりもあとを尾けた。笛のぬしはそれを知らぬやうにも見えた。又、知つてゐるやうにも見えた。しづしづと練り歩きをしてゐる間に道のまがり角あたりでちらりと見られはしなかつたかと男は川楊のかげに身伏せてみたが、笛のぬしは一度も振りかへらなかつた。あまりに落着き過ぎ、その上隙間をつくつてくれなかつた。男は焦々した。汗がしつとりと肌身にかんじた程、身を伏せ或ひは走り或ひは隠れたりしてゐるうちに、三丁ばかり尾けて来た。男は足に一杯の露を浴びた。

「知らないであるなら早く早く……。」

男は身を伏せて走り寄つたとき、笛のぬしの歩みはひとり

でに静かに止められたが、笛の音色を止めなかつた。かれはそのとき一と思ひにと思つたのが、歩み止つたので、衝き戻されたやうに踏みとどまらねばならなかつた。しかもかれは胸のところを丁とひと突きくらはされた曖昧な偶然を感じた。かれは身を草むらに匿した。蟲がすぐ鼻さきでじゆいじ

ゆういと啼き立つてゐる。——かれは心臓のどきつくのを感じ、それを甚だ不愉快に感じた。かれにはこんな困惑な思ひになやまされたことがなかつた。大がいに思はく通りに行つてゐる筈なのに、かれは全くこの笛のぬしに手こずつた。

笛のぬしはまだ歩き出した。

男はそのあとを尾けた。指貫が男の目にはつきりと厳めしく映つた。が、こんどこそと云ふ氣が男にあつた。隙を隙をとねらつた。隙だらけではあつたが、どの隙もすぐ氣付かれさうな隙だつた。七八丁行つたときに男は疲れを感じた。

小川の音がした。かれはその土橋の上で最うあと三四歩のところまで太刀をふりかざしたが、そのときはじめて笛のぬしは笛の音をやめて振りかへつた。その静かな落着いた姿、——男は慄然とした。えたいの分らない恐怖が一齊に押しよせた。

「何ものだ。」

男ははつきりと月あかりの中で、笛のぬしの顔を見た。それは何か品格のある顔立ちであつた。品格はそのまま凝乎として男の心を打つた。

男は黙つて立つたまま、太刀をひつきけてゐた。

「物盗りか、それとも——。」

「われら袴垂といふ盗人ぢや、こよひ衣の用あつておん身さ

まを尾け申した。が、もうお身には刃を向けまい。」
「袴垂といふはそちであつたか、いま世に騒々しい物盗りぢや。なぜ、刃を立てぬと云ふか？」
「おん身さまが恐くなり申したからだ。袴垂一生のしくじりぢや。」

「うむ……。」

笛のぬしはわらつた。そして袴垂の顔をつくづく眺めた。

「おん身さまはどなたで居られたかの。」

「われら攝津前司保昌ぢや。」

「お聞き及び申す、もうおん身さまの勝手になされい。」

保昌は微笑つた。そして穩かな聲で言つた。

「秋も半ばにその姿では寒からう、われらと同行せられぬかわれらの古衣調度はあるが……。」

「それにては恐れ入ります。」

「參られい。われらの笛をもの十町も聞きとれ申されたからの。そのお禮ごころからではないが……。」

袴垂はやはり知つてゐたのだと思つた。かれは黙つて保昌のあとに従いた。保昌は又笛を吹きはじめた。月はまだ眞上にあつた。何か清澄な、ゆとりのある心が袴垂に湧き、かれはすがすがしい氣になつた。こんな物珍らしい人物、たしかに何事も自分の上にあるやうな人物のあとに、かれは歩いてゐるうちに或る物静かさをかんじた。——袴垂は一體自分は

この笛の音にまやかされ、この人をあやめることができなかつたのか、それともこの人自身に袴垂を寄せつけない威格があつたのかと考へて見た。そして笛の音が邪魔をしたことが實際だつたこと、また、この人が振りかへつたときに、さすがに柔和な面輪が自分をにぶらした原因であることも疑はなかつた。

保昌はとある芝まじりの折戸の前に立つとその戸をあけた。中庭に灯がこぼれ、水引草であらう長い莖のさが袴垂の手にふれた。露めいた濕っぽい莖であつた。保昌は奥へ聲をかけた。奥から女のこゑがした。戸があいた。保昌は袴垂をかへり見た。かれは默然と竹縁の冷たい上に腰をおろした。灯のかげで女の顔はみえなかつたが、白い物静げな暮しの中にあるらしい面持ちが、袴垂の目にうつつた。

「ちよいとした近つきぢや。」

保昌はかう奥に聲をかけると灯を明るくし、己の古衣を着だけ袴垂の前に置いた。袴垂は保昌から衣服を貰ふことに卑怯を感じたが、しかしそれよりも保昌の人物に床しさを感じた方が強かつた。かれは自分よりも強いものには自分も強くなることを考へたが、しかし保昌の優柔な心には頭が上らぬやうな氣がした。あんなに長い十町の道のりに一太刀をも加へられなかつたことが、あながち笛の音色に邪魔されたばかりではないと思つた。

保昌の家を辭したとき、かれは不圖その保昌の妻らしい女に目をとめた。かれの眼には埃の中に消えた女房の姿が、美しい瞳をしてかれに挨拶をしたことを思ひ出した。大柑子を頒けた女房であつたか？ あるひは人ちがひにしても、世の中には似た女房もあるものだと思つた。

「ではお別れ申す。いろいろ難題の事ばかりで濟みませぬ。」

袴垂は柴折戸の外へ出てあいさつをした。保昌とその妻が縁端に立つてゐた。袴垂の心はかれらが餘りに静かにくらくらしてゐるのを羨しくながめた。

「ときどきお出であれ。いつなりとお會ひ申す。」

「恐縮にぞんじます。」

袴垂は裏門を出た。月は屋敷の上にあつた。木犀であらう露ぼい風のままだに荐りに立ち香うてゐた。

暗い社頭で袴垂は女と坐つてゐた、しかも風には荒涼とした刺のある寒さが含まれてゐて、皮膚の上に冬の夜のやうな乾きをかんだ。

「それにしては何處から越された方、——わたくしそれを聞きたうございます。よう話して下さい。」
女の聲を聞かぬやうに袴垂は黙つてゐた。今夜も保昌の家はまはりを歩き、そして保昌の妻のことで心は重々しかつた。自分のやうに世に容れられぬものとしたことが、あの人